東京異聞

とうけいいぶん

小野不由美



新潮文庫

新潮文庫

東京異聞

小野不由美著



新潮社

新潮文庫

東京異聞

小野不由美著



新潮社版

6279

目次

序幕　ちかごろ、帝都に跋扈する者ども……七
第一幕　さて、闇の華とは……一三
第二幕　一方、夜の華とは……八八
第三幕　夜の底、魚の回遊……一六八
第四幕　夜の者、満願成就の場……二八一
大詰　時代転変……三九七

解説　野崎六助

東京異聞

序幕　ちかごろ、帝都に跋扈する者ども

その街は海底の泥の中から浮上した。

都から遥かに離れた辺境、東国の地に栄えた港町は、浸食するものと堆積するものとの鬩ぎ合いの中で緩やかに成長を続けてきた。その水際、入り江の最奥にひとつの城が建設され、そこに国政の中枢が置かれるや否や、町は自然の摂理を裏切って爆発的な増殖を始めたのだった。

入り江が埋め立てられ、河口が埋め立てられた。すべての窪みが埋められ、均されてしまうと、陸地は海に向かって突出を始めた。汀は水が岸辺を切り崩すよりも早く、海に向かって前進していった。

陸地が肥大していく以上の速度で、町もまた肥大していった。浅瀬が干され、湿地が埋められ、やがて泥の上には巨大な都市が出現した。国政の中心ではあったが、都ではない都市が。それはちょうど泥の干潟が、果たして陸であるのか、それとも海であるのか、判然としない様に似ていた。

その都市の上に「都」の称号が置かれて、力の趨勢は確定した。この街を再び泥の中に引きこむことは許されない。そこには国体の威信が載せられている。

帝都、東京。

江戸湊から始まって、時代の力を糧に肥大しつづけたこの地が、従来の呼称「江戸」から「東京」へと名を変えたのは、明治元年七月のことである。

この年の東京行幸を先触れに、翌年の再行幸でなしくずし的にそのまま奠都、これをもって「帝都・東京」は誕生した。

浸食するものと、堆積するものとの、営々と続いた鬩ぎ合いの帰着した姿がそれだった。

もしも首都のありようがその国のありようを象徴するものならば、浸食するものを駆逐して軟泥の上に忽然と現れた都市は、必ず何かを象徴しているはずである。東京に住む者が、すでにそこが海であったことを忘れ去っているように、忘却の中に葬り去られてしまったものがありはしないか。

帝都・東京、その誕生から二十九年。

十一ばかりの子供がとぼとぼと夜道を歩いていた。

場所は霊岸嶋銀町、石河岸を新川沿いに、向かうのは八丁堀、子供の名前を長松という。

一

長松は使いの帰りだった。

お父に弁当を持っていったのだ。長松のお父は船人足をしている。銀町の酒問屋に詰めて、荷の揚げ降ろしを監督するのが今夜の仕事なのだった。

本当ならばもっと早くに行って帰るはずだったのに、末妹のツエが癇を起こして、お母は弁当を作るのが遅れた。

夜道をひとりは心配だからと、ツエを背負ったまま家を出ようとするお母の手から、弁当包みと提灯をひったくるようにして、長松は家を飛び出してきた。暗い夜道だからなおいっそう、朝から晩まで手内職で忙しいお母に行かせたくはなかったのだ。

そういうわけで長松は、こんな夜道を自分の足音に怯えながら歩く羽目になったのだった。

土手蔵の続く道には灯火がない。長松の持った提灯の明かりばかりが、酒蔵の白壁にゆらゆらと揺れている。

人通りもなかった。

寂しいかと言うとそうでもなくて、新川を挟んだ四日市町のほうから、川面伝いに賑

やかな音が細く響いてきている。

鉦や太鼓を打ち鳴らす音、それだけならば季節はずれの祭りだろうかと思うところだが、鉦太鼓の音に混じって「かやせやい、かやせよお」と叫ぶ大勢の声が遠く頼りなく聞こえる。

長松はなにやら背筋の寒いのを、足を速めてやりすごした。

夕暮れどきに隠れんぼうをした莫迦な子供がいたのだ。隠し婆に攫われて、それであして捜している。

長松の家の近所でも、つい半月前に子供が消えたばかりだ。近所中の大人たちが、自分までもが隠されぬよう、互いに縄に摑まって、鉦や太鼓を叩きながら姿を消した子供を捜した。子供の行方は知れなかった。川に落ちたか井戸に落ちたか、それとも。

隠れんぼうの鬼が隠れ家の前を通り過ぎるのを、息を詰めてやりすごす子供の肩を、叩いた誰かの手があったのだろうか。

長松の目に見えるのは黒々と並んだ蔵の屋根ばかり、子供を捜す人々の姿も見えず、明かりも見えない。

夜の向こう側から微かに聞こえる音はまるで狸囃子のようだった。その調子が陽気なだけに、風に途切れてぽつぽつ届けば、かえってなにやら嘘寒い。

長松はひたすらに足を進めている。

前のほうにぽつりと薄暗い明かりが見えたのは、二之橋を過ぎて一之橋の袂にさしかかったときだった。

なにしろ暗い中をひとりで歩いてきたものだから、長松はにわかに安堵した。息をついて提灯の柄を握りなおし、無意識のうちにそれでなくても急いだ足がさらに急いで、ゆらゆらと小さな影も駆け足になる。

しかしながら、明かりの正体が分かる程度に近づいて、長松はぴたりと足を止めた。法被を着た男の後ろ姿だった。酔ったようにふうらりと歩く背に、明かりの入った袋が背負われていた。

まさか今時分、蛍売りだろうか。

長松は首をかしげた。どうあっても蛍の季節にはまだ早い。とは言え、黒紹の袋を背負って中に明かりが見えるとあれば、蛍売りだとしか思えない。

子供らしい好奇心で、いったいどこで獲ってきたのだと、心細さも半分に、声をかけようかと思ったのだが。

少し待ったほうがよくないか。蛍売りにしか見えないものの、はて、あの蛍、なにやら大きすぎはしないだろうか。

暗く冷たい光の色は蛍のようだが、その大きさはと言えば大人の拳ほどもあるように

見える。それが三つ四つほど袋の中を漂っていた。

蛍にしてはどうにも可怪しい。そもそも、こんな蔵ばかりの通りを流して商いになるのか。蛍売りなら夏の宵、涼を求めて辻の縁台に出る人々を狙ってくると決まっている。

狸囃子は途切れとぎれに続いている。

声をかけようか、それともこのまま見送ろうか。

長松の決心がつかないうちに、男の姿は富嶋町の角を曲がっていった。長松は釈然としないまま、揺れて遠ざかる明かりを見ていた。

『ありゃあ、人魂売りですわいなァ』

急に若い女の声がして、長松はひょんと心臓が飛び跳ねた心持ちがした。

『獲った人魂を、見世物にするばかり』

かつん、と乾いた硬い音がして、つられたように長松は振り返ってしまった。

蔵と蔵の間の小路、角から半身を覗かせるようにして長松を見ている顔があった。思わず一歩退ったのは、それが人形だったからだ。

人形は娘、髪に挿した簪が提灯の明かりにきらきら揺れた。鹿子の半襟、黒襟をかけた黄八丈、町娘の拵えだが、なにしろ見事な人形だった。

人形だけが宙に浮いているかのようだった。よくよく見れば背後に黒衣の姿が見える。

人形遣いか、と思うものの、これほど立派な人形を遣う見世物など、これまでに出会ったことがなかった。長松が見た人形遣いといえば、一尺ほどのお粗末な人形を、黒布を顔にかけた遣い手が口ずさむ浄瑠璃に合わせて踊らせるだけ、その踊りも両手が袂をひらひらさせる程度、いま目の前にある人形とは比べるべくもない。

『さて、坊やはどちらへお行きかえ』

人形は首を傾ける。つられて長松も頭を傾けた。

「この子はね」

言ったのは驚いたことに、男の声だった。こつん、と人形が背後の黒衣を見上げる。

「銀町の父親に弁当を届けてきたところだ。感心なことじゃないか。この夜道、神隠しやら怪しげな見世物やら盛んに世間を騒がせているのに、提灯ひとつを頼みにねえ」

『ほんに、それは孝行な』

黒衣は蔵の角に雨ざらしになった、古い酒樽に腰を下ろしていた。子供を膝に抱き上げるようにして人形をかかえているが、その両腕が抱いた形にはっきり見えるのはどういうわけか。あれが黒衣の腕ならば、人形を遣う手は誰のものか。これでは人形が生きているようではないか。

「孝行者には良い報いがある。人魂売りもさすがにこの子は見逃した。これが遊び浮かれて家を忘れた子供なら、くるりと捏ねて袋の中に放りこんだろうよ。黒絽の中には人

魂がひとつ増えて、子供の姿がひとつ消えるという按配」

あんぐり口を開けて佇んだ長松の前で、黒衣は低く含み笑う。

「なあに、袋は袈裟を解いたものだ。抹香臭いが、経文の音も染みこんでいる。ああして揺すられている間に、手向けの回向も済む寸法」

くすくすと、娘もまた笑った。

『良うできた趣向じゃわいなァ』

「だろう」

黒衣は言ってから、唐突に樽を降りて蔵の陰に身を隠した。人形だけが角から顔を覗かせていたが、それもするりと消え失せる。男の声だけが小路のほうから響いてきた。

「気をつけてお帰り。早く早く、一心にねえ」

ぽかんとそれを見ていた長松は、幾度か瞬きをして我に返った。慌てて人形を追い、小路の口に向けて提灯を掲げてみたが、長い小路のどこにも何の姿も見えなかった。

かやせやい、と狸囃子の音が聞こえる。

長松はひとつ息を呑んで踵を返した。

逃げるのじゃない。家ではお母が心配している。

小さな影が、まろぶようにして去っていく。

それを見送るようにしていた娘は、こつんと背後を振り返った。
『あれ。あのように怯えて』
娘島田の頭を黒衣の腕にもたせかける。
『お前さまも、人の悪い』
抱えた腕の中から見上げてくる娘の顔を覗きこんで、黒衣は含み笑った。
「少うしね、知ったほうがいいんだよ。近頃、夜道は油断がならないとね」
娘は黙って小首をかしげた。ことり、と乾いた音がまた小さく夜に響いた。
「電灯だとか瓦斯灯だとか。夜の端々に灯火を点して闇を追い払った気でいるようだが、灯火は畢竟、紛いものでしかない。夜はただ暗いだけじゃないのだからね」そう言って、黒手甲の手が娘の顎を軽く撫でる。「川面に板を浮かべて蓋するようなものだ。板の上に土を盛って石を敷いて、それで川を無くしたことになるだろうか」
黒衣の指が擽るようにして娘の頬を辿ると、娘はこつんと首をかしげてその手に頬擦りするふうを見せた。それを覗きこむ黒衣が、黒頭巾の下でふと笑った気配がする。
「ましてや、魚は水底に住むものだから。川底の魚は死骸でこそつくが、人を襲ったりはしないけどね。だけど、夜の底に住む魚はねえ」
くすくすと娘は笑ったが、果たして黒衣の言葉に笑ったのか、それとも黒衣の指に笑ったのか。

「不幸な男の話を聞きたいかい」
『封印切やら籠釣瓶やら、耳に胝もできようわいなァ』
「そんな昔の話じゃない。昨今のこの東京での話だ」
娘は首をかしげた。
「いいからお聞き。亥蔵という男がいる」
黒衣はいとおしげな手つきで白い首を撫でている。
「亥蔵は信州松本の生まれだ。家はお定まりの農家で亥蔵はその三男。丁稚働きに売られて、この東京にやってきた」

二

勤め先は深川にある醤油屋で、その間に女房も持ったし、子供も三人持っている。蕎麦の屋台を曳くようになったのは五年前、屋台の上がりは一家五人の生活に足りない。女房が針仕事で、いちばん上のみつが日銭仕事で家計を助けてかつかつのありさま。
さて、その亥蔵が店の仕舞いを段取りしていると、西の方角からひとりの老人が歩いてくるのが目に入った。
爺は風変わりな唐人姿。一見して唐辛子売りかとも思えたが、先の垂れた唐人帽をち

よんと冠って、裄も丈も余った広袖といい、お父の唐人衣装を借り着した子供という按配。背丈も低くて子供のようだが、子供でない証拠に深い皺と雪のような顎鬚がある。この顎鬚も鳩尾に届こうかという長さ、真っ白になった眉も目許を覆うばかり、なにやら胡乱なことこのうえもない。

これがふらりと暖簾を分け、蕎麦を、と言う。

「仕舞いのところを済まんがの」

いえ、と亥蔵は笑って蕎麦を手笊に入れ、湯の中に落とした。

「火を落とす前でようござんした。辛子の商いですかい」

商いにしては荷が見えない。それは承知のうえだった。

「辛子売りに見えようか」

爺は飄々とした口調をしていた。

「珍しい扮装じゃござんすね」

「儂や、易者じゃよ」

へえ、と亥蔵は呟く。

「そりゃあ、珍しい。爺さんのような易者は初めて見た」

爺は鞴のような音で笑う。

「そうかね。仕舞いの邪魔をした詫びに、ひとつあんたも占ってしんぜようか」

「そりゃあ、どうも」

亥蔵は軽く愛想笑いを浮かべた。共に酔客めあての蕎麦屋と易者は河岸が重なることが多い。易者、人相見なら幾人も知っているが、初めて見る趣向なので興味が湧いた。蕎麦の茹で加減を見ながら、爺が天眼鏡なり筮竹なりを取り出すのを待ったのだが。

易者は丸い石の皿をひとつ懐から出した。何やら細かな細工をした皿の表面を撫でながら、亥蔵の顔を見る。

「して、あんた、生まれはいつだね」

「八月ですが。八月の八日」

「旧かい、新かい」

「旧でさ」

「生まれの時刻は分かろうかの」

「宿曜ですかい。明け方と聞いておりやすが」

いやいや、と老爺は呟く。亥蔵はその手許を覗きこんだ。

「なんです、そりゃあ」

老爺は、ふむ、と言っただけで亥蔵の問いには答えなかった。亥蔵が茹でた蕎麦を笊に上げて水で洗う間にも、枯れた指で石皿を撫でている。怪訝に思いながら蕎麦と猪口とを出す亥蔵に、爺は意味ありげな目つきをした。

「爺さん、それで」
老爺は答えなかった。石皿を懐に戻して、黙々と蕎麦を喰う。なんだ、揶揄われたのか、と亥蔵も黙って片づけにかかった。道に屈みこみ、七輪の火を落として炭の始末をしていたときだ。
「観ると言った以上は、言わずばなるまいて」
老爺の声がして、亥蔵は顔を上げた。屋台ごし、屈んだ亥蔵から爺の姿は見えなかった。
「もしも五つの生まれなら、あんた、死ぬよ」
亥蔵は手を止めた。屋台の縁に挟まれた暖簾が捲れて戻るのだけが見えた。
「家には帰り着けまいて。こんなことなら観るのじゃなかった」
「爺さん」
亥蔵は立ち上がる。すでに爺の姿はなく、屋台の縁に一銭硬貨が置いてあった。

「まったく、験の悪い」
悪態をつきながら、亥蔵は屋台を曳く。淡路坂、太田稲荷の前まで辿り着いていた。社に向かって滅多になく頭を下げたのは、悪い辻占を落としたかったからだ。
足を止めたせいで少し重くなった屋台を改めて曳きなおし、亥蔵はさらに足を進める。

社を右手に通り過ぎ、曲がり角まで来たところで足を止めた。その角の宙をふらふらと飛ぶ白いものを見たせいだった。

ちょうどあたりは神田川の土手、それでなくとも寂しいところで、しかも通りに面した家も店もすでに戸締まりしたあと、近辺は閑散として人気がない。

「なんだ、ありゃあ」

飛び交うそれは四つばかり、大きさは人の頭ほど。否、おぼろ提灯の明かりでも、それが人の首だと分かった。

ぎっ、と屋台が身じろぎをする。

髪振り乱した生首が、男女併せて四つ、音もなく宙を飛んでいるのだ。

俺ぁ、五つの生まれだったのか。

そう独白しながら玄蔵はそろそろと屋台を放して、置いた長柄を跨ぎ越す。無念の色を面に浮かべてただ飛び交う首を見ながら、音を立てぬよう後退った。

「なに、ありゃあ、首遣い」

いきなり声をかけられて玄蔵は声を上げる。飛び交う首と視線が合った気がしたが、とっさに目を閉じたので実際のところは分からない。

頭を抱えて坐りこんだ玄蔵の肩を誰かが叩いた。

「お助け」

「趣味の悪い見世物だ、蕎麦屋。銭でも投げれば消えて失せる」
亥蔵はようやく顔を上げた。
目の前にあったのは黒紋付に小倉の平袴、白襷に白鉢巻。腰に差した長いもの。昼間によく見る、居合抜きの男だった。
「旦那、ありゃあ」
「見世物だよ、私と同じ。私の後をついてまわるのが好きでな」
亥蔵は息を吐いた。背後を振り返ると、四つ辻に首はなく、手拭いを被った男の姿だけが見えた。
「なんて気味の悪い見世物だ」
居合抜きの男はくつくつと笑った。
「だろう。ついでに私の芸を見ないか」
「冗談は止してください」
亥蔵はかりかりとして土を払う。
「わたしゃ、早く帰って寝ちまいたい。出し物ならまたにしてくださいよ」
屋台に戻ろうとする亥蔵の背に朗々とした声が響いた。
「そも武芸八般のうち、短剣仕合の一流は誰しも自在にできる芸道、拙者一流居合の義は外に真似手と貫手のなき、中心はすなわち六尺五寸、腰の工合と腰の冴、首尾よく抜

けばお慰み」

ふざけるな、と振り返った亥蔵の目に柄に手をかけた男の姿が入った。抜きそうで抜かないのが居合抜きの芸、抜くと見せかけて薬を売るまでのその手際。それがどうしたことか、白刃が鞘からすべり出ていく。

亥蔵は、ちゃりん、と音を聞いた。自分の懐から一銭硬貨が落ちた音だった。

拾うまでもなかった。

亥蔵の首は一銭硬貨のその上に落ちた。

こつん、と音を立てて、娘は黒衣の胸に顔を伏せた。

「どうした。脅かしてしまったかい」

『これ以上は聞けませぬ』

「これ以上もなにも、これで終わりだ。易者の言葉は本当になった。亥蔵は居合抜きに首を斬られて、それで命を落としたのだよ」

黒衣は娘の背中を撫でた。

「だからねえ、夜道は油断がならないんだ」

『それから、亥蔵は』

「うん。翌日紅梅町のあたりで首のない骸が見つかったばかりだ。捜したが、首は見つ

からなかった。女房子供は仕方なくそのまま弔いをしたそうだ」
『哀れなこと』
「それより後、亥蔵の娘のみつが夕刻に首を遣う見世物を見かけたそうだよ。首遣いが飛ばす首の中に、亥蔵によく似た首があったそうだ。話の真偽は分からない」
『その居合抜きは』
「見つかってない。けれどもさすがに鳴りを潜めているようだ。他の無害な同業と一緒にねえ。なにしろちかごろ、江戸の昔でもあるまいに、手馴れの辻斬りが出るとかで、竹光の居合抜きまで駐在所に連れていかれるありさまだからね」
『ほんに、夜は恐ろしやの』
そう、と黒衣は呟いて、娘の身体を抱えなおす。
「夜というのはそんなものだ。家にいて家族と布団に入れば、これほど安らかなものもない。けれどねえ、忘れてはいけない。夜の懐には百鬼魍魎が潜んでいる。それでいて菩薩のような顔をして夜はゆくものだから」
こくんと頷いた娘に含み笑って、黒衣は再び娘の首を撫でた。
「先だっても、新聞に華やかに火炎魔人とやら」
『それはまた、大仰な』
「まったくだ。しかし、あれも夜の者。お前も重々お気をつけ。綺麗な首を灼かれぬよ

うにね」

『火炎魔人とやらも、人を襲いましょうか』

「襲ったのだよ、実際にね。日本橋吉川町に巽堂という建物が建ったのは知っているかい」

『とんと耳の曲がり角にも』

「巽堂は何ということもない鰻屋だが、昨今流行の四階建ての建物でね、御丁寧に屋根の上には広い物見台がある。花火の頃にはこれを貸し切って一儲けしようという寸法」

『まあ』

「花火がなければ、季節の花を飾らせる。気候が良ければ花を見ながら、浅草橋やら浅草広小路の瓦斯灯の明かりが見えるというわけだ」

三

義助が物見台の跳ね戸を開くと、澄んだ夜風が顔に吹きつけてきた。

句会の連れと巽堂にやってきたのが夕刻、それからずっと芸妓を引きこんでの大盤振る舞い、浮かれ騒ぎにも酒にも飽いて、手水へ行くと言い残し、実際のところはしんとした沈黙と酒気の漂わない夜の空気を吸いたくなって座敷を出てきた。別に何というあ

てもなく、低いよりも高いほうへ惹かれて三階から四階に昇ると、奥まった手水の入口あたりに、男の姿が見えたのだった。

「オヤ、読売りかえ。商売かい、それとも遊びかね」

義助はそう声をかけた。洒落気のある縞の長着、襟の後ろに小さな提灯を挿しているのは、夜商いのためだろうか。深編み笠を夜中屋内でも冠っているとなると、読売りだとしか思えないが、そもそも読売りは街頭で読み本を売る商売、こういう座敷店の中で見かけるのは珍しい。それで商売か、それとも遊びかと問うたわけだが。

「もちろん、商売でさ」

読売りは含み笑うようにして答えた。

「物見台なら露天のうち、差し障りもなかろうとやって参りましたが、あいにくどなたもおられませんで」

なるほど、と言って義助は懐に手を入れて小銭を探った。

「それじゃあ、わたしが一部もらおうか」

しかしながら、読売りはさらに含み笑って手を上げる。

「お代はいただきませんので」

「妙なことを言うね」

「お代はお客さまのお噺で。旦那、何か奇妙な、それは吃驚するような面白い噺を御存

じじゃありませんか」

「さあて」

妙な言い分に興をそそられたが、あいにくそんな噺に心当たりがなかった。

「それじゃあ、本はお渡しできません。何かねたを仕込んでから、また御縁がありましたおりに」

そう言って読売りはふらりとその場を立ち去る。背中には呆れるほど大きな木箱を背負っていたが、その箱に「珍妙珍奇噺替」と書いてある。人でごったがえす廊下のほうへ俯き加減に歩いていった。

「妙な読売りもあったもんだ」

義助は呟き、そうして読売りが立っていたところに天井に向けて上る梯子があるのに気がついた。見上げると上は跳ね戸になっている。さてはこれが物見台に出る道筋か、と梯子に手をかけたのだった。

内側から締まりをしてあった跳ね戸を勝手に開けて押し上げると、冷えた夜風が吹きつけてきて酒気に火照った顔に心地好かった。思ったよりも風が強い。物見台には明かりもなく、この風に商売を諦めたのだと想像がついた。

跳ね戸を抜けて義助は物見台に出る。店の者に誰何されるのも興醒めな話なので、そ

っと跳ね戸をもとに戻した。

物見台には申しわけ程度の屋根があるばかり、四方の景色を遮るものは何もなかった。右に強い明かりが見えた。ふらふらと惹かれるようにして、並んだ卓や低い屏風を避けながらそちらへ向かうと、手摺の向こうに浅草広小路の瓦斯灯の明かりが見下ろせた。

これは良い眺めだと、しばらくその光の列を見守り、改めて四方を見渡そうとして、義助は物見台の反対側、両国橋のほうに人影があるのに気がついた。夜目のことで定かではないが、男がひとり、下を眺めているようだった。

声をかけるのも憚られて、視線を逸らすようにして浅草のほうへ向け、そうして義助はぎょっとする。

彼は跳ね戸を抜けるとき、確かに締まりを自分の手で外しはしなかったか。

上に出ていた男には気づかず、店の者が戸締まりしてしまったのだろうか。あるいは、男がいることを承知でほんの悪戯心、あの読売りあたりが締まりをしてしまったのだろうか。それとも、義助の気づかぬうちに後に続いて昇ってきたのだろうか。

義助はそっと背後を窺った。何かが噴き出すような異音がして、視野に強い光が点ったのはそのときである。

義助は狼狽した叫びを上げた。川を見下ろすようにして立っていた男の身体が突然、炎に包まれたのだ。

着ているものにどういうわけだか火がついた、そうとはとうてい思えない、尋常ではない火勢だった。いったい何がと駆け寄りかけて、卓に足をぶつけ、つんのめってハタとそれに気づく。

火達磨になった男には苦しんでいる様子がなかったのだ。

愕然とした義助の耳に、含み笑う声が聞こえた。眦が裂けるほど見張った目には、火炎を上げる肩が笑いを怺えるようにして動くのが映った。男はゆらりと身動きをした。義助のほうを振り返るように。

常太は柳橋を渡って、吉川町へ出たところだった。夜も深夜に近づいていたが、人の流れは少ないながらも途切れる様子がない。

常太は声色遣いだった。歌舞伎役者の声色を遣って、ひとくさりの芸を見せる。座敷が舞台の、夜の町にはよくいる芸人のひとりだった。

次の座敷に向けて足早に歩く常太の耳に叫び声が飛びこんできたのは、ちょうど両国へ抜ける小道を、半分歩いたところでのことだった。声の所在を捜して右左、果ては上を見やった常太の視野に、巽堂の四階建ての建物がそびえていた。その四階のさらに上、物見台に動く人影が見えた。手摺にしがみつくようにして、下に向かって何かを叫んでいる男の姿。

叫びは風に吹きちぎられて、切れぎれにしか届かない。なにごとかと伸び上がるようにした常太の目の前で、その男の身体に火がついた。

あっと声を上げる間もなかった。突然、男の背後から火の塊が押し寄せるようにして、それが男の着物に朱い花を咲かせたのだ。男は身もがき、踊るようにして手摺から身体を乗り出した。そのまま、声を上げることさえできない常太の目の前に落下してきたのだった。

炎をまとわりつかせた男の身体は張り出した二階の軒に叩きつけられ、跳ねて塀の返しにかかり、自らの重みに堪えかねるようにして地面に墜落した。一瞬のことだったはずだが、常太の目にはそれが長い長い光景のように思われた。

異堂の物見台に火の手が上がった。

両国広小路を歩く酔客がひとり、ふたりと足を止め、頭上を指してあたりはたちまちのうちに縁日のような人だかり。通りからも見える物見台の手摺際、すっくと立ちすくんだ人の形に紅蓮の炎。血相を変えた観客も、人影が下方を睨んだまま断末魔の様子もないのを見てとって、胸を撫でおろした。

よくよく見れば、炎に包まれた人影は時折肩を揺らしている。まるで笑いを咏えているようだった。今にも躍りだしそうな手足を必死で押しとどめている、そういう風情に

見えたのだ。

なんて無気味な、と後退ったのは観客の半分、あとの半分はあんぐりと口を開けたまま、想像を逞しくする。

さては新手の東西だろうか。だとしたら木造家屋の屋上であれほどの火を使うとは、なんとも非常識な話ではないか。

「おい、兄さん」

義憤にかられた観客が異堂の下働きを呼び出した。

「ありゃあ、お前さんとこで雇った東西屋かい。ちょいと無茶な話じゃないか」

下働きはきょとんと目を見開き、男の視線を追って自店の屋上を見上げ、さらに目を見開いた。

「手前、何者だ」

叫んだものの、声が届いたとも思えない。

「なにごとだい」

暖簾を分けて顔を出したのは番頭と亭主で、これもまた頭上を見上げて立ちすくむ。

「異堂、非常識にもほどがある。いくら川端とはいえ、吉川町にあるのは手前の店だけか。よりによってこの風の日に。開化だなんだと珍妙なことを始めるのは勝手だが、柳橋を焼き開かれちゃあ、洒落にならねぇ」

「とんでもない」
亭主は首を振った。
「誰か様子を見ておいで。ええ、とんでもない。東西屋ならば店開きのおりに、まっとうなのを頼みましたとも」言って、なにごとならんと顔を出した店の者を叱りつける。
「水を汲んでさっさと上に行かないか」
そのときだった。立ち止まって群れる観客の間にひとりの男が駆けこんできた。
「巽堂さん」
声を上げながらあたふたと亭主の許へ駆け寄ったのは、あたり常連の声色遣い、これが亭主の羽織を引くようにする。
「死人だ」
「ええ、あの火勢じゃ、命のあろうはずがありませんとも」
邪険な亭主の言葉に、声色遣いは首を振った。頭上を振り仰ぐ余裕も持たないようだった。
「何の話だい、それよりも」と、声色遣いは店の傍らを指さした。「死人だ。お店の裏に」
亭主は声色遣いを見返した。周囲の観客もしんと声色遣いを見る。
「お店の裏の板塀脇に、男の死体が。いや、虫の息かもしれないが」

一拍置いて誰かが店脇の路次に走り出し、それに連れて物見台を見上げていた観客までもが路次に向かって殺到する。

人混みを掻き分けて倒れ伏した男の側まで行った亭主は、黒塗りの板塀、その脇で綻切れた男の死骸を発見した。ちろちろとその場が明るいのは、他ならぬ男の着物が燃えているからだった。

飛び出した観客は二、三人、てんでに羽織だの法被だのを脱いで、男に被せて火を消しにかかる。火が消えて薄煙と異臭だけがあたりにたちこめ、改めて観客は男の様子を確認した。

捩曲がった首と手足と。裂けた棒縞の着物には提灯の明かりに血糊が光る。見上げれば板塀の返しに揺れる棒縞の切れ端、そこにもべっとりと血糊がついて流れている。さらに上には四階の軒、屋上に張り出した物見台の手摺が見えた。

「飛び降りて塀にかかったのか。しかし、あの火は」

脈を取った男は仰向けの死体を俯せに返す。脇腹の背筋に近いあたりに深い傷が見えた。

「なんてことだい」

青ざめて呟いた亭主に、別の男がそれを示した。

「亭主、そりゃあ、なんだろうね」

男が示したのは死体の背。血の染みかとも思えたそれは、よくよく見れば焦げの痕、それも左右にきちんとふたつ、着物を焦がして肌にまで及び、今も薄煙を上げている。

「手形、じゃないのかい」

誰かが背中を突いたように、肉の焦げる臭いも生々しく、くっきりとふたつの手形がそこには残されていたのだった。

単に手形なら着物が肌が焦げようか。まるで灼熱の手が突いたようではなかろうか。

誰もがそう思い、はっと頭上を仰ぎ見た。

わらわらと路次を飛び出し、物見台を見上げる。

夜にたなびく薄煙、それは先ほどまで炎に包まれていた人影がじっと握っていたあたりの手摺から漂っている。その薄煙の他に、物見台には何の人影もなかった。

「あいつぁ、どこへ」

亭主が呟いたところに、上から盛大な音がした。振り仰いだ視野の中、手摺の脇に人影が姿を見せる。先ほどの番頭だった。

「旦那さま」

「奴ぁ、いるかえ」

叫ぶ声に番頭は大きく手を振った。

「それが、誰もおりやせん。まったくの蛻の殻で」

ぱらぱらと細かい水滴が降ってきたのは、物見台の上で誰かが水を打ったせいだ。それと同時に薄く揺れていた煙も消えて、そこにはなにごともなかったかのよう。
「ようく捜したのかい」
「捜すもなにも」
四階の屋上と地上との、喉を嗄らした会話だったので、これは観客にも筒抜けだった。
「あたしゃ、見たよ」
声を上げたのは夫とふたり、肩を寄せあった新内流しの女房だった。
「あいつは消えた。ぐずぐずと崩れてさあ、火口が風に飛ばされるみたいにして消えちまったんだ」
夫のほうもこれに頷く。化け物だ、と誰かが呟いて、ざわざわと同意の声が人垣の中で閧ぎ合う。
「どうした」
遅れて駆けつけた新手の観客に、はや解説の声は化け物よばわり。
「火達磨の化け物が、人を突き落として逃げちまった」
「莫迦な」
「本当だ。そこの路次に手形の灼き痕のついた死体があらぁ」
高らかに笛の音が鳴って、駐在が駆けつけてきたのはそのときである。

『なんて、まあ』
娘は首をかしげた。
「巽堂も災難な話だ。以来、物見台は締め切って、せっかくの趣向も徒になった」
『して、その火炎魔人とやらは』
「見つかっていない。死体が残っているばかりだ。よくよく調べてみると、物見台の板張りの床に足跡の形をした焦げ痕がいくつも残っていたそうだよ」言ってくすくすと黒衣は笑う。「店は上を下への大騒ぎ。その夜の代金は、あらかたどさくさ紛れに踏み倒されたそうだ。本当に災難なことにねえ」
娘もまた笑って、微かな音をたてた。
「翌日の新聞には、火炎魔人帝都に跋扈す、とねえ。すでに同じ手口で三人殺している。四人目がなければいいけれどね」
『ほんに』
「その一方では闇御前とやら。火炎魔人が夜の華なら、闇御前は闇の華だ」
『さて、それは』
「そもそもの話をしてあげよう。福富町、甚内橋の近くに安吉という鳶がいる。親方のところに弟子入りして五年、歳も若ければ腕も若い、なんということもない若者だ」

四

安吉は湯屋の帰りに猿屋橋の近くを歩いていた。顔見知りの若後家に湯屋の座敷で軽く奢ってもらって気分がいい。鼻歌は新内、親方がこのところ何を思ったか凝り始めて、仕事の合間に唄うのを門前の何とやらで覚えてしまった。

ゆったりとそぞろ歩く通りに面した店は、どれも閉め切っていて暗い。飲み屋のひとつにだけまだ明かりがついていたが、暖簾を中にしまうところ、通りにはちらほらとしか人影が見えない。川端に、般若の絵を描いた蕎麦の屋台が止まっていたが、すでにねたが尽きたのか、提灯が暗かった。

しんとした通りに自分の声が通るのが心地好かった。親方よりも筋がいいのじゃなかろうか、実入りが増えたら習いに行こうか、そんなことを考えていると、ふいに声をかけられた。

「いい喉だこと」

眉を寄せたのは、いい気分に水をさされたせい、そうしてその声が押しひしゃがれたような低い微かな声だったからだ。

安吉は足を止めた。振り返ったすぐ脇に細い真っ暗な路次がある。その入口にあった

影は端座した犬の形をしていた。闇に溶け入るように黒い犬、犬にしては大きいような、少しばかり姿が変わっているような。

「粋だねえ」

犬より他に影が見えない。まるで黒犬が喋ったようだが、そんなはずはあるまい。そう思って安吉は路次のほうへと二、三歩戻る。近づいた安吉から逃げるように、犬は小道の奥に消えた。

「誰だい。誰かいるんだろう」

路次を覗きこむと、ぼうっと白い人影が見える。目を凝らして、安吉は少しばかりその目を見開いた。

「こりゃあ、驚いた。姐さん、何者だい」

芝居で言う赤姫のしつらえだった。髪は吹輪に花櫛、打掛は真紅、金糸銀糸が闇に沈んだようにきらめく。

そっと翳した袂の陰で、白塗りの顔にそこだけ緋い唇が笑った。

「知りたいかえ。ならば、もちっとお寄り」

安吉は少しの間逡巡した。新手の夜鷹だろうか。それとも、もっと異常な何かだろうか。躊躇った幾許かの間に白い顔を隠すようにした袖が下がった。

「こりゃあ、別嬪だ」

に、と緋い唇が笑う。歳の頃は分からない。あどけないほど若いようでもあり、意外に年嵩であるような気もした。

「まさかこんな路次裏で悪所働きかい」

安吉の問いに、返答はなかった。滴るような緋が笑っただけだ。唆す笑みに安吉は一歩を踏み出す。豪華な刺繍の袂がついと動いた。

惚れぼれと白い顔を見つめていた安吉の目には入らなかった。その袖口から禍々しいほど鋭利な鉤爪が出たのを。

三歩目を踏み出して、四歩目を下ろす前にそれは顔面に向かって振り下ろされた。堅いものを叩きつけられた衝撃を感じてとっさに呻き、退ること二歩、その場に膝を折る前に顔を切り裂かれた灼熱の痛みが襲ってきた。思わず顔を覆った手がずるりと滑る。ばたばたと音を立てて掌に生温かなものが零れ落ちた。

「ひッ」

叫ぶ間もなく、鋭利なものが首の後ろの肉を剔る。安吉は切り裂かれた顔面から前につんのめった。

馴染みの飲み屋から最後に出た男たちは三人連れ、店の亭主に挨拶をして、さてと家路の方を向いた瞬間に裏返った悲鳴を聞いた。

なにごとかと振り返った視野、ほど近い路次から男がひとり、文字どおり転げ出てくる。驚くよりもぽかんとしている間に、その路次から身を乗り出すようにして芝居じみた赤姫姿が半身を現した。さらに啞然とする目の前で、打掛の腕が振り下ろされる。男は悲鳴を上げてその場を転げまわった。

「おい」

三人ともが叫んだものの、あまりに異常な光景にそれ以上の言葉が出ない。ましてや身動きはできなかった。

加害者は声に気づいたのか、男たちを振り返った。夜目にそこだけぽっかりと白い顔がにっと笑い、そのまま路次に身を隠す。

男たちは赤姫の姿が見えなくなって、はじめて呪縛を解かれたように動いた。路次に駆け寄る。背後では飲み屋の亭主が驚いたように店から顔を出していた。

「おい、兄さん、大丈夫かい」

先頭を走る男は一声言うなり、突然わっと仰反った。後に続くふたりが慌てて止めた足許を黒い影が駆け抜ける。てんでに声を上げて影の抜けた方向を見やって、彼らは飲み屋の前で足を止めてこちらを振り返る黒い獣を見た。

一見して犬のように見えた。そうと言うのは、どことはなしに変わった姿の犬だったからだ。のちに三人の中のひとりは狐か狼ではなかったろうか、とそう言った。

獣の目が飲み屋の明かりに光る。嗤うような短い間をおいて、疾風の速度で駆け出して闇に紛れていった。

「なんだ、犬か」

狼狽をごまかすような言葉のあとで、男たちは低い呻き声を聞く。慌てて路次を振り返り、そこでもはや転げまわる体力も尽きたように倒れ伏している男の傍へと犇めきながら駆け寄った。

誰かが上擦った叫びを上げた。見れば男は血だらけのありさま。顔から首、喉にかけて目を背けたくなるような傷がついている。あたりには男が擦りつけた血がいくつもの染みを作っていた。

「女ッ」

振り返った路次にはすでに闇ばかり、何の姿もない。三人はどうする、と顔を見合わせたあと、飲み屋の亭主に男を任せ、数を頼みに路次へ踏みこんだ。

あの恰好、女の足、きっとすぐに見つかるはずだ、誰もがそう思ったが、方々を駆けまわったにもかかわらず、その姿は見出せなかった。路次に面した勝手口からどこかの家に入ったか。それとも闇に消え失せたのか。通りを行く人々や屋台の連中に声をかけても、誰ひとり赤姫姿の女はもちろん、通りがかる人影さえも見た者はいなかった。

『それで、お前さま、その男は』
娘の問いに、
「おや。お前は女の行方より、安吉のほうが気にかかるかい」
『アレ、そんな意地悪を』
黒衣は笑って娘の頬をひとつ撫でる。
「安吉は虫の息で見つかったが、結局その三日後に死んだ。それは深い傷だったそうだ」
『顔とは、それは酷な話』
「まったく、お前でなくてよかったよ」と、黒衣の指は娘の白い頬に些かの傷もないのを確かめるように動く。「それはさておき、三人は不思議がって、やがて足許を逃げていった獣のことを思い出した。あれは狐ではなかったかと誰かが言いだして、黒い狐が女に化けて、男を襲ったのに違いないという話になる」
『続きがありましょうか』
「同じようなことがね、もう五度続いているのだよ。ひとりは生きて残ったが、四人は死んだ。どれもまるで爪で剔ったような傷でねえ、必ず近くでその黒い獣が駆けて行くのを目撃されている。狐を遣うか、狐が化けたか、いずれにしてもあの赤姫は静御前の謂だろうか、それでいつか闇御前、と」

『まア』
「はてさて近頃、本当に物騒なものだね。お前も重々お気をつけ」
『あい』
「怪しげな物売りやら、怪しげな人殺しやら」
『物の怪の仕業でしょうか』
「さてね。いずれにしても夜の住人なのは違いない。だけれどねえ、夜の住人だからといって、物の怪と決めつけるのはどうだかね。いちばん暗い闇は人の胸の内に巣くうものだから」
『人の内』
「そうとも。物の怪の仕業か。それとも人の闇が起こした仕業だろうか」言って黒衣はくすりと失笑する。「さて、実際のところはどうなんだろうねえ」
『判じ物なら、判じ手が要りますわいなあ』
「その通りだ」くつくつと黒衣は笑った。娘を抱いた手で、黒い帯の絹目を辿る。「これでは役者が揃わない。むろん、判じ手はいるとも。瓦町の話をしてあげよう」
『浅草茅町北、瓦町』
「そう。その借家だ。間口九尺の小さな家だが、低いながらも二階があって、狭いながらも庭がある。一応、一軒家の体裁をしていて、この家の借り主の名を万造、ただしそ

れは本当の名じゃない」

『アレ、それは怪しげな』

「万造は浅草界隈に根城を置く大道芸師の顔だ。桝屋一家あずかりの客分で、香具師の間で雑用や揉めごとの仲裁、代理人を引き受けている、いわば便利屋。誰もが彼を万造と呼ぶし、彼自身も『浅草瓦町の万造』と名乗るが、万造とは『よろず雑事ひきうけそろ』の『万雑』に由来している」

『実の名は』

「誰も知らないし、誰も必要としていない。万造、で充分だからね。この万造の客人に平河という男がある。平河は帝都日報の記者だ。万造とは取材で会った。一昨年あたりからぽつりぽつりと増えてきた、目新しい大道芸を記事にしようと手蔓を辿って、紹介されたのが万造だったんだ」

黒い手甲から出た指だけが白い。その白い指が娘の額の生え際を撫でて、娘はくすくすと首をすくめた。

「平河は名を新太郎という」

五

新太郎の父親は旧会津藩の下級藩士だった。さらにその父親、新太郎にとっては祖父の代に不始末があって閉門を申しつけられ、閉門が解けてからも家格を下げられて汲汲としていたが、戊辰戦争のおり、忠義を見せて戦いに参加し、結局それで一命を落とした。

藩士として名前はあるもののろくな役目にもつけず、収入と呼べるほどの収入もなく、一家総出の手内職で食べるのが精いっぱいのありさまだったが、父親は一切境遇への不満を言わなかった。会津戦争に際しては自藩の大事であるからと、細い手蔓を辿って自ら願い出て戦いに赴いたのだった。

父親と別れた七月の夜を、新太郎は覚えている。上司の家に駆けつける前に、父親は母親に離縁状を突きつけたのだ。会津が戦場になるかもしれないとの噂はすでに盛んに囁かれて、当時八歳だった新太郎もそれを耳にするほどだった。あるいはその戦いの行く末を予見してのことだったかもしれないし、ひょっとしたら脱藩を勧めた母親への愛想尽かしだったのかもしれない。

真相はともかく、父親はそのまま家を出ていって、二度と戻ってこなかった。母親は

会津戦争の直前に親戚を頼って会津を出、さらに東京に移り住んだ。新太郎の下にふたり歳の離れた弟妹がいたが、ふたりはその過程で困窮のうちに死んだ。

新太郎には、なぜ父親が己を閑職に飼い殺しにしてきた藩のために忠義を示そうとしたのか理解できなかったし、今もやはり理解できない。風の便りに死んだとは聞いたが、それは父親の死というものに伴うべき感慨を何ひとつもたらさなかった。むしろあの辛い時節に、自分たちは捨てられたのだという、その思いのほうが強いまま今日に至っている。

たったふたり残された母と子は、巨大な帝都に流れ着いた。新太郎はその時の、目も眩むような華やかな衝撃を忘れない。母子が方々を流転している間に、東京は維新の戦禍から立ち直っていた。軒を連ねる店、行き交う人、往来を横切る歯切れの良い声。母子は手を繋ぎ、しっかりと互いの指を握り合って往来に立ち尽くした。貧困と飢えの影のない街。生き生きと歩く人々は、文字通り開かれゆく世界を謳歌しているように見えた。

母親は下働きに出、その後、裕福な瀬戸物屋の後添いに納まって、子供を新に三人儲けた。先妻の遺した一男一女があって、六人兄弟だったが新太郎だけが異分子だった。

新太郎が家を出たのは十四、新聞社の使い走りを五年やって、そのままそこに就職した。育ての父親はおっとりとした好人物だが、新太郎が家を出るのを止めはしなかった

し、特に妻も貰わず勝手な暮らしをしているのを咎めもしない。だからといって別に不仲というわけでもなくて、今でも喰うに詰めれば実家に転がりこむし、父親もそれを笑って迎えてくれる。

とにかく新太郎は、妻子もなければ庇護を求めてくる親もない、至って太平楽な身分、取材と称しては興味に飽かせて方々へ首を突っこむ、それが許される鷹揚な暮らしをしていた。

「昨日、面白い話を聞いたよ」

新太郎は二階の窓枠に腰を下ろして、部屋の中を振り返った。六畳の部屋の反対側の窓の脇、壁に凭れるようにして翁格子の袷を着流した万造が坐っている。髷はなくて文士風、それでもどこかおっとりと人好きのする風情があるのは、仕事が仕事だからかもしれない。物腰が柔らかく、そのくせ妙に知恵の回る、自分よりずいぶんと年下の男を、新太郎は私かに無二の友人だと思っている。

「知り合いに入船町に住んでいる女がいるんだが、この女の長屋に長松という子供がいてね、この子が妙な見世物を見たんだそうだ」

そう言って新太郎は、わざわざ入船町まで出向いて当の子供から仕込んだ話を開陳する。万造は半分眠っているかのような風情で黙ってそれを聞いていた。

「長松は慌てて明かりを路次へ向けてみたが、もう誰もいなかったんだそうだ」
新太郎が語り終えると、万造はふうん、と呟いた。
「誰でしょう。とても行商とは思えない。おおかた土場芸でございましょうが、そういう見世物は初めて聞きました」
「万造君でも知らない見世物があるのかい」
万造は苦笑する。
「そりゃあ、ありますとも。興行ならともかく、往来を流す土場芸じゃあ、近来出自のはっきりしない見世物が多うございますしね。人形遣いではないでしょう。話に聞くかぎり、どうやら本当に文楽の人形を使っているようですが、そんな豪勢な見世物などありゃしません」
「やはりなぁ」頷いて新太郎は身を乗り出した。「人魂売りとかはどうだね」
「まさか」言って万造は笑う。「そりゃあ、その人形遣いに担がれたんでしょう。蛍売りにはかなり早いので、新ねたの土場芸だと思ったほうがよござんしょうね。奇妙な見世物もあったものですが、近頃は何が始まるか分からない」
「まったくだ」言ってから、新太郎は首を傾けた。「しかし、行方知れずになる子供が多いのは本当らしい。他にも辻斬りやら、火炎魔人だの闇御前だの、どうにも物騒なことだね」

まったくです、と言って万造は眉を顰める。

「夜に茶屋を流す連中は、肩を寄せ合って往き来しているようです。実入りも悪いらしいし、物騒なばかりでなく迷惑な話です。しかし、妙ですね」

「何がだい」

「その連中ですよ。人形遣いにしても、蛍売りにしても。辻斬り、火炎魔人、闇御前と、その連中は互いが怖くないんでしょうか。人を驚かすつもりでひとり夜道を流していて、ちょいと入った小路に辻斬りが出たりしたら。そういう心配はしないのでしょうかね」

ああ、と新太郎は呟いた。

「そう言われてみればそうだね。存外、連中は顔見知りなのかもしれない。そういうことだったら、これはちょっと面白い話だね」

新太郎が一人合点で頷いていると、万造は苦笑した。

「面白がって話を拵えてはいけませんよ」

「しかし、これは話だけでは済まないかもしれないよ。よくよく考えてごらん。人魂売りやら人形遣いやら、これを仮に新手の見世物だとしよう。にしても、どうして連中は口上も芸もしなかったのだろうね。まるで人をただ驚かして喜んでいるようじゃないか。夜道で脅されて金を投げる観客がいるだろうか。見世物にしては何か可怪しい気がしないかい」

「それは、相手が子供だったからでしょう。使い帰りの子供にお銭をせびってどうします」苦笑しながら言って、万造はふいに怪訝そうな表情をする。「ああ、でも何だって連中はあんな寂しいところを流していたのでしょうね」

新太郎は袴の膝を打って、窓枠からすべりおりた。

「そう、そうだよ、万造君。夜の見世物なら、夜に人の集まる場所に行かなくては。土手蔵の並ぶ川縁なんぞを流してどんな商売だね。商売に出る途中にしては刻限が遅いし、帰るにしては早すぎる。ねえ、これは何やら本当に可怪しくはないかい」

「さて、商売としては得心のいかない話ですが」

「だろう。おまけに火炎魔人だの闇御前だの。あれは人殺しだよ、見世物じゃない。懐中めあての強盗だというのなら分かるが、誰も懐中を探られた様子がない。異堂で死んだ薬種問屋の亭主なぞ、懐が抜けそうなほど重い財布を持っていたが、これは露台に落ちたままだったのだからね」

「確かに何やら妙な話ですね」

「新手の見世物だの、物騒な人殺しだの、ひとくくりに怪しげな、と思っていたが、ひょっとしてこれは何かが起こっている兆じゃあるまいか」

「何かが」

考え深げに呟いた万造に、新太郎は頷く。

「妖怪変化の跋扈だろうか。それとも他の何かだろうか。これはひとつ、調べてみる値打ちがありそうに思うが、どうだろう」
「玄人衆の勘でございますか」
「茶化すものじゃないよ、きみ」
万造は笑ってから、眉を顰めた。
「確かに。ええ、これは漠然と近頃妙な、では済まされないような。何が出てくるか分かったものじゃァありませんが、調べてみる値打ちはありましょうね」
深く頷いてから、新太郎はときに、と声をかける。
「何を調べればいいのだと思うね」
万造は再び苦笑した。
「その見世物連中なり、火炎魔人なりを捕まえてみるのが何よりも早そうですが」
「もっと穏便な方法がいいんだが、ぼくは」
「餅は餅屋とか。土場芸ならば土場芸連中が、いちばんよく知っておりましょうよ。近頃新ねたの土場芸に行き合った者に話を聞いておきましょう。平河さんは、火炎魔人やら闇御前のほうを」
「というと」
「懐中めあての強盗じゃァなければ、恨みあまっての人殺しでしょうか。だとしたら、

殺された者が幾人もいるのはなぜでしょう。犠牲者はどこかで繋がっているのかもしれません。まずそれぞれの事件を洗い直すのが先決」

「ふむ」

「詳しい話を集めて突き合わせてみれば、何やら見えるかもしれません」

「まったくだ」と頷いてから、新太郎は破顔する。「ありがたい。万造君は手伝ってくれるのだね」

「わたしでよろしければ、お手伝いいたしましょう。なにぶん、こう夜が物騒では夜見世の連中が喰いはぐれてしまいます。かと言って新内流しが昼の長屋を流したところで商売になりゃァしませんからね」

それに、と万造は珍しく険しい顔をした。

「怪しげな連中のせいで、香具師の全部が胡散臭げに言われるのも、我慢がならない話です」

夜の小路にくすり、と笑いが響く。

『さて、成り行きや如何』

「まったくね」

酒蔵の脇の路次、蟠った闇に紛れて黒衣の姿は見えない。

『ぬばたまの川面を掻いて魚の手探り。鯉や鮒なら良けれども、河太郎など摑もうほどには、獲ったつもりが獲られた羽目の笑いぐさ。ナァ、お前さま』

くすくすと、笑い声ばかりが闇に響く。

「本当にねえ、夜はただ暗いだけじゃないのだけどねえ」

くすくすと笑う男女の声に混じって、微かにチョンと柝の音がした。

第一幕　さて、闇の華とは

闇の中に人形が坐っていた。

首は娘、衣装は赤。枝垂れ桜の文様も美しく、裾からのぞいた襦袢にもひとつふたつ桜が刺してあって、袂の桜が散りこぼれたかのよう。帯は黒。綸子に金の狂言文。

その帯に向かって艶やかな黒い髪が流れ落ちていた。首にはふつう鬘を使うが、娘の髪は首に直接植えられてあるようだった。整った生え際からしっとりと流れて背中にかかる。

きっ、と音がしたのは、娘の背後にいる黒衣が元結をしごいたせいだった。

「夜は光が隠れるから暗いのだろうか、それとも、闇が立ちあらわれるから暗いのだろうか。ねえ、どう思うかい」

『どちらがどうでも』

「では、人の心の夜はどちらなのだろうね。光が隠れるから暗いのだろうか、闇が立ちあらわれるから暗いのだろうか」

『アレ、またそのような理屈を』

「いつも不思議に思うのだよ」言って黒衣は娘の豊かな髪の間に指を忍ばせる。「いったい世の中は、昼が正しいのだろうか、夜が正しいのだろうか、とね。本当は昼であるべきものを、闇がそれを食い荒らして、それで夜が来るのだろうか。それとも、本当は夜であるべきものが、場末の女郎よろしく闇の地金が見えぬように厚く塗り固めて昼が来るのだろうかね。それともどちらも正しいのだろうか。昼と夜と繰り返していくのが本当なのだろうか」

『月の形を問うようなものですわいなァ。月は痩せるか、それとも太るか、それを問うてどうなさる』

「うん。確かにそうなのだけどね」黒衣の指は髪を櫛ですくいあげ、形作り、髻をきりりと結っていく。「繰り返すのが正しいのなら、人の心はどうだろう。人の心に落ちた闇を誰も誉めはしないもの。まるで昼だけでいるのが正しいのだと言わんばかりじゃないか。夜と昼とが繰り返すものなら、人の心もそうであってなぜいけない。どうして人は昼ばかりでいようとするのだろうねえ」

くす、と娘は笑った。

『お前さまは、悋気や嫉妬を御存じないかえ』

「知っているとも。だがね、そんなものは人の心に落ちた黄昏に過ぎない。あるいは夕

立のようなもの。闇というのはもっとずっと暗いものだ。そして多分、それは一見安らかで穏やかだ」

『そうしてその底には魍魎が』

「ひょっとしたら、誰も光が何なのか知らないのかもしれないね。人の心の光も闇も目には見えない。誰もが昼だと思っていたら、実はそれが夜なのかもしれない。瓦斯灯で明るい通りを昼と勘違いするようにねえ」

油で髪を撫でつけられながら、娘は軽い溜息を落とした。

『夜語りならばもっと他に話もあろうに、お前さまは理屈ばかりを言わっしゃるかえ』

「たまには理屈も聞くものだよ」くすりと笑って黒衣は櫛を置く。手許に並べて揃えた簪のひとつを手に取った。「光ばかりを飼っているつもりで、実は闇を飼っているのかもしれない。心を闇に染めた者は、きっと鬼に見えるだろうか。ひょっとしたら、菩薩のように見えはしないか」

『お前さまは、ほんに分からぬ』

「自分でもよく分からない。ただ、夜に惹かれるのだよ。それも人の心の夜にねえ。夜は分かるが、人の心は分からない。闇に染まった人間がいたら、会ってみたいと思わないかい。それも毒々しく塗り隠したりせずに、夜そのものでいられる人間がいればねえ」

『女子ならば、いっそう良いかえ』

険を含んだ娘の声に、秘めやかに笑いながら、花の簪、櫛を挿す。仕上げに金の烏帽子を被せた。

「女ならお前の姉妹にしてやろう。男なら、お前に添わせてやろうか」

『どちらも欲しゅうないわいな』

「悋気を見せるものじゃない。特にこの恰好ではねえ」

娘を膝に抱き上げ、笑って襟を整える指先を人形の手が捕らえた。喉許から襟の内に誘いこんで、その手を袂で抱き寄せる。かつんと背後を仰ぎ見た。

『蛇身に変じて灼き殺してみしょうか』

くつくつと笑って黒衣は娘の顔を覗きこんだ。

「悋気で身を滅ぼした女の話をしてあげようか」

ふいと顔を背けた娘にはかまわず、黒衣は笑い含みに語り始める。

「女の名をお勢という。歳は三十、亭主は箍屋で、箍を抱えて方々を回り、桶の修理をしている」

一

お勢は夜道を歩いていた。ちびた下駄の歯が不揃いな音を立てて、それでなくても燻ぶった胸のうちをさらにもやもやとさせた。

亭主が商売から帰ってこない。もうとっぷりと暮れて、気の早い者は寝ようかという頃合なのに、いったい何の商売か。

かたかたと下駄の音をさせながら、お勢は唇を噛んだ。

亭主はお勢よりふたつ若い。箍屋などしているが、ちょっと鯔背な見栄えのする男だった。その見栄えに惹かれて味噌屋の小娘が入れあげ始めたのが昨年の暮れ、すったもんだの騒動の末、切れると約束させたものの、今もこうして亭主がしばしば遅くなる。居場所ならば分かっているのだ。小娘の琴の師匠の貸し長屋。浜松町にある長屋のうちの一軒を、出入りの娘たちが水茶屋がわりに使っているのをお勢は噂で聞いていた。

今夜こそは勘弁ならないと、急ぎ足に歩くお勢の背後から声がかかった。

「姐さん、どちらへお急ぎかえ」

知り合いだろうかと足を止めたお勢は、振り返ってそれが知人であるはずのないことを悟った。こってりとした白塗りで素顔は判然としないものの、お勢の知り合いには赤

姫の扮装などして夜道を歩く変わり者はいない。

お勢は踵を返した。増上寺の裏手、寺ばかりが続く寂しい小道、気味も悪いし気も急いている。係わりあいになりたくなかった。

「つれないこと」

声を聞いたそれと同時に、背中に鋭利な衝撃を感じた。つんのめって夜道に手を突き、思わず背後を振り返る。赤姫を振り返ろうというより、自分の背に何が起こったのか知りたかった。その目に背中が見えなかったのは当然のこと、見えたのは打掛の袖口から覗く長い鉤爪だった。

「返事くらいはするものだよ。いくら急いでいてもねえ」

緋い唇が愉しげに笑った。お勢はそれを呆然と見上げた。背中はまだ痛みを感じない。それでも湿った生温かいものが、帯の下に伝って染みこんできたのを感じていた。

元信は門まで檀家衆を送り出して、そこで女の悲鳴を聞いた。挨拶を交わしていた全員が声の方向を捜して周囲を見渡す。どうやらほど近い場所から聞こえたようだった。駆け出したのはその場の全員、方々を窺いながら増上寺のほうへ入っていくと、夜道に女が倒れている。元信は女を助け起こし、わっと声を上げてその手を放した。顔といわず喉といわず、無惨に裂けた傷痕で潰れた石榴のようなありさまだったのだ。

狼狽した叫びは幾人分か、手に手に提灯が掲げられて、それで夜道に蠢った影のようなその姿を見つけた。ある者は黒犬だと思い、ある者は黒狐だと思った。そんな獣が暗く閑散とした道に佇んでいたのだ。

闇御前、と誰かが声を上げた。それで誰もが昨今巷を賑わせている狐女のことを思い出した。

逃げ出すように退ったのが半数、獣に向かって踏み出したのが半数だった。獣はふいと脇を向いて、そうして駆け出す。相手が逃げたのを見てとって、退った者までがその後を追って駆け出した。

獣の足は速い。あっという間に樹木の並ぶ道を駆け去り、角を折れたのを遠目に見ながら息を切らせて追いかけ、曲がろうとしたその刹那、角の向こうから人影が転がるようにして飛び出してきた。

闇御前かと身構えてみれば、相手は単なる着流し姿、噂に聞く白塗りの様子も見えないのも当然、年若い男だった。これが駆けつけた元信たちを見やって声を上げる。

「助けてください」

優しげな顔立ちの頼りなげな若者だった。痩せた肩が息を切らせて上下している。どうした、と元信が声をかければ、怯えたように背後を示した。

「妙な女が」
言われて角の向こうを覗きこんだが、そこには何の人影もなかった。
「いない」
そんな、と切れぎれに言って、若者もまた通りを振り返る。徳川霊場に沿ってまっすぐな道が続くだけ、もはや人影も獣の影もありはしない。
「打掛姿の女が」と言って若者はほっそりとした手を示した。左の掌（てのひら）が赤く染まっている。そこに鋭利な爪で裂いたような、深い二条（すじ）の傷痕があった。「なにやら刃物を持っていて」
「大丈夫かね」
元信が声をかけると、若者は頷（うなず）く。
「ええ。でも、確かに」
「それより犬を見なかったかね」
「見ました。急にこの角から飛び出してきて、東のほうへ。それで振り返ったら女が」
「ひょっとして赤姫の」
「たしかに赤い打掛のようでしたが、一瞬のことなので」
ようやく息の整ったふうの若者とともに、全員で近くを捜したが、何の姿も発見できない。海軍省の裏手に続く小道の入口あたりに、どうしたものか蕎麦（そば）の屋台がひとつ止

まっていたが、提灯に火はなく、蕎麦屋の姿も見られなかった。
若者が角から転がり出てきて、そこへ駆けつけるまで、いくらもかかってはいない。道は天光院までまっすぐ、右は徳川霊場、左は海軍省、飛びこむ路次もありはしない。なのに逃げていく後ろ姿も獣の姿も見られなかったのはどういうわけか。
やはり、と元信は思った。闇御前は闇の中に溶け消えてしまったのだろうか。

二

新太郎が万造の住居を訪れたのは、先の会話をしてから五日後のことだった。
「万造君、闇御前が出たよ」
勝手知ったる他人の家、玄関先から声をかけたばかりで返答も聞かずに階段を昇っていって、新太郎は襖を開きながらそう告げる。
「ああ、平河さん」
下には台所と茶の間、厠のそれきり、二階にあるたった一間を万造は自室に使っている。その二階の部屋の寝床から身を起こして、万造はきまり悪げに笑った。
「なんだ、まだ寝ていたのかい。点灯夫が走る時刻だというのに」
「ごろごろと物臭を決めこんでいただけでございますよ。闇御前が出たとか。いつで

す」

「昨夜だ。女をひとり殺して」

軽く眉を顰めながら、万造は布団を畳む。

「これで、幾人になりましたか」

「六人目だ。成す術もなく、六人も」

万造は浴衣のまま積み上げた布団に凭れた。洋灯には灯が入っているし、長火鉢には炭が入って鉄瓶に湯が沸いていたので、本当にごろごろしていただけなのだろう。呼ばれれば夜中にでも出ていく万造の生活は不規則で、蝙蝠が飛ぶようになってから起きることも珍しくない。それで新太郎もこういう事態には慣れている。

「湯屋帰りの鳶、呉服屋の小僧、飴売りの爺、飲み屋の女給。侘び住まいの老婆に、そして昨夜が箍屋の女房」

そうですか、と呟いてから、万造は新太郎を見る。

「それで、何か分かりましたか」

「さて、仕込みだけは一応ね。長い話になるから、きみの話から聞かせてもらおう」

「別にお話しするほどのことは仕込めませんでした。お茶をいかがです。出がらししかありませんが」

「いただくよ、ありがとう。すると例の見世物は香具師の身内じゃないのだね」

「やはり、そのようです。桝屋の親分さんにも訊いてはみましたが、やはり御存じないとか。一家衆に尋ねてみても、知り合いだという者もおりません。知り合いを知っているという者も」

万造は険しい顔で土瓶に湯を注ぐ。

「蛇の道は蛇、同業者は同業者に詳しいものです。それが、誰も件の連中を知らない。見かけたという者もおりません。噂をちらほら聞いたことがあるばかりで」

「見たことがないとは、妙な話だね」

「ええ。まるで同業者を避けているようです。浮き草稼業とは言っても、本当に根無し草ではなし、この稼業にも元締めというものがございます。付き合いもあれば、しがらみもあるもの。それを嫌って敢えて同業者を避けているのか、そのあたりははっきりいたしませんが」

万造は新太郎の前に欠け茶碗を置いた。

「ただ、件の連中はまっとうな香具師ではないと、それだけは確かなようでございますね。噂をたよりに数えると、まずは居合抜き。首を刎ねられた死骸が幾つか」

「四人だ」

新太郎が言うと、万造は笑う。

「なるほど、四人ですか。その被害者のひとりと話をしている居合抜きを見かけた者が

おります。居合抜きなら香具師のはしくれですが、見慣れない顔だと思ったばかり、立ち話の最中だったせいもあって、特に挨拶もせずに通り過ぎたようですが」

「なるほど」

「それから蛍売り。これも時節外れの蛍売りだと思ったばかり、子供と何やら話しているのを見かけたことがあるとか。その子供がのちに行方不明になったと、そういう話も聞きますが、本当なのか尾鰭なのか、はっきりいたしません」

「しかし、蛍売りならぬ人魂売りには妙なところがあるだろう」

「蛍にしては大きな光、ですか」言って万造は首を傾ける。「それが、誰も蛍の入った袋を持った蛍売りを見ていないのです。見たと話を聞くのは、黒紹の空袋を持った男の噂ばかり、これも何やら妙なことでござんすね」

新太郎は唸る。空袋を持った男が子供と一緒に目撃される。そのあとに子供が消えて、人魂売りとやらが目撃される。これでは本当に長松が聞いたという人形遣いの話のようではなかろうか。

「あとは人形遣い。文楽の娘人形を使って、文楽の芝居ではなく、歌舞伎芝居のひとくさり、黒衣との掛け合いをするそうですよ」

「ほう」

「本来人形は三人がかりで遣うものですが、それを器用に黒衣一人で。その他には首遣

いとか。生首を飛ばしてみせるのだそうです。あと、見慣れない顔の行商と言えば、般若蕎麦」

「なんだい、そりゃあ」

「さあ。詳しくは。屋台の蕎麦屋で、なんでも亭主は般若の面を被っているとか。客が来れば、命の次に大事なものは何か、と客に訊く。蕎麦代はそれだというのだそうです」

「そりゃあ、法外な話だ」

「ええ。これも噂ばかりで、詳しいことは、とんと。同じ手口の読売りもおりますよ。客が声をかけると、珍しい噺をしろと言う。読売りが客に話をねだるのじゃ、あべこべですが、興を誘われて客が話すと、もっと聞いたこともないような噺でなければ読み本は渡せない、と言うらしいのです。大きな木箱を背負っていて、そこに文字が、珍妙珍奇噺替、と」

「ふうむ」

「それから、易者。これは背の低い爺さんだそうです。なにやら妙な皿を出して、生まれた月日を訊いてくるとか。よく当たるそうですよ」軽く笑ってから、万造は自分に確認するように頷いた。「とりあえず、それくらいでしょうか。他にもちらほらと、珍しげな土場芸や見慣れない行商の噂を小耳に挟みましたが、これはもう本当に海のものと

も山のものとも知れません」
「なるほどね」
「共通するのは、見慣れないこと。それから、必ず夜にしか見当たらないこと」
「よる」と新太郎は口の中で言葉を転がしてみる。「いったい東京の夜に何が起こっているのだろうね」
「はい、本当に」
新太郎は軽く息をつく。短く刈った頭をひとつ掻いてから、絣の懐に手を突っこんだ。そこから取り出したのは小判の帳面である。
「火炎魔人とかいう奴は、ちょうど一月前に現れた。最初は両国、巽堂という座敷店だ。死んだのは旭町の義助という男で、三十七、薬種問屋の三代目。店はその時刻ごったがえして、義助が露台に上がるのを見た者はいない。火炎魔人と思しき人物を見た者も同様にいない、というわけだ」
「巽堂はずいぶんな流行りようでございましたから」
「うん。次は五日後。今度は芝の愛宕塔だ」
明治に入って建築物の高さ制限が取り払われた。それと同時に高所からの展望が見世物になることが発見されて、方々に展望所が建てられ始めた。巽堂のような展望を売りにする高楼建築の店もその流れの中で当然のように誕生したものである。

二十年には浅草に富士縦覧所と称する富士山の紛いものが登場、それに刺激されて翌年末愛宕山に建てられた物見台、愛宕塔と呼ばれる建物は、煉瓦造り八角形五階建てのものだった。建物自体の高さからいえば、二十三年に浅草に建った十二階に比べるべくもないが、そもそも愛宕山は平地から断崖をなして屹立する丘陵地、登れば三方に眺望を得ることができる景勝の地である。ために未だに人気が高かった。

「愛宕塔の天辺に立っている火炎魔人をそぞろ歩きの連中が見つけた。男の悲鳴がしたので塔のほうに寄ってみると、愛宕塔の五階、展望台の上に火炎魔人がいたというのだね。愛宕塔はもう閉めてある時間だったが、表が壊されていた。落ちた男は例によって、全身の火傷に背中の手形、駆けつけた連中が見つけた時にはすでに息がなかった。これは近所に住む勝八という俥屋だった」

商人、俥屋、と万造は呟く。

「その次が剛次という漁師、北門橋の上から。あたりは西本願寺やら海軍兵学校やらで夜には人通りもなく寂しい場所だが、荷の揚げ降ろしをする船の往来は少なくない。橋の上に火炎魔人を見つけて、あわてて船を寄せると、川面に剛次が浮いていた。やはり全身の火傷と背中の灼き痕、そちらのほうは水に落ちたのが幸いだったが、事情が事情だけにさしもの漁師も溺れて助からなかった」

新太郎は帳面を畳の上に投げ出した。家族、縁者、経歴、調べられるだけのことは時

間の許す限り調べたが、被害者の誰もが毒にも薬にもならない連中で、殺されるほどの恨みを買うとは思えない。

「まあ、とにかく見てごらん。怠けていたわけじゃないが、御覧の通り、何の収穫もない。誰もがどこにでもいる当たり前の人間たちだ。辻斬りに襲われたのは四人。下っぱ役人、魚屋の女房、植木屋、それから蕎麦屋。首を刎ねられてそれきりだ。どれも首は見つかっていない」

万造は帳面を手に取る。

「何の関係もありそうじゃござんせんね」

「だろう。共通するのは、それが夕刻でも早朝でもなく、夜だということだけだ。それも深夜ではない。人通りが絶えはしないが、決して多くもない頃合、闇の中から現れて闇の中に消えていく」

万造はしばらく無言で帳面を繰っている。

「闇御前が六人。飴売りの爺がひとり生き残ったが、喉首かっ切られて喋れない。読み書きもできないうえに、歳と酒のせいでずいぶん耄けてもいたから、何が起こったのか当人には訊く術がない」

「狙われたのはひとり歩きをしていた者ばかり。なるほど、ろくに証人もいないのですね」

「それだよ」
いきなり新太郎は身を乗り出した。
「いるのだよ、証人が、ひとりだけ」
「闇御前に襲われた老人ではなくて、ですか」
「違う。実はね、もうひとり、新聞には出なかったが闇御前に襲われた人物がいるのだよ。昨夜、女が襲われたときに闇御前は通りがかった連中に追われた。正確には件の獣を追っていたのだがね。路次から路次へ逃げた獣に行き当たって、危うく殺されそうになったが軽い怪我で済んだ者がいる。それで、その人物をこれから訪ねてみようと思うのだがね」
万造は苦笑する。
「そりゃア酷い。訪ねるからには、もう約束をしてあるのでしょう」
「してあるとも。万造君、良かったら同行しないかね」
「だったら早く言ってくださらなくちゃ困ります。私はまだ顔も洗ってないんですよ」
新太郎は声を上げて笑った。
「なあに、化粧をするわけでもあるまい。俥を奢るよ。急げば蕎麦を仕込む時間くらいはある。付き合ってくれるのなら、手っとり早く水を使っておいで」

三

新太郎が万造を案内したのは、麻布汐見坂の邸宅だった。麻布区共同館の前で俥を乗り捨て、濃く宵闇が漂い始めた町を歩いた。邸宅の多い町並みは樹木も多く閑静で、寂しさを紛らす灯火も遠く塀の内、夕風にはしんと冷たいものが混じっていた。どこからか鉦太鼓の寂しい音が響いてきている。遠目に見える路次口で子供がひとり独楽を回して遊んでいた。

「こんな時間に大丈夫なのですか」

万造の声はぺたぺたと草履の音をまとわりつかせる。

ウン、と新太郎は頷いて、一人遊びする子供から目を離した。

「まだ学生なのでね、夜のほうが都合がいいとのことだ。ああ、このあたりのはずだよ。そこに見える門柱がそうじゃないかい」

新太郎が示したのは、西洋風に門扉を拵えた煉瓦造りの門柱だった。鉄柵の内側には西洋杉が並んでいたが、さしては高くもなく、その枝の上に洋館の屋根が覗いている。万造はわざわざ足を止めてそれを見上げ、息を吐いた。

「ああ、これは本当に酷い。こんな大層なお屋敷なら、そうと言ってくだされればいいの

に。こんな恰好で、失礼を咎められたらどうしてくださるんです」
万造が情けない声を上げる。
「使いをやった感じでは、そうそう煩い人でもなかったようだよ」
「けれど偉いお人なのじゃないんですか」
「さてね。名前は鷹司さんと言うが」
万造は困惑したように瞬いた。
「まさか、元摂関家の鷹司家のことじゃァないでしょうね」
「いい勘だ。その鷹司家だよ。先代はあの鷹司熙通」
ああ、と万造は芝居じみて顔に手を当てる。
「本当になんて酷いことをなさる。恨みますよ、平河さん」
心底恨めしそうな声に、新太郎は軽く笑った。

門扉は内側に開かれ、建物に続く白州の道の両脇には瓦斯灯が点されていた。
鷹司邸はまだ新しい洋風建築、白い石の堂々たる建物で、正面玄関の大きな樫材の二枚扉には青銅製の叩いて鳴らす呼び板がついていたが、果たしてこの広大な屋敷で、この音が聞こえるのだろうか。訝りながら金具を叩いてみると、すぐに内側から扉が開いた。約束の時刻、中では人が控えていたらしい。

現れたのは和装の老婦人、それが丁寧に頭を下げる。
「帝都日報の平河新太郎さまでございましょうか」
「はい。御主人にお目にかかりたいのですが」
「いらっしゃいませ。お待ち申しあげておりました」
老婦人は新太郎たちを中へ招く。連れがひとりあると思う、と使者に伝えさせておいたせいでか、特に万造について問い質されはしなかった。
入ったところは玄関広間、正面の壁を大階段が上っている。中二階までまっすぐ上って、そこから左右に分かれる様式の階段の、その踊り場の正面には大きな日本画が掛けてあった。
「少々、こちらでお待ちください」
婦人は言って新太郎らに椅子を勧める。同時に奥から盆を掲げた若い女中が出てきたので、本当に待ち構えていたのだろう。
「失礼ですが、あれは鷹司熙通さまの肖像画でしょうか」
女中から受け取った茶器を小卓の上に置きながら、老婦人は微笑う。
「はい。先代さまの」
画布の中の熙通は黒の礼装、胸に下げた勲章の数は想像されるよりも少ない。彼の置かれていた複雑な立場をよく表しているように思われた。

鷹司家は藤原氏の末裔、近衛家実の四男、兼平を祖とする。近衛、九条、一条、二条の四家と並ぶ五摂家のうちの一で、熙通の祖父にあたる輔熙は幕末の動乱期に関白を務めた親長州、尊攘派の廷臣だった。文久三年八月十八日の政変で関白を退き、以後公武合体派の孝明天皇の許、雌伏を余儀なくされる。

孝明天皇の崩御から今上帝の即位、尊攘派の再びの台頭、その果ての王政復古の中で当然のように復権を狙っただろうが、新政府の方針は明解だった。旧態を徹底的に排すること、討幕に対し積極的に働かなかった者の一切を排除すること。摂政関白が廃止され、五摂家が廃絶され、そのうえさらに輔熙は参内停止の処分にあった。彼は新政府の中枢から完全に弾き出されてしまったのだ。

失意のまま隠遁を余儀なくされた祖父輔熙、唯々としてそれに従い甘んじた父輔政とは違い、その後継者熙通は政府にも所属せず、朝敵でもない己の立場を利用することに長けていた。彼は朝廷からも幕府からも自由な自分を奔放に生かした。

彼が動乱期の中で真実何を行なったか、委細を知っている者は少ないが、明治十七年、華族令が発布されて旧五摂家の家格に基づき公爵が授与されたとき、熙通は一財を抱えた外交通になっていた。横浜の別邸に足を運んだ外国要人は引きも切らなかったと言われる。

この外国通でしかも外国語に堪能な人物は、外交上の問題において野に下ったまま多

くの成果を挙げ、十年前、ちょうど五十で死亡した。画布の中の熙通は逝去間際のものだろう、五十近くのように見える。細面に眼光の厳しい、どこから見ても切れ者の、小柄な体格のわりには威圧感のある人物だった。

新太郎は熙通の峻厳とした表情に見入る。新太郎自身は維新前の生まれ、物心ついたときには世界は激動のさなかだった。

まるでうねる大波のようにして、古いものが新しいものに呑みこまれ、それさえもさらに呑まれて変化していく様を肌で感じとってきた。時代は文字通り怒濤の勢いで変化する。天変地異とも思われた変化を、呑まれもせず、むしろ裏で御していた冷徹な手があったのだ、とそんなことをしみじみ考えた。維新は新太郎にとっては嵐だった。しかし、熙通にとっては疾走する馬のようなものだったのだろう。

「どうぞ、こちらでございます」

老婦人に声をかけられて、新太郎は物思いから覚めた。

「ああ、ありがとうございます」

慌てて席を立ち、老婦人のあとに続いた新太郎は、同じく立ち上がった万造と視線を合わせた。万造の目にも感慨深げな色がある。彼もまた同様のことを考えたのかもしれなかった。

四

老婦人に案内されたのは一階の一室、そこに待っていたのはまだ若い洋装姿の、ほっそりとした人影だった。

「常さま、平河さまを御案内いたしました」

室内はほぼ完全な洋風だった。ほぼと言うのは、様式は洋風でも随所に和風の意匠が残っていたからだった。仏蘭西窓から見える庭は瓦斯灯の明かりこそあるものの、枯れた和風の庭園、欄間位置にあたる壁と天井には明らかに日本画の手法によって花鳥図が描かれている。部屋に備えられた椅子は古代裂の錦張り、小物にも和風の意匠によるものが多かった。

「鷹司常熙と申します」

丁寧に頭を下げた物腰は柔らかい。柔和な女性のような面差しの青年だが、青年と呼ぶにはいささか雰囲気が頼りないように思われた。

やんわりと笑った顔に、父熙通の峻厳な面影はなかった。到底、時代という暴れ馬を御せる人物には見えない。そのせいだろう、この当主は熙通の跡を継ぐことなく、ひっそりとここに隠栖している。

「初めてお目にかかります。ぼくは帝都日報の平河と」

軽く会釈をして彼は長い睫毛の目を万造に向ける。別段不審がる様子もない、柔らかな目の色だった。

「私は瓦町の万造と申します。平河さんの使い走りをさせていただいております」

新太郎は内心で苦笑する。いくらおっとりとした人物に見えても、仮にも公爵家の当主に向かって香具師の便利屋、桝屋一家の客分なのだとは言いにくい。万造の心中を察したので、特に異論は唱えなかった。

彼はにこりと笑って椅子を勧める。女中が紅茶を運んできた。

「見事なお屋敷ですね」

新太郎が当然のように口に昇らせると、彼はやんわりと微笑う。

「ありがとうございます」

「洋館というのは流行のようですが、これほど見事なお屋敷に伺ったことはありません。ただ、少し雰囲気が違っていますような」

そう言って新太郎はカップをしげしげと見やる。光琳派の蒔絵を思わせるような意匠の一揃いの、受け皿には抱牡丹に似た文様が小さく染めつけられている。記憶に間違いなければ抱牡丹は近衛家の家紋、これを特に近衛牡丹と呼ぶが、近衛家にゆかりの家々も近衛牡丹を変じた類似の紋を使用したはずだ。するとこれが鷹司家の家紋、鷹司牡丹

と特に言われるものなのだろう。

「鷹司さまの」

ああ、どうぞお気兼ねなく、と彼は口を挟んだ。

「わたしなどは御覧の通りの若輩、平河さんのほうが年長でいらっしゃるのですから」

「はあ、しかし」

「官吏はおろか記者になる能もない、しがない二代目でございます。どうぞ本当にお気づかいなく」

困惑して新太郎は万造を見やる。万造の顔には好意的な色の微苦笑が浮かんでいた。

「知人は常と呼びます。わたしには鷹司の姓も熙の文字も、少し荷が勝ちすぎるようでございます」

おっとりと言って常は微笑ったが、これは謙遜というものだろう。明治五年の太政官布告で複名が禁止されて、通称や別号などをわざわざつけることが廃れていった。「常」とはそのかわりに用いられる通称のようなものなのだろう。

「これは父が建てました建物です。もっとも、とうとう完成したところを見ることなく逝ってしまいましたが。設計は外国の技師に任せたようですが、室内の装飾は家具や食器に至るまで、全部父が采配いたしました。西洋の真似ではいけない、外国のお客さまは日本を御覧になりたいのだから、と生前よく申しておりましたので、それで少し余所

さまとは違っておりますのでしょう」
「ああ、なるほど」
そうと聞いて改めてあたりを見ると、外国の珍しい風物に憧れて訪ねてくる来客には、好ましい建物なのかもしれなかった。
「それでも洋館なのですね」
「書院が離れにございます。お客さまをお泊めするには、やはり洋館でないと、と、これも父の受け売りでございますが」
「やはり外国のお客さまが多いのですか」
新太郎の問いに常は首を傾ける。
「父を偲んで訪ねてくださるお客さまもおられますが。それも年々減っておりますし、宝の持ち腐れというところでございましょうか」
特に卑屈な様子には見えなかったが、やはり父熙通の存在が重いのだろうと、そんなふうにも思えた。
近年来の極端な欧化主義に対して、国粋主義を唱えて反抗する者たちがいる。野に在って稀代の外交官であった熙通の薫陶を受けたこの若者に、そのあたりを訊いてみたい気もしたが、それも何やら躊躇われて、言葉を失っていると常のほうから用件を切り出してきた。

「ときに平河さん。昨夜の出来事について話をと、お使いの方にはお聞きしましたが」
慌てて新太郎は来訪の目的を思い出す。
「ええ、はい。闇御前とやらについて調べておりましたところ、鷹司さんが、闇御前に襲われて辛くも助けられたと、そのようにお聞きしまして。なにぶん証人のない事件ですので、何かお話を伺えたらと」
常はやんわり苦笑する。
「そんなに大層なことではなかったのです。ちょっと行き合ったと、それだけで。お役に立つほどのことがお話しできますかどうか」
新太郎は軽く身を乗り出した。
「では、鷹司さんが闇御前に行き合われたというのは、本当なのですね」
はい、と常は頷く。新太郎は思わず笑みを漏らしてしまった。
「なにぶん、やんごとないお方のこと、事件に係わった警官も記者も、言葉を濁して言明してくれません。ひょっとしたら単なる噂かとも思っていたのです」
常は少し困ったふうに微笑う。
「わたしは帰りを急いでおりましたので、官警が来るのを待たず、名前だけをお教えして先に失礼したのです。そのせいでなければ、亡き父を憚って遠慮してくださったのでしょうか。わたしは別段、記事を差し止めたり、人さまの口に蓋をしたつもりはなかっ

たのですが」
「なるほど。詳しいことをお訊きしてもよろしいですか」
「どうぞ」
「鷹司さんが闇御前に出会われたのは、徳川霊場のあたりだったとか」
常は頷く。
「はい。海軍省の裏手を抜け、徳川霊場の脇を歩いておりましたら、急に足許に犬が」
「間違いなく犬ですか」
新太郎が訊くと、常はやや首をかしげた。
「ああ、犬だ、と思いました。ですが言われてみると、犬にしてはどこか奇妙だったような」
「狐ということは」
常はやんわりと微笑う。
「黒い狐というのは聞いたことがございません。あれは少なくとも狐と呼ぶには黒かったと思います。少し犬よりもほっそりとしておりましたけれど、どんな動物だったと問われれば、やはり犬だったと、そうとしかお答えしようがありません。わたしは犬が好きですし、自分でも飼っておりますので、そう思っただけかもしれませんけれど」
「なるほど。それで」

「犬が足許を駆けていって、なんだろう、と思いはしましたが、気に留めませんでした。それよりも、誰かが何かを怒鳴っている声が聞こえてきて、そちらに気をとられてしまいましたので。そうしたら、いきなり背後に人の気配が」

「振り返ると闇御前だった」

常は頷く。

「衣擦れの音を聞いたのか、それとも息づかいでも耳に入ったのでしょうか。ふっと何気なく振り返ると、打掛姿の女が。袖口から長い爪が覗いていて、それが振り上げられるところでした。どうして避けられたのか、自分でも分かりません」

「でも、怪我をなさった」

「はい。とっさに出した掌を」言って常はまだ包帯の巻かれている左手を示した。「治癒にはしばらくかかるようですが、そんなに大した傷ではございません。ほんの少し剔られた程度で。怒鳴り声がすぐ近くまで来ておりました。それでとにかく角に転げ出て、人を呼んだのです。南のほうから人が駆けてくるところでございました」

「それで、女は」

「駆けつけた人たちに、とにかく背後を示して振り返ったときには、もう姿はどこにも」

ふむ、と新太郎は眉を顰める。

「どこかの小道に隠れたというようなことは」
「ないと思います。他の方々としばらくあちこちを捜しましたので」
「犬もそれきり見なかったのですか」
「はい、どこにも。犬ならばどこへなりとも潜りこめましょうが、あの重い衣装をつけた女性が隠れるのは簡単なことではございません。まして道は天光院までまっすぐでございます。振り返ったのも、ごくわずかの間ののち、どこかの窪みに身を潜めたとしても裾なり袂なり見えてよさそうなものでございますが。爪から零れたのでしょうか、血の跡が転々と残っておりましたが、それもふっつり途切れてそのまま。みなさん、不思議なことだとおっしゃっておいでした」
それでは、犬が変じて女に化けたようではないか。そうして闇の中に消え去ったかのような。
常は思い出そうとするように首をかしげる。
「ああ、でも、蕎麦の屋台が出ておりました」
「蕎麦の」
「はい。屋台に般若の面が描いてあって、ぎょっとしたので印象に残っているのですが。誰もおりませんでしたし、灯も落ちておりましたが、釜の中には湯が残っておりました。亭主が少し屋台を離れたと、そういうふうでございましたけれど」

新太郎はちらりと万造を見た。万造が言っていた妙な行商（ながし）の中に、般若蕎麦と呼ばれる蕎麦屋がなかったか。目線を交わしてから、新太郎は身を乗り出す。
「どんなことでも結構です。その女について覚えてらっしゃることはありませんか」
新太郎が言うと、常は困ったようにする。
「それが、月の明かりが頼りの夜道、本当に一瞬のことでしたし、わたしも驚いておりましたので」
「そうでしょうねえ」
やや落胆して新太郎は息をついた。
失礼ですが、と口を挟んだのは万造だった。
「おひとりだったのでございますか」
「はい。わたしひとりです」
「こう申しあげてはなんですが、あのあたりは夜には寂しいところ。昨今の事情を考えますと、いささか無用心なように存じあげますが」
常は少し含羞（はにか）んだような笑みを浮かべた。
「愛宕町に私用がございまして。三田英学校の近くまで出掛けた、その帰りだったのでございます」言って軽く口ごもる。「その、あまり余人を伴いたくはなかったものですから。できれば知人に会いたくもありませんでしたので、西ノ久保（にしくぼ）のほうへは抜けず、

増上寺のほうへ歩いていたのですが」

その表情を見て、新太郎は内心で手を打つ。

「ああ、どなたかいい人がいらっしゃるんですね」

出過ぎかと思った新太郎の言葉を咎めもせず、さらに常は含羞んでみせる。切れ長の涼しげな目許にほんのりと朱の昇るのが微笑ましく、同時になにやら艶めいて見えた。

「はい。このことばかりは、平河さんの胸の内にしまっておいてくださいまし」

新太郎は笑いを恢えた。

「重々承知いたしました」

俥を出そうかという常の申し出を辞去して、新太郎は万造と夜道を歩いた。あたりにはすでに深夜の気配が漂っている。しんと静謐な麻布、路次の入口にはぽつんと独楽が転がっていた。子供が忘れていったのだろうか。

我ながら呆れたことに、すっかり常と話しこんでしまった。覇気の薄い人物だが、聡明な若者と会話をするのは心地好かった。果ては家令や女中までが交じって、当節の噂話に花を咲かせた。常はそのあたり、非常に優しいおおらかな主人のようだった。女中などが意気揚々と喋るのを微笑って見るばかりで咎めもしない。新太郎のほうがはらはらしたほどである。

家人はこの若い当主をたいそう慕っているようだった。女中が自慢話を始めると、このときばかりは「お止しなさい」と窘めて、顔を赤くしたのが思い返しても微笑ましい。

「どうだね、少しも難しい方ではなかったじゃないか」

新太郎が言うと、万造は苦笑する。

「気取ったところのない方でございますね。もっとお高い方かと思ってましたが」

「まったくだ。あまりお父さまの熙通卿に似ておられない。なにしろ線が細い。おっとりとした御気性といい、ちょっと可憐な娘さんのようだね」

「失礼なことをおっしゃるもんじゃございません。仮にも公爵さまなのじゃありませんか」

新太郎は笑った。

「ああ、そういうことになろうかね。しかし、残念ながらあまり意味のある話は聞けなかった」

「さようでございますね」

頷いて万造はわずかに眉を顰めた。

「なんにしても鷹司さんには大事がなくてよろしゅうございました。さても闇御前とやらは闇に身を隠すのが巧い」

新太郎は万造を見返した。

「きみは、どう思う。闇御前はどこに消えたのだろうか」
万造は瞬きして首をひねった。
「どこへ、とは。もちろん、闇に紛れて逃げ出したのでございましょうに」
「まさか万が一にも、本当に消え失せたということがありうるだろうか。闇御前なる者が、本当に妖怪変化の類だということは」
莫迦な、と万造は苦笑した。
「捜した者が見落としただけでございましょう。それとも平河さんは妖怪変化を信じておいでですか」
「いや、信じているわけじゃないのだけど」言い淀んでから、新太郎は万造の表情を窺う。「では万造君は、妖怪ではないと、闇御前も他の連中も人だというのだね」
「もちろんでございますとも」と万造は笑う。「例えば人魂売りだとか。聞けば気味が悪いようですが、実際に袋の中にいたのが人魂だと、確かめた者がおりますでしょうか。首遣いとやらが飛ばす首が、本当に生首だと、確かめた者は」
「それは、聞いたことがないね」
「そうでございましょうとも。妖怪変化は人を取って喰らうとか。ならば居合抜きの男はどうして光り物を使う必要があるのですか。闇御前にしても火炎魔人にしても、人がやってやれないことではございません。爪のような刃物と火があればいいのですから。

あとは追手に捕まらないよう、ほんの少し運が良ければいいだけなのじゃございませんか」

確かにそうだ、と新太郎は頷く。

「では、あの連中は奇妙じゃあるが、人なのだね。妖怪変化が跋扈しているのではなく、血に飢えた人が跳梁しているのだと」

はい、と万造は頷いた。

「しかし、いったい、何のために」

「さて。そればかりは本人たちに尋ねてみませんことには」

新太郎は首をかしげる。少しの間、月明かりが足許に落とした自分の影を睨みつけた。思案はしたが、これと言って納得できそうな想像は思い浮かばなかった。

「これで被害が終わればいいのですが」

万造が呟いて、新太郎は顔を上げた。

「まったくだね」

第二幕　一方、夜の華とは

夜の参道には二十ほどの人だかりができていた。
「アノ、白々しい。隠しゃいのう。そなたが朝夕、肌身離さぬその錦絵。まだそのうえに、確かに腕に」
さして大きくもない寺だが、なにがしかの縁日か、参道にはぽつぽつと露店が出て、多くはないが人の流れも続いている。その参道の少しはずれ、大きな石造りの常夜灯の下に人が集まっているのだった。
「それほど真実惚れている、男があるゆえ、それでわたしに。ハテ、その男はどこの誰じゃ。言うて聞かしゃ。この山三とて野暮ではないわいの」
『そのようなありがたいお詞をくださりますれど、どうしてあなたに打ちつけに』
男の声は常夜灯の中程に坐った黒衣のもの、答えて腕を押さえ、恥ずかしげに顔を伏せたのは娘人形。
「言われぬほどに心底づく。隠すほど猶聞きたい。ちょっとそなたの腕の」

『アもし、おゆるしなされませ』
「いやいや、なんでも見にゃならぬ」黒衣は片手で膝の上の人形を抱えたまま、もう一方の手で娘の手を引く。軽く指先で袖口を持ち上げるようにして、「なんじゃ。旦那さま命。はて、変わった腕の刺青じゃなァ」
『この旦那さまとは、ほかにござりますかえ』
ヤ、と驚いてみせる黒衣を娘はしっとりと見上げた。
『もったいないことながら』
「そんならそなたは」
『とうから、あなたに』
「ヤ」
『ハイ』
娘は首を俯け、袂で白い顔を隠す。襟元から匂いたつように羞恥が香った。
「ハテ、可愛い奴じゃなァ。その真実な志、仇には思わぬ。今宵は互いに」
『もったいないことながら、これで死んでもわたしは』
「奥の小部屋で。コレ、まず屏風を」
『ハイ。屏風は先程、余所へ』
「余所へ貸したか。ハテ、屏風がわりに」言って黒衣は、常夜灯に立てかけてあった古

びた傘を取り上げて、「幸いここにありあわす、開く屏風のそのかわり、開く傘、家の紋、これなと立てて」それを開いてさしかける。

『モシ、ありがとうございます』

黒衣を見上げた娘は、うっとりと身を黒衣の胸に寄せ、手を添え頬を当てるようにした。黒衣は傘を傾ける。

「傘の文字は照降町の。降らねばよいが」

娘を隠した傘の内で、チョンと柝の音がした。

少しの間、しんと観客の声はない。片頬につけた絵の具を拭った娘が、傘の縁から周囲を窺うように顔をのぞかせて首を傾けると、どっと観客の歓声が上がった。

「こりゃあ、見事だ」

「なんとも可愛らしいお国じゃないか」

「いったいどうやって遣っているんだね。まるで人形が生きているようだが」

観客の声をよそに、黒衣は腕に人形を坐らせて立ち上がる。観客に向かって頭を下げた。

「鞘当、名古屋浪宅の場でございました。春の宵もおいおい更けますれば、今夜はこれきり」

拍手といっしょに、半開きにすぼめた傘の中に小銭が投げ入れられた。それに対して

娘ともども頭を下げ、黒衣は常夜灯の傍を離れる。話をしようと声をかけた観客もあったが、聞こえたのか聞こえないのか、執着も見せずにその場を去って、参道脇の闇の中へ消えていった。

『どうじゃえ。可愛らしいとナ』

腕に坐った娘が言って、黒衣はくすくすと笑いを漏らした。

「今夜は本当に良い出来だった。男衆は妬ましげでねえ」

『少しは見直して、一人命に思い定めてみしょうかえ』

くつくつと笑うばかりで、黒衣の返答はない。

『あれサもう、どうにもつれない』

「銀座に伊沢屋という小間物屋があるが、知っているかい」

『また、夜の者とやらの話かえ。お前さまにはよほどのお気に入り』

「妬かずにお聞き。伊沢屋はもともとは日本橋、老舗の呉服屋だ。それが洋装品や洋装小物ばかりを集めて銀座紺屋町に出店を出した。場所も銀座の桜並木のすぐ近く、舶来洋品にふさわしく、英吉利から技師を招いて赤煉瓦で三階建ての建物を建てさせたのだよ」

いっこうにとりあわない黒衣の様子に、娘は溜息を落とす。

『呆れたお人じゃなァ』

「三階の一部を切って広い露台を拵えてあって、陶の卓と椅子を並べて、客がちょっと休んでいけるようにしてあった」

一

左吉はその露台の手摺に肘をついて、下の通りを見下ろしていた。歩道まで視野を遮るものがない。人の頭の天辺ばかりを見るのは奇妙な気分がした。横から見た雑踏はいろんなものがあふれているが、上から見てみると、存外かわりばえがしない。

伊沢屋は店内の照明が全て電灯なのが自慢だった。昼は遅めに店を開け、かわりに夜まで営業している。露台から見渡す夜景はさして良くもなく、おまけに風があって、そのせいか左吉の他に客の姿は見えなかった。

露台には明かりがない。見下ろす通りの軒先に連なる瓦斯灯が眩しかった。目を細めてそれを見るともなく眺め、心中ではこのところ頭を悩ませている件について考えを巡らせている。楽しくはないその思考が重い溜息になって漏れ出た。

左吉は齢三十八、女房はもらって二年で死んだ。もう二十年近く前のことである。先

代の主人から娶せられた女房、死んだときには世間並みに悲しいような気もしたが、振り返ってみればもう顔も覚えていない。女房のほうも死んでほっとしただろう。女が自分を嫌っていたことを左吉は知っていた。どう贔屓目に見ても自分の容姿が醜いことを左吉は充分了解している。

以来鰥夫の暮らしだが、特に寂しさを感じていなかった。子供は生まれないままだったが、先代の主人から子息を預けられ、その世話を任されていたので、これまた寂しいとは思わない。息子のような、と呼ぶには大きく、すでに先代が逝ってその子が新しい主人だったので、あまりに身分に隔たりがあったけれども、その子の成長だけが楽しみで今日まで来たのだ。

なのに、と左吉は溜息をつく。自分などをよく慕ってくれて、一度たりとも左吉を落胆させたことがなかった。愛しいばかり、側に仕えるのはこのうえなく幸福なことであったのに。それが近頃、と左吉は昏い目を背後に向ける。あの女のせいで。

露台から店の中に向かう扉があった。輸入ものの大きな板硝子が入っていたが、内側に厚い垂れ幕が下がっていて、店内の光は見えない。

重い息をついて、再び視線を下の道に向けたとき、わずかに光が射して、誰かが露台に出てきた気配がした。左吉は振り返らなかった。きっと女が自分を呼びに来たのだろうと思ったからだ。今は顔を合わせたくなかった。

開いた扉が閉じてしまえば、露台はまたもとの暗闇、手摺を抱えこむようにして左吉は肩を窄めた。露台の上は風が強い。冬の気配が残った風に、左吉は肩掛けを掻き合わせた。女が預けていった肩掛けからは濃く脂粉の匂いがした。ことさらに俯けた視野に強い光が射したのはそのときである。

振り返ろうとした。肩掛けを摑んだ手が緩んだ。下から吹き上げる風に肩掛けがめくれて落ちていった。

そのどれもを、はっきりそうと認識する前に、背中に灼けつくような衝撃を感じた。異音と異臭、ぐらりと視野が揺れたのは、背後から突かれたせいか、目眩のせいか。

とっさに手摺を抱きしめて、左吉はかろうじて身体を支える。石の感触にとりすがり、その場に膝をついた。背中から全身を貫く痛みで霞む目に、炎を上げる人影が見えた。

火炎魔人。

痛みのあまり目を閉じながら、左吉はその噂を思い出した。では自分は死ぬのだろうか。自分が死んだら、誰があの方を守るのだろう。とっさにそれを考えながら、このまま仲違いして単なる主従に離れてしまうくらいなら、ここで死ぬのも悪くないことのような気がした。

手摺の下に蹲った左吉の襟を摑む手があった。引きずられ、手摺の外に押し出された。

表に人が、と店の中に駆けこんでくる者があって、にわかに店内は騒然とした。聞けば店の露台から転落した者があるという。見上げる露台には火があって、それが人影にしか見えない、噂の火炎魔人ではなかろうかと。

店の者が幾人か外に飛び出したときには、まだかろうじて人の形をとどめている火炎魔人の姿が見えた。人だかりの真ん中で倒れ伏したのは女と男、小柄な男は低い呻きを上げていた。どうやら息はあるらしい。

その知らせを聞いて、番頭は露台に駆け上がる。扉を開け放ち、露台を眺めれば、薄煙の漂うそこはすでに無人だった。丁稚に命じて点火棒を持ってこさせ、日頃は点けない露台の瓦斯灯に灯を入れさせた。

明かりの中で見回しても、すでに露台には何の人影もなかった。露台の隅に赤いものが見えたので寄ってみれば女物の肩掛け、それが風に吹き寄せられて隅のほうに押しこまれていたのだった。

肩掛けの他に見えたのは、点々と残った焦げの痕。露台の床は石を張ってあるが、その石を焦がして裸足の足跡と思われる不明瞭な焦げ痕が薄く残っていた。

焦げ痕は露台の入口から手摺のほうに尋常でない歩幅で続いて、露台の右手にある壁の手前で消えていた。まるで壁を開けて中に入ってしまったように、唐突に切れた足跡の、その先の白壁にはそこを押したような手形までが残っていた。

壁に残された手形は、焦げ痕というよりも掌の形をした汚れだった。血膿を擦りつけたような染みがそこには残っていたのだ。

壁を押し開けて消えた魔物のことよりも、壁に残された手形のほうが、見る者を慄然とさせた。

掌の形をした染みのおぞましい色は、被害者の身に降りかかった惨事を否応なく思い起こさせた。それで駆けつけた誰もがしばらくその手形に見入って、声も上げられずにいたのだった。

二

新太郎が瓦町の借家に駆けこんだのは、鷹司家を訪問したその翌日、しかも夜半のことだった。

「万造君、また、火炎魔人が」

襖を開けるなり叫んだ新太郎に、例によって布団から身を起こして万造が目を丸くする。

「闇御前ではなく、火炎魔人」

新太郎は万造の腕を握った。

「来てくれ。しかも、今度は殺しそびれた。どんな具合なのか知らないが、今ならまだ息があるかもしれない」

新太郎と万造が駆けつけたのは和泉町の第二医院だった。瓦町からは目と鼻の先、小走りに行く道すがら、新太郎は社の同輩から仕込んだ話を開陳する。

紺屋町に昨今できた伊沢屋という小物店、煉瓦造り三階建ての露台から墜落した被害者が担ぎこまれたという。

「伊沢屋、ですか」

「うん。舶来物の小間物やらを扱っている、もとは呉服屋だよ、知っているかい」

「ええ」

「伊沢屋が銀座に出した出店、その三階の露台に火炎魔人が現れたのだね」

「なるほど。火炎魔人はどうにも高いところが気に入りのようでござんすね」

「まったくだ」と新太郎は頷いて、「伊沢屋は、店を開けるのが普通よりも遅い。そのぶん閉店も遅くて今時分まで営業している。夜にはさすがに露台で一服する客はいないから、茶を出す給仕は退っていたものの、露台へは誰でも出入りができた。そこに奴は現れて、男をひとり突き落として消えたのだ」

「やはりあの灼熱の手で」

「そうだとも。誰かが露台を見ろと指さして、それであたりは大層な騒ぎ、火炎魔人は例によってひとしきり通りを見回した後、崩れるように消え去ったという」

「たしか、あのあたりは石の舗装が」

「そう。銀座紺屋町一帯は煉瓦と板石でできた歩道がある。三階と言っても、洋館の三階は高い。一階の出入口の上に庇があったが、男は運悪くそれをかすめただけで、露台から下の歩道めがけて墜落した。例によって銀座一帯は夜というのに人の波、男はそぞろ歩きの婦人の上に落ちた。下敷きになった婦人のほうが死んで、男のほうは助かったという定めの悪戯」

「なるほど。驚いて上を見上げると、そこには火炎魔人が」

「そういうことだ。おっかなびっくり店の者が露台に行ったが、そこはすでに蛻の殻」

と頷いてから、新太郎は軽く手を玄関先にかざした。「ああ、きみ」

駆けこんだ病院の玄関で捕まえた看護婦に、被害者はどこだと問えば、教えられぬと突っぱねられて、教えろ、駄目だの押し問答。そのさなかに、あ、と小さな声がして、新太郎は万造と共に振り返った。

さして多くもない人混みの中で足を止めて新太郎を見ているのは、ほっそりとした洋装姿、その人物を新太郎とて昨日の今日では忘れようはずもない。

「鷹司さん」

常は昨日のように丁寧に頭を下げた。
「奇遇でございますね、平河さん」
「本当に奇遇ですね」
そそくさと去っていく看護婦に目をくれてから、新太郎はふと眉を寄せた。
「どこかお身体の具合でも」
いえ、と常は微笑う。
「家人が入院を。今日怪我をいたしまして」
「御家族ですか」
「家族のような者です。古くから家で働いてくれておりますので」
「ああ、それは」良かったと言ったものかどうか悩んで、新太郎は言葉尻を濁した。
「それで、その方のお加減は」
「幸い、思ったよりも大事にならずに済みそうです」そう言ってから、常は首を傾けた。
「ときに、平河さんこそ、どこかお加減でも」
「いや、ぼくは取材です」
新太郎は苦笑する。ああ、と常もまた微笑った。
「看護婦さんとなにやら言い合っておられるようでしたので、なにか深刻なことかと。それはよろしゅうございました」

「あさましくも記者根性を出して飛んできたのに、断られてしまいました」
おどけて言ってから、新太郎は声を潜めた。
「鷹司さんは、昨今帝都を賑わしている火炎魔人とやらを御存じですか」
常は怪訝そうにした。
「もちろん、知ってはいますけれど」
「その火炎魔人に襲われて、九死に一生を得た人物がこの病院に担ぎこまれたとかで」
常は頷いた。
「はい。左吉でございましょう」
新太郎は常をまじまじと見返す。
「まさか」
「その、まさかです。それがわたしの家の者です」
「本当ですか」
はい、と頷いて、常は済まなさそうに笑む。
「それは申しわけないことをいたしました。取材やらお見舞いやら、沢山の人で左吉が心配でしたので、お客を断ってくださるよう、わたしが院長にお願いしたのです」
「そうだったんですか」言って新太郎は常の顔色を窺う。「そこをなんとか、枉げて」
常はやんわり微笑った。

「昨日今日の御縁ですから、平河さんと万造さんだけは特別に。ただし、本人が辛(つら)そうでしたら、いずれ日を改めてお引き合わせしますので、今日のところは勘弁してやってくださいまし」

新太郎は小躍りしたい気分だった。

「ええ。それはもう」

「常さま、何かお忘れに」

寝台の上から掠(かす)れた声を上げた男は、常の背後から中へ入った新太郎と万造を見て言葉を途切らせた。

常は半身を起こした左吉を軽く手で押し留(とど)める。左吉が横臥(おうが)しているのは、背中に火傷(やけど)があるからだろう。

「ああ、休んでおいで。大事におし」常は言ってから、新太郎と万造を振り返った。

「こちらは平河さんとおっしゃって、先に取材に見えた帝都日報の方だ。もしも身体が辛くないようだったら、少しお話ししてさしあげてくれないか。ただし、決して無理はしなくていいのだからね」

左吉は新太郎と常を見比べるようにしてから頷いた。

新太郎もまたわずかの間、この主従を見比べた。左吉というこの男は、一言でいって

醜い男だった。歳の頃は四十前、痩せた非常な小男で、角張った顔もあいまって蟹のような印象を与えた。その輪郭にぐっと中央に寄った造作、それを押しひしゃげたような按配、濃い眉の下の小さな目はさらに瞳が小さくて三白、決して人相が良いとは言えない。

新太郎と万造が名乗る間に、常が椅子を出してくれる。病室は洋風の個室で、贅沢な部類に入る。それが家族同様と称した左吉にだけ特別に払われた配慮なのか、常の使用人に対する態度の表れなのかは、はっきりしない。常の為人から考えて、その両方であろうと思われた。

「不幸な事件の後に申しわけないのだけど、ぜひ話を聞かせてもらいたいんだ。きみは火炎魔人を見たのかい」

新太郎の最大の興味はそこだった。

左吉は首を横に振った。

「いえ。かろうじて炎に包まれた人影を見ましたが、それも一瞬、見たというほどのことではございません。露台に出て真下の歩道を眺めておりましたら、いきなり後ろから背中を突かれたので」

「噂にいう、あの灼熱の手で」

左吉は無言で頷く。

「間抜けな言い方で恐縮だが、熱かったろうね」
いえ、と左吉は無表情に呟いた。
「とっさのことで、熱いとは思わなかったのです。背中を突かれて、慌てて手摺に縋りました。そのときになって、ようやく突かれたところが妙に疼くような引きつるような、そういう感触がしましたのです。嫌なにおいがいたしました。髪が焦げる、あのにおいです」
「すると、きみは突き落とされたのではないのかい」
左吉はわずかに口許を歪める。
「背中を突かれて真っ逆さまに落ちるには、わたしにとってあの手摺は高すぎるのですよ」
ああ、と新太郎は気まずく呟く。左吉は背丈が低い。おそらく新太郎の肩口までしかないだろう。そのぶん手摺は高かった。大の大人なら転がり落ちたろうが、左吉はそれを免れたのだ。
「しかし、では、落ちたのは」
「手摺にしがみついておりましたら、身体を引きずられ足を抱え上げられて、手摺の外に押し出されました。なにぶん背中が痛んで、それだけでも朦朧としていたところでしたので、抵抗できなかったのでございます」

「それでも火炎魔人の姿は見なかったのだね」
「露台にはまったく明かりがございません。襲われる前には暗うございましたし、襲われた後には痛みで目が霞み、相手を見ることができなかったのでございます。ただ」と左吉は何かを考えるようにする。「漠然と、あの読売りではないかと」
新太郎は眉を顰める。
「あの、読売り」
「店の中で読売りを見かけたのでございます」
「待ってくれないか。伊沢屋の中に、読売りかい。いや、別に読売りが買い物をしてはならないと、そんなつもりではないが」
「はい。わたしも妙に思いました。それで印象に残っているので、そう思っただけかもしれません。とっさのこと、相手の様子を窺う間もございませんでしたから、本当に勘のようなものでございます。お忘れくださいませ」
新太郎は万造を見る。読売りという言葉が気にかかった。
新太郎の意を汲んだように万造が口を開く。
「その読売りに声をかけてごらんになりましたか」
いえ、と左吉は首を振った。
「階段を昇っていくのを見かけただけでございますから」

「扮装は」

「ごく当たり前の読売りと同じように見えました。深編み笠に尻端折りの棒縞の着物だったと思います。襟の後ろに小さな提灯を挿してありました。背中に大きな木箱を背負っていたのが、変わっているといえば言えましょうか。何か文字が書いてありましたが、よく見えませんでした」

万造は少し考えるようにしてから、再び口を開く。

「ときに左吉さんはなぜ、伊沢屋の露台などにおいでだったのですか」

左吉がちらりと常に視線を向けたのを、新太郎は見逃さなかった。

「鷹司さんのお使いでしょうか」

そのようなものです、と言ったのは常だった。常は少し苦笑を浮かべる。

「それは左吉からは申しあげにくいかと思いますので、わたしから」言って常は左吉のほうに思いやりをこめたまなざしを向け、次いで新太郎を見返した。「わたしの知人の買い物の供をしておりましたのです。昨日申しあげた御婦人ですが」

ああ、と新太郎は呟いた。常の面にまたあの含羞んだ色が昇る。

「近頃夜はなにかと物騒でございます。本当でしたらわたしが御一緒するはずだったのですが、急の来客がございまして。それで左吉に供を頼んだのです」

「なるほど、それで。しかし、なぜ露台に。その御婦人は一緒ではなかったのかい」

左吉は少し言い淀む。

「店内でしたら、物騒なこともございますまいと、ついそう考えまして。わたしのような無骨者にはいくら御婦人のお供とはいえ、白粉だののお買い物に御一緒するのは恥ずかしゅうございます。それで露台で時間をつぶしておりました」

「なるほど。それでひとりになったところを狙われたんだね。露台には左吉さんだけだったのかい」

左吉は頷いた。

「わたしが露台に出ましたときには、どなたもおられませんでした」と言ってから、左吉は思い起こすように首をひねる。「露台の隅に布をかけた荷物がございまして、それがちょうど人の背丈ほどでございましたので、誰かがいるのかと思いましたが、どうやら人ではなかったようでございます」

「何かの不要な品物を出してあったのだろうかね」

「それはわたしにはなんとも。その後も人の出入りは一度だけ。ちょうど露台への出入口は手摺の反対側にございます。下を眺めておりまして、一度だけ誰かが露台に出てきたな、と感じたことがございました。特に興味もありませんでしたので、振り返らずにおりましたら、そうも間をおかず、いきなり」

新太郎は頷いた。

「それは大変な災難だったね。何にしろ、無事でよかった」
言うと、左吉は悄然と肩を窄める。丸めた背中が何かに疲れた中年女のように見えた。
「亡くなった方には申しわけないことでございます」
病室で常と別れ、ぶらぶらと歩きながら帰る道々、新太郎はしきりに首をひねった。
「どうだろう。左吉が言っていた読売りは、きみが言っていた読売りと何か関係があるのだろうか」
新太郎の問いには生返事が返ってきた。
「どうした、万造君」
「何やら不吉ではございますまいか」
万造は呟く。
「不吉、とは」
「先には鷹司さんが襲われ、今度はその御家人が襲われる。これは平河さん、偶然でしょうか」
「おい、おい」
万造は眉根を寄せた。

「お連れは鷹司さんの好い方だったのでございましょう。鷹司さんに御縁の深い御婦人が男連れで伊沢屋に入っていく。見かけた者はそれを鷹司さんだと思ったりはしないでしょうか。ましてや露台は暗かったと、左吉さんもおっしゃって」

「なるほど、確かに。だが」

「先には鷹司さんはその御婦人のお宅からの帰りだったのじゃァありませんでしたか。犬と行き違って、背後を振り返ると闇御前がいたとおっしゃる。犬が闇御前に化けたものなら、何の問題もありゃァしませんが、犬は犬、闇御前とは別物だとしたらどうでしょう。背後からということは、闇御前は鷹司さんを蹤けてきたのだと、そんなふうには考えられませんでしょうか」

新太郎はさらに首をひねった。

「確かにね。しかし、それは考え過ぎのような気もするが」

「はい。鷹司さんと左吉さんは背恰好もずいぶんと違っておられます。ですからちょっと気にかかると、それだけのことじゃァございますが」

「鷹司さんは闇御前に襲われたのだろう。左吉のほうは火炎魔人。襲った相手も違うし、だいいち妖怪たちが襲ったのは鷹司家の人々ばかりじゃない。やはり気の回し過ぎだと思うがね」

「それでございます」と、万造は足を止めて新太郎を振り返る。「平河さんの帳面はわ

たしも拝見しました。確かにこれまで亡くなった方々は鷹司家とは何の関係もなさそうでございます。闇御前が鷹司さんを入れて七人。火炎魔人が左吉さんを入れて四人。辻斬りが四人を襲って計十五人でございます。この広い東京の人混みの中から選ばれた十五人のうちに、たまたま主従の関係でいらっしゃるお二人、これは何やら妙なことではございますまいか」

新太郎はぽかんとした。ややの間考えて、確かに、と思う。銀座の雑踏、その中で適当に人を選んで肩を叩いてみたとして、十五人のうちの二人が知り合いということは、あまりありそうにないことだ。

「まさか万造君は、これが二人を狙ったものだと、そう言うのかい」

「お二人か、それとも鷹司の御家人を狙ったものか。そういうふうに考えますのは、あながち無理とも言えない気がするのですが」

「しかし、だったら他に殺された十三人は。彼らは鷹司の家とは何の関係もありはしないのだよ」

「絶対にないと言い切れますかどうかはさておき。もしも鷹司さんなり左吉さんなりに恨みのある者が、これを殺めればたちまち自分が疑われます。それを恐れて敢えて何の関係もない人を殺しておく、そういうことは考えられないでしょうか」

「そんな無茶な」

「無茶は百も承知ですが、ありえないことではございませんでしょう。ありえないと言うならば、十五人のうちの二人が主従であることのほうが、わたしにはよほどありえないことに思えます」

「しかし」

「殺された全部が鷹司家ゆかりの人物なら、背後の事情は明らかでございます。それを怖れて敢えて無関係な者も殺しておく。相手がそういう知恵と残忍さを持っているのだとしましたら、これは妖怪変化よりも恐ろしいものに魅入られたことになりますまいか」

「だが、鷹司さんは人の恨みを買うような方には見えなかったが」

「左吉さんも襲われたのですから、鷹司さんに、というよりも鷹司家そのものに恨みがあってのことでは」

ふむ、と呟いて新太郎は背後を見やった。道の突き当たり、衛生局の試験所の陰に、出てきたばかりの病院の屋根が見えた。

「鷹司さんに一言耳に入れておいたほうがいいだろうか」

「さようでございますね」

思案するように万造もまた足を止めて振り返る。

「ですが今から引き返しても、もうお帰りでしょう」

うん、と新太郎は頷く。頷きながら、明日にでももう一度連絡を取ってみようか、そんなことを考えていた。

三

連絡をしてみようか、思案しながら一日が過ぎた。あまりにも無稽な話のようだが、注意を促すだけでもしておいたほうがいいのでは、とそう思い、使いをやろうと立ち上がると同時に、何やら莫迦げた心配のような気がして思い留まる。そんなことを繰り返しているうちに時間が過ぎてしまった。

ぐずぐずと思い悩む新太郎に、左吉の見舞いに行かないかと提案したのは万造のほうだった。

「どんな具合か、伺いがてら先日のお話のお礼をして、そのついでに左吉さんのお耳に入れておいてはいかがです」

万造にそう言われて、新太郎は息をつく。

「そうだね、それがいい。莫迦な思案のようだが、万が一ということもあるからね。何かあって大事になっては申しわけがない。かと言って、わざわざお時間を取らせるのもさらに申しわけない話、左吉の耳に入れておくなら、さほど大仰なことでもあるまい」

それでもなお言い訳めいたことを口に昇らせる新太郎に、万造は苦笑する。
「平河さんともあろうお方が、ずいぶん遠慮をなさる」
「それは酷いよ、きみ。それじゃあぼくが途方もなくあつかましいようじゃないか」
「いえ」と万造はさらに失笑した。「そうは申しておりませんよ。ただ、つねひごろ手蔓は財産だと言っておられる平河さんでも、さすがに相手が華族さまともなると、手蔓扱いできかねるものかと」
新太郎は顔をしかめた。
「そんなことじゃないよ。ぼくは家格や財産に遠慮する気などありはしないからね。ただ、何を頓狂なと笑いものになるのが嫌なだけだよ」
万造は笑った。
「そういうことにしておいても、よろしゅうございますよ」
「そうやって嫌なことを言っているといいよ。ときに万造君」
はい、と促す万造に、新太郎は軽く笑う。
「ぼくは今日、伊沢屋に行ってきたよ」
「ああ、そう言えば帝都日報も銀座でございましたか」
「うん。近所のことでもあるしね。行って露台を見てきた。件の足跡はまだうっすらと残っていたよ。店の者を捕まえて、当夜の話も聞いたのだけどね」

「いかがでした」
「それがね、ほら、左吉が言っていたろう。露台に荷物があった、と。その荷物を誰も知らないと言うんだ」
新太郎の顔を、万造は見返してきた。
「では、その荷物は」
「店の者が知らない間に運びこまれて置かれたことになろうかね。人の背丈ほどもあったという話だったが、そんな大きなものをどうやって運びこんだのか、店の連中も不思議がっていたよ」
露台は客に休んでもらう場所だから、決して荷物を置いたりはしない、と話をしてくれた番頭は憤慨した様子だった。少なくとも店の荷ではない。では、誰がどうやって露台に運んだのだろう、と。店員にも尋ねてくれたが、そんな荷物を見た者も、運びこんだ者を見た者もいなかった。
なるほど、と万造は呟く。
「それで読売りなんだがね。店の者も覚えていた。なにしろ滅多に商売の途中で店の中に入ってくるものじゃないからね。大きな木箱を背負っていてね、そこに文字が書いてあったそうだ。詳しく文字面を覚えている者はいなかったけれども、確か珍妙とか珍奇とか、そういう言葉が六文字七文字書いてあったそうだ」

「珍妙珍奇噺替、ですか」
「だろうね、おそらく。万造君が言っていた、例の妙な読売りのようだ。しかもね」
新太郎はわざわざ一呼吸の間をとってみせる。
「巽堂にもいたのだそうだよ」
「その読売りが、ですか」
「そう。きみの家を訪ねる道中、ついでに寄ってみたのだけどね。義助という最初に火炎魔人に殺された男、あれが死んだ夜に店の中をふらついている読売りを店の者が何人か見ている。客の誰かが表から呼び入れたのだろうと思ったようだが」
それは、と万造は声を落とす。
「その読売り、なにやら火炎魔人と縁が深そうな」
「仲間ではなかろうかと思うんだが」
「二人がかりの凶行となると、なにやら深い思惑がありそうな気がいたしますね。少なくとも、そぞろ歩きの魔人がふと思いたって人を殺めたのではないような」
「まったくだ。やはり鷹司家に恨みあってのことだろうか」
「鷹司家ほどの御大家であれば、恨みのひとつやふたつ、買っていても不思議はなさそうでございますが。ひょっとしたら、先代、熙通さまの代になにか」
それはありうることかもしれない、と新太郎は思う。

「なにしろ華やかに活躍した人だからね。一代で膨大な財を築かれた方でもある。さだめし敵も多かったろう。なるほど、それは考えられる」

深々と頷いた新太郎の右手、宵闇の中に第二医院の門が見えた。

新太郎が左吉の病室を訪ねると、そこには当の常がいた。見舞いに来たのだろうか、それとも見舞いを案内してきたのだろうか、病室にはもうひとり、女の姿が見えた。

「左吉さんのお加減はいかがです」

新太郎が言うと、主従は丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます、完治にはまだまだかかりそうですが、おかげさまで二日三日のうちには家に戻れそうでございます。わざわざお見舞いくださったのですか」

新太郎は慌てて手を振った。

「いえ、万造君の家に来ていたものだから」

「ああ、万造さんのお宅は瓦町でしたか。本当に御近所なのですね」

常の笑みを受けて、万造は軽く頭を頷かせる。新太郎は一歩も二歩も退る万造のふうを心中で笑ってから常に目を向けた。

「鷹司さんは、毎日お見舞いにおいでですか」

「そういうわけでは。今日はたまたま近所まで、芝居見物のお供に来ておりましたの

で」

「ああ、中村座ですか」

言って新太郎は目線を窓辺に向けた。そこには女がひとり、窓辺に置いた椅子に坐って我関せずという体で外を眺めていた。

新太郎の視線に気づいて、常はそちらへ目を向ける。含羞んだ笑みを浮かべた。

「有田菊枝さんとおっしゃいます」

新太郎は幾度か瞬いた。ひどく意表を突かれたせいだった。常の顔を見ればこれが件の女だろうと想像がついたが、そこにいる女が常とはうまく結びつかなかった。

可憐な少女を想像していたのだと、新太郎は悟る。菊枝はおよそ可憐という言葉にも縁がなく、少女という年代でもありえなかった。

「こちらは以前お話しした、平河さん」

常の紹介に、窓辺に坐った女は形ばかりの会釈をする。煙管の吸い口を紅い唇から離して笑い、音高く灰吹きを灰皿に打ちつけた。

歳の頃は三十過ぎ。春らしく霞に桜の着物は黒に近い紫地、夜桜の趣向だろうか。絵羽の裾をぞろりと長めに着流して、大きく抜いた襟許には緋に桜の刺繍襟、白い細面に映えていかにも粋だったが、到底堅実な家の女には見えなかった。

「ひょっとして、伊沢屋に左吉さんと御一緒だったのは」

新太郎は敢えて問う。常は、はいと頷いた。
「そうでしたか」
呟くように言いながら、少しのあいだ二の句が出てこない。それでもすぐに気を取り直すことができたのは、持ち前の好奇心が首をもたげたからだった。
「有田さんは、火炎魔人を御覧になったのですか」
やや唐突な問いに、菊枝はわずかに眉を上げた。次いで浮かんだのは婀娜な匂いのする笑みだった。
「いいえ。わたくしは店の中におりましたから」
「では、左吉さんが落ちたのも御存じでなかったのでしょうか」
「ええ。表が騒がしくなって、どうしたのかしらと怪訝には思いましたけれど。買い物を終わって、左吉に声をかけようと露台へ出てみたら、左吉の姿がございません。先に帰ったのかと思っておりましたら、後で聞けば露台から落ちたというじゃございませんか。それで吃驚してしまいましたの」
「すると、有田さんも店の者も、当の店の露台に火炎魔人が出たのをお気づきでなかったのですか」
「ええ、もちろん。露台は店からは見えませんから。他のお客もお店の方も、まさかそんなこととは夢にも思わず」

「なるほど」と呟いて、新太郎は、「ときに、有田さんは店で読売りを見かけませんでしたか」

「見ましたわ」案に相違して菊枝はあっさりと頷いた。「左吉と別れて番頭と話をしているときに、三階を横切る読売りをちらりと見かけました。どうしてこんな所に、と思ったので覚えております」

「横切ったというのは、どちらのほうへ。まさか露台へ向かうところじゃありませんでしたか」

「さあ」と菊枝は気のない声を出す。「店の中には結構なお客がおりましたから。その間にちらりと見かけただけですし。平河さんは伊沢屋に行かれたことは」

「ありますが」

「三階は鉤の手に曲がっておりますでしょう。少しだけ曲がって突き出たところに階段があって、その脇が露台への入口でございますわ。そちらのほうへ向かって店を横切るのを見ただけですから」

どこまでも気のない声だった。

「そうですか。なんにせよ、左吉さんに大事がなくてよろしゅうございましたね」

新太郎の言葉に、菊枝はわずかに皮肉げな笑みを漏らした。

「左吉の身代わりになって亡くなった方は、そうはおっしゃいませんでしょうけど」

新太郎は一瞬身を引いた。滴るほど悪意が顕に滲み出ていた。
「亡くなった御婦人とは御面識は」
「ありませんわ。けれど道を歩いていて、上から人が落ちてくるなんて、不運なことですわね、そうお思いになりませんこと」
返答に窮して新太郎は周囲を窺う。万造は盛んに瞬きながら菊枝を見ていたし、反対に常も左吉も俯きかげんに視線を逸らしていた。
「別段、左吉さんが御自分の意思で飛び降りたわけではないでしょう。ひょっとしたら左吉さんも今まで亡くなられた方のように」
「ええ。ですから、左吉には幸運なことでございましたわね」
笑って言った言葉の端々に、棘が見え隠れしている気がした。
新太郎は憮然とした。菊枝の物言いが気に喰わなかったのはもちろん、そもそも一目見たときから、この女は気に喰わないとそう思ったのだ。
「確かに、左吉さんは運がよろしくていらっしゃった。ですが、そういう幸運は滅多にあるものじゃありません。いろいろと物騒なことも多い昨今、夜のお出かけは控えられたほうがよろしいのでは」
「そうですわね」と菊枝は笑う。新太郎の挑戦的な台詞に気を悪くしたふうもないが、特に気に留めたふうでもなかった。「けれど、常さんが闇御前に襲われて、今度は左吉

でしたでしょう。これで次がわたくしでは、少し出来すぎた話でございますわね」

「それは、そうとも限りません」

新太郎は思わず言葉にしてしまった。おや、というように菊枝は新太郎を見返す。常も左吉も訝しげに新太郎を見たので、そのまま黙っていることができなかった。

「これはあくまでも、ひょっとしたらの話なのですが」

そう前置きをして新太郎は不安を述べる。闇御前は常を蹤けていたのではないか、火炎魔人は左吉を常と間違ってはいなかったか。

当の常はきょとんとしたように目を見開いて小首をかしげてみせた。

「わたし、ですか」

笑ったものか不安な顔をしたものか、分からないという表情だった。

反対に菊枝は声を上げて笑った。むっとしてねめつけた新太郎に、菊枝は紅い唇を曲げて微笑む。

「面白いお話ですわ、平河さん」

「ぼくは真面目にお話ししているのです。それは、根拠もなにもない単に心配だという、それだけのことですが、しかし」

言いさした新太郎を菊枝はそっけなく止める。

「ええ、ですから面白いと言っておりますの」言って笑って、菊枝は常を見る。「ほう

ら、御覧なさい。とうとう直さんは尻尾を出したじゃありませんか」
常は柔和な印象の眉を顰めた。
「菊枝さん、滅多なことを申しあげないでください」
「あら、他に考えられないじゃないの」
新太郎は口を挟む。
「失礼ですが、その、直さん、とは」
常は困ったように新太郎を見、それから目を伏せた。
「わたしの、兄です」
え、と新太郎は思わず声を上げたし、万造も傍らで息を呑んだ気配がした。
「お兄さまがいらっしゃったのですか」
「はい。同い年、母親の違う兄ではございますが」
「庶子でいらっしゃるのですか」
ええ、と常は首を頷かせる。複雑そうな表情が浮かんでいた。
「父には、ついに嫡子がなかったのです」
「では」
「父熙通の子供はわたしを含めて六人、そのうち男子は四人ございますが、嫡子はひとりもおりません。初子さまは」言ってから常は慌てたように言い添える。「母にはお子

さまがおありでなかったのです。側室が三人ございまして、うちのひとりから生まれたのがわたし、別のひとりから生まれたのが直、さらに別のひとりから生まれましたのが輔と熙の兄弟でございます」

「そうだったのですか」

「わたしと直は初子さまが手許に引き取られましたが、輔と熙、信輔と信熙と申しますが、このふたりと妹ふたりは京都のほうにおります」

「京都の御本邸のほうに」

いえ、と常は首を振る。

「本邸と申しますかどうか。父は住まいを横浜の別邸に移してしまいましたし、麻布の屋敷が建ったあかつきには、正式にそちらに移るつもりでございました。実際に初子さまがそのように手続きなさってしまわれましたので、ですから、別邸ということになりましょうか。けれども、その邸ではございません。あれは家令に任せてそのままにしてございます。それとは別に東山に家を買って、それを京都の方にさしあげていたのでございます」

「なるほど、では麻布のお屋敷が御本邸になるのですね」

「はい。昨年亡くなった初子さまが、わたしにあの家を遺してくださいました。今は遺言に甘えておりますが、本来鷹司の家は兄のもの。わたしは次男になりますので」

「同い年、とおっしゃいましたか」
「はい。兄とわたしは同年同日の生まれでございます」
「同年同日」
菊枝は棘のある声を挟んだ。
「たまたま直さんのお生まれのほうが、先に先代さまのお耳に入っただけでしょう。そりゃあ一応、直さんがお兄さまということになってますけれど、奥さまは常さんをお気に入りで。土地屋敷も全部常さんに遺されて」
「菊枝さん」
「本当のことじゃあございませんの」菊枝は常に言ってから新太郎を見る。「戸籍の上では直さんが長男になりますけれど、初子さまは直さんがお好きでなかったのですわ。それこそ早くに婆やをつけて牛込のほうに出しておしまいです。常さんだけを手許におかれて、亡くなられたときにも御遺言で、財産も何もかも常さんに遺されましたのよ」
言って菊枝は婀娜な口許を歪めて笑う。
「直さんのものなど、何一つありゃあしないのですわ。直さんがお住まいの別荘まで、常さんに遺されたのですもの。おまけに直さんときたら風来坊で。学習院もすぐに辞めておしまいだし、今だって何をしていらっしゃるのか。生活費だけは沢山のお金が月々送られておりますけれど。次期公爵があれでは、誰も納得しやしません。実際、初子さ

まは直さんを廃嫡しようとなさっていたぐらいで」

「菊枝さん、やめてください」

うろたえたような常の声に、菊枝は険のある視線を向けた。

「だからいつも、お気をつけなさい、と言っているのに。自分に何かあったとき、大笑いするのが誰なのか、心に留めておくものだわ。初子さまにしたって、本当に事故かどうか分かったものじゃあないと、いつもそう教えてさしあげてますでしょ」

菊枝の言葉に、新太郎は問い質したい気がしたが、さすがにそれは思い留まった。菊枝がさらに何かを暴露するのを待ったが、ちょうどそこに看護婦が入ってきて、菊枝も口を噤んでしまう。

入ってきた若い看護婦は、気まずい空気を困惑したように見渡した。

「遅くまで賑やかになさっていては、左吉さんのお身体に障ります。そろそろ休ませておあげなさいませ」

看護婦の言葉を受けて、ついと菊枝が立ち上がった。

「常さん、帰りましょう。送ってくださいますでしょ」

「ええ、それはもちろん」

「それじゃあ左吉、お大事にね」

いっこうに心のこもらない口調で言って、菊枝は新太郎に会釈だけして病室を出てい

く。残された人々を困ったように見渡してから、常が丁寧に頭を下げた。
「平河さん、今日は失礼いたしました。気まずいことで申しわけありません。このお詫びは後日改めて」
「そんな、お気遣いなく」
いえ、と呟いて常は会釈し、慌てたように菊枝を追う。それを見やって、看護婦もまた、病室を出ていった。後には押し黙った左吉と、新太郎、万造の三人が残される。
「それじゃあ」と声を出したのは万造だった。「わたしどもも失礼いたしましょうか、平河さん」
「ああ、そうだね」
「左吉さん、何やらお騒がせするだけのお見舞いで、申しわけございません」
「わざわざどうも」
左吉はこの男らしくもなくぶっきらぼうに投げ出すような口調で答える。お大事に、と頭を下げる新太郎と万造を複雑そうに見やってから、踵を返した新太郎たちに声をかけてきた。
「万造さん」
「はい」
振り返った万造に、左吉はしばらく思案するような沈黙を作った。言おうか言うまい

か迷っているような風情だったが、結局口を開く。
「どうして露台にいたのかと、お訊きになったのは万造さんでしたね」
頷く万造に、左吉もまた頷いた。
「わたしは、実は露台で菊枝さんとよんどころのない話をしておりましたのです」
万造も新太郎も左吉のほうに向き直った。
「有り体に言えば、常さまと別れていただきたいと、そういう話を。それでわざわざ明かりのない露台におりましたのです。結局ものわかれになって、菊枝さんは店の中に入ってしまいました。わたしだけが露台に残って、どうしたものかと思案しておりました」
「きみ」
新太郎は狼狽して声を上げる。自分が聞くにはあまりに立ち入った話であるように思われた。
「直さまも常さまも、まだ正式にお家を継いでいらっしゃいません。初子さまが亡くなる寸前、直さまを廃嫡しようと手続きを始められたところだった、そのことが尾を引いて親族会議が紛糾しておりますので。戸籍の上は直さまが御長男、どうあっても直さまを後継にという者もおりますし」
「ああ。なるほど」

「実を言えば、あの日もそれで御親戚さまがおいでになりまして。初子さまが始めた手続きをどなたかが引き継いで、常さまにという意見が趨勢ではございますが、それにはあの菊枝の存在が仇なすのでございます。菊枝の存在を傷のように考えられる方は多いもの。常さまにも再三申しあげるのですが、常さまは家督などどうでもいいと。家督が直さまに移ってしまって、鷹司の財が直さまの手に渡れば、菊枝のような女は離れてしまうものだということを、どう申しあげても呑みこんでくださらない」

万造は苦笑してみせた。

「鷹司さんはまだお若い。この道ばかりは、他者の意のままにはならないものでございますからね」

「まったく、その通りです」

左吉は深い溜息を落とした。

「申しあげても詮無いことを。お呼び止めして申しわけありません」

いえ、と首を振って、万造は首を傾けた。

「不躾は重々承知でございますが、ときに、あの女性はどういった方なのですか」

「菊枝のことがお知りになりたければ、柳橋に行かれるとよろしいでしょう。菊哉という女性をお訪ねなさいませ」

やはり、と新太郎は心中で頷く。花柳界の女なのだ。

頭を下げて退出しようとした新太郎と万造を、左吉はああ、と再び呼び止めた。
「どうか菊枝の申しあげたことをお信じにならないでください。直さまはそういった方ではございません」
それは本人に会ってみなければ分からない。そう思ったが、新太郎はとりあえず頷く。
「第一、直さまが、わたしと常さまを間違えたりなさるわけがございません」
「でも、露台は暗かったのだろう？」
「そういう意味ではないのでございます。あの日、御親族の方々が直さまを連れてお見えになりました。それで常さまはお出ましになれず、わたしにお供を命じられたのでございます。直さまは菊枝に同行したのがわたしだということを御存じでございました」
「ああ、それでは左吉さんと常さんを間違えるはずがないね」
笑ってやりながら、しかし、と新太郎は思う。だったら、本当に左吉を狙ってのことだったとは考えられないだろうか。その理由までは窺い知れないが。
丁寧に別れを述べて帰る道すがら、万造も新太郎も思案深い溜息を落とした。
「なんて曰くありげなお家だろうね」
「確かに」と、万造も呟く。「いろいろ複雑な事情がおありのような。家も大きいと大変でございますね」

「万造君はどう思う」
「どう思うとおっしゃいますと」
「火炎魔人やら闇御前やらだよ。おりもおり、お家が紛糾しているこの時期に、鷹司さんが襲われたり、左吉が襲われたりしたのには果たして意味はないのだろうかね。ましてや左吉が、昨夜言ったように常さんと間違えられたのだとしたら。熙通卿への恨みというより、これはひょっとしたら」
「お家騒動、でございますか」
「うん。家督を狙った末の犯行、そういうことはありえないだろうか」
あえて誰が、とは新太郎は言わない。しばらく万造の返答はなかった。
「ですが」と万造はやっとのことで口を開く。「直さんは常さんと御一緒でしたのでしょう」
「だが、見舞いには来てなかった。左吉が襲われた日、もしもまだ常さんといたのなら、病院まで一緒に駆けつけてきたのじゃないのだろうか」
「そう一概に言い切れますかどうか」
「だが、帰ると言って、それから銀座に向かったとも考えられる。直さんがいつ頃まで常さんと一緒にいたのか、これは結構重大なことではないだろうか」
万造は、少しの間ののちに頷いた。

「なるほど、それはさようでございますね」

四

「万造君、夜の散歩に行く気はないかい」

そう言って新太郎が万造の住居に顔を出したのは、すっかりあたりが黄昏れてからのことだった。左吉の見舞いに行ってから三日、もう左吉は病室を引き払っている頃だろう。

例によって万年床の上で本を開いていた万造は、新太郎の顔を見て苦笑する。

「平河さんの散歩は、含みが多うござんすね。牛込までは散歩にしては距離がありますような」

万造の台詞に、新太郎もまた苦笑した。

「まあ、いいじゃないか。気候もよくなったことだし。帰りが大変なようだったら、俥を奢ってあげるから」

苦笑しながら万造は身を起こす。袷の裾を軽く整えて、行李に被せてあった羽織を手にとった。

「少しばかりね、調べてみたのだよ。なにしろ先代夫人のことが気にかかったし」

月明かりを頼り、神田川に沿って歩きながら、新太郎は話をする。鎮火神社の桜が莟をつけて、枝がほのかに白かった。

「初子さま、ですか。鷹司さんはそう呼んでいらっしゃいましたね。あまりお母さまとも思えない呼び方ですが」

「うん。鷹司家は五摂家のひとつ、近衛家を祖とする藤原氏の裔だ。熙通卿の祖父、常さんにとっては曾祖父にあたる鷹司輔熙は幕末に関白を務めた尊攘派の廷臣、これが八月十八日の政変で廷を追われて、以来政治むきには傾いたことになる」

「お父さまの熙通卿は結局政治表には出てらっしゃらなかったと覚えておりますが」

「その通りだよ。熙通卿は輔熙卿の孫、とはいえ父親の輔政卿も熙通卿自身も養子だから、血統的には繋がりがない。熙通卿は、鷹司家と同じく摂関家の九条家から養子に入った人だ。堀田正睦の勅許工作に密かに協力して、それで輔熙卿の勘気を被ったらしいね。十八かそこらで家を離れて、横浜に蟄居した。そこで見聞を広めたのだろうね。語学の勉学も熱心に行なって、通事として活躍したが、とうとう官吏にはならなかった。柿香倶楽部という在留の外国人や内外の貿易商の集まりを主宰していたけれども、終生を在野で終わった人だ」言ってから、新太郎は呟いて添えた。「ぼくもきみも生まれる前の話だ」

「江戸は遠くなりましたね」

そう言って万造は右手に延びる塀の内に目をやって笑む。ちょうど師範学校の前まで来ていた。

「まったくだ。きみは江戸が懐かしいかい」

「さて、どうでございましょう。わたしは明治の生まれでございますから、御一新前を実際に知るわけではございませんが。ただ、商売の話をいたしますなら、窮屈な御時勢になった気がいたしますね。土場芸はそのうち絶えてしまいますことでしょう。行商露商の類も、ずいぶんと数が減ってしまいました」

うん、と新太郎は頷く。特に昨今の大道芸の衰退は目に見えるものがあった。街頭に人を集めて小銭を稼ぐ商売だが、これが道路交通の整備を行なおうとする政府の思惑と衝突した。そもそも往来は人や馬や俥で雑多なものだが、馬車や俥に対する取締規制が出されたのは御一新前、さらにそれが明治五年には左側通行が義務づけられて、往来の管理は強化された。さらに十一年に出され、十五年に改定された街路取締規則が、大道芸や露商の運命を決定した感がある。道に商品などを積み置くことの禁止、路上での大道芸の取り締まり、罰則までが設けられてしまったのだ。

その一方で芸能統制もまた強化された。明治十年の寄席取締規則を皮切りに、十五年に布告された公園での演芸興行の禁止、二十四年の観物場取締規則と、統制は徐々に強

化されていく。鑑札制の導入、組合を組織させてそこに取締係を置き、警視庁巡査の監視を受けること、自由な興行を禁じられ、路上や公園からは追われて、彼らは行き場を失くしつつある。

「鑑札を受けた興行はむしろ華やかなぐらいですが。けれどなんにしろ、不自由な話でございます」

しかし、と新太郎は呟いた。

「しかしね、きみ。万造君には悪いが、ぼくは結局のところ、政府の意向は歓迎したい気がするんだよ。街路取締規則ができて、ずいぶんと道はすっきりしたね。大通りは均されたし、以前のように不心得な馬車が道を塞いで往来を妨げることもない。馬車も俥もおとなしく行き交うようになって、足弱な老人でも安心して道を歩けるようになった」

「それは確かに」

「もちろんね、罪もなく他愛もない大道芸が消えていくのも寂しい話だけれども、因業物だの猥雑な見世物だのが禁止されて消えていったのは、善いことだと思うがね」

万造の返答はない。

「見世物小屋にしても、仮設小屋が規制されて本建築になったのは善いことだと思う。仮設小屋、あれはどう考えても危ないからね。鑑札ができたのも悪いことじゃない。根

無し草に根ができた、とそういうことだから」

川面を渡る風を受けて、新太郎は少し言葉を切る。万造はじっと足許に視線を向けたまま、ぽつりと言葉を落とした。

「本当に、そうなのかもしれません」

「やはり気に喰わないのだね」

「わたしはただ、猥雑で品のないものが好きなのでしょう。確かに見世物の中にはずいぶん趣味の悪いものもありました。中には贋物もございましたし、露商の中には詐欺まがいのものもございます。けれどそれも愉しみのうちだと、そう思っているのかもしれません」

「愉しみ、ね」

「はい」と、万造は夜道に落とした言葉を拾い集めるように俯いて歩く。「河童だの人魚だの、見世物があっても本物だったことはございません。それでも人が集まるのは、嘘でもいっこうに構やしない、むしろ嘘を観るために集まっていたからじゃァありますまいか。露店の古道具にしても、しかつめらしく親父が来歴を語ってみせて、それは嘘かもしれないし、本当かもしれない。買った品物は屑同然のがらくたかもしれないし、大層な値打ち物なのかもしれません。その本当のような嘘のような曖昧なところを、人は愉しんでいたのではなかったのでしょうかね」

ふむ、と新太郎は頷く。
「そうだろうかね」
「世の中には本当のことと嘘のことがございます。どちらとも知れず曖昧だから面白いのだと思います。本当と嘘の白黒を分けてしまえば、安全なかわりに何の面白味もございませんでしょう。ましてや嘘を規制すれば、誰もが本当の顔で嘘をつく。嘘が本当としてまかり通ってしまうことと、ふたつが曖昧なこととは同じようでまるで違う気がいたしますんです」
「それは、確かにそうかもしれないね」
「規制を受けて、芝居の演目まで許可が必要になりました。お上は品のない出し物を規制するのだとそう言いますが、本当のところは壮士芝居だの政府批判の芝居だの、そういったものを規制したい肚があるのです。下品な出し物を規制すると言えば本当のようですが、肚を探れば嘘がある。そういう肚を探っていかなければならない状態が、わたしは嫌いなのかもしれません。嘘でもいい本当でもいい、無責任に楽しんでいたかったのでございましょう」
言ってから、万造はどこか自嘲めいて笑う。
「済みません。脱線してしまいましたね」
いや、と呟いて新太郎もまた吹っ切るように首をひとつ振った。

「鷹司家の話をしていたのだったか。ともあれ、熙通卿はそういう人だったわけだね。進歩的な開国派、尊王攘夷を主張した祖父輔熙とは折り合いが悪かった。当時の公家のほとんどが攘夷を頑強に主張していたから、公家の中でも異端だったと言っていい。京都に戻ったり横浜や長州を往き来したり、果ては外国へ出掛けたりで暮らしていたが、輔熙卿と輔政卿が相次いで亡くなられ、家督を継いで一旦京都に落ち着いた。東京奠都の際に横浜に本邸を移して、のちに東京に居を移している。このあたりは鷹司さんのおっしゃっていた通りだ」

「お母さまのことは」

「熙通卿の正妻は初子。陰陽道で知られる安倍氏の流れをくむ倉橋家から輿入れした女性だ。現在の倉橋子爵家だね」

「ずいぶんと家格に違いがあるようにお見受けしますが」

「うん。そうなんだよ。倉橋家といえば、名家、家格でいえば第五、第一位の摂関家とは比べるべくもないからね」

倉橋家は祖を安倍晴明に仰ぐ。安倍家から土御門家が分かれ、倉橋家が分かれた。名家は学問文章をもって朝廷に仕えた家々のことである。そもそも公家は家格によって昇進にも限界が定められていた。摂関家ならば摂政関白に進むことができたが、これに対して名家では大納言までしか昇進できなかった。

「この結婚は当然輔熙の指示だったようだが、なぜ倉橋家から奥方を迎えたのか、その真意はよく分からない。この初子夫人が亡くなったのが昨年、久しぶりに横浜の別邸へ行かれたおり、小舟に乗って海に出てそのまま帰らなかった」

万造は怪訝そうにした。

「おひとりで、ですか」

「だから奇妙な話なんだよ。夕刻、女中には少し散歩に行ってくると言いおいて出掛け、そのまま行方が知れなくなった。鷹司家が主宰の柿香倶楽部所有の桟橋から手漕ぎの小舟が消えていて、翌朝、それが無人で漂流しているのが発見されたんだ。初子夫人の遺体はさらにその翌日の午後、船遊びしていた英吉利人が見つけたそうだ。結局事故だろうということになったが、どうして初子夫人が唐突に海に出たのか、その理由は分からない」

「初子夫人は舟を漕げたのですか」

「うん、熙通卿の手ほどきがあったのだろう。来客の外国人と小さな帆船を操ったりもしていたようだよ」

「海に出る初子夫人を見た人は」

「いなかったそうだ。近頃横浜には霧が多い。特に朝夕には濃い霧が立ちこめるというし、それで水難に遭う舟も多い。実際、その日もそうだったらしいのだよ。だから朝夕

には見通しも悪いし、海の上も寂しい。それで誰も海に出ていく夫人を見かけたりしなかった。なんとも含みありげな話じゃないかい」

「まったくですね」

万造はそう考え深げに答える。

「熙通卿には、この初子夫人の他に側室が三人あった」

明治十五年までは公に認められた妾制度が存在していた。明治四年に戸籍法が公布されたが、この戸籍では戸主を筆頭に、戸主の妾は妻に次いで記載されていたのである。十五年の刑法によって妾制度が否定され、一夫一婦制が成立したが、これは主に妻の姦通を禁止するもので、夫のそれを禁止するものではなかった。依然、蓄妾制度は存続している。

「ひとりは毛利家の流れを汲む長州藩士の娘で、名前は千代、この女性が明治九年六月十四日に庶子直熙を生んでいる。鷹司さんは直さんと呼んでいたね。もうひとりは横浜の商家の娘さんで名前を沢、この女性が同じく九年六月十四日に常さんを生んだのだよ。直さんも常さんもすぐに初子夫人の手許に引き取られて、乳母に養育されたようだね。常さんの母上、お沢さんはそれから六年ほどして亡くなっている。お千代さんのほうは存命らしいが、本邸を東京に移したときに彼女だけは横浜に残ったのだそうだ」

「なるほど。そうですか」

「いずれにしても、お沢さんもお千代さんもあまり深い繋がりではなかったようだね。お千代さんには横浜に小さな別邸をあてがっていたようだが、お沢さんのほうは終生、実家にいたままだった。ひょっとしたら、多分に政治的な縁だったのかもしれないね」

「長州藩士に横浜の商家、でございますからね」

「うん。三人目の側室は京都の方だ。初子夫人の縁続きの女性で、小里という。縁続きとはいえ、特に良いお家の女性でもなかったようだね。身寄りを失くし、初子夫人を頼って横浜に出てきて、本邸に勤めているうちに熙通卿の手がついたということだろう。十一年に上のお嬢さんが生まれて、この子を連れて京都に戻っている。その後も三人お子さんが生まれていることから考えると、熙通卿が京都に通っておられたのだろうね。小里さんのお子さんのこの四人は、お母さまと京都にいる。きちんと戸籍に入っているようだ」

「なにやら、その女性との御縁がいちばん親密でいらっしゃったような」

「そのようだ。初子夫人にはついに子供がなかった。長男は直さん、常さんは次男になる。家督相続の手続きはまだ済んでいない。直さんを廃嫡する件で揉めているのは本当のようだね。華族部局にその旨、届出があったようだ」

「廃嫡の理由はおありなのでしょうか」

「うん。初子夫人の言い分によれば、直さんは、多分に政府に批判的で、華族の品位を

軽んじる傾向があり、皇室の藩屏には適さない、ということらしい」

「政府に批判的、ですか」

「実際、華族の子弟は原則として学習院に入学することが義務づけられているけれど、直さんは入学しただけ、不登校を続けて幾度も処分を受けたうえ、結局除籍になっている。華族部局からせめて軍へ入隊するよう勧告があったが、これも無視、どうも民権論者と付き合いがあるらしいね。中江兆民のところへ出入りしたりもしているらしい。自由党の残党壮士とも交流があるらしいし、ぼくの友人で同じく記者をしている男がこの二月、末広鉄腸の葬儀で会ったというから、やはり間違いないのだろうね」

へえ、と万造は呟く。

「初子夫人は常さんを溺愛なさった。熙通卿の死後、家督は一時棚上げにした形、爵位継承の手続きも一旦先送りにされたままだった。なにしろ常さんはお小さかったのでね。その間の社交は初子夫人が切り盛りしたわけだけれど、夫人は必ずまだ未成年の常さんを連れていって、次の公爵だと紹介していたのだそうだよ。家令にも家扶にも常さんを次期当主として待遇させた。直さんのほうは、熙通卿の死後すぐに牛込に出してしまって、全く係わりを持とうとしなかったらしいね。ほとんど無視に近い状態だったというから、よほど直さんがお嫌いだったのだろう」

「直さんも常さんも九年のお生まれでしたか。確か熙通卿が亡くなられたのが」

「十九年。華族令の出た年の年末だよ」
「では、十一歳でございますね。どうしてそこまで初子さまは直さんをお嫌いになったのでしょう。十一かそこらでは、反政府的だとか華族の品位を軽んじるだとか、そういう気性が表に出ていたとも思えませんが」
「それは、そうだね。あるいは生母のお千代さんと何かの確執があったのかもしれないね」
「直さんは不良華族のような言われようですが、生まれてすぐに実のお母さまの手を離れて、初子さまの手許に引き取られてしまったのでしょう。その初子さまにも十一で捨てるようにして余所へやられてしまったわけです。直さんが何やら反抗的な気性をお持ちでも、無理もないことだという気がいたしますが」
「本当にね。どうにも嫌な感じだ」
「ええ。まるでお家騒動を起こしてくれと言わんばかりの」
新太郎は万造を見やった。
「きみもそう思うかい」
「はい。では平河さんも」
「どう考えてもね、直さんの心中は複雑だろうと思うのだよ。母親の愛情を独占してきた弟が、家督も家財も一切合財持っていこうとしている。さぞかし初子夫人が恨めしか

ったろうね。廃嫡されてしまえばおしまいだ。その前に初子夫人が死んでくれればいいのにと願ったことはなかっただろうか」

「ええ」

「運良く夫人が亡くなってみれば、今度は親族が出てきてまたも家督を取り上げようとする。常さんさえいなければ、と考えないでいられるだろうか」

「そうして、初子さまは不審な死、常さんも闇御前とやらに襲われて」

新太郎は頷く。

「これは少し、直さんに都合良すぎる気がするのだが」

「さようでございますね」

頷き合ってふと気づくと、新太郎たちはいつの間にか砲兵工廠を過ぎて船河原橋を渡っていた。そのまま神楽坂を登って新太郎は足を止めた。矢来町を神楽坂から北にほんの少し入ったところに、閑静で洒脱な一軒家が建っている。表札はなかったが、前もって調べた地図と見比べると、その家が目的の場所に違いなかった。

万造が嘆息した。

「麻布のお屋敷に比べると、これはあまりな」

「本当にね」

家の構えからすると、これはおそらく別邸ですらないだろう。熙通なり初子なりが、

自分のために買い求めたとは到底思えない。周囲の建物に比べれば確かに大きく、それなりの佇まいをした建物だが、この家に次期公爵が住んでいるのだと、言われたところで誰も納得はすまい。

新太郎もまた軽く息をついて、それからちょうど通りがかった老婆を呼び止めた。

「済みませんが、このあたりに鷹司さんのお宅はないでしょうか」

老婆は怪訝そうな顔をした。

「そんな御立派なお名前の家はなかったと思いますけどね」

どうも、と不審そうな老婆に頭を下げ、新太郎はぶらぶらとそのあたりを行きつ戻りつする。当たるを幸い、通りがかった人々に鷹司家の所在を尋ねたが、誰ひとり知っている者がいなかった。

「よほどひっそりとお住まいなのでしょうか」

嘆息混じりに万造が言ったときだった。

「そんなわけじゃないが」

突然背後から声をかけられて、新太郎も万造もぎょっとする。慌てて振り返ると、書生風の若い男が立っていた。

「鷹司なんて姓で訊くからいけない。中畑と言えば近所の者は誰でも知ってる。それで、あんた方は何者だ」

「ぼくは、その」新太郎は可能な限り狼狽を悟られまいと努めたが、とうてい成功したとは思えなかった。「帝都日報の平河と」

ああ、と男は呟く。

「娯楽新聞の記者か」そう嘯いて、男は新太郎を品定めするように見る。「その大衆紙の記者が何の用だ」

「失礼だが、きみは」

「中畑直という。ごくまれに鷹司直熙と呼ぶ輩もいるが」

新太郎は目を見開いた。

片親が違えば当然のことながら、直にはおよそ常に似たところがなかった。かといって父親の熙通に似ているわけでもない。熙通が痩せた小柄な男であったのに比べ、直は軍人を思わせる体格の、陰のある顔をした若者だった。

そっけなく言っただけで、彼は足を進める。新太郎たちを追い越して、すたすたと歩いていく。新太郎と万造が顔を見合わせたとき、その足を止めて振り返った。

「どうした。来ないのか。おれに用があったのじゃなかったのか」

五

直の後をついて四脚門を潜りながら、万造が小声で問うた。
「御用がおありなんですか」
「ない」
新太郎にすれば、住まいをちょっと見てみたい、どういう暮らしをしているのか、近所の者に訊いておきたい、とその程度の気分だったのだ。まさか当の本人に会うなど思ってもみなかったので、用件など考えていない。
「どうなさるんです」
万造の困ったような視線に、新太郎は苦笑した。
「これはもう、正直に振る舞うしかないようだね」
門から玄関までは飛び石の続く短い前庭、石を五つ踏んだ向こうに曳寄せがあって、その奥の板戸は開け放してある。上へあがりながら直は振り返った。
「そういえば、連れの名前を聞いてなかった」
万造はやや苦笑ぎみに頭を下げた。
「瓦町の万造と申します」

「瓦町。浅草か」

はい、と万造が頷くと、それきり興味を無くしたように奥へ入っていく。家は表から想像されるよりも奥行きがあるようだった。上級武士の小屋敷、という風情の建物で、靴脱ぎを上がったところに立てられている屏風は来歴のありそうな山水画、華やかさこそないものの決して貧しい拵えの家ではなかった。

玄関の四畳半を左に通り抜けると長い廊下、その廊下の途中で年配の女中が出てきた。構うな、とだけ直は声をかけて、そのまま奥へ向かっていく。突き当たりの右の襖を開いて、少し顔をしかめた。

「いたのか」

直の声には華やいだ若い女の声が応えた。

「そんなに露骨に嫌な顔をなさるものじゃ、ありませんわ」

広縁に面した二間続きの部屋、床の手前、付け書院の窓から夜の庭を覗くようにして少女が坐っていた。歳の頃は十六か七、柑子色の振袖も鮮やかな少女だった。

思わず部屋の入口で足を止めた新太郎に、直はそっけなく顎をしゃくってみせる。

「何をしている。入ったらどうだ」

言って自分も床の前に腰を下ろす。少女に向かって邪険に手を振った。

「御覧の通り、客だ」

出ていけという含みなのだろうが、少女のほうには一向に気にした様子がなかった。
「拝見すれば分かりますわ」笑って言い、新太郎たちに向き直って指を突く。「いらっしゃいませ」
対応に困りながらとにかく新太郎が頭を下げると、少女は屈託なげに笑顔を見せた。
「わたくしは九条鞠乃と申します。直さまの許嫁でございます」
言ってから、少女は悪戯めいた笑みを浮かべる。
「もっとも、直さまは諾とおっしゃってくださいませんけれど。でも、わたくしはきっと頷いていただくつもりですの」
啞然とした新太郎に、直は顔をしかめてみせ、鞠乃は声を上げて笑ってみせた。
「九条というと、熙通卿の御実家の」
「その九条の係累ではございますけれど、名前だけの九条ですわ。四民平等の世の中ですもの、名前だけの九条が鷹司さまの奥方になっても何の差し障りもございませんわね。たとえ障りがあるとしても、直さまさえ頷いてくださったら、本家にお願いして形だけでも養女に入れていただけば済むことですもの」
「ああ、なるほど」
どう対応したものか困惑した新太郎を興深げに見やって、少女は潑剌と言葉を継いだ。
「本当のところは、女学校に入るのに、お世話になっているだけなのですけど」

「華族女学校ですか」
華族子弟のために創設された学習院には同時に女子部が置かれた。その女子部が独立して華族女学校と称したのは明治十八年のことである。
「ええ。女子も教養が必要だと、それが父の言い分ですけど、実のところはそれにかこつけて、わたくしを鷹司家に入れたいだけですの。そうでなければ娘を一人で東京に出して、いくら遠縁とはいえ、奥さまのいらっしゃらない殿方のところに置いたりはいたしませんもの」
新太郎は苦笑した。鞠乃の父親の思惑が分かるような気がした。言葉から察するに、鞠乃の実家は爵位を持たない名目だけの華族なのだろう。その娘を女学校入学のためと称して東京に出し、身柄を遠縁に預ける。その間にあわよくば見初められて、それでなにがしかの縁ができれば、とそういうことか。
「ところで、そちらさまは」
鞠乃は小首をかしげる。
「帝都日報の平河と申します」と言ってから万造を見て、「彼は万造と」
「珍しいお客さまですのね。どういった御用件で」
直は苦々しげだった。
「あなたには関係がない。とにかく、離れへ戻りなさい」

「あら、直さまに関係のあることなら、わたくしにも関係のあることですわ」
「いい加減にしないか」
直の言葉には棘があったが、鞠乃は気にした様子がなかった。邪気のない笑顔で新太郎に向き合う。
「御用件を聞かせていただいてはいけませんかしら。まさか、直さまを取材にいらっしゃったのですか」首を傾けてから直を振り返る。「直さま、とうとうなにかなさったの」
直がひときわ渋い顔をして、新太郎は思わず漏れた笑いを噛み殺した。
「取材というほど大層なことではなかったのです。実はぼくは昨今帝都を賑わせている火炎魔人だの闇御前だのについての取材をしておりまして」
新太郎は言って、その過程で常と会ったこと、常の話を聞くうちに直に興味を持ったこと、為人を知りたくて近所の者に尋ね歩いていたら、ばったり本人に会ってしまったいきさつを、差し障りのない程度に語った。
「こうしてお宅に上がりこんでしまって、どうしたものかと、実は途方に暮れているところです」
新太郎が告白すると、鞠乃は声を上げて笑った。
「平河さんは正直でいらっしゃるのね」
「ぼくでも嘘ぐらいはつきますが。なにしろ予定外のことだったので、嘘を用意してお

かなかったのですよ」

鞠乃は再び声を上げて笑ってから、華やいだ面を傾けた。黒目がちの優しげな目が真っ向から新太郎に向けられた。

「つまり平河さんは、火炎魔人だのが鷹司のお家騒動に関係があるのじゃないかとお考えになったのですね」

「いや、別にそういうわけでは」

新太郎は慌てて言ったが、鞠乃は声を上げて笑う。

「駄目ですわ。平河さんは嘘を用意していらっしゃらなかったのですもの。そうとしか考えられないじゃございませんの。だって直さまは火炎魔人に行き合ったことも、闇御前に行き合ったこともないんですのよ。平河さんがわざわざ訪ねていらっしゃる理由なんて、その他にありはしません。違いますかしら」

新太郎は苦々しげな顔をしている直を見やって息を落とす。

「その通りです」

くすりと笑って、鞠乃は軽く身を乗り出した。

「それでそれは常さんの入れ知恵ですの。それとも、菊枝さんの」

新太郎はとっさに鞠乃を見返す。その動作で悟ったように鞠乃は頷いた。

「ああ、菊枝さんですのね。そんなことだと思いました」

「菊枝さんを御存じですか」
「ええ、もちろん。だって父はわたくしを、本当は常さんのところへ預けたかったのですから。最初はわたくしも麻布のお屋敷にお世話になりましたけれど、菊枝さんにお会いして、あそこにいるのが莫迦ばかしくなってしまいました。それで直さまを頼ってきてしまいましたの」
「莫迦ばかしく、ですか」
「菊枝さんが目を光らせているのじゃあ、父の期待しているようなことは起こりそうにないのですもの。常さんはそれはお役者のようなお綺麗な方ですけれど、どこか頼りなくていらっしゃる。そのうえ菊枝さんの御機嫌をとるのにお忙しい御様子ですし。わたくしだってお相手が菊枝さんでは張り合う気も起きません。家に帰ろうかと思っていたら、実は鷹司の御長男は直さまだと伺って」
「それでこちらに」
少しだけ揶揄を潜ませた言葉だったが、鞠乃はあっけらかんと肯定した。
「そうですわ。父の望みはきっと鷹司の御当主と御縁をいただいて、ということなのでしょうし、だったらそもそも常さんのところへやったのが間違いですわ。そう思ってこちらへ伺いましたの」言って鞠乃は直に向かって目を細める。「直さまにお会いして、常さんが御長男でなくてよかったと思いましたわ。父の意向には逆らえませんけれど、

わたくしにだって好みがございますもの」

あまりにあけすけな物言いに、苦笑するより失笑してしまった新太郎を、当の直は無言のまま苦々しげな表情で見やった。

鞠乃は邪気のない様子で首を傾ける。

「でも、菊枝さんの言葉なんかに振りまわされて、わざわざいらっしゃるなんて、平河さんも御足労ですわね」

はあ、と曖昧に呟いた新太郎に、鞠乃は強い視線を向けた。

「ええ、確かに火炎魔人やら闇御前やらと、胡散臭い。常さんが襲われて、しかも左吉までが襲われたとなると、そこに何か思惑が、とそうお考えになる平河さんのお気持ちは分かります。けれどそれは直さまとは何の関係もございませんわ。直さまと常さんは、ほとんど何のお付き合いもありはしないのですもの。襲われたのが常さんのお身内なら、まず常さんの周囲を疑ってかかるのが筋というものじゃございませんの」

「しかし」

鞠乃はふと笑んでみせる。

「例えば、菊枝さんだとか」

「菊枝さんがなぜ常さんや左吉さんを襲うんです。御親族の御意向は存じあげませんが、常さんは菊枝さんを奥様にお迎えになるつもりなのじゃありませんか」

「まさか」鞠乃はころころと笑った。「菊枝さんがどういう方だか、平河さんは御存じじゃありませんの」

「ええ、それは」

「仮にも鷹司の家に芸者上がりの女性が入れるとお思いですの。常さんは菊枝さんの借金を肩代わりなさったり、愛宕町の借家をさしあげたりと、それは大層な御親切ですけど、お嫁入りなんて一族の誰も認めやしないし、宮内省だって許可するものですか」

「ですが、側室ということもありえますね」

「もちろん、ございます」鞠乃は笑う。「ですからこれは例えばのお話ですわ。直さまが何か、とそんなことをお考えになるくらいなら、もっと疑ったほうがいい方が他にいるのじゃないかと申しあげているだけです」

「しかし」

「左吉は忠義一途の者。常さんも左吉には特別な信頼を置かれている御様子。その左吉があの家の中でいちばん菊枝さんを嫌っていることを、平河さんは御存じでしょうか」

新太郎は返答に窮した。それは当の左吉から聞いたことである。

「それとも、こんなふうにも考えられますわね」鞠乃はいっそう艶やかに笑ってみせる。「どれもこれも、そうやって直さまを陥れるために常さんがおやりになったことだと」

とっさに新太郎は鞠乃をねめつける。それは酷い言いがかりのように思われた。

「少なくとも常さんは、そういった方ではないと思いますけどね。大層お優しい、おっとりとした方で」

少女はころころと笑う。

「平河さんは常さんの味方でいらっしゃいますのね」

「そういうわけでは」

「誰も彼も、そんなふうにおっしゃいますわ。それはそれはお優しい、出来た方だと。でも、皆さん、大切なことをお忘れです」

「それは、何ですか」

「鷹司の御長男は直さまだということですわ」鞠乃は凛と顔を上げた。「いま常さんが当主顔でお住まいになっているお屋敷も、生活を支えている山林も農地も、全部直さまのものですのよ」

「しかし、あれは先代の御夫人が」

「ええ、初子さまが常さんに遺されたものです。ですけれど、いつからこの国では女が財産を管理できるようになりましたの」

新太郎は返答に詰まる。

「家法があります。生前の御意向もあります。お遺しになっていた御遺言もあります。直さまを廃嫡なさるよう、準備をなさっていたとも伺いました。ですけれど、今も法律

の上では直さまが歴とした御嫡男。しかも近々新しい民法が発布されるとの噂を平河さんなら御存じのはず。長男単独相続が強まったと聞いております。しかも家法よりも民法が優先されるとか。それまでに廃嫡が間に合いますでしょうか。本当に廃嫡の手続きが続けられますでしょうか。相馬騒動の例もございますけれど」

新太郎は完全に返答に窮した。旧相馬藩の相続に関して起こった大騒動は、明治十年に始まって十八年の長きにわたって世間を騒がせつづけた。当主誠胤を瘋癲を事由に廃嫡し、異母弟に家督を譲ろうとした件で、旧相馬藩士がこれを家督窃盗の陰謀であると糾弾し、政界までを巻きこんだ大騒動に発展した。

確かに、事由のはっきりとしない性向を理由の廃嫡は、同様の騒動に発展する虞がある。簡単に廃嫡が叶うとは思えない。

「別に直さまは廃嫡になってしまったわけではございませんわ。戸籍の上でも御立派な鷹司の御当主、お優しいのは直さまのほうです。だって常さんを御自宅から追い出したりなさらないんですもの」

言って鞠乃は、依然苦々しげな表情をしている直をうっとりと見る。

「しかし、左吉が」

常が左吉を信頼しているのだとしたら、それではいっそう左吉が襲われたわけが分からない。

鞠乃はあっさりと笑った。
「あら。左吉はね、常さんのためなら何でもするんですの。死ねと言われたらきっと死ぬんですのよ。死ねと言われなくても、常さんが死んだら後を追っていきそうなくらい」
「ですが」
「左吉が襲われたとあれば、常さんへの疑いは晴れますわね。それを目的の狂言だとしたらどうでしょう」
「けれども、常さん御自身も闇御前に」
「常さんが襲われたところを見た人はおられますのかしら」
新太郎は言葉に詰まった。
「そんなことだと思いましたわ。でしたら、常さんが言ってらっしゃるだけ。違いますの」
鞠乃は晴れやかに笑う。
「直さまが得体の知れない怪人を操って、常さんに何かよからぬことを、そう思っていらっしゃったのなら、過ぎた心配というものですわ。直さまがなぜ常さんに何かをしなくてはなりませんの。鷹司の御長男はあくまでも直さまです。ですから、ようく御思案あそばせ。本当に悪だくみをしている者がいるとしたら、誰なのか」

新太郎が返答に窮していると、唐突に立ち上がったのは直だった。鞠乃はその姿を怪訝そうに見上げた。

「どうかなさいましたか」

直は鞠乃に目もくれなかった。新太郎のほうへ目をやって、目線で部屋の外を示す。

「近所まで送ろう」

新太郎は一瞬、万造を見、それからやむをえず立ち上がった。

「突然、押しかけて済みません」

頭を下げる新太郎に、直はそっけなく頷く。立ち上がった新太郎たちをまたも追い越して、先に立って廊下に向かう。直が襖を開けたところで、先の女中に行き合った。

「あら、もうお帰りでございますか」

盆の上に茶器を載せた女中のやや狼狽したような声に、直は無言で頷く。お邪魔をしました、とその女中に声をかけ、鞠乃にも挨拶をと振り返ってみると、彼女は複雑そうな表情をしていた。

「お転婆というのかな」

直は四脚門を潜りながら呟いた。

「悪い娘ではないが、善い娘でもない。あまり彼女の言うことを信用しないでもらいた

い」

新太郎は直の横顔を見る。上背のせいでわずかばかり、見上げる角度になった。

「常は腑抜けだ。おれを陥れるような甲斐性などありはしない。第一、左吉が襲われたとき、おれは常に会っている」

新太郎は改めて直を見返した。

「たしか、御親族がいらしていたとお聞きしましたが」

「おれも呼びつけられたんだ。常に家督を譲る気はないかと言って。それでも構わんと言っておいたが、どうせ誰かがまた反対するんだろう」

「常さんを庇われるのですか」

新太郎の問いに、直はそっけない視線を向けた。

「鷹司の長男は不良華族で、次男は腑抜けだ。どちらも家督を継ぐ器量などないが、どちらかが継がねばならない。どっちが継いでも、鷹司のためにはならんだろうが」

「他人ごとのようにおっしゃる」

「他人ごとだ。興味がない」

そう言ってから直はしばらく足を止めたまま夜のどこともしれないあたりを見ていた。

「おれと常は似ていないが、家督に興味のないところだけは似ていると思う。おれは家督をありがたく思うほど鷹司の家に癒着して生きてはこなかったし、反対に常はあまり

に当然にそれがあったのでありがたみを感じていない。興味があるのは、おれたち以外の連中だ。鞠乃や鞠乃の父親や菊枝のような連中。あるいは、家令や家扶や左吉のような連中」

そう言ってから、ああ、と直は呟く。

「いっそ輔が継いでくれればいいのだがな。あれなら何の問題もないはずだ」

「輔というと京都の方の」

新太郎が言うと、直は興味深そうに眉を上げてみせた。

「よく調べているな」

まあ、と新太郎は言葉を濁す。

「常や左吉が襲われたというのは知らなかったが、お家騒動などという大層な問題じゃない。ほんの偶然だ。おれはそう思うがね」

「それは、しかし」

「火炎魔人だの闇御前だの、そいつらに襲われたのは常や左吉だけじゃあるまい。その連中全部が鷹司の関係者だという話は聞いたことがないが、そうなのか」

「確かに関係があるのは常さんと左吉さんだけですが」

「じゃあ、あんたの考え過ぎだ」

新太郎はただ息をつくに留めた。

「ときに直さん。さっき、中畑とおっしゃいましたか」
「言ったが」
「それはお母さまの」
「そう。実母の姓だ。どういうわけか、この家は中畑の名義になっているからな。中畑が鷹司から借りたことになっている。もう死んだが、鷹司からついてきた婆さんもおれを中畑と称していた。案外初子の差し金かもしれん」
さらに溜息が漏れた。それは初子の悪意だとしか思えなかった。
「初子さまは昨年亡くなられたのでしたか」
「そのようだな。葬式にも行かなかったので、おれは詳しいことは知らんが」
「行かれなかったのですか」
「おれには関係がない。喪主と呼べるのは常だろう。あいつにとっては母親だからな。連絡はあったが、おれは行かなかったし、家令も無理にとは言わなかった。鷹司は常を中心に動いているんだ。第一、あの女だっておれに弔われても嬉しくはなかろう」
新太郎は口籠る。言ったものかどうか悩んで、結局口に出した。
「初子さまも酷いことをなさる」
「おれにとっては最初から赤の他人だ。興味がない。別に恨みがあって行かなかったわけでもない。多少顔を知っているだけの他人の葬式にわざわざ足を運ぶこともないだろ

う。そういうことだ」

「お母さま、実母のお千代さまとお付き合いはおありですか」

直は背後を振り返る。

「さっき廊下で会ったのがそうだ。ひとり暮らしは寂しいとみえて、おれを訪ねて横浜を引き払ってきた。もう三年になるか。別に邪魔にもならないので置いている」

思わず新太郎も背後を振り返った。女中だと思った、あれが直の母親だったのだ。

「ではもうお千代さまは、鷹司家とはお付き合いがないのですね」

「おれが生まれてじきに親父とは切れたようだな。さすがに生活の面倒は見てくれたようだが。子供が欲しかっただけじゃないのか。それとも、実家のほうかな、用があったのは」

「確か、毛利藩の」

直は面白そうに新太郎を見た。

「本当によく調べているな。その手蔓が大事だったんだろう。特に幕末の動乱の時期には意味のある手駒だったろうさ。それも明治からこちら、あまり用をなさなくなった。子供も生まれたことだし、さほど必要がなくなったと、そういうことなのじゃないかな。常の実家も似たようなものだったらしいから。もっとも、おれは当事者ではないので感情の機微までは分かりかねるが」

「京都の方とは、ずいぶん円満に続いておられたようですが」
「そのようだな」
「京都の方とお会いになったことは」
直は頷いた。
「何度か会った」言ってから直はふと視線を上げる。「ああ、そう言えば確かあの一家は今は東京にいるはずだ」
え、と新太郎は瞠目する。
「こちらに」
「常はそう言わなかったのか。あれも知らないことなのかな。多分そうだと思う。以前、昨年の末か、その頃に銀座で輔と母親を見かけたからな。輔ももう十六かそのあたりになるだろう。学校に入れるためじゃないのか。おれはそう思っていたのだが」
「そうだったのですか」
常も知らない間に、上京していたのだろうか。上京したなら、何がしかの挨拶があって当然のように思われるけれども。
「直さんはお父さまを覚えておいでですか」
「あまり会わなかったからな。家よりも倶楽部にいることのほうが多かったし、そこにもいないことのほうが多かった。洋行することも多かったしな。別に冷たい父でもなか

ったが、特に優しい父でもなかった。父親というのは、あんなものだろう」
直の声はどこまでもそっけない。
「常さんとはしばしばお会いになるのですか」
「この間のように親族が集まったときに、呼び出されて同席することはあるが。そういうことでもなければ特に会ったりはしない。会う理由がないからな」
「そうですか」
呟いた新太郎に、直は少し笑ってみせる。
「ああ、それから。おれは火炎魔人とやらも闇御前とやらも知らないし、会ったことも襲われたこともない」
唐突に何を、と驚いて瞬いた新太郎に、直はさらに笑った。
「それを訊かなければ、あんたも面目がたたないだろう。一応そのことで来たのだからな」
思わず赤面した新太郎を笑って、直は踵を返す。
「ではな。近頃夜道は物騒なようだ。気をつけて帰るがいい」
結局、俥を捜すのも面倒で、新太郎は万造と夜道を歩いた。神楽坂の下のあたりの道では通りがかる俥や荷車を待つ立ちん坊が、所在なげに煙管をふかして夜の中に小さな

紅い火を点していた。

「きみは、直さんをどう思った、万造君」

新太郎の問いに、万造はさて、と声を発する。

「思っていたのとは、ずいぶん違った方ではございましたが」そう言ってから苦笑した。

「直さんよりもむしろ、鞠乃さんのほうが印象に強うございましたね」

新太郎もまた軽く笑った。

「確かにね。直さんはずいぶんそっけなかったが、綺麗な娘さんだったじゃないか。少し跳ねっ返りなところはあるようだったけれど」

「女性も開化で変わったということでございましょうか。聡明な方ではございましたが」

うん、と呟いて新太郎は万造を見る。

「お家騒動なら、むしろ常さんのほうに疑いがある、か。きみ、あれをどう思う」

「一理あるように思われましたが、そういうふうに何もかもを疑ってかかると、結局のところぐるりとまわって、火炎魔人だの闇御前だのは鷹司家とは何の関係もないのじゃないか、気紛れに人を襲っているのじゃあるまいかという気分になりますね」

「そうだね」

「何にしても奇妙な御兄弟でいらっしゃる」

「まったくだ」

「同年同日の生まれで、ともに庶子、一方は不良華族で、一方は学習院から帝国大学へ進んだ典型的な皇室の藩屏。しかしながら皇室の藩屏のほうは次男で相続権がなく、不良華族のほうに相続権がおありでらっしゃる」

ウン、と新太郎は頷く。

「常さんは初子夫人の寵愛も深く、華族の体面を守っていけるお方、けれども肝心の相続権がない。歳の離れた弟ならばまだしも諦めがつくでしょうが、実際のところはお兄さまとは同い年、たまたま御誕生があとから御父君のお耳に入っただけという菊枝さんの言い分を信じるならば、さだめし御無念なことでございましょう。当の御本人が無念かどうかはさておき、少なくとも常さんに肩入れしてらっしゃる方々は」

「まったくだね。片方は相続権以外の全てを持っている。もう片方は相続権以外のものをなにひとつ持っていない」

万造は息をついた。

「本当に、騒動を起こしてくれと言わんばかりの」

そうだね、と新太郎も息を吐いた。

「それにしても、意外だったのはお千代さんが直さんのところにいらっしゃったことだね。ずいぶん地味な様子の方だったように思ったが、きみはお千代さんがどんな人だか

ちゃんと見たかい」

新太郎がそう問うと、万造は少し何かが気にかかる表情をした。

「どうした」

「いえ。確かに地味な造りをしていらっしゃいましたけれど、お綺麗な方のようにお見受けしましたが」

「その先がありそうだね」

「ええ、これははっきりとしたことではないのですが。お千代さんはずいぶんと長いこと、襖の向こうにいらっしゃったのではないでしょうか」

新太郎は万造の顔を見返した。対して万造は困ったような笑みを浮かべる。

「お茶器に湯気がなかったと、それだけのことでございますけれど。直さんが出ていかれて、ちょうどお千代さんと行き合った、それがどうも、たまたまやってきたところで出会ったと、そんなふうには見えなかったものですから」

「そう言われてみれば、お千代さんはずいぶんうろたえておられたような。まさか立ち聞きしてらっしたのだろうか」

「さて、どうでございましょう。ですが」万造は眉を顰めた。「直さんにも、直さんに家督を継いでいただきたい方々がおられるのは確かでございますね。お千代さんも鞠乃さんも、それを望んでおいでしょう」

新太郎はその言葉に妙に胸落ちするものを感じた。
「それに、御三男さんもこの東京においでだとか」
「ウン。それはぼくも気になった。どうして常さんはそれを御存じなかったのだろうね」
「気にかかるのはそれでございます。継げるものなら家督が欲しいと、そうお考えになるのは、果たして直さんと常さんだけでしょうか。どうにも嫌な感じでございますね」

第三幕　夜の底、魚の回遊

娘の白い首だけが、闇の中に浮かんでいるかのように見えた。
それもそのはず、娘の衣装は黒、比翼の裾模様は流水に梅、頭に被った手拭いの、さらりと下がった布端の内側、額にかかったほつれ毛が美しかった。背後の黒衣は闇に溶ける。
『私が姿、目に立てば、借り駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十両、使い果たして二分残る、金ゆえ大事な忠兵衛さん、咎人にしたのも私から』
娘の口説きに、黒衣はふいにくつくつと笑った。
「これ、娘や」
『あい』
「心中の道行きで、そうも嬉々と口説いてどうするね」
『アレ』

「忠兵衛が自分のために咎人になってくれたのが嬉しいかい。お前を大事に、四十両、使い果たしてくれたのが嬉しいのだねえ」

『モウ、そんな意地悪を』

「本当にお前は、いつまで経ってもそんなに無邪気な。梅川はこれから死ぬのだよ。少なくともそう思い定めての道行き、その道中でそんなに嬉々としたんじゃあ、冥途の飛脚ならぬ、浄土の飛脚だろう。これから忠兵衛と新居の床に行くようだねえ」

つんと娘はそっぽを向いた。

『知らぬことじゃわえ』

くつくつと、黒衣はさらに忍び笑う。

「やはりお前に梅川は無理かね。おさんといい、哀れな女の似合わないことだね」

笑い含みの声に、きり、と娘は黒衣を見上げた。

『供に冥途へ旅するならば、そりゃあ慮外の幸せというもの。お前さまはお三輪を御存じないかえ』

黒衣はほんのわずか、娘の顔を覗きこむように押し黙り、すぐにくすりと笑って、見上げてくる娘の首を抱き寄せる。ことんと胸に顔を伏せた娘の首筋を撫でた。

「お三輪も、お七もね。なるほど、その通りだ。考えの足りないことを言った」

娘はなおも恨めしげだった。

『ええいモウ、好いた殿御がこの身のため、罪に手を染め身を滅ぼしてくれれば、そりゃァ嬉しいわいな』

娘は言って、かつんと黒衣を見上げる。

『それでお前さまは、そこまでのつもりがあらっしゃるかえ』

「おやおや」

黒衣はそれだけを言って笑う。

『わしゃァ、それが幸せだもの。この身には縁のないことなれば、たとえ芝居のうえだとて、嬉しゅうて声も弾もうほどに』

これに対しても黒衣は笑うばかり、応えた台詞は笑い混じりだった。

「鬼棲む里の果てまでも、お前と一緒に暮らすなら、なんの厭おう、厭やせぬ」

『えい、憎らしい。もうお前さまのことなど、知るものかえ。どうなと好きにするわいな。わしゃァお前のために、竪なものを横にもせぬわ。嫌じゃわいなァ』

くつくつと笑って黒衣は、伏せた娘の顔を上げさせる。

「機嫌をおなおし。この埋め合わせは先々で。きっと良いようにしてあげるから」

『嫌じゃというに』

「言うことをお聞き」片手で抱き取った娘の首をひとつ撫でて放す。「今夜は浅草に行くのだからね。きっと大層な見物になる」

『そんなに夜の者とやらが気に入ってかえ』
「気に入ったねえ。少なくともお前くらいにはね」
『アレ、そんな上手をいまさら』
「本当のことだ。お前に会ってからこちら、久々に真面目に働く気になっている。だからねえ、手を貸しておくれでないか。決してお前に悪いようにはしないから」
『お前さまの頼みならば嫌じゃ』
黒衣は笑う。
「憎まれ口ばかりきくものじゃない。いいから、お聞き。浅草の凌雲閣、通称を十二階というあれの近くに、チロー館という見世物が出来た」
『なんとも妙な名前じゃな』
「そもそもは昨年、大阪の千日前で始まった興行だ。二十六年、亜米利加の市俄高大博覧会で好評だった水晶館を模したものなのだけれども」

一

闇御前、と世間から呼ばれる、その夜の者は、わだかまった闇の中にその身体を潜めていた。

化け物といい、変化という。ならばいま懐に差した掌に音高く響く鼓動はなにゆえか。身動きをすれば、袂の中できし、と小さな音がする。爪が擦れた音だった。

闇の中に身を屈め、目の前の厚板硝子の表面に見入る。闇の固まりのような自分の姿に見入った。

奇妙な空間だった。

厚板硝子と大姿見でできた迷路は、どこまでが道なのか判然としない。げんに闇御前の右手には果てしなく長い道が続いているように見えたが、そこには鏡しかありはしないことを手触りで確かめて知っていた。

左手の硝子の向こうの小道を来る者は、闇御前の姿をどう見るだろうか。黒布を被ったその姿は闇そのものに見えるか、それとも禍々しい影に見えるか。

きし、とまた袂の中で音がした。掌が薄く汗を刷いている。

襲った贄はすでにもう片手では足りぬ。哀れにもおぞましくも思ったのは最初の一人を殺すまで。一人殺して血に酔った。大量の血が醸す匂いは甘いと、初めて知った。

女が男を悦ばなければ、どうして遊女などという商売が成り立つか。そのように、殺戮には愉悦が伴うゆえに、軍人などという商売が成り立つのだと、そう悟った。

昏くとも明るくとも愉悦は愉悦だ。贄を切り裂く感触、悲鳴を上げる様は慣れれば可笑しく、それを追って切り刻むのは愉しい。このまま血の海に溺れて、叶う限りに屠っ

てみたいが、当初の目的を忘れてはならない。

すでに殺戮は呼吸のようになじんで抵抗がない。贄を憐れむことと、殺戮自体を悦ぶこととは別のこと、人の死は悲劇だが、いつかは誰にも必ず降りかかる平等な悲劇だ。それはいつでも路次裏に潜んでいる。通りがかった者を死の淵へ突き落としていく。天災かもしれないし、病魔かもしれない。あるいは強盗であり、あるいは闇御前であるかも。通りがかったのが不運というもの、それ以上の意味などない。

じっと見守る硝子、その向こうに延びる通路の突き当たりの鏡に、小さく人の姿が映った。こうして身を潜める間に、それが遠くの角を曲がってくる人影なのだと学んでいた。

じっとその影を見つめること、しばし。それが目的の人物だと見極めて、黒布を掻き合わせる。

あの血の匂いも甘いだろうか。

不思議に感慨も緊張もなく、いつも通りの高揚した気分だけがあった。

だが、血に酔って我を忘れることがないように。切りつけ傷つける必要はあるが、決して深手を負わせてはならない。

「まァ、すごい」

鞠乃は声を上げて、あたりを見回した。ただ広いだけの空間に見える。けれどここは迷路の中なのだ。あちこちに歩いている人影が見えるが、乏しい瓦斯灯の明かりでは姿形までは判然としない。その人影のうちの幾つかは、鏡に映った自分の影だと、そう前もって知ってはいる。

「直さまは迷途は初めてですの」

少女は、背後から面白くもなさそうについてくる男を振り返った。

「餓鬼のころに親父に連れられて、見物にいったことがあったと思うが」そう、直は言ってから、微かに笑った。「ああ、元祖の迷途は行ったな。あれは覚えている」

鞠乃はあたりの硝子に触れながら首をかしげた。

「横浜のかくれ杉」

直は苦笑する。

「その、さらに元祖だ」

横浜野毛に本邦最初の迷途が設けられたのは、明治九年のことである。以後、八重垣、八幡知らず、と名を変えてほうぼうに迷途が乱立した。

「野毛の迷途は英国のハンプトンコオトにあるやつを真似たものだ。そちらのほうなら行ったな。親父が死ぬ前の年だったか」

「まア」

「英国に行って帰っただけの旅だったが。途中南方に寄港したかな。詳しいことはもう覚えていない」
「お父さまと御一緒でしたの」
「そう。親父とおれと常と、三人だけの旅だった。わざわざ仕事に子供を連れていくのも妙な話だが、あのひとはおれたちを、何かというと外国へ連れ出したがったからな」
「素敵ですこと」
「そうでもなかろう。本人は仕事で行くのだから、当地ではそこで雇った女中におれたちのことは任せきりだった。それで乳母と一緒にハンプトンコオトに行ったな。あれはよく覚えている」
「ひょっとして迷ってしまわれたとか」
「そう」直は笑う。「後先考えず走りまわったあげく、乳母とはぐれて迷ったんだ。動かないで待っていよう、と言う常を引っぱりまわして、むきになって出口を探したものだから、探してくれていた大人たちになかなか出会えなかった。常が泣き出さなかったら、夕暮れまで迷っていたかもしれない」
「あら、まア」
鞠乃は声を上げて笑った。直もまたこの男にしては珍しく、さも可笑しげに笑う。
「おれは迷子になるのが得意だったんだ。どこの町でもちょろちょろとあちこちの路次

に潜りこむんで、すぐ迷う。意地っぱりだから、人に助けを求めない。だいたいいつも常が泣き出して、それで助かるんだ」

「常さんとは、仲が良くていらしたのね」

鞠乃が言うと、直は苦笑する。

「餓鬼の頃はな。なにしろ同じ家に同い年の子供がいるんだから。牛込にやられてからも、しばらくの間は往き来していたが、初子や婆やが怒るのでやめた」

鞠乃はついと間近の硝子を撫でた。

「そうでしたの」

「別に今でも憎いわけではない。あえて親しくしたいほどの興味も失せたが。そうだな、幼なじみのようなものかな」

鞠乃はそう、とだけ呟いた。直はその顔を見やり、そうして眉を顰めた。別段、鞠乃の表情に問題があったわけではない。微かに耳が嫌な音を拾ったせいだった。

キィ、と、それは硬いものの表面を金属が擦る音に聞こえた。耳の中の産毛を逆撫で、背筋までをちりちりとさせる、あの嫌な音。

キィィ、と再び音がして、直も鞠乃もその方向を探した。八方は闇。黒い床板と大量の硝子と何も映さない鏡が作る、紛いものの闇が広がるばかりだった。

あ、と鞠乃が直の背後を示した。振り返った直の視野に、ひときわ黒い闇が膨れあが

るのが見えた。否、闇の色をした何者かが間近で立ち上がったのだ。

それは黒い布を被っていた。立ち上がる動きにつれて、その黒布が落ちる。現れたのは白い顔と緋の口唇。赤に金襴の赤姫姿、花櫛の飾りが銀の小波を作った。

「あ、あッ」

声を上げた鞠乃をとっさに背後に庇う。それが何者なのだか、疑いようもない。打掛の袖口から覗いた鉤爪が、宙を掻いて細く嫌な音を立てた。それは、硝子一枚を隔てた至近の距離にいるのだ。

いや、と直は思う。至近の距離にあるのはひょっとしたら鏡か。間近に見えるその魔性は果たして実像か、鏡像か。鏡像だとしたら、実体はどこにある。背後か、それとも。

「戻れ」

短く言って背後の鞠乃をやってきた方向へ押し出す。逸らすことのできない視線、白い顔に緋い唇がにっと笑う。

それは一歩を踏み出した。と同時に四方に赤い影が現れた。真横に、真後ろに、正面の遠くに、さらに遠い脇に。

ぐらりと強い目眩がした。直はわずかのあいだ迷う。逃げるべきか否か。逃げろ、と無意識は訴えるが、何かがそれに抵抗する。白塗りに滴るような唇の紅、禍々しいほどそれは艶やかで麗しかった。紛いものの闇の中、忍び出るように現れて爪をかざした姿

が、夢幻のようで目を離したくなかった。
せめて背後の娘だけでも逃がしてやりたかったが、どちらへ逃がせば安全なのかが直には分からない。そんな直の心中を嘲るように笑って、闇御前はさらに足を踏み出す。とたんに姿が掻き消え、次に現れたときには、二人の周囲を埋め尽くすように無数の姿に増えていた。
「鞠乃、叫べ」
言ったが、少女は目を見開いたまま硬く立ちすくんで、直の声が聞こえているのか、いないのか。
「叫べ。逃げろ」
どちらへ、とは直は言えなかった。
いいえ、と鞠乃は目を見開いたまま零す。
「いいえ、いいえ」
鞠乃、と呼んでその身体を押し出そうとしたときに、伸ばした腕に最初の斬撃が襲ってきた。紬の白い袖が裂けた。
「念仏おし」
嬉々とした響きの歪んだ声は背後、右から。同時に二度目の痛みが肩口を切り裂いた。
「鞠乃、逃げろ」

反対の方向へ押しやろうと、伸ばした直の腕をしかし、鞠乃は摑んで反対に引く。渾身の力で引き倒し、つんのめった直を躱すようにしてまっすぐに赤姫の影のひとつに駆け寄っていった。

「よせッ」

「小娘、死にたいかえ」

笑い含みの声がして、凶器を潜ませた袂が振り上げられるや否や、少女はその懐に飛びこんで腕にしがみついた。

「邪魔だてはお止し」

「いいえ、させません」叫んで鞠乃は直を振り返る。「直さま、爪を」言って見上げた打掛の腕は、振りおろす力と押し戻す力との鬩ぎ合いで揺れている。

一瞬、直は迷った。どうするべきか。迷いながらも立ち上がったとき、鞠乃の力が拮抗に負けた。

「鞠乃ッ」

直はとっさに叫んだが、しかし、自由になったその腕が振り下ろされることはなかった。

「お止しなさいまし」

闇御前は背後から男の声を聞いた。振り冠った手首を握った力は紛れもなく男のもの。

しかし見やった背後には、何の姿もありはしない。いや、ありはしないと見えたのはその男が黒ずくめのせい、顔まで黒い布をさげていたせい。男は黒衣姿だったのだ。

ぎり、と手首を摑んだ力が強まる。指の先から血の気が引いた。黒衣は袖の先に手を伸ばす。黒手甲から現れた指の先だけが白かった。

「これはわたしがいただきましょう」

黒衣は爪をもぎとる。身もがいても逆らうことができなかった。

それを懐にしまって、黒衣は闇御前の手を放した。くすくすと忍び笑う声が聞こえる。

「これでこの一幕は、お仕舞いでございますね。無様な幕切れにならぬよう、お早くこの場を退場なさいませ」言ってくつくつと笑う。「そろそろ人が参りますよ」

黒衣が言ったとき、実際に何かを怒鳴る声が聞こえた。黒衣を除く三者が、はっと声のしたほうを見やる。闇のあちこちに無数の人影が現れた。

直は身動きができなかった。鞠乃は肩で息をしながら、赤姫を見つめて立ちすくんでいる。

赤姫はわずかの間、呆然としているように見えた。逡巡するように化粧の下、そこだけが素顔を示す瞳が揺れて、すぐにその身を翻した。黒衣の脇を抜け、その場を離れ、するりと脇道に消えていく。

「あんたは」

直は黒衣に目をやって言ったが、これにはただ含み笑いが返ってきた。笑うばかりで返答もなく、黒衣もまたその場を退る。これまた脇道にでも入ったのか、闇の中に溶けて失せた。

呆然と目を見開く直の背後からは、人が駆け寄る声と足音が近づいてくる。今になって傷が激しい痛みを訴え始めていた。

二

新太郎は夜道を万造と駆ける。瓦町からまっすぐに、行く先は第二医院、今夜の知らせを持ってきたのは、新太郎ではなく万造になじみの露店商だった。

浅草チロー館に闇御前が現れた。今度は殺しそびれたらしいと言う。

やってきたばかりだった新太郎は、まだ体温の残る下駄を足に履きもどし、万造ともども瓦町の借家を飛び出してきたのだった。

「直さん」

病室に駆けこんだ新太郎は、そこに直と鞠乃を見つけた。さして深手でもないのか、直は寝台の上に坐っただけで、ことさら大事のふうでもなかった。

「平河、だったか。どうして、ここに」

直は心底、驚いているように見えた。
「万造君のところに知らせがあったんです」
「誰から」
やや呆れたような直の問いには、万造が答えた。
「わたしは浅草界隈を河岸にする香具師の雑用をしておりますのです。場所が浅草、それで顔なじみの者が闇御前が現れたと」
万造の言葉を新太郎が継いだ。
「聞けば襲われたのは、鷹司直とおっしゃる方だと言うじゃありませんか。それで担ぎこまれた先を聞いて、急いでやってきたんです」
直は苦笑する。
「なるほどな。とんだ早耳でおそれいる」
「それで、お怪我のほうは」
「大したことはない。二の腕と肩と」
直が答えたところで、扉を叩く音がした。促す直の声に戸が開いて、顔を出したのは常と左吉だった。
「直」と言いかけて、新太郎たちを見て驚いたようにする。「平河さん、万造さんも」
直もまた驚いた様子を見せた。

「なんだ、お前のところにも連絡がいったのか」
「ええ、こちらの院長は懇意の方でございますから。起きても大丈夫なのですか」
「大したことはないんだ。二箇所ほど切っただけで。特に入院というわけでもない。今夜一晩は泊まっていけと勧められたが、別段帰りたければ帰ってもいいという話だったからな」
よかった、と常は心底安堵した様子を見せる。そうして鞠乃を見やった。
「ひょっとして鞠乃さんも御一緒だったのですか」
ええ、と鞠乃の声は低かった。
「鞠乃さんはお怪我は」
「ございませんわ。御心配なく」
けんもほろろの物言いに、常は困ったようにして、すぐに直に目を向けた。
「闇御前とか」
「ああ。あれが噂の狐女なのだろうな」言ってから、新太郎を面白そうに見た。「あんたはこれが訊きたくて来たのだろう」
「いや、決してそれだけというわけでは」
狼狽した新太郎を、直は可笑しげに笑う。
「せっかくの取材の機会を無駄にすることもあるまい。闇御前、なのだと思う。噂通り、

白塗りに赤い打掛、吹輪に花櫛の赤姫姿だ。チロー館の中で」
言って直は赤姫に出会ったところから、人が駆けつけてきたあたりまでを淡々と語る。
「なるほど」と新太郎は呟いた。「御無事でよかった。しかしやはり、闇御前とやらは人なのですね」
「だろうな。少なくともあの爪は、鋼か何かでこさえたもののように見えた。うんと尖った熊手のような代物だったが」
「どんな顔つきの女だか、お分かりになりましたか」
「分かるはずがない。一瞬だったし、あの白塗りだし、おまけに中は薄暗かったしな。細面の美人だったという印象はあるが」
「鞠乃さん、いかがです」
新太郎が水を向けると、鞠乃はそっぽを向いた。
「分かるはずがございませんわ。無我夢中のことでしたもの」
そうでしょうねえ、と新太郎はやや落胆しながら呟き、ふと首をかしげた。
「しかし、その黒衣はいったい何者だったのでしょうね」
直もまた首をかしげる。
「それが分からない。助けてもらったことになるが、にしては敢えて闇御前を逃がしたようでもあるし」

「ええ、本当に」

「駆けつけてきた連中はチロー館の呼びこみたちだ。連中の弁によれば、黒衣がやってきて、チロー館の裏手のほうから中に入る赤姫姿の女を見たと、そう言っていったらしい。それで中の様子を窺ってみると、おれたちの声が聞こえたという。チロー館は、思ったよりも小さな建物らしいな」

これには万造が頷いた。

「さようです。中に入って感じるよりもずっと小さな建物で。中が人で混み合わないよう、入場を整理しているくらいですから」

「裏口でもあるのかい」と、新太郎が問うと、万造は首を横に振った。

「決して、そういうわけでは。ですがあの小屋は見た目ほど大きくもないし、頑丈な建物でもないのです。迷途の周囲を黒板壁で囲って光が入らないよう工夫をし、その外周の小道に瓦斯灯がいくつか点けてあるのですけれど、迷途から外周を巡る小道へは入れないことになっております。硝子のせいで続いているように見えますけれど、あれは実は区切られた空間なのです」

「へえ」

「ただ、それを火急の際には抜け道として使おうというわけで。特に中で火を使いますことから、外周の板壁が万が一に備えて何箇所か開くようになってございます」

「壁が開くのかね」
「はい。あの壁は実は、地面に打ちこんだ柱の溝に板を差しこんだだけの造作なのです。そこに天井板を被せて押さえてあるのですが、そのうちのいくつかは、二枚仕立てになっておりまして、下の一枚を軽く中に押しこんでやれば内側の溝に沿って押し上げることができます。三尺ほどの隙間ですが、潜り戸としてはそれで充分でございましょう」
ふむ、と新太郎は唸る。
「では闇御前は、ずいぶんとチロー館の事情に詳しい人物なのだということになりはすまいか」
「それはどうでございましょう。小屋を建てるところを見ていれば、誰でも推測のつくようなことですが」
「しかし、迷途に忍びこむのも、追われて逃げるのも、よほど詳しくなければ簡単なことじゃあるまい。迷ってしまっては話にならないからね」
新太郎がそう言うと、万造は苦笑した。
「それもどうでございましょう。これを言うのはなんでございますが、実は迷途には抜け道のあることが多いのでございます」
「へえ、そうなのかい」
「ええ。中で不都合の起きた客のために、板囲いの迷途では、小屋の者が往き来する秘

密の道があるものなのです」
「壁のようなからくりでも」
「もっと簡単でございます。中の仕切りは硝子と鏡、これも外壁同様、黒塗りの柱の溝に沿って落としこんであるだけです。しかも、その硝子のほう、あれは実は上が二尺ばかりすいておりますのです。急の際には硝子をひょいと持ち上げて、下を潜ればいいだけのことでして」
「ああ、なるほど」
「ただこれも、たまたま小屋の者が往き来するところを見たり、なにかのはずみで試してみたりすれば、誰でも分かることでございます。チロー館は特に分かりにくい造作になってはおりますが、他のもっと安手の迷途に行ったことがあれば、薄々想像はつくのじゃないでしょうか」
新太郎は唸る。
「しかし、閣御前が人である以上、必ず犯人がいるはずなんだよ。しかも直さんまでが襲われたとなると、いよいよ鷹司のお家騒動に関係ないとは思えない」
言ってから、新太郎は当事者である常と直が目の前にいることを思い出した。
「ああ、これは、失礼を」
新太郎は赤面したが、直は苦笑しただけだったし、常も困ったように俯いただけだっ

た。

「いまさらでございましょう」

そう苦笑混じりに言ったのは万造だった。

「失礼ついでにお訊きしたいのですが」そう断って、万造は鞠乃を見る。「鞠乃さん、無我夢中だったとおっしゃいましたが、闇御前が男だったか、女だったか、それくらいはお分かりではなかったでしょうか」

新太郎は万造を驚いて見やった。

「男」

「はい。闇御前の話を聞いたときから思っておりましたのです。赤姫といえば、歌舞伎の役柄、あれはふつう男が、女形が演じるものでございます。だとしたら、東京を賑わす赤姫も必ず女だとは限らないのではないかと」そう言って、視線を新太郎から鞠乃へ向ける。「とりすがった感じはいかがでした」

鞠乃はじっと万造を見返してから首を振った。

「分かりません。女性でないという気はいたしませんでしたけれども。けれど確かに、わたくしより大柄で力の強い方だという気はいたしましたわ」と言って、鞠乃は常をちらりと見やった。「ですがわたくしは特別小柄なほうでございますもの。例えば女性でも菊枝さんなら、わたくしよりずっと大きな方でございますわね」

鞠乃、と咎めたのは直、視線を逸らして俯いたのは常だった。
万造は苦笑する。
「そう結論をお急ぎになって、みすみす人柄を安くなさることもございませんでしょう。お話を伺えば、闇御前はチロー館で待ち受けていた様子、すると闇御前は今夜直さんと鞠乃さんがチロー館にいらっしゃるのを、前もって知っていたことになりはしないでしょうか」
あ、と新太郎は声を上げた。
「確かに。どうです、直さん、今夜のお出掛けを誰かにおっしゃっていたのですか」
直は常を見る。常もまた直を見返した。口を開いたのは常のほうだった。
「わたしは存じておりました。実は昨夜、また親族が訪ねてきておりましたのです。例によっていっこうに埒のあかないまま、今夜もう一度、という話になりましたとき、兄が今夜は浅草に出る約束がしてあるから、困ると」
「言ったな」と、直は苦々しげだった。「連れがどうあってもチロー館へ行きたいと言っているから、とそう答えた覚えがある」
「それをその他の方は」
「その場には親族の他に、家人が何人かおりました。左吉、お前はいたろうか」
黙って控えていた左吉は頷いた。

「おりました。しかも昨夜は、菊枝さんも御同席でございましたね」
左吉、と常は少しばかり恨めしげな声を出した。
新太郎は問う。
「今夜は、菊枝さんは」
「結局、今夜の集まりは流れまして、今日は特にお会いする約束がなかったものですから」
「では、今日はまるでお会いになっていらっしゃらないのですね」
はい、と常は小さく答える。
「その他に、誰か御存じの方は」
「いないだろう」と、言ったのは直だった。「もちろん、家を出るときに家人にはそう言って出た。うちの者や常の家の者が、誰かに言ったとしたら、おれの知ったことじゃないが」
では、誰もが怪しいのだ、と新太郎は思った。直と鞠乃以外は、誰もが闇御前でありうる。
「万造君」と、新太郎は深夜の帰り道、隣を歩く連れに呼びかけた。「ぼくはね、ぼくはいつかきみが言ったように、嘘と本当の曖昧なところを愉しんでいた気がするよ」

見返してくる万造の視線を感じたが、彼は言葉を発しなかった。
「闇御前だの、火炎魔人だの。それは誰かの茶番かもしれないし、妖怪変化なのかもしれないし、極悪非道な人なのかもしれない。そこのところは曖昧なまま、奇妙で恐ろしいものが帝都を跋扈するのを愉しんでいた気がする」
やはり万造の返答はない。
「けれど、あれはやはり人だ。血に飢えた人鬼なのだよ。目的が真実何なのかは知らないが、そんな危険人物が夜を徘徊しているのを、このまま見過ごしていいものだろうか。ましてや、それは鷹司さんに御縁が深い。本当にお家騒動に関係があるのだろうか。それとも、もっと別に何か恨みでもあるのだろうか」
息をついて新太郎は万造を見る。
「ぼくは少しね、本気で探偵の真似ごとをしてみようと思うのだよ」
万造は、はい、とだけ言った。
「ついてはきみの力を借りたい。ぼくに手を貸してはくれないだろうか」
万造の返答は、やはり短かった。
「承知いたしました」

三

翌日の宵の口、新太郎は万造を誘って麻布へ向かった。一連の事件が鷹司のお家騒動に関係があるのだとしたら、やはりいちばん欲しい情報は鷹司家の内部のそれだろう。最初に鷹司邸を訪ねたときのように、麻布区共同館の前で俥を降り、汐見坂へ向かって新太郎は万造と歩く。

「今日、事件のあった場所を全部回ってきたよ」

「それはお疲れさまでした。いかがでした」

「うん。愛宕塔と北門橋、共に火炎魔人が出たところだが、どちらでも例の読売りを見たという話は聞けなかった。なにしろ愛宕山は夜も人出の多いところではあるし、香具師の出も多いから、目につかなかったのだろうね。北門橋は川面でこそ舟の通りが多いが、付近の道には人気がない。舟からは見通しが悪いし、それで誰も見ていないのだろう」

「それはございますでしょうね」

「闇御前のほうは、何しろ数の多いことでもあるし、さすがに自分では回りかねてね。小僧と若いのを走らせたのだが、七件のうち五件で般若蕎麦の屋台を見かけた者がいる

らしいのだよ」
「常さんが御覧になった、あの般若蕎麦ですか」
「そう。屋台の主は般若の面を被った男というが、この亭主の姿を見た者は少ない。屋台の仕舞いをしているのを見かけた者が三人ばかり、あとは灯の落ちた無人の屋台を見ただけだ」
「意味深長でございますね。そのとき亭主はどこに行っていたのでしょうか」
「闇御前の仲間だろうか、それとも、闇御前本人だろうかね。本人だとしたら、やはり闇御前は男だろうか」
万造はただ頷く。
「常さんが襲われたとき、現場に駆けつけた官警、記事にした記者にはぼくが会ったが、あまり新しい話は聞けなかった」言って新太郎はくすりと笑う。「そうそう、記事に名前が出なかった件だけれどもね」
「やはり差し止めがあったのですか」
いやいや、と新太郎は笑って首を振る。
「逆だよ。闇御前に襲われた若い男が、鷹司と言い残して去っていった。ところが誰もまさかあの元摂関家鷹司だとは思わなかったと言うのだよ。と言うのも、あの日、常さんはごく質素な着物をお召しだったそうでね」

ああ、と万造も軽く笑う。

「菊枝さんのお宅に通うのは、お忍びのようでございましたからね。洋装は目立ちますから、変装のつもりでいらしたのでしょうか。なるほどそれで、誰も真に受けなかったのでございますね」

「てっきりその場限りの嘘か、聞き違いだと思ったと言うんだよ。確かめてみようにも鷹司では敷居が高い。間違いならば記事にしては大事だ。それで、通りがかりの若い衆としか書けなかったそうなんだ」

万造はくつくつと笑う。

「それを御本人に確かめにいった平河さんは、あっぱれでございますね」

新太郎は顔をしかめた。

「嫌なことを言うね。その記者からもさんざん、物怖じを知らないと非難されたよ」

「玄人気質で結構なことでございましょう。もちろんわたしは誉めてさしあげているんですよ」

「どうだかね」

本当ですとも、と言ってから、万造はふと真顔になる。

「なにしろ御不自由なことでございますね」

「何がだい」

「常さんですよ。人目を憚るならそんな扮装をしてひっそり夜道を歩かずとも、俥なり馬車なりを夜に紛れてつけてしまえば済むこと。それを御自身で行かれたのは、御家中にも憚るからでございましょう。左吉さんをはじめ、お宅の方々がいい顔をしない、そのせいでございましょうから」

「ああ、それはそうだね」と新太郎もまた笑みを引いた。「なにしろお家騒動のさなかだから、家人が止めるのも無理はないし、それも忠義あってのことだろうが。確かに常さんにしてはやるせない話かもしれないね」

「菊枝さんはいかがでしょう」

え、と新太郎は万造を見る。

「いえ。菊枝さんにしても、憤懣やるかたない話ではないかと。花柳界の女性にしてみれば、たとえ御正室になれないとしても、鷹司の側室と言えば大層な出世でございましょう。見栄もございましょうし矜持もございましょう。鷹司の御当主が堂々とお通いになれば御近所にも面目が立つものを、どこの馬の骨ともしれない若造といった風情では。鷹司の若君だと言ったところで、官警やその記者さんのように、莫迦なと一笑されるだけだとしたら。さだめし恨めしくお思いではないかと」

なるほど、と新太郎は呟く。確かに菊枝は、そんなことが我慢できる性質の女には見えなかった。

「屈辱だと思うだろうか」

「どうでございましょう。ただ」と万造は薄闇を這い昇る月を見上げる。「お千代さんもそれは同じでございましょうね。直さんはあの通り、堂々とした風格の方でございますし、特に鷹司を名乗れないことを恥じていらっしゃる御様子もありませんでしたけれど、お母さまもそのように鷹揚に構えておれるものでございましょうか。本来ならば麻布のお屋敷にお住まいになって、奥様、大奥様と呼ばれてもいい方でございます」

そのお千代は、女中にしか見えなかった。やはりこれも、屈辱だと感じて当たり前なのかもしれない。

新太郎は溜息を落とした。

「常さんも直さんも、いっこうに家督には興味がないようだったが。家督を失っても少しも気にしないのだろう。お家騒動と言えば当事者にこそ複雑な思惑や事情がありそうな気がするものだが、本人よりもむしろ、周囲をとりまく人間のほうが複雑なのだね」

「本当に、そんなものかもしれません」

「やはりこの事件は、どうあってもお家騒動に関係があるのだろうね」

新太郎が問うと、万造は頷いた。

「はい。そのように思います」

「では、犯人は誰だろう」

これには万造は首をかしげた。

「最初に襲われたのは常さんでございました。これだけを見れば、直さん側の人が犯人であるように思われます。ですが、鞠乃さんのおっしゃる通り、これは常さんの狂言、あるいは常さん側の誰かが殺すつもりもなくただ疑いを逸らすために襲ってみせただけとも思えます。それにしては、たまたま襲われたという状況が気になるのでございますが」

「うん、そうだね。その一方で常さんと同じく、闇御前に直さんが襲われたわけだ。これだけを見れば、常さん側に犯人がいるかのようだが、これまた直さんが人に頼んで打った芝居、あるいは直さん側の誰かがやったことも思える。ただ、いつか鞠乃さんが言った、直さんを陥れるために常さんがやっている、という、あれは否定できるのではないかい」

「それが」と万造は溜息をつく。「直さん側の誰かが、常さんに陥れられるのではないかと焦って、敢えて疑いを逸らすためにやった芝居、とも考えられますので」

新太郎は額を押さえた。

「目眩がしてきた」

「はい。わたしもです」と言ってから、万造は、「なんにせよ、今ここで結論を出すのは時期尚早というものでございましょう。問題はむしろどちらが犯人かではなく、どち

らを犯人は狙っているのか、ということのような気がいたします」
「そうだね」
二人ともが揃って夜道に溜息を零した。
「では、万造君、これはどう思うかい。闇御前と火炎魔人、二つの魔性が跳梁しているわけだけれど、この両者には関係があるのだろうか」
万造は考えこむように首を傾ける。
「一見して別人のようでございますが。例えば、火だの爪だのという異常な演出の仕方といい、片や読売り、片や般若蕎麦が間近に出没していることといい、別人の仕業だと考えるには、少し手口が似すぎているように思えるのですが」
「うん。ぼくもそう思う。しかもね、この両者はきちんと河岸が分かれているのだね」
「河岸、ですか」
「そう。火炎魔人は高いところが好きらしい。違うかい」
「そう言えば。異堂、愛宕塔、北門橋、そして伊沢屋、でしたか。高くて人気がない場所、けれどもその下には人の往来が盛んなところを選んで出没しておりますね」
「そうなんだよ」と新太郎は勢い込んだ。「一方、闇御前のほうは人気のない、けれども犠牲者には困らないような場所ばかりを選んでいる。これはひょっとして、火炎魔人と闇御前の嗜好の違いというよりも、場所によって扮装を使い分けているのだとは考え

られないだろうか」

「確かにそのようでございます。それで闇御前のほうが同じ頃に現れたにもかかわらず、殺した数が多いのですね。火炎魔人のほうは舞台を選びますゆえに」

「うん。だからね、火炎魔人と闇御前、少なくともこの二者は同一人物ではないかと、ぼくは思うんだ。ひょっとしたら、居合抜きの男、あれさえも同じ人間なのかもしれない」

「さて、それはどうでございましょう。ですが、時を同じくして人殺しが二者徘徊していると考えるより、ひとりの人間がいろんな顔を使い分けていると考えたほうが良さそうではございますね」

うん、と頷いて、新太郎は一息をつく。いつの間にか足の止まった寺の塀際、夜風はまだ冷たい。このぶんだと桜の花が綻びるまでにはまだまだかかることだろう。

先の夜のように邸を訪ねてみると、当の常は外出中だった。きっと菊枝のところだろうか。事前に都合を訊いておかなかったのだから、会えない可能性には気がついていた。新太郎はむしろ常よりも、実を言えば家人から話を訊きたかったのだ。

「まことに申しわけございません」

玄関に出てきた老人は済まなさそうに頭を下げる。記憶によればこれは桂井という、

この邸を取り仕切っている番頭にあたる人物だったはずだ。

「いえいえ」と新太郎は笑う。「近くまで来たものですから、お寄りしただけです。常さんに格別の用があったわけではないんです。左吉さんのお加減はいかがだろうかと思って」

「ああ、さようでございましたか。おかげさまで。いま、呼んでまいりましょう」

桂井老は好々爺然とした笑みを浮かべて、少しお待ちをと言葉を残し、玄関広間を横切っていく。すぐに左吉が姿を現した。

すでに老齢の桂井老と並ぶと、左吉の小柄なのがよく分かった。いくぶん猫背の小柄な老人より、さらにかなり小さいだろうか。その左吉は丁寧に頭を下げて奥を示す。

「わざわざありがとうございます」

「いや、本当についでに寄っただけだから。もうずいぶんと、お加減はいいようだね」

「はい。いくらか手足を痛めただけですから。もう歩くのには不自由ございません」言ってから、左吉は再度奥を示した。「どうぞ、せっかくのことですから、常さまにもお会いください。もうお戻りになる頃合でございますので」

「ああ、これは済まないね」

言いながら、新太郎は万造に頷く。何やら眉を寄せて広間を見渡していた万造は、はたと我に返るようにして、新太郎に続いて左吉のあとに従った。

お茶をどうぞ、と言って前回の訪問のときと同じように紅茶を出してくれたのは、老婦人だった。名を文、と言ったと思う。

「そうそう」と新太郎は文に声をかける。「ついでで失礼ですが、以前お会いした若いお女中はおいでしょうか。名前を失念してしまいましたが」

おや、というように文は目を丸くした。

「お多恵でございますか」

「そういったお名前でしたか。たいそう元気な娘さんで」

文はおっとりとした笑みを浮かべて頷き、部屋を出ていく。すぐに小走りに多恵がぽこりとした顔を覗かせた。

「まァ、平河さん」

やってきた多恵に、平河は小さな包みを差し出す。

「前に九谷が好きだと言ってらしたでしょう。うちに貰ったきり仕舞いっぱなしの香合があったものだから」

実を言えば袖の下のつもりで瀬戸物屋の実家からねだってきたものだが、新太郎はそのように言った。

「本当ですか。まあ、どうしましょう」

多恵は満面に笑みを浮かべて、つるりとした頬を赤くした。多恵は前回の訪問の際、最もよく闊達に喋っていた娘だった。彼女からならいろんな話が聞けるかもしれないと、そう下心あってのことだったので、あまりに無邪気に喜ばれてしまって、新太郎は内心で恥じ入った。

「戴いてもよろしいんですか」

「うちにあっても、使わないからね。ぼくはとんと風流には縁がないから」

「あたしもです。でも、大切にします。ありがとうございます」

部屋に立ったまま控えていた左吉が、そんな多恵を見守って笑みを浮かべていた。顔つきはどこか酷薄な印象のある男だが、決して内面までそうというわけではないらしい。

「左吉さんが怪我をなすって、きみもいろいろと心配だったろうね」

ハイ、と多恵は立ったまま頷く。

「あたしもう、吃驚してしまって。そりゃア、火炎魔人だ何だのと噂にも聞いておりましたし、おまけに常さまが闇御前に。そのうえ今度の左吉さん、それに続いて直さまのことでしょう。本当に怖くって」

「そうだろうね」言って新太郎は左吉と多恵を見比べた。「それでその後、警察から何か連絡はあったのかい。犯人の行方は」

これに答えたのは多恵のほうだった。

「それが、何にも」
「だろうねえ。実はぼくも、何とかしてあの連中を捕まえたいと思っているのだけどね。それで少し教えて欲しいことがあるのだが」
新太郎が言うと、多恵も左吉も軽く首をひねるようにした。
「これはどう考えても、このお宅のお家騒動に関係があるとしか思えないのだよ。だとしたら、一刻も早く犯人を捕まえなくてはいけない。また常さんや直さんに何が起こるか分からないからね」
「ええ、本当に。平河さん、きっと捕まえてくださいね」
「うん。そのために訊きたいのだけど、左吉さんが襲われた日、直さんはこちらにおいでだったんだね。お帰りはいつ頃だったか、覚えているかい」
これには多恵が答えた。
「お夕飯の前でした。御一緒にどうぞ、と申しあげたんですけど、御親戚と一緒では喉を通らない、とおっしゃって」
「何時頃です」
左吉が軽く咳払いした。
「何をおっしゃりたいのかは存じませんが」
言いさした左吉に、新太郎は全部を言わせない。

「うん。ぼくも左吉さんが何を言いたいのか分かる。でもね、これは大事なことなんだ。ぼくだって直さんが犯人であって欲しいとは思わないし、むしろそうではないだろうと思っているが、ほんのちょっぴりでも可能性があれば確かめておかないといけない。思いこみで常さんを危険にさらすわけにはいかないのだからね」

左吉はしばらく新太郎の顔を覗きこんだ。そして多恵に椅子を持ってくるように命じた。

「申しわけありませんが、足が痛みますので失礼して坐らせていただきます」

「もちろん、どうぞ。お多恵さんも掛けてください」

二人が壁際に寄せてあった椅子を運び、それに腰を下ろすのを見守ってから、新太郎は再び口を開いた。

「直さんがこの家を出たのは何時だったんだい。その時間によっては、犯人でないと確認できるんだが」

多恵は記憶を辿るように天井を睨む。

「六時過ぎ。ひょっとしたら七時が近かったかもしれません。あの日はお夕飯を遅らせるよう、常さまに言われてましたから」

「左吉さんが災難に遭われたのは」

新太郎が左吉を見ると、左吉は目を伏せたまま答える。

「閉店間際でございますから、八時かそこらでございましょう」
「では、こちらからなら俥を使えば充分銀座に辿り着ける時刻なんだね。直さんは帰るときに俥を使っていたかい」
多恵は頷いた。
「ええ、松六さんに、ああ、松六さんは抱えの俥屋さんなんですけど、その松六さんを呼んでお乗せしました。でも、直さまはお宅には帰らなかったんですって」
「どこかへお出掛けにでも」
「ええ。賑やかなあたりをぶらぶらするんだ、とおっしゃって。汐留に向かわれて、停車場の近くで松六さんを帰しておしまいになったんです」
「常さんが御親戚と残っておられたときに左吉さんが災難に遭われたと、そう知らせがあったのですね」
「ええ」と多恵は頷いた。「お食事を終えられてちょうど皆さん、食後のお酒を召しあがっておいでした。そこへ、第二医院の院長さんから連絡があったんです」
「そのときに菊枝さんは」
それが、と左吉は憮然とした。
「菊枝さんはどうやら、お帰りになってしまったようです」
新太郎は目を丸くした。

「では、病院に付き添っていかれたわけではないのですか」
「ええ。わたしもよくは存じあげませんが。少なくともわたしが担ぎこまれましたとき、連れはなかったそうでございますし、後々常さまがお聞きになったところでは、わたしの姿が見えないのでひとりでお宅にお帰りになったのだと」
そうですか、と新太郎は呟く。それはかなり不審な行動に思える。伊沢屋は大変な騒ぎだったはずだ。なにごとだろうかと、人に尋ねてみる気にならなかったのだろうか。露台から客が落ちたと聞けば、それはすぐに左吉に結びついたはずである。それを確かめもせずに帰ったというのはどうにも解せない。
「では、本当に恐縮なのですが、昨日はいかがだったでしょう」
左吉は太い眉を寄せたが、特に苦情は言わなかった。
「わたくしは常さまのお使いで出掛けておりましたので存じあげません」
「それなら」と多恵は声を上げる。「家の者は全員家の中にいました。出掛けたのは左吉さんだけです」
「常さんは」
「お部屋においでした。お勉強があるから、とおっしゃって。ずっと窓に明かりが点ってましたから、そうだったんだと思います」
「確かめたわけじゃないんだね」

多恵は手を振った。
「お勉強の邪魔はいたしません。そりゃァ、常さまが書斎にお戻りになってから、常さまを本当にお見かけした者はいないかもしれませんけど、常さまは絶対に人殺しなんてできるようなお方じゃありません」
「うん。もちろんぼくもそう思っている」
だが、これだけは胸の中にしまっておかねばならない。左吉が襲われた日、直は銀座に駆けつけることができた。菊枝は途中で行方をくらました。そして直が襲われた日、常と左吉は浅草に行くことができたのだ。
やはり、と左吉は声を低くした。
「やはり家中に犯人がいるのでしょうか」
「きみたちはどう思う。やはりこれは御家督の問題と何か関係があると思うかい。だとしたら、お宅の関係者の中に犯人がいるということになってしまうのだけど」
そりゃァ、と言って多恵は左吉を見た。左吉はゆるく首を振る。
「そうではない、と思いたいところでございますが」
「自信がないのだね」
「直さまが与(くみ)しておられないのは、確実でございますが。けれど直さまの周りにも、直さまに家督を継いでいただきたいと、お望みの方がございましょう。ひょっとしたらそ

の中に思いあまった者がいて、と考えることもございます」

でも、と多恵は首をかしげた。

「なんにしても、どうして左吉さんがあんな恐ろしい目に遭うんです」

「おそらく、左吉さんは常さんと間違えられたのでしょう」

新太郎が同意を求めて万造を見ると、万造は少し首をかしげた。

「そう考えるのが一番真っ当なような気がいたします。ひょっとしたら左吉さんは菊枝さんと間違えられたのじゃないか、と思ったりもするのですけど、男の方と女の方ではお召しになるものからして違います。たとえ暗がりのこと、背恰好が似ていたとしても、髪の形、帯の膨らみ具合から違いますから」

万造が半ばひとりごちるように言うと、左吉が、あ、と声を上げた。

「どうしました」

「いえ」左吉は口ごもってから、「実はわたしは菊枝さんに肩掛けをお借りしていたのです。いえ、本当はお預りしていただけなのですが。なにしろ風があって冷えましたので」

「なんですって」

新太郎は言って、万造と顔を見合わせた。

「薄手ですが三角の、大きな肩掛けです。あの日は菊枝さんも無地で藍色の着物をお召

しでしたので、ひょっとしたら」

露台は暗かったという。そして左吉はかなりの小男だ。ひょいとのぞいた火炎魔人が、そこに肩掛けをした小柄な人影を見つける。もしも左吉が深く俯いていて、さらに肩掛けが羽織の帯のあたりまでを隠していたとしたら。その人影は男に見えたろうか、女に見えたろうか。

「わたしは、菊枝さんと間違えられたのかもしれません」当の左吉がそう言った。「常さまが狙われたのだと考えるより、ある意味でありえそうなことでございます。例えば直さまが、常さまを殺めたからといって、すんなり家督が手にはいりましょうか。それよりも、常さまにぜひともお家を継いでいただきたい誰かが、邪魔になる菊枝をどうにかする、そのほうがよほどありそうなことでございます」

四

新太郎は常の帰宅を待たずに、早々に麻布の邸を辞去した。ありがたく俥を出してもらい、左吉から聞いた菊枝の住居に行ってもらう。

もしも菊枝を狙っている者がいるのだとしたら、これは早急に忠告が必要なことだと思われた。

菊枝の住居は愛宕町三丁目、三田英学校の脇を奥へ入ったところにあった。閑静な一軒家で、直の家より一回り小さいくらいだろうか。付近はしんと音もなく、遠くから鉦太鼓の音だけが聞こえている。黒板塀の中にすっきりと立った辛夷の花が白い色を点していた。

「夜分遅くにごめんください」

そうは言ったが、他家を訪問するに憚るほど遅い時間でもない。奥から出てきたのは卑屈そうな目つきをした老婆で、これが来意を告げると奥へ一旦戻ってから、どうぞ、と上がるように促した。

「こんな時間に済みません。どなたかお客さまではなかったのですか」

新太郎は常のことを思って言ったが、老婆のほうは目を眇めてふん、と鼻を鳴らしただけだった。肯定か否定かは分からない。少なくとも玄関に男物の履き物は見えなかったので、ひょっとしたら常はもう帰ったか、あるいはそもそも別の用件で出掛けていたのかもしれなかった。

どうぞ、と言って、老婆は一室の襖を開ける。新太郎たちに中を示す前、棘のある一瞥を部屋の中に投げた。

「あら、あなたでしたの」

長火鉢の奥に坐った菊枝は朱鷺色の襦袢に棒縞の羽織をかけただけ、新太郎も万造も

思わずぎょっと足を止める。
「どちらの平河さんかと思いましたわ。こんな恰好でごめんなさいましね。今日は早めに休もうかと思っていたところですから」
「それは失礼をいたしました」
火鉢には火が入って、五徳の上の鉄瓶に銚子が一本浸けられている。猪口がひとつ出ていたので、本当に今夜はひとりなのかもしれない。
老婆が出してくれた座布団の上にあがりながら、新太郎は室内を見渡す。繭飾りや破魔矢があったり、棚の上には姫達磨や手鞠があったりと、どこか子供じみた装飾を施された部屋だった。
「お飲みになりますかしら」
菊枝は湯から引き上げた銚子を示したが、新太郎はこれには首を振った。
「いや、早々にお暇しますから」
「ああら、ごゆっくりなされば。滅多にお客のない家ですもの、少しは賑やかしてくださいな」
いや、と言って、新太郎はそそくさと用件を切り出す。伊沢屋で左吉は菊枝と間違えられはしなかったか。だとしたら、菊枝も危険なのではないか。
聞いて菊枝は喉を反らして笑った。

「だとしたら左吉でしょうかしらね。ああ、左吉は間違えられたのだから、そんなはずはございませんわね。すると、親戚の誰かかしら。心当たりが多すぎて。精々気をつけることにいたしますわ」言ってから、菊枝はどこか崩れたふうの笑みを浮かべた。「と言っても、女ひとりの所帯ですもの。他にいるのはあのお婆さんだけ、押しこんで殺すのは簡単なことでしょうけどねえ」

言ってさらに、くつくつと笑う。

「もっとも、おふくなら、わたくしのことなど見捨てて逃げていくのでしょうけど。小金を握らせれば、手引きぐらいはするかもしれませんわねえ。おお、怖い」

「おふくさんとおっしゃるのですか。あの方は鷹司さまの紹介で」

とんでもない、と菊枝は笑う。

「鷹司の者じゃあ、寝首を掻かれかねませんもの。知り合いの伝で捜しました婆やですわ。わたくしとは折り合いが悪くって」言って菊枝はもう一度声を上げて笑う。「もっとも、わたくしと折り合いの良い人間なんて、そうそういやしないのですけど」

この女は、と新太郎は思う。全身の毛を逆立てた猫のようだ。自嘲だろうか、それとも周囲のありとあらゆるものに対する怒りだろうか。

「でも、わざわざ忠告に来てくださるなんて、お二人は御親切ですのね。それとも敵状視察ですかしら。直さんが襲われたんですってね」

「御存じでしたか」
ええ、と菊枝は笑う。
「闇御前ですとか。わたくしなら白塗りにも慣れておりますし、重い衣装にも慣れております。もっともお姫さまという柄じゃァありませんけれどねえ」
「菊枝さん」と重い声を出したのは万造だった。「平河さんはそんなことで足を運ばれたのじゃありません。どうぞ耳をお貸しになって、下働きの男手なりお雇いなさいませ。戸締まりは重々お気をつけになって。お婆さんでは心許のうございますから、若いお女中とお替えになるとか」
ええ、と気のない声で言って、菊枝は火鉢に頬杖をつく。手酌で注して、猪口を弄んだ。
「菊枝さんに万が一のことがあれば、悲しまれる方がおいでしょう。充分にお気をつけください」
「ええ、わたくしも自分の身は可愛く思っておりますからね。精々用心いたしましょう」
その気のない声に新太郎は溜息をつく。ときに、と話を変えた。
「以前、常さんが闇御前とやらに襲われたとき、あれはこちらからのお帰りだったのですね」

菊枝は新太郎を見る。すぐにふいと横を向いた。
「ええ。そうですわ。ここをお出になってすぐのことでございますから、わたくしが大急ぎで着替えて後を追えば、追いついて切りつけられないこともございませんわね」
菊枝さん、と新太郎はうんざりと息を吐く。
「闇御前はその前に籠屋の女房を襲っています。白塗りをして重い衣装をつけ、そのうえ菊枝さんが先回りできるはずがないでしょう。第一、菊枝さんが常さんを襲ってどうなさいます。菊枝さんが闇御前のはずがないじゃありませんか」
「あれは常さんを庇うための狂言ですの」と菊枝は笑ってみせた。「だって直さんだけを襲ったのじゃア、常さんが疑われてしまいますでしょ」
「昨日はどちらかへお出掛けになりましたか」
「ええ、チロー館まで」
にっこり笑う菊枝に、新太郎は再び深い溜息をついた。
「お止しなさい。うかつにそんな軽口をおっしゃるもんじゃありません。ぼくたちは真面目に犯人を捜しているのです。この得体の知れないお家騒動を終わらせて、家督の行方がどうなるにせよ、常さんにも直さんにも心安く暮らしていただきたいと思っています。菊枝さんもそれをお望みなのじゃないのですか」
くすり、と菊枝は失笑した。

「芸者上がりの妾がいたんじゃ、常さんが心安く暮らせる日は来ませんわね」
「菊枝さん」
菊枝は頬杖をついたまま銚子を爪の先で弾く。澄んだ寂しい音がした。
「これが開化の音かしら。四民平等の世の中だとか。けれども少しも平等なんかじゃァないわ。いつの世だって貧乏人は惨めなもの。特に貧しい女はお金のない殿方よりいっそう惨めでございますわね」言って菊枝は新太郎を見る。「昨日は家におりましたわ。ずっとひとりでしたけれど。おふくが気が向けば、そう証人になってくれますでしょう」
「伊沢屋では先にお帰りになったとか」
「ええ。だって左吉はいなかったんですもの」
「左吉さんが露台から突き落とされたのを御存じではなかったのですか」
「知ってましたわ」と菊枝は笑う。「でも、お怪我をなさった方に送ってはもらえませんでしょ。ですから、帰りました。左吉だってわたくしに傷を撫でて欲しかったわけじゃございませんでしょうし」
「帰り道、伊沢屋で見かけた読売りだとか、何か不審な人物をお見かけじゃありませんでしたか」
「いいえ。誰も」

新太郎はひとつ息を吐いた。

「これはこの場限りの話なのですが、菊枝さんは犯人は誰だとお思いですか」

「直さんでございましょ」と菊枝の声はそっけない。「家督欲しさの凶行、そうとしか考えられないじゃありませんか。だったらやっぱり伊沢屋で襲われたのは常さんでございましょうね。常さんと左吉を勘違いしたんだわ」

「しかし、直さんは伊沢屋へ行かれたのが左吉だということも御存じだったし、まして や昨日浅草で」

「狂言でございましょ。それとも直さんではなくて、直さんの周りの誰かがやったことかしら。お母さまのお千代さんか、それとも鞠乃とかいう小娘か」

「直さんが無事に帰られたのは、闇御前を黒衣姿の男が止めたからです。そうでなければどうなったか分からない。狂言というのは」

「じゃァ、その黒衣も仲間ですわ」

「直さんの周囲に、そんな男がおられるのですか。ずいぶん寂しいひっそりとした暮らしをしておいでのようでしたが」

「下働きの男が二人ほどいたのじゃなかったかしら。それに直さんにはその気になれば、手を貸してくれる強面の知り合いがおいでしょう」

「そうなのですか」

新太郎の問いに、菊枝は笑う。
「直さんは民権論者とお付き合いがおありだそうですから。壮士の中には、なにがしかのお金と引き換えに協力する人もありましょうね。ましてや、仲間の一人が家督を継げば一財産を手に入れられるのだと知ったら、頼まれなくても常さんをどうにかしたいと思うのではないかしら」
昨今の壮士の中にはずいぶんと乱暴な、やくざまがいの連中もいる。お上の睨みも厳しいし、活動資金にも事欠いているだろう。菊枝の言い分はあながち無理な話ではない。
菊枝はもう一度銚子を弾いた。
「御親切にどうも、と申しあげておきますわ。御用はお済みでしょう。妙な噂にならないうちにお帰りなさいませ」

菊枝の家を出て、新太郎は懐中時計を見やった。そうして万造を振り返る。
「済まないが、もう一軒付き合ってくれないかい」
「直さんでございますか」
「うん。直さんのお怪我の加減を尋ねてみよう」
新太郎は足早に汐留のほうに向かう。大急ぎで俥を探した。

五

牛込のその家の玄関で声をかけると、はい、と短い返答があって、千代が出てきた。新太郎たちを覚えているのかいないのか、千代は心中の窺えない顔で頭を下げる。なるほど改めて見てみると、女中に見紛ったのも無理はない、いかにも地味な女だった。老けた顔にいっそう老けた着物、髪にはろくな飾りさえない。

「先日お邪魔した平河と申しますが。夜分遅くに失礼いたします。直さんのお加減はいかがですか」

ああ、と千代は頷く。母親の顔でごく軽く笑みを浮かべた。

「ありがとう存じます。おかげさまで大事なかったようでございます。どうぞ、お上がりくださいませ」

「ありがとうございます。お訪ねするのに不躾な時間だとは重々承知なのですが、たまたま近くまで来たもので」新太郎は深く頭を下げてから、「これをどうぞ。安給料の身のうえなもので、鷹司さまには不似合いな下品な菓子で恐縮ですが」

「あら、まァ」と、千代はさも嬉しげだった。「お気遣いいただいてありがとうございます」

「いえ、そんな大層なものでは。饅頭では失礼かとも思ったのですが、お酒というのもお怪我のある方にはなんですし。ただし知っているなかでいちばん旨い小店に行ってきましたので、勘弁してください」

千代は包みをおしいただく。満面に笑みが浮かんでいるのは、新太郎の土産が嬉しかったのか、それとも鷹司と呼ばれたことが嬉しかったのだろうか。なんにしても、土産をと言ったのは万造だった。それに従ってよかった、と新太郎は万造に感謝の目を向ける。千代は奥を示した。

「どうぞ、お上がりください。直は少し出掛けておりますけれど、すぐに戻ってまいります。さ、どうぞ」

「何でしたら出直しますが」

「いえ、本当にすぐに戻りますので」

強く勧められて、新太郎は頭を下げる。

「では、遠慮なく」

「先日はお母さまとも存じあげず、ろくなご挨拶もせずに失礼をいたしました」

座敷に通され、今度は熱い茶を振る舞われて、新太郎は深々と首を垂れる。

「お母さまだなんて、そんな」そう言いながら、千代は嬉しげだった。「さまを付けて

いただくほど、大層な身分ではございません」
「しかし、鷹司熙通卿の」
「ええ」と千代は頷いた。どこか矜持の覗く声で、「籍には入れていただきましたけれど。ですがもう、熙通さまもいらっしゃいませんから」
きちんと妾として戸籍に記載されたのだろう。それを誇りに思っている風情が確かにあった。
「確かお母さまは毛利藩の」
「はい。父が藩士でございましたが。御一新を機に隠居いたしまして、熙通さまのお手伝いを。柿香倶楽部のお世話をさせていただいておりましたが、熙通さまが亡くなられてすぐに逝去いたしました。それは熙通さまに傾倒しておりましたので、後を追っていったのだろうか、とそう思っております」
「ああ、そうだったのですか。それはお悔やみを申しあげます」
熙通の主宰する柿香会が、輸出入貿易を行なう内外の商人と、港を運営する業者、及びその他の対外業者を集めて横浜に設けたのが柿香倶楽部だった。柿香倶楽部の建物は、外国要人が起居する宿泊所にもなっていて、宴会や会議も頻繁に行なわれる。横浜外務省と呼ばれる所以である。
「お母さまは、柿香倶楽部にお出掛けになったことはおありですか」

「ええ。熙通さまのお知り合いがいらしたときなど、お供させていただくことがございました。熙通さまは芸者にお客さまを供応させるのがお好きではなかったので」
「というと、お沢さんや初子さまもですか」
「ええ」と返答はどこか含みがあった。「京都の方が横浜にお住まいの頃には、あの方も。なんでも、外国の方には側室というものが御不快だそうで、友人と紹介されておりましたけど」
「するとお母さまも外国語に堪能でいらっしゃるのですね」
「初子さまほどではございませんけれど。お客さまと御挨拶をするくらいでしたら」
初子さま、と呼ぶときの千代の声にはどこか棘が隠れているように思われた。おそらくやはり深い確執があったのだろう。それとなく方造に目を向けると、黙って控えている方造もまた目線で頷くようにした。同じことを感じたのに違いない。
「なるほど、初子さまは才媛でいらしたのですね。しかし、これを申しあげてはなんですが、ずいぶんと癖のあるお人柄のような」
新太郎が言葉に皮肉をこめると、千代は意を得たように笑った。
「ええ。わたくしもよくは存じあげないのですけど。なにしろ、わたくしどもがお供をするときには、初子さまは絶対に御一緒くださいませんでしたから。御正室ともあろう方が、わたくしどもにお会いになろうともしなかったんでございますよ」

よほど側室を嫌っていたのだ、と新太郎は思った。大家の本妻ともなれば、妾に対しては鷹揚に構えて、主人が世話になっております、ぐらいの時候の挨拶、謝礼程度はするものである。

「直が生まれたときにも、御自分でお育てになると、初子さまがそう言ってらっしゃったようですのに、熙通さまが亡くなられるとすぐにこちらへ出しておしまいになって。もっとも、初子さまから直接お聞きしたわけではございませんし、熙通さまがそうおっしゃっていただけかもしれませんけれど」

「なるほど。にしても、熙通卿が亡くなられてすぐにお出しになるとは、初子さまもずいぶんと露骨なことをなさるものですね」

「ほんとうに、気位の高い方は何を考えていらっしゃるのか」言ってから、千代はふと口許を押さえる。「あら、ごめんくださいまし。ずいぶんと品のないことを申しあげてしまいました」

いえ、と新太郎は笑う。

「お母さまが御不満に思われるのはもっともなことですから。かくいうぼくも、御長男が家を出されたと聞いて多少呆れてしまいました」

そうですか、と千代は笑む。

「無事に天下の御法通り、直さんが家督をお継ぎになるといいのですが」

千代は苦笑するふうを見せた。

「どうでございましょう。初子さまの御遺言がございますから。それに直も、家督などいらないと、そんなふうに申しますし」言って、千代はわずかに肩を落とす。「せっかくの家督をいただいても、常さんと比べられて悪し様に言われるのでは直が不憫でございます。本人が必要でないと言うのでしたら、それで良いのでございましょう。御立派なお屋敷になど住まわずとも、母子ふたり、無事に過ごせればそれで結構なことだと思っております」

「それは欲のない、御立派な」感心したように言いながら、新太郎はこれは果たして本音だろうか、と思う。「もっとも常さんも、自分は家督などいらないと、そうおっしゃっているようですが」

千代は微笑む。

「本当に、常さんはお優しくていらっしゃいます。わたくしどもにも、本当によくしてくださって。初子さまの御葬儀のあと、本邸にお帰りください、とそう言って、わざわざみえたこともございます」

「そうだったのですか」

それは常らしい振る舞いのように、新太郎には思われた。同時に千代が常にまで悪意を抱いている様子がないのが心に軽い。万造も微笑っているから、これはあながち新太

郎だけの思いこみではないだろう。

「ですが、わたくしも直もこの家が気に入っておりますので。熙通さまがわたくしに下さった借家や農地もほんの少しですがございますし、わたくしも多少なりとも針仕事などしております。ここでつつがなく暮らせるのであれば、家督などどうでもいいと」と言って千代は微笑む。「確かに最初は、少し残念にも思いましたけれども。針仕事に疲れたわたくしの肩を直が揉んでくれたりいたしますと、本当にそれだけでいいと、そう思えるのでございます」

新太郎は千代の柔和な笑みをしみじみと見やった。この女が、家督のために人を襲うとはとうてい思えない。ただの満ち足りた母親の顔をしている。

「本当に、御立派なお心栄えだと思います」

「まァ、ありがとう存じます」

千代は含羞むように頭を下げた。

「ときに、鞠乃さんは今日は」

「お出掛けでございます」と、これまた千代の声は複雑そうだった。「昼は陽に灼けるのが嫌だと、夜のお出掛けがお好きで。近頃夜は物騒でございますから、それで直が俥の溜まりまで送っているのでございます」

「ああ、そうだったのですか。にしても、お出掛けには少々遅すぎるような。ずいぶん

進歩的なお嬢さんなんですね」

「一日中寝ているか出掛けているかで、女学校もどこへやら、本当に気ままにお暮らしです。常さんからお預かりしたお嬢さまですから、滅多なことも申せませんし」

「鞠乃さんは直さんのお嫁さま志願のようですが」

「直のほうには、そんな気はないようでございますが。どうせ家督第一の方のようですから、じきにまた本邸のほうへお戻りになるでしょう。ここはそのうち、鷹司とは縁のない家になってしまいますから」言って千代は笑う。「華族とは関係のない普通の家の嫁には、向かないお嬢さまでございましょうね」

そう言ったところで、表のほうから戸の開く音がした。千代は立ち上がる。

「戻ってきたようでございます」

「出歩かれるようなら、お怪我の具合はよろしいのですね」

開口一番、新太郎が入ってきた直に言うと、直は苦笑した。

「いろいろと気遣ってもらって済まないな。なにやら手土産を貰ったようで、母が大層喜んでいる。礼を言う」言ってから直は快活に笑った。「しかしおれはどうせなら、煎餅のほうが良かったな」

「それは申しわけないことを。次にはそうさせていただきましょう」新太郎もまた笑っ

た。「それで、鞠乃さんは」

ああ、と直はさらに苦笑する。

「夜桜が見たいのだそうだ。どうしても行くといってきかないので、下働きの男をつけてやった」

「夜桜にはまだ少し早いでしょう。鞠乃さんは直さんとお出掛けになりたかっただけではないんですか」

「さてな。確かに拗ねたようだったが。チロー館にはおれも興味があったから同行したが、夜桜を愛でるような風流な趣味はないからな、付き合えと言われても困る」

「つれないことでいらっしゃる」

「鞠乃が靡いているのは、おれでなく鷹司の跡継ぎにだろう。おれが相続権を失えば、出ていく」

「本当に辞退なさるおつもりなんですか」

「もちろんだ」

「しかし」

「興味がない。初子だって、おれが盗っていったのでは恨んで墓から出てきたいだろう。おれは今まで鷹司なしでやってきた。いまさら必要ない」

けれども、と声を上げたのはずっと黙って控えていた万造だった。

「直さんは世直しをなさりたいのではないのですか」
直は目を見開いて万造を見る。
「妙なことを言う。おれはそういう正義漢じゃない」
「ですが、民権論者とお付き合いがあると伺いました。鷹司の名前と貴族院の議席、それに鷹司の財があれば、ずいぶん多くのことができるのではないのですか」
おれは、と直は言いかけて、ほんのわずか口ごもった。
「おれは、確かにそういう連中と交流があった。親密な、と言ってもいい。この家にも自由党の残党を匿ったことがある。星さんにも目をかけてもらっているが」
明治十四年、板垣退助を党首として発足した自由党は改進党に比べて急進的で、軋轢が絶えなかった。その反目と集会条例に対する反発、困窮する農民の不満とが結びついて爆発する。十五年の福島事件を皮切りに高田、群馬、加波山事件と続き、秩父事件ではついに鎮圧に軍が乗り出してくるに至った。
これを憂慮した板垣は自由党を解散、改進党からも大隈重信らが脱党して、自由民権運動は一旦は瓦解する。しかしながら十九年、旧自由党の星亨らが大同団結を唱え、その翌年に三大事件建白運動を起こすと、これに対して政府は保安条例で対抗、弾圧を強めて中江兆民ら大量の民権論者を追放処分にする。
「地租の改正と言論及び集会の自由、国権の確立、ですか」

新太郎は呟く。民権論者たちの主張はこの三語に要約される。

直はわずかに口許を歪めた。

「四民平等というが、農民の暮らしと常の暮らしを比べてみろ。どこに平等などというものがある。巨財を争って廃嫡だなんだと言ってられる奴等は恵まれている。争うほどの財のないのはもちろん、むしろ押しつけ合うような借金しかない連中がこの国には五万といるんだ。旧来の陋習を破り天地の公道に基づくべきではなかったのか。貧しい者は娘を売れ、それで足りなければ飢えて死ねなどという公道がどこにある」

「確かに、そうですが」

「実直に生活している者たちから、国はわずかばかりの財を搾取する。しかもそうやって吸い上げた財を列強がさらに搾取するのだからお笑いだ。列強は脅威だ。我が国はこれでもいささか恵まれている。それでも決して列強に対して対等ではない。清国の状況を見るまでもなく、おれは父親に連れられて幾多の外国人に会って、連中が実はいかにこの国を侮っているか、見下げているか肌で感じている。まずは列強の搾取を排除しなければならない。関税自主権の回復は急務だ。おれの言っていることは、間違っているか」

「いえ」

「間違ったことを叫ぶならともかく、国のために叫ぶのに、なぜ取り締まられねばなら

ない。そんなことをして、この国はいったいどこへ行くつもりなんだ」

新太郎は黙した。返す言葉を思いつけるほど、新太郎は国体や民権に興味を払ってこなかったのだ。

「農民を踏み台にして背伸びして、開化の猿芝居を続けるつもりか。悲鳴も上げられぬほど民から搾取しつづければ確かに国は潤うだろう。税と血税とで国を肥やしていけば、いつかは列強に対抗できるのかもしれない。そうしてどうする、次は外地か。朝鮮か清国か、さらには露西亜でも呑みこむつもりか」

新太郎は顔を上げた。民権論者の一部は対外進出を訴えている。

「直さんは進出には反対なのですか」

「あたりまえだ」と直の口調は吐き捨てるようだった。「自分が盗まれて苦しいからといって、余所から盗んできてどうする。列強の支配が怖い、搾取が苦しいというのなら、するべきことは同じ盗人に成り下がることではないだろう」

「まったく、その通りです」

「おれはね、平河さん、この国の先が見えたような気がする。民権論者たちでさえそうなら、いったい誰がこの国を公道に戻すのだろう。おれは何度も外地進出は天道に悖ると訴えたが、壮士連中からは腰抜け呼ばわりされる始末だ」言って直は息を吐く。「おれはもう、莫迦ばかしくなってしまった」

庭に向いた直の横顔は、真実何かに決別した表情をしていた。その顔が振り向いて、万造を見る。

「だから、鷹司の家などいらんのだ」

「よく、分かります」

直は万造に笑う。

「浮き草稼業は気楽でいいだろう」

「それがなかなか。お上は浮き草を根無しのままではいさせてくれませんので」

「だが、羨ましい。根が無ければ、すたこら逃げ出すのに何の不都合もないからな」

「逃げ出したいのですか」

直は自嘲めいた笑みを浮かべた。

「国を支配する連中は、支配するつもりでいつの間にか国に仕えている。もはや民意は重大じゃない。国はただ動いている。時代は容赦なく動く。そこに国というものがあり、時代というものがある限り、流れていくべきほうへ向かってただ動いていくだけなのだと、そう悟った。それに反抗したければ、できることは逃げ出すことだけだろう」

「逃げてどこへ行かれます」

これには直はただ苦笑しただけだった。庭を見やってから、唐突に話を変える。

「ところで、また闇御前とやらの話をしに来たのか。もう何も出んぞ」

新太郎は慌てて我に返り、首を振った。
「それもなくはありませんが。お見舞いというのも、本当で」
直は声を上げて笑う。
「あんたは正直だな」
「そもそもがあれですから、今更取り繕っても仕方ありません。どんな小さなことでもいい、何か思い出したことはありませんか」
ないな、と直の言葉はそっけなかった。そうですか、と俯いた静寂に水の音がする。庭にある蹲踞から水が零れ落ちている音だった。
「おれはね、平河さん。あれが何を考えているのか、分かったような気がする」
え、と目を見開いた新太郎に、直は陰のある笑みを浮かべてみせた。
「闇御前とやらが、何を企んでいるのか、分かったと思う」
「それは」
「自分で考えてみるのだな」
そう直は笑って、再び視線を庭に戻した。小さな池の水面では、月が砕けて揺れている。
「じきに終わる。もう被害は出まいよ」
言って直はひとりごちるように言い添えた。

「おれが、やめさせる」

六

結局どれほど新太郎と万造が問い質しても、直はその言葉の意味を言わなかった。諦めて辞去し、とぼとぼと瓦町のほうへ戻る途中、万造が、浅草に行かないか、と言う。

「チロー館をお見せしたいんですよ。不寝番に話を通してありますから」

そう誘われたので、新太郎も頷いた。その場所を自分の目で見ておきたかったのだ。話題のチロー館は、十二階のすぐ近くに建っていた。一見して小芝居の小屋と大差ない外構え、中央に小さな高楼を載せた寄せ棟の屋根には一応瓦が載っているが、仮小屋よりもややまし、という程度でしかない。建物の周囲には杙が打ってあって、そこに幕を張り巡らせてあったので、外壁は見えなかった。

「万造さん、こんばんは」

そのチロー館の脇小屋から出てきたのは提灯を手にした四十がらみの男、これが丁寧に頭を下げる。

「こんな夜中に済みませんね」と万造は男に声をかけて、新太郎に、「こちらはチロー館の呼びこみをしている箕吉さん。こういった巡回の興行のお手伝いをしておられま

す」

「興行もはねたというのに、申しわけなかったね」

新太郎が声をかけると、箕吉は、いえ、と言って、チロー館を囲った幕に手をかける。

「どうぞ、こちらから」

幕をめくって中に入ると、そこは建物の外壁に沿った幅一間ほどの露地、板切れやら材木やらに交じって天水桶が並べてある。

箕吉は板壁の下に膝をついた。一見してごく普通の板壁のようだったが、箕吉が下のほうを押すと軽い音をたてて内側にへこむ。手にした楔の先を板にかけるようにして持ちあげると、難なく上にすべりこんだ。

「よく出来てるね。特に取っ手のようなものはないのだね」

「内側にはございますが、外にはございません」

言って箕吉は壁板を押し上げる。三尺ほどが難なく開いた。箕吉はそこに棒を噛ませて押し上げた壁板を支える。そうして中を示した。

「どうぞ。灯はもう落としておりますけれど」

三尺四方の穴を潜って中に入ると真の闇、提灯の明かりを翳してみると、そこは幅三尺の細い通路になっていた。すぐ目の前に厚い板硝子の壁があるが、天井は高く、その板硝子と天井の間は二尺ほど空いている。下のほうにはほんの微かな隙間、ためしにそ

こに手をかけてみると、想像したよりは重い手応えで上に動いた。
「なるほどね。しかし、これを利用して近道をしようとする狡い客はいないのかね」
新太郎が問うと、箕吉は笑う。
「中が瓦斯灯の明かりになりますと、この隙間が意外に見えませんので。こうして見ているとぱっとしない迷途のようですが、きちんと灯が入るとそれは不思議な光景になりますよ。そういうふうに光の角度を考えてあるのだそうで」
「へえ」
「もっとも隙間が見えたところで、お客さまとて、迷うために来たのですから、這ってまで近道をしようとは思いませんでしょう」
「それはそうかもしれないね」
「ついでですから、高台まで御案内いたしましょう」
言って箕吉は硝子を押し上げて下を潜る。あとに続いた新太郎と万造を待って、迷いのない足どりで迷途を辿っていった。
「きみは黒衣を見たのかい」
「ええ。ちょうどわたしが木戸番をしていたときでしたので。順番待ちのお客の間から黒衣姿の男が寄ってきて、妙な女が裏から中に入ったよ、と。それだけ言って、踵を返した背中越しに、赤姫の扮装をしていたね、とそう言っていきましたのです」

「妙だとは思わなかったのかい」
「女が中に入ったという話なら。黒衣が寄ってきたのは別になんとも。近所の芝居小屋の者か、見世物小屋の裏方なのだろうと思いましたから。黒頭巾の布をあげた連中なら、ちょくちょく見かけますのでね」
「このあたりの連中だったのかい」
「それが、万造さんにも頼まれて尋ねてみましたが、どこの誰だかはっきりいたしませんので」
ふうん、と唸った新太郎に、箕吉はこちらです、と道を譲る。先に立ってみると、硝子に挟まれた道を抜けたところが、広間のような体裁になっていて、その中央に高台が、その四方に高台に上る黒塗りの短い階段があった。
「これだけのことなのかい」
新太郎が問うと、箕吉は苦笑する。
「これだけのことが、なかなかどうして、難しいのでして」
高台の上には縁台がいくつか並べてあって、客が一服していけるようになっている。御丁寧に迷途の図面を描いた立て札までがあったが、それでも帰りに迷う客があとを絶たないのだという。
「それで箕吉さんは闇御前を」

「わたしが駆けつけたときには、影も形も。建物周囲にも人をやりましたが、物陰に潜んでいる様子もございませんでした」

「じゃあ、小屋の者が駆けつけたときには、すでに闇御前は幕の外に」

「そうなのでしょうが」と言って箕吉は首をかしげる。「けれども外は夜遊び客の雑踏でございました。いえ、確かに仕舞際でいくぶん少なくなってはおりましたが。それでも赤姫姿の女が交じれば、いやがおうでも目立ったことだろうと思います。闇御前の噂を思い出した客が騒ぎださないとも限りません。それをどうしたものか、女を見かけたという話を聞きませんので」

「黒衣が中から出たのを見た者は」

「それもおりません。もっとも黒衣のほうは雑踏に紛れてしまえば、それまでしょうが」

「そうだねえ」呟いてから、「きみはこのあたりで、般若の絵を描いた蕎麦屋を見なかったかね。あるいは大きな木箱を背負った読売りとか」

これに対して箕吉は首を横に振る。

「そういう見慣れない香具師はとんと。新顔がありましたら、すぐに分かります。浅草の周辺はあちこちの親分さんの庭場でございますからね」

「そうか。いや、申しわけなかったね。こんな遅くに」

「いえ。他ならぬ万造さんのお願いですから。今度はぜひ、興行の時間においでください」
「そうさせてもらうよ」

十二階へ昇っていきませんか、と万造は新太郎を誘った。
「しかし、とっくに閉まっているだろう」
そういう新太郎に、万造は鍵を示して笑う。
「平河さんのおっしゃる通り、手蔓は財産でございますね」
浅草といわず、東京の顔ともなったこの高層の建築物は英吉利の技師、バルトンの設計によって明治二十三年に竣工した。煉瓦造りの十階の上に木造の二階があって、その眺望は信じられないほど広大なものだ。
一階に入ると演芸場だが、当然のことながらこれはしんと静まり返ってしわぶきの音ひとつない。万造が螺旋階段に足を載せて、新太郎はそれに続いた。八階までは昇降機があるが、それは竣工して間もなく危険を理由に止められてしまっている。
十二階の内部はちょうど蔵の中のような按配だった。あの独特の澄んでいるのか淀んでいるのか分からない空気が満ちている。それは敢えて形容するなら、空虚そのものの気配だ。どんなに人の出入りする蔵でも、そこには必ずこの気配が漂っている。しかも

今は明かりといえばふたりが持った提灯だけ、二階以上にある勧工場の棚も布を被ったまま、人の気配もその残滓もなく、ただ階段を上がる足音だけが響くのでいっそう空虚な印象をあたえた。

「夜の十二階は初めてだな」

「そうでございましょうとも」

眺望を売り物にするのだから、すっかり陽が落ちてしまえば魅力は半減する。十二階に設置された三十倍が売り物の望遠鏡もその役を果たすまい。いずれ市区改正が徹底して、瓦斯灯やら電灯やらが増えてくれば夜の眺望も見物だろうが、まだまだ帝都の夜は魔物の跳梁を許す程度には暗いのだ。

休み休みに十一階を昇って展望台に出た。澄んだ風が吹きつけてきて、あたりは闇、広大な景色も今は夜の川面のよう、墨の濃淡が入り混じって、そこに何かがあるのかどうか。

「海に浮かんでいるようでございますね」

同じことを思ったのか、欄干に凭れて万造がそう言った。

「まったくだね。何も見えない」

ぽつぽつと連なった明かりは浅草広小路だろうか。あちこちに散った明かりはいかにも小さくもの寂しく、こんなにもここは暗い街なのだと、そう思わせた。

「夜はいけないね」そう、新太郎は零した。「これはいけない。人を不安にさせる景色だ。火炎魔人などいなくても、ふらふらと飛び降りたくなるような」
「さようでございますね」
「それで奴は高いところばかりに現れるのだろうか」
「さあ、それはどうでございましょう」
新太郎は万造に向き直った。
「きみはどう思う。ぼくにはどうあっても、常さんや直さんが事件を起こしたとは思えない。ならば菊枝だろうか、お千代さんだろうか。それもまたありえないことに思えるのだよ。御親戚の誰かだろうか。先走った壮士連中の誰かだろうか。考えてみればみるほど、これは鷹司とは無関係なのじゃないかと思いたくなる。ひょっとしたら実は本当に妖怪変化なのじゃないか、そう考えるのはやはり荒唐無稽だろうか。きみはぼくを笑うかい」
さて、と言って万造はなおも眼下の風景に見入っている。
「わたしはもっと荒唐無稽なことを考えたりもいたしますよ。重石を載せてたわめたものは、重石を跳ねのけようとするもの」
「なんだい、そりゃ」
「御一新がやってきて、世間はそりゃあ変わりました。開国、開化といろんなものが大

波のようにやってきましたが、さて、波に洗われた巌のほうは、そうそう変わりますものでしょうか」

「そうだね」

「わたしにはこの国も人も、どこかで無理をして開化を急いでいるような気がいたします。人は案外変わらないもの。自然もやはり変えようのないものでございます。電灯だの瓦斯灯だのと夜に明かりをもってきても、結局はこのありさまでございますから」

新太郎は漆黒の虚空を見やって頷く。

「御一新前にもやはりたわんだものがあったのでございましょう。それがこの嵐を呼びこんだのだとすれば、御一新によってたわんだものが、そろそろ噴き出してきても良い頃合のような気がいたします」

「その噴き出してきたものが、怪しげな連中だと」

「そうも思ったりもいたします」呟くように言ってから、万造は新太郎を見る。「ただ、闇御前は違います。火炎魔人とやらも違います。あれはそんなものではありません。あれはおそらく、鷹司家から噴き出してきたもの」

「やはり」

「闇御前が八人を襲い、火炎魔人が四人を襲いました。それは徐々に鷹司のお家に近づいてきております。とすれば、やはり最初の被害者は疑惑を逸らすための捨て駒と考え

たほうがよろしゅうございましょうね」
　新太郎は頷いた。
「人なのだね」
「はい。間違いなく人でございましょう。闇御前の爪が紛いものだったのがその証拠」
「火炎魔人は」
「左吉さんは引きずられ、手摺の外に押し出されたとおっしゃっておいででした。もしも火炎魔人が噂の通りの化け物で、化け物であるがゆえに灼熱の手を持っているのだとすれば、どうして左吉さんの火傷の痕は、ただ背中にしかなかったのでしょうか」
　新太郎はぽかんとした。
「その通りだ」
「闇御前も火炎魔人も間違いなく人、それも、鷹司家の周囲にいる人であろうと思います」
「それは、誰だろう」
「問題は」と万造は言う。「それが狙っているのが、直さんなのか、常さんなのかということです」
「目的が直さんなら、犯人は常さんの周辺にいる。反対に常さんが目的なのだったら、犯人は直さんの周囲に」

「はい」
「だが、それでは、常さんと直さん、両方が襲われたわけが分からない」
「おふたりとも死んではいらっしゃいません。疑いを逸らすための狂言だとも思えます」
「よく分からんな」新太郎は溜息をついた。「えい、ややこしい」
「焦らずに順に考えてごらんなさいませ」
言われて新太郎は事の次第を思い起こす。
「昨夜は直さんが襲われた。襲ったのは闇御前、だが黒衣が乱入して闇御前は目的を果たせなかった。直さんがチロー館に出掛けることは、関係者の誰もが知りえた。ただ、鞠乃さんと直さんだけが、闇御前ではありえないことになる」
「はい」
「その前は左吉だ。襲ったのは火炎魔人、これはたまたま下の通行人が身代わりになって目的を果たせなかった。ただ、左吉はそもそも間違えられた可能性がある」
「そう思います」
「本当に左吉が目的だったということはないだろうか」
新太郎が問うと、万造は首を横に振った。
「わたしはずっと妙に思っていたのですが、火炎魔人はそれまで必ず、被害者を突き落とすだけでなく、その身体に火をつけてはいなかったでしょうか」

「ああ、そう言えば」
「けれど左吉さんだけはそれをされていない。わたしはこれが、火炎魔人が人違いに気づいたせいではなかったかと思うのです」
「なるほど。しかし」
「まだあります。左吉さんは露台で真下の道を見ていたとおっしゃいました。けれども伊沢屋の玄関の上には庇があった。もしも下に庇があれば、そういうおっしゃりかたはしないでしょう。なのに左吉さんは庇をかすめて落ちたのです」
「つまり、火炎魔人はわざわざ庇のほうに左吉を引きずっていったのだと」
「はい。そうでなければ、火炎魔人が左吉さんを引きずったわけが分かりません。少なくとも火炎魔人は左吉さんを必ず殺そうという意思があったのではないように思えるのです。敢えて殺す必要は感じないが、死んだ場合はそれでも構わないと、そういうことではなかったでしょうか」
「やはり左吉は常さんと間違えられたのだね」
「ええ、おそらくは」言ってから、万造は首をかしげた。「ひょっとして、菊枝さんなのかもしれませんが」
「ああ、どうにも分からないね。しかも常さんが闇御前に襲われた事件もある。闇御前が常さんを狙ったものなら、犯人は常さんが菊枝さんのお宅に行ってらっしたことを知

っている人物ということになる。左吉は知っていたかもしれないが、他の人はどうだろうね。しかもあの日、闇御前はすでに箍屋の女房を殺しているんだから」

「はい」

「たまたま闇御前は常さんに行き合って、それで何か都合の悪いことを知られてしまったのだろうか」言いさして、新太郎は首を振った。「ああ、これも駄目だね。だったら闇御前がその次に直さんを狙ったわけが分からない」

「さようでございますね」

新太郎は深い息を落とす。帝都の夜に目をはせた。

「直さんは、何を分かったというのだろう」

「はい。やめさせてみせる、と。あれはどういう意味だったのでございましょうね」

「ひょっとしたら、直さんは闇御前が誰なのだか、分かったのかもしれない。だとしたら、闇御前は直さんの身近の人間ということになる」

「たまたま御存じの人だったのかもしれませんよ」

「そんな偶然があるだろうか。本人に諭して、凶行を止めさせようというのじゃないのだろうか。それは危険なことのような気がするが」

「さて、どうでしょう。諭してみようというのでしたら、よほどの自信がおありなのかもしれませんが」

二人して手摺の外の闇に溜息を落とし、そうして新太郎はそこを離れた。
「やっぱりね、ぼくはこれが鷹司家の騒動なのだと思うよ。それだけは疑う気になれない」
万造もまた手摺を離れた。
「わたしもそう思います」

七

その使者は、新太郎が新聞社の机に向かって帳面をためつすがめつしていたときに、やってきた。常から、前日のお詫びをかねて食事に招待したいのだが、と新太郎の都合を尋ねる使者だった。伺います、と返答をして、社を出たのが夕刻、蝙蝠が飛び交う中を麻布へ向かったのだった。
時間には余裕があったので、社のある銀座からのんびりと歩いた。愛宕下を曲がって三田英学校のほうへ向かったのは、いつぞや常が歩いた道を辿ってみたかったからだ。
菊枝の住まいを遠目に覗き、とりあえず表立って異常のないことを確かめ、英学校の建物を眺めて、それから東京鎮台の会計倉庫脇を通って海軍省のほうへ向かった。その道筋のほうが静かだと思われたからだ。常が人目を忍んだのなら、そういった道のりを

選んだのではないかと思われた。

実際に歩いてみて、驚くほど人通りが少ないのに気づいた。少し東の海岸へ向かって歩けば、賑やかな雑踏に出るのに、ほんのわずかそれただけで道は閑散としている。そもそもこのあたりには住宅が少ないのだ。

海軍省の裏手へ出ると本当に寂しいばかり、道の向かい側は寺と墓地、街灯もなくて、提灯を持ってこなかったのを後悔するほどだった。足早にその道を抜けて増上寺の徳川霊場の脇まで出たときには、すっかりあたりは暮れている。

角に立って、常もこんな感じだったのだろうか、と新太郎は思った。広い通りの左を見ればまっすぐ天光院に突き当たり、右は増上寺裏手の斜面に向かって曲がっている。月は細く、足許は頼りない。

「この道だったんだな」

するとちょうど今、新太郎が立っているあたりのどこかに、蕎麦屋の屋台があったのだろう。

斜面のほうに向かって右に折れると、すぐに道は二股に分かれる。一方は大きく曲がって増上寺の裏手へ延び、一方はこれまた曲がって切通しのほうへ出るはずだった。箍屋の女房が襲われたのは斜面の南のほう、それで新太郎はそちらへ向かって歩いていった。

斜面は林、明かりもなく人気もなく、しんしんと寂しい。よくもこんな道を常はひとりで、と感心するほどだった。細い枝道を覗きのぞき、枝が風に騒ぐ音に気分を尖らせながら歩いていたときだ。

前方に丸い小さな光が見えた。よくよく見れば前を歩く人影がある。

わずかばかりほっとして、ひとり歩きの寂しさに思わず新太郎は足を速めた。風に乗ってどこからか、誰かを呼ぶ女の声が聞こえた。その声音が何やら哀切を帯びて聞こえて、気味が悪いよりも寂しいばかりで、それで無意識のうちに小走りになる。先を歩く人影の、姿がはっきり見えるところまできて、しかし新太郎は足を止めた。

法被姿の男だった。姿自体は珍しくないが、淡く蒼白い光は男が持った提灯の灯ではなく、背中に背負った黒紹の袋の中にあった。大人の拳ほどもあろうかという光がひとつ、男の背で揺れていたのだった。

じわりと新太郎の背中に汗が浮かんだ。

人魂売りとは、こいつのことではないのか。声をかけてみようか。それともこのまま何も言わず、あとを蹤けてみようか。

迷いはしたが、人はこういうとき、黙ってはいられない生き物なのだ。

「おい、きみ」

新太郎の声に、男が足を一瞬止めて振り返った。その表情は影になっていて分からな

い。

「きみ、ちょっと」

男はふいに足を速めた。ほとんど小走りになって、すぐ脇の小道へ曲がっていく。

新太郎は駆け出した。男が曲がった小道へ駆けこむと、さらに先の角を曲がっていく姿が見える。暗がりだが、男自身が背負っている光がなによりも明瞭な目印になった。林を抜け、斜面を抜けた。さっと射した月光に、墓地の角を曲がってゆるい坂を登っていく法被姿と光が見えた。それを追いかけ、角を曲がり、新太郎は足をゆるめる。

道は行き止まりだったのだ。

墓地へ向かって登る小道、両脇は土塀で正面に小さな門がある。門扉はぴったり閉ざされて、先への通行を妨げている。その門の前に男は立っていた。

「きみ、ちょっと」

新太郎が息を切らせながら声をかけると、男は驚いたように振り返った。そうして、新太郎もまた目を見開く。

縞の着物を尻端折り、深編み笠、その背には大きな木箱が背負われている。小さな明かりを灯していたが、それは襟に挿した提灯の明かり。

「莫迦な」

これはあの男ではない。あの人魂売りでは。

新太郎は左右を見渡す。土塀は高く、手がかり足がかりになるようなものもない。門もまた高く、しかも小さいながら屋根が載せてあったので、これを越えることができるとも思えなかった。

「きみ、ここに法被姿の男が来なかったかい」

新太郎の問いに、男はいいえ、と短く答えた。

「そんなはずはない。ぼくはすぐあとを追ってきたんだ。法被を着て、黒絽の袋を担いだ男だ。来ただろう」

「いえ。誰も」

新太郎は走って門に辿り着く。門には錠前がつけてあった。ためしに門扉を動かしてみたが、やはりそれは動かなかった。

「きみはどこから来たんだい」

男はすでに袋小路の入口に向けて歩き始めていた。軽く振り返って手で前方の路次口を示した。

「なんでこんな袋小路に」

「用足しでさ」

笑い含みに言った男を新太郎はしばらく呆然と見送り、そうしてはっと息を呑んだ。

深編み笠に背中の木箱。木箱には「珍妙珍奇噺替」の文字。

「あれは左吉が」
慌てて駆け出し、男を追ったが遅かった。路次を出て左右を見渡しても、もう何の姿も見えない。
「まさか左吉が言っていた、あの読売り」

八

新太郎が鷹司邸に辿り着いたときには、すでに約束の時間を半時ばかり過ぎていた。多恵に案内されて昨夜の部屋に通されると、そこには常と、そうして万造が待っていた。
「ああ、万造君も」
「どうしました。狐につままれたようなお顔ですが」
新太郎は思わず顔に手をやる。そうかい、と軽く受け流しかけて、結局それを口にした。
「万造君、ぼくは人魂売りに会ったよ」
万造は目を見開き、ちょうど高坏を運んできた多恵は悲鳴に似た声を上げた。
「平河さん、人魂って」

「そういう商売があるのですよ。人魂と称してふわふわした明かりを見せる大道芸が」
慌てて新太郎はそう言った。
「あァ、なんだ。あたしはてっきり、本物の人魂のほうかと思いました」言って多恵は盆を胸に抱えこむ。「気味の悪い商売もあったものですね。自慢じゃないですけど、あたしはそういうのは駄目なんです。本当に気が小さくて。横浜のお宅のすぐ近くに墓地があって、まだあたしも小さかったし、それで夜のお使いなんかは本当に嫌でした。ずいぶんそれで先代さまに叱られましたけど」
「へえ」
「先代さまは、幽霊だとか化け物だとか、そういうものが大のお嫌いで」
新太郎は笑む。
「なるほど、熙通卿も実は気の小さい方だったのかな」
多恵は手を振った。
「とんでもない。先代さまはそりゃァ剛胆な方で。それであたしどもが、うかつに怖いなんて言おうものなら、本当にお怒りでした。莫迦なことを言うものじゃない、とおっしゃって」
へえ、と呟いて常を見ると、常は困ったように微笑う。
「父は迷信じみたことが本当に嫌いだったのです。占いやまじないも嫌いで」

「そうそう」と多恵は口を挟む。「いつだったか、立て続けに使用人に死人が出たことがございましてね、そのときに桂井さんが神社からお札をもらってきたら、鬼のようにお怒りになって。お札を取り上げて破ったうえに、今度こんなことをしたら暇を出すって」

常は微笑った。

「そういうことがあったっけね」多恵に言って、常は平河を見て苦笑する。「まじないのようなものは、異文化の方から見れば滑稽だか気味が悪いかのどちらかだというのが、父の言い分だったのです」

「ああ、なるほど」

多恵は盆を抱いたままくるりと瞳をまわす。

「反対に奥さまはそういうことを気になさる方でしたから、ときどき言い争いをしてらっしゃいました。奥さまにすれば御実家は倉橋家でしょう、陰陽道のお家ですもの、そりゃあ喧嘩にもなりますよねえ」

常はさらに苦笑する。

「お多恵、あまり恥を申しあげるものじゃないよ」

「あら」と多恵は赤くなる。「済みません」

慌てたように頭を下げて、ぱたぱたと部屋を出ていった多恵を見送り、新太郎は笑む。

闊達な様子が微笑ましい。

「失礼をいたしました」

常は詫びたが、新太郎は軽く笑って首を振った。

「熙通卿はたいそう合理的な方だったんですね」

「はい、それは徹底しておりました。封建的なことや前時代的なことも嫌っておりましたし。ただ、異文化を尊重しなくてはならない、と申しまして、他人さまの前ではあまりそれを出しませんでしたので、そのぶんかえって家の中では我慢ができなかったのだと思います」

「なるほど、それが良い外交官になる心構えなのでしょうね」

熙通は外交の名手だった。老中堀田正睦の勅許工作の際にはこれに協力して、密かに公卿を合意に向けて動かしたというから、内々への交渉の名手でもあったのに違いない。国の外交官でさえ、熙通に教授を求め、非公式の場では臨席を望んだほどだ。外国駐在大使ともきわめて親密だったと言われる。

常は困ったように微笑ってみせた。

「初子さまがお可哀想でしたが。父は初子さまの御実家もずいぶん嫌っておりましたので」

「そうですか。でも、惜しいような気がいたしますね」

新太郎が言うと、常は不思議そうにする。
「いえ、常さんが。せっかく熙通卿の手ほどきがそれほどあって、それを生かさないのは惜しい気がします。常さんは外交官になるおつもりはないのですか」
「いえ、わたしは、そんな」
「向いてらっしゃるのでは」
常は困ったようにした。心底からの表情のようだった。
「わたしには自信がないのです。父の方策が正しいという」
え、と問い返した新太郎に、常は言った。
「よく初子さまが言っておられました。お父さまは見事に国を沈めておしまいです、と」
「それは」
「どういう意味かは存じません。何度かお尋ねしましたが、答えてはいただけませんでした。ただ、初子さまは父の進む道をよくないと、最善でないという意味ではなく、最悪だという意味で、よくないと思っていらしたようでした」
「しかし、それは」
「初子さまはたいへん聡明な、国家のことも社会のこともよく御理解になった方でした。その初子さまがそれほどにおっしゃるのだから、何かしら根拠がおありだったのだと思

います。それでわたしには、自信が持てないのです」
常が言って、やんわりと微笑ったときに、桂井老が部屋に入ってきた。
「じきに食堂の用意が整います。食前酒のおかわりはいかがでございますか」
ありがとうございます、と新太郎が高坏を差し出したそのときに、突然けたたましい音がしてそれをあやうく取り落としそうになった。
犬の声だった。目をやると、仏蘭西窓の外に庭で吠える二頭の犬が見えた。常が立ち上がり、桂井老もまた窓辺に寄る。
「放していたのかい」
「いえ、お客さまですので、小屋に入れてあったのですが」
「小屋の戸の留め金が緩いようだったから、壊してしまったのだろうか」常は窓を開ける。「松王丸、梅王丸、どうしたんだい」
常が声をかけると、あらぬ方向に向かって吠えていた犬たちは振り返る。くぅん、と鼻を鳴らして、すぐにまた庭の奥に向かって吠え始めた。
「猫でも迷いこんできたのでしょうか」言って、桂井老は踵を返す。「繋いでまいります」
「そうしておくれ。三頭ともだよ」
「はい」

桂井老がそそくさと部屋を出ていき、常もまた窓を閉める。新太郎たちを振り返って申しわけなさそうにした。

「済みません」

「車引ですか」新太郎は笑った。三頭目は桜丸というのだろう。「秋田犬ですね。ずいぶん大きな」

はい、と頷いた常はどこか嬉しげだった。

「やはり番犬なのですか」

「単にわたしが好きで飼っているのです。一応用心のために、夜は一頭だけ放すのですけど」

「一頭だけ、ですか」

「どの犬も気が荒くて。別に咬んだりはいたしませんけれど、身体が大きくて力があるので、全部放すと朝、家の者が小屋に戻すのが大変なのです」言って常は笑う。「わたしには大層おとなしいのですが」

そうですか、と新太郎もまた笑ったところで、多恵が再び部屋に顔を出した。

「どうぞ食堂にお移りくださいませ」

洋食を覚悟していた新太郎だったが、料理は和食の体裁で、かなりのところほっとし

た。箸を使っての気楽な食事だった。
　食事が済むと喫煙室に移ったが、新太郎も万造も、そして常も喫煙の習慣がない。勧められるままに珍しい洋酒の味見をしていたのだが、万造が左吉の具合を尋ねたのをきっかけに左吉が呼ばれて、それでいつしか、話題は事件の話になってしまった。
「左吉さんが伊沢屋へ行かれたことを、知っていたのは誰でしょう」
　新太郎が問うと、常と左吉は顔を見合わせる。答えたのは常だった。
「あの日来ていた親族と、兄だけだと思います。なにしろ菊枝さんがいらしていて、さあ出掛けようか、と言っていた矢先に前触れもなく親族がやってきたものですから」
「なるほど」
「ひょっとしてすぐに話が終わりはしないかと、菊枝さんもずいぶん待ってくださったのですが。店が閉まってもなんですので、結局左吉に供を頼んでしまいました。その実、それからいくらもせずにお開きになってしまったのですけど」
「常さんが菊枝さんと出掛ける予定だったことは」
　常は首を傾けた。
「特に誰かに言った覚えはございません」
　すると火炎魔人は、偶然左吉たちを見かけたのだろうか。
「確認しておきたいのですけど、左吉さんが露台にいた場所というのは、下の庇から離

れていませんでしたか」

左吉は頷いた。

「離れておりました。庇はずいぶん右のほうにあったと思います」

やはり、と新太郎は思う。ではどう考えても左吉は誰かと間違えられたのだ。問題は常と間違えられたのか、それとも菊枝と間違えられたのかということ。これでがらりと犯人の立場が変わってしまう。

「たいへん失礼ではございますが」と、万造が口を挟む。「菊枝さんとはいつごろからのお付き合いなのでしょうか。もう長くていらっしゃるのですか」

常は困ったように万造を見、すぐに目を伏せた。

「昨年からの御縁です」

「柳橋の芸者さんだとか」

「はい。いつぞや知人に座敷へ連れていっていただいて、そこでお会いしましたのです。しばらくは通っておりましたが、昨年の末に芸妓をおやめになって」

言って常は視線を上げた。

「それは、皆さんが菊枝さんをどうお思いだか、わたしにも重々分かっております。菊枝さんはあの通り、気もお強くていらっしゃるし、ときには口が過ぎることもございます。つい親族などとも諍いを起こしがちです。けれど菊枝さんは、わたしの周囲の者が

寄ってたかって悪し様に言うものですから気が立っていらっしゃるのです」

そうだろうか、と新太郎は思う。あれは菊枝のそもそもの性質のように見える。

「芸者と誰もが悪し様におっしゃいますが、菊枝さんとて望んで芸者におなりではありません。御実家が傾いて親兄弟を養うために売られて入った世界でございます。人身売買はもっとも野蛮な制度だと、父も生前そう言っておりましたが、わたしもそうだと思います。それを皆さん、まるで菊枝さんの咎のようにおっしゃる」

新太郎は黙した。

「菊枝さんが多少言葉を過ごしても、どうしてそれで咎められましょう。わたしには優しい、可愛らしいお方です。金蔓にされているのだと、左吉も親族も申しますが、務めとはいえ酔客に侍る自分が情けなく悲しく、わたしの風評までを下げたのが申しわけないと泣いてくださった菊枝さんの真情を、わたしは信じております」

万造はやんわりと微笑った。

「奥様にお望みですか」

常は陰のある笑みを浮かべる。

「はい。けれども宮内省が許可くださいませんでしょう」

「華族さまも不自由なことでございますね」

「本当に、さようでございます」

万造は頷く。
「鞠乃さんでしたら、何の問題もなかったのでございましょうが」
常は首を傾けた。
「先日伺いそびれましたが、平河さんも万造さんも兄と鞠乃さんを御存じでしたのですか」
ええ、と苦笑したのは新太郎だった。
「どんな方だろうと好奇心で牛込まで行きましたら、ばったり御本人とお会いしてしまいました。鞠乃さんはなかなか、おきゃんなお嬢さんのようですね。なんでも直さんのお嫁さま志願とか」
はい、と常も困ったように微笑う。
「いちおうお父さまからお預かりしたのはわたしでございますから、こちらに戻ってくださいまし、とお願いしても聞いていただけません」
「九条家の方とか」
「はい。そのように伺っております」
「伺って、ですか」
目を丸くした新太郎に、常は微苦笑してみせた。
「わたしにも、どこまでが親族でどこからが親族でないのか、よく分からないのでござ

います。なにしろ、祖父の実家だの曾祖父の兄弟の実家の孫だのと、それはややこしゅうございますから」

「それは大変ですね」

「いちいち系図を見なくては、わたしにも何がなんだか。父は九条家とは御縁が切れておりましたし、鞠乃さんのお家はその九条家でも傍流の傍流、よくは分かりませんが九条公爵の紹介状を持っていらしたので」

「そんなものなのですか」

新太郎がやや呆れて言うと、常はさらに苦笑する。

「桂井に命じて、手頃なお宅を見つけて女中をおつけするように、と手配していたのですが、牛込に行っておしまいです」

「なるほどねえ」新太郎は言って、ふと、「そう言えば。御親族で思い出しましたが、京都のお方が東京においでなのですね」

常も左吉も驚いたようにした。

「小里さまが、ですか」

「はあ。なんでも直さんが銀座で、小里さんと輔さんを見かけられたとか。学校に入れるためじゃないだろうか、と直さんはおっしゃってましたが」

常は左吉を見た。

「お前、聞いておいでかい」
いえ、と左吉は怪訝そうに首を振った。
「常さんも御存じなかったのですか」
「はい。学校は違うと思います。縁故の者が学習院に入れば、必ず耳に入りますから。しかも輔も熙も、病弱を理由に京都のほうで教育する旨、届けが出て受理されております」
「では、御旅行だったのでしょうか」
「でしたら、当家に挨拶なりともあったと思いますが」
「直さんの人違いか」
「輔ならば見間違えたりはいたしますまい。左吉、済まないけれど京都の方の御様子をお伺いしておくれでないか」
「かしこまりました」
単なる銀座見物だったのだろうか。それとも、と新太郎は眉を顰める。そうでないなら、なぜ常に連絡がないのか。常に遠慮してのことならともかく、もしも敢えて隠しているのだとしたら。
それはなにやら意味の大きいことに思われた。

九

万造と共に鷹司邸を辞去したのは夜半が近づいてから、新太郎はその帰り道で、改めて増上寺裏で人魂売りと出会った話をした。

「消えてしまったとしか思えない」言いながら、新太郎は袋小路に辿り着いて、そこに人魂売りがいないと知ったときの、あの妙な気分を思い出していた。「今のは左吉さんが言っていた読売りでは、と思ったときにはあとのまつりだ」

「土塀を乗り越えて向こうへ入ったということは」

「ないと思う。なにしろ高さがあったし、古い土塀だったから。塀の上には瓦が載せてあったが、そこに姫女苑やらが茂っているような按配でね。無理にとりついてよじ登れば、必ず壊したろうと思うんだよ。それに、そこには読売りがいたのだからね」

「門の中に入って、中から締まりをしたということはないのでしょうか」

「表に錠前がついていたのだよ。ちょっとそれは考えられない」

そうですか、と万造は考えこむようにする。

ちょうど汐見坂の角を曲がって永坂沿いの寺の前まで来ていた。さらにその角を曲がって永坂を昇る。そうして、それを見つけたのは新太郎が先だった。

「万造君」
新太郎は低く呼びかけた。目は前方から離さなかった。永坂の先のほうに白いものが飛んでいた。白い、首が。
「あれは」
万造も低く言って、それきり声が途絶える。
暗い坂道、あたりは寂しく人の気配もない。その暗闇の中、塀と塀に挟まれた道を高く低く幾つかの生首が音もなく飛び交っているのだった。
「首遣い、とかいう」
新太郎の声は喉許に蟠って掠れた。じんわりと冷たい汗が背中に浮かんでいた。
「戻ろう」
背中を向けることは恐怖だったので、首たちのほうを向いたまま足を戻した。じりじりと距離をあけ、曲がってきたばかりの角を捜して振り返ったとき、坂の下に立つその姿を見つけたのだ。
黒紋付に平袴、白襷に白鉢巻。あまりに見慣れた居合抜きの姿だが。
居合抜きだ、とは思わず、辻斬りだ、と新太郎は思った。四人を殺してこのところ、鳴りをひそめていた噂の者。
男はこちらを向いていたが、月光に翳ってその顔はさだかではない。男のすぐ前方に

汐見坂に曲がる角が見えた。男が一歩を踏み出せば切っ先が届く、その程度の距離しかない。

坂の上には首たち、坂の下には居合抜き。飛びこむ枝道も叩く門も近くにはない。

「万造君」

はい、と万造の声も緊張している。

せめて首のほうへ、と再び反対側へ足を戻すと、居合抜きは一歩を踏み出した。その手は刀柄にかかっている。手許がきらりと光ったのは、すでに鯉口が切れているからだ。

唐突に新太郎は昨夜見た十二階からの景色を思い出した。

夜はまだあんなにも暗い。

「お止し」

突然そう声がかかったのは、そのときである。

居合抜きは俯き加減に脇道のほうを見た。その脇道から小柄な姿が現れた。白絣に袴、文士風だが何しろ若い。おそらくまだ十六かそこら、その少年が居合抜きと新太郎たちを見比べる。

新手だ、と新太郎は思った。居合抜きの仲間だか首遣いの仲間だか、それとも両者には関係のない新たな魔性か。そう思うほどその美貌は尋常でなかった。それは美醜を超えているように見えた。人の範疇のものではないと思われたのだ。

「お退り」と、少年は居合抜きを見る。「消えて失せなさい。これ以上の殺戮はまかりならない」

気圧されたように居合抜きが後退り、少年は坂の上を見る。

「首遣いとやら、お前もです。今夜は見逃すが、次に会ったら容赦しない」

居合抜きは身を翻した。ぺたぺたと素足の音をたてて坂を下って闇の中に紛れていく。

驚いてそれを見送り、新太郎が振り返ったときには、首の姿までがなかった。

唖然として三方を見比べる新太郎に、少年は何かを窺うように目を細めてみせた。そのまま、居合抜きの消えていった坂の下へ向けて曲がっていく。

「きみ」新太郎は声を上げた。「きみは」

声を上げたものの、何を言えばいいのか、分からなかった。

「深夜の外出はお控えなさい」少年は振り返らないまま言う。「いつもわたしが居合わせるとは限らない」

「ちょっと待ってくれ」

追いかけるふんぎりがつかずに、ただ新太郎は声を上げる。

「きみは、何者なのだい」

少年はようやく振り返った。

「姓は名乗るほどのものじゃない。名前は、輔、と」

新太郎は棒立ちになった。
声をかけることもできないまま、ただ見送った視野を小柄な影が遠ざかって、やがて闇に呑まれていった。
「確かに」ぽつりと万造が言って、新太郎は我に返る。「あれでは見間違えるはずがございませんね」
新太郎は坂の下と万造を見比べた。
「では、やはり今のは」
「そうでございましょう。たまたま同じお名前の方だとは思えません。歳の頃も直さんのおっしゃった頃合、今の方が鷹司輔さんなのだと思います」
新太郎は息を呑んだ。確かにあれでは、どんな雑踏の中にいようと見間違えるはずがない。もしも一年後に会っても、必ず分かるという確信があった。
「万造君、ぼくは」新太郎は軽く絶句し、わずかに喘いだ。「ぼくは自信を失ってしまった」
「どうなさいました」
新太郎は坂の下の闇を見つめる。
「きみ、万造君、ぼくは今日まで物の怪を信じなかった。けれど今は宗旨替えをしたい気がする」

なぜひとは、ふいに見慣れた暗闇に背筋を粟立てることがあるのだろう。どうして、いつもと変わりない廊下の端の暗闇に意味もなく怯えてしまうのだろうか。そこに何かを嗅ぎとるからではないのか。だとしたら、その何かと同じものが確かに先ほどまでこの場にはあったのだ。

「今のはなんだったのだい。珍奇な見世物かい、人殺しかい。輔君、彼はいったい何者なのだい」

「平河さん」

万造は眉を顰める。

「近頃の東京はどうなっているんだ。いったい、夜はいつからこんな危険なものになったのだろう」

「落ち着いてください、平河さん」

新太郎は頷いたが、今になって恐怖が噴き出してきて、身体が震えるのを止めることができなかった。

「文明開化とやらではなかったのかい。文字通り暗がりに明かりをくれたのではなかったのかい。電灯やら瓦斯灯やら、明かりを点して闇を追い払ったのではなかったのかい」

だが、闇は帝都のうえに依然として存在するのだ。十二階から見たあの光景のままに。

「そう、ぼくは暗がりに怯えて泣き喚くほど子供じゃないとも。化け物に怯えて手水を恐がる子供じゃない。それでもね、万造君、開化開化と言いながら夜が開かれないのはなぜなのだろう。良い時代が来るのではなかったのかい。古い忌まわしいものが一掃されて、四民平等の合理的な近代的な世界が来るのじゃなかったのだろうか」

自身の中にたわめられたもの、それがこれなのだと、新太郎は我ながら思った。

「開化など、嘘だ。誰もが新しい時代が来たふりをしているだけだ。四民が平等ならなぜ華族がいるのだい。華族院などというものがあるのだろう。文明国家の幕開けというのなら、どうして下長屋はあんなに貧しい。ことあるごとに大火が起こって街が灰になるのはなぜだい。虎狼痢だの窒扶斯だので人が将棋倒しに死んでいくのはなぜだろう」

「平河さん」

「なにひとつ開かれてなんかいないのだ。銀座、鹿鳴館、瓦斯灯、そんなものはその昔、阿蘭陀人が出島に持ちこんだ珍奇なものとなんら変わりはありはしない」

文明は幻想であり、開化もまた幻想だ。問題は内外を問わずに山積している。列強との軋轢、膨張する都市の最下層に汚濁のように淀んだもの。人々はたまに着飾り銀座の煉瓦街や瓦斯灯を見物して、また腐臭の漂う昔ながらの九尺二間の裏長屋に帰っていくのだ。

「化け物はね、あれは、過去の遺物だよ。営々と国を蝕んできたもののひとつだ。文明

がそれを駆逐できないのなら、どうして他のものも駆逐できるだろう。新しい世などというものは来やしない。古い忌まわしいものが形を変えて、そこに蠢いていることになりはしないか。新しい良い世が来ないなら、なんのための革新だろう。時代の力が革新を産まないのだったら、人はなんのために時代に巻きこまれていくのだい。ぼくらは時間か。生きて死ぬことで時間を埋める、それだけの値打ちしかありはしないことにならないかい」

「落ち着きなさい、平河さん」

「ぼくは父が嫌いだった。ぼくらを見捨て、冷や飯を食わせた藩のために自ら望んで死んでいった父の心根が、今でもぼくには分からない」

祖父の不始末の一件に関して、その原因が何だったのか新太郎自身は知らぬままだった。よほどのことがあり、よほどの事情があったのだろうが、今となってはそれを知る術もない。

「美名を背負って死んだ父は満足だったろう。けれどぼくらは東京に流れ着くまで、どれほど辛酸を舐めたことか。妹も弟もその最中に病で死んだ。貧しくて滋養のあるものさえ食べさせてやれなかった」

黙って立ちつくす万造を新太郎は見る。

「東京に来たときね、ぼくは夢のような気がしたよ。鉄道に煉瓦街に瓦斯灯に。新しい

時代だ、と思った。もう武士なんてものはないのだ。藩の大事なんてものもないのだ。人は自由に生きていいのだ。きっとそのうち煉瓦街も瓦斯灯も東京のすべてに広がって、泥の池の中に清い水が注ぎこんで広がるようにして、日本という国全部に広がっていくのだと思っていた。そのように、貧困や理不尽が清められて自由な良い世の中が来るのだと思っていたんだ」

「ああ」と万造は言った。「平河さんは諦めておられたのですね」

新太郎は虚を衝かれて万造を見る。そうしてその意を悟った。前にそんなことを訊かれたことがあったのを思い出した。

帝都日報は通俗新聞だった。体裁はともかく、その内容においては読本と何ら変わりない、意味も意義もない、娯楽紙だったのだ。帝国議会の開設があり、社会運動があり、清国との戦争があった。そんな中で多くの同僚が辞職して、もっと意義のある論説を行なえる場所に移っていった。残り続ける新太郎に、なぜなのですか、と万造は問うたのだ。そのとき新太郎は答えを返せなかった。今は返せる。

「ぼくは新時代に夢を見すぎていた。だから、諦めざるをえなかったんだ」

「時代は変わっていくのですよ」そう万造は言った。「変わっていく性質のものだからです。その行く先がどこであれ」

「その、通りだ」

「それでも水が高いほうへは流れないように、決して逆戻りはしないものです。より良くなるにしろ、悪くなるにしろ、時代は転変していくもの」
「きみ、妖怪はいると思うかい」
「いません」
「人を襲う魑魅魍魎は」
「おりません」
「人魂は」
「おりませんとも、平河さん」
新太郎は万造をひたと見据える。
「では、人魂売りとかいう、あいつは」
「人魂などというものがなく、妖怪などというものがいないなら、それはもちろん人なのですよ。黒紹の袋に入ったものは、人魂なんかではありません。あれは人魂に似た、それだけのものです」
「だが、蛍ではない」
「そう。蛍ではありません。あんな大きな蛍はいない。かと言って炎でもない。炎なら紹などたやすく焼き切ってしまう。だとしたら、あれは大人の拳大をした光る何かなのです」

「光る、何か」
「茸の一種に光るものがあるのは御存じですか。苔の一種に光るものがあることは」
「ああ。しかし」
「茸が光るのは、光る物質が含まれているからです。この世にはね、発光する物質というものがあるのです。昔、欧州の錬金術師によって発見された燐がいい例ですよ。燐は暗所で燐光を発し、空気に触れると燃えあがる。硝子の珠の中に燐を詰めて、黒絽の袋の中に糸で吊っておくというのはどうです。わたしは、実際に人魂売りが何を使ったのかは知りません。でもね、人魂でなくても夜に光るものはいくらでもあるんです、いくらでも。光るものがある以上、平河さん、そんなことは不思議でも何でもないのですよ」
「しかし、奴は消えたんだ」
「そんなものは、あなたの思いこみです。あなたは人魂売りを追って袋小路に入っていった。人魂売りが消えて、そこには読売りがいたという。だったらなぜ、人魂売りが扮装を解いて、読売りの扮装をしたのじゃいけないのです」
「それは」
「人魂売りはなぜ、そんな面倒なことをしたのです。人魂売りはあなたに蹤けられていたことを知っていた。では、なぜ蹤けられていることを知っていながら、袋小路に逃げ

こんだのですか。そこには読売りになり代わるための用意があらかじめ隠してあったからに決まっているじゃァありませんか」

ああ、と新太郎は呻いた。

「ただ単に、あなたの目をくらますためだけならば、人魂売りは物陰で扮装を解くだけでよかった。それをできなかったのは、あなたに顔を見られたくはなかったからです。万が一にもあなたに顔を覚えられたくはなかった。そうはお思いになりませんか」

額を押さえた新太郎に、万造は口調を変えて静かに言う。

「落ち着いてください。化け物などはいやしないのです。かつてはいたのかもしれませんが、今はいない。それは時代と共に過去に流されてしまったのですよ」

「そう、そうだね」

新太郎は深い息を落とした。

「では万造君、人魂売りと子供の失踪には何の関係もないのだろうか」

「ないとは思えません。人魂売りは消えた子供の周囲で頻繁に目撃されているのですから。だとしたら、答えは明らか、人魂売りが攫っているのですよ。子供たちの運命は分かりません。人魂売りの陰惨な楽しみのために殺されたか、それともどこかに売られたか。いずれにしても隠し婆の仕業などではありません」

「では、居合抜きは本当に血に飢えた辻斬りなのだろうか」

「そうでしょうとも。奴は単に人を斬りたいのかもしれません。四民は平等になって、切り捨て御免の特権もすでにない。でもね、武士という身分から離れられない人間がこの世にいても可怪しくはありません。武士である己を、人を斬ることでしか確かめられない哀れな男が」
「しかし、首遣いは」
「首に白化粧をして、その下を黒衣のように黒一色の身なりでかためたら、それはどんなふうに見えるでしょうね」
「黒衣は」
「あんなものは人形遣い、新手の見世物に他なりません」
「文楽の人形を使ってかい」
「もちろんですとも。黒衣はどこからか文楽の首を手に入れた。これを見世物に利用できるとそう思った」
「しかし、黒衣は人形と喋った」
「黒衣は黒頭巾で顔が見えません。もちろん黒衣が声色を遣っているのです。その他に考えられますか」
「腕は。人形を遣うはずの腕は」
「張りぼての腕を拵えて、人形の着物に縫い止めておけばいいことです」

「そう。そうだ、確かに」
新太郎は顔を撫でた。
「万造君、ぼくは完全に度を失っていたようだ」
万造は微笑う。
「やっと落ち着かれましたね」
「ああ。目が覚めた。そうなのだね、やはり物の怪などというものは、この世にいやしないのだね」
「もちろんですとも。新手の土場芸でしょうか、それとも物好きな連中が始めた茶番でしょうか。いずれにしても、あんなものに意味などありはしませんとも」
新太郎は笑って、それからふと眉を寄せた。
「だけれども、闇御前は。火炎魔人は。あれもたぶん人なのだろうけれど、単なる人とも思えない」
万造は笑んだ。
「宵闇に紛れて、赤姫が現れる。それが現れたところには必ず死体が残る。死体には無惨な爪痕、しかも走り去る獣が目撃される。もしも狐が化けないのならば、赤姫は本当に赤姫の扮装をした人間に決まっています。獣は本当に獣、犬か狐か、どこかで飼われた生き物に違いないのです。爪痕は熊手か、そんなもの。なんの不思議もありはしない

じゃありませんか」
「だが、闇御前も闇に消えるんだよ」
「扮装を解いてしまえばいいことです」
「簡単な袷や単ならともかく、赤姫姿ともなれば着物を脱ぐのも簡単なことじゃないよ。打掛は嵩張る。脱いだ着物をどうするね。大層な白塗りを落とすのだって簡単なことじゃない」
「ええ、首や手の先まで白く塗ったのを落とすのはさぞ大変でしょうとも。けれどそれもちょっとの水があれば済むことです」
「確かに。だが」
「水は必要なのです。素早く確実に白粉を洗い流すために。頭は鬘で充分。着物は脱げばそれまでです。打掛も裾を引いた着物も、重そうな帯も、取ってしまえばそれまで、しかもそれは難しいことではありません」
「そうだろうか」
「そうですとも。鷺娘を御存じじゃありませんか。芝居の衣装には引き抜きというものがございます。糸を切って帯から引き抜けば、簡単に脱いでしまえるのです。その帯だって糸一本で外してしまえる。舞台の上でできることがどうして、観客のいない暗がりでできないわけがあるでしょう」

「しかし、脱いだといっても嵩はある」
「ええ。ですから、犯人は大きな荷物を抱えていたことでしょうよ。鬘と重い打掛があるのですから」
「それだけの大荷物をどうやって」
言いかけて新太郎ははっと口を噤んだ。
「闇御前が現れたところに、しばしば蕎麦屋がいやしませんでしたか」
「いた」
「屋台の中なら隠せましょう。しかも化粧を洗い落とす水までそこには用意されているのです」
「常さんが屋台を見た、あの般若蕎麦」
万造は頷いた。
「浅草にだけは屋台を持ちこむわけにはいかなかったようですが、鬘を脱ぎ、これを脱いだ打掛を裏返して包んでしまえばあの雑踏の中、立ち去ることは不可能ではありますまい。白粉を落とすには天水桶がございました」
「確かに」
「亭主は般若の面を被る。これほど怪しい者もおりません。おまけに法外な価をふっかけて、商売をする気があるのか、ないのか」

「商売なんてする気がないんだ。客はむしろ邪魔だから、適当なことを言って追い払っている」
「そういうことだと思います」
「じゃあ、火炎魔人のほうは」
万造は笑った。
「全身が火達磨で生きておれる人がおりましょうか。だったら、あれは人形でしょう」
「あの手形は」
「わたしは灼き鏝のようなものを想像いたしますが。掌の形の鏝を作っておいて、それを背中に押し当てる。そうとしか考えられません」
「火炎魔人が消えたのは」
「燃え尽きた、と考えるのがよろしいでしょうね。ただ燃え尽きただけでは灰や燃え滓が残ります。それで火炎魔人は風の強い日を選んだのではないかと」
「なるほど、全部風で飛ばしてしまおうという肚なわけだね。しかし、そう簡単に燃え尽きてしまうだろうか」
「燃え尽きるように作った、と考えたほうがよろしゅうございましょう。ごく柔な張りぼてのようなもの」
「だが、鏝といい人形といい、それは大層な仕掛けだね」

「はい。人形は持ち運びを考えて多少小分けにして作ったとしても、それでもかなりの嵩があります。鍛も炭火の中に仕込んでおかなくてはなりません。これもかなりの大荷物でございましょう」

「読売り」

「その通りです。夜でも深編み笠姿、顔を隠すのにこれほど向いた商売も他にありません。背中には読本を入れた荷、読本ではなく灼き鍛が入っていたところで、誰にそれが分かりましょう」

「では、ぼくは」新太郎は出遅れた自分を改めて悔やんだ。「ぼくはまぎれもなく火炎魔人に会ったのだね」

第四幕　夜の者、満願成就の場

闇の中には人形だけがあった。

段鹿子の娘振袖、するとお七の衣装だろうか。帯は筋入り麻の葉、振り下げに締めたその帯と、片袖脱いで現れた緋襦袢の袂が、腐り落ちそうな床板の上に艶やかな波を作っていた。

娘は髪振り乱し、ことんと広い闇の中に坐っている。己の罪を眺めるように白い首を項垂れて。

白い顔にうちかかったその髪をすくう手がある。黒い手甲から覗いた指が、顔にかかったひとふさを払い、そっと後ろに撫でつけた。

「疲れたかい」

黒衣の声に娘の返答はない。撫でられるまま闇のどこか一点を見ている。

「いい子だ。もう少し辛抱しておくれねえ」

やはり娘の返答はない。こそりと手足を投げ出したまま、その場にじっと坐っている。

黒衣の指が髻を解いた。首に植えつけられたその髪を全部解いて、黒衣の手が梳る。
「綺麗な髪だ。お前は本当に見事だねえ」
それでもなお娘の返答はなかった。黒衣は髪を梳きながら、軽く忍び笑いを漏らした。
「本当に拗ねてしまったようだね」
『別に』
人形は呟いて、ただ闇を見る。
「それとも、心ここにあらず、というところかな」
またも返答はない。軽く笑い、音をたてて黒衣は櫛を置いた。俯いた顔にかかる黒髪の艶、そのどこが気に入らなかったのか、黒衣は髪を掌で撫で、指先に拾っては撫でることを繰り返す。娘はその間、ぴくりとも動かない。まるでただの人形のように。
『あれがお前さまの目当てかえ』
「そう」
黒衣は言って娘の帯に手をかけた。帯締めをほどき抱え帯を解き、ひとつひとつを丁寧に始末してから、絹鳴りの音をたてて帯を解いた。
「見事な夜の者だったろう」
『あれが、夜の者』
「そうだ。お前もひとかどの夜の眷族、同類は分かるだろう。どうだね、お前はあれが

欲しくはないかい」

娘の返答はない。

黒衣はくつくつと笑って娘の振袖を脱がせ、緋襦袢に白い伊達締めを解く。文楽の人形ならば首の下には竿しかありはしないが、そこには真っ白な身体があった。その身体を黒衣は膝に抱き上げる。

『お前さまは欲しいかえ』

「欲しいね」

軽く言って黒衣の手は刷毛を取る。桶に張った水に毛先を浸し、指先で水を切って、刷毛の角を使うようにして、胸に背中をもたせかけた娘の顔を丁寧に撫でていく。わずかに仰向いたまま虚空を見やった娘の顔が、しっとりと汗を刷いたように輝いた。

「見事な首だ。お前は真実、夜の顔をしている」

娘の返答はやはりない。

「顔の造作の可憐で美しいこと、髪の豊かで艶やかなこと、お前に勝る者はいない」

幾度も刷毛の先を水で洗いながら、娘の首筋から肩へ腕へ、あるいは喉から胸へ。娘の手足を取っては降ろしして、ゆっくりと刷毛を動かしていく。睦言を囁くようにしてひとり語りを続ける黒衣の声には、いつまでも返答がなかった。

ことり、と黒衣は刷毛を置く。かわりに紅絹の小布をとって、それで身体に残った湿

り気を拭いとってゆく。闇の中、黒衣の膝の上、白い身体にその布だけが鮮やかに赤い。
「さて、今夜の出し物は何にしよう」
『赤姫』
くすりと黒衣は笑った。
「可愛いことを言う。では八重垣姫がよかろうかね。時姫はどうだい」
『なんでも』
娘の声はどこまでも上の空、闇に吸いこまれるようにして消えていく。
黒衣は含み笑って膝の上の娘を抱き直した。片手を肩から首にかけて支えるような、撫るような。
「お前があれに気を奪われることなど分かっていたとも。だからお前のいいようにしてあげると言ったろう」
黒衣の手が娘の顎先にかかり、かつんと娘は黒衣を振り仰いだ。
『翅が欲しい羽根が欲しい。飛んで行きたい。知らせたい』
娘の台詞に、黒衣は呟いた。
「満願成就の夜が来る」
『お前さま、なんと』
忍びやかな笑いが闇を這った。

「これから真の悲劇の幕があがるのだよ」

一

桜が咲き始めた。枝がおぼろに白く染まって、浅草や上野、桜のあるところはどこもかしこも昼となく夜となく桜見物の客で賑わい始める。

その五分咲きの夜桜の下を流れる人波の中、左吉は懸命に前の様子を窺っていた。行き交う男女のその間に、常の後ろ姿が見えた。

使いが来たのは夕刻、どうしても常に直接会うと言ってきかなかったその使いと、面会して急に、常は外出すると言い出した。供を、と言えば、いらない、と言う。

現在の事情が事情だけに、ひとりで外に出したくなかったが、当の常がついてくるなと言うので、逆らうことができなかった。

だが、左吉はあの使いの顔を知っている。あれは直の家の下働き、角蔵という男ではなかったか。そのうえさらに、鞠乃がふらりと現れて、直が何やら思い詰めた顔をして出掛けたと言ってきた。不安な思いを耐えきれず、それでこうして、あとを蹤けている。

どんな犠牲を払ってでも、常だけは守らねばならない。そうして必ず近い将来、名実ともに鷹司の当主になってもらうのだ。

夜桜見物の客は浅草寺にまで流れこんで、境内は活気づいていた。軒を連ねた露店と見世物、カンテラの光とその匂い。そこから流れ、観音堂に詣でていく善男善女たち。

輪平は飴を引き伸ばす。竹串の先で食紅をつけ、まだ熱いほど温かいそれを手でこねて緑の色をなじませる。丸めて叩き、器用に整えながら首と尾をつまみ出し、手足をつまみ出して最後に竹篦で甲羅に粗く模様をつけた。それで亀のできあがりだった。

「ほら、坊や」

お内儀に連れられた子供の手にそれを渡し、掌に代金を受け取る。前掛けの中にそれを放りこみながら、輪平はふと視線を上げた。

「おや」

そう呟いたのは、目の前に黒々とそびえる五重塔の、その四層の屋根あたりに黒い影が見えたからだった。五層の高欄と四層の屋根のその間、黒い影がちらちらしている。夜のこと、闇の中とはいえ、空には月があって真の暗闇ではない。ましてや下にはこれだけの提灯やカンテラが点す明かりがある。少なくとも、影が見える程度には、空は明るかったのだ。

輪平は身を乗り出す。それは人影に見えた。誰か人が四層の屋根の上に昇って、そこで何かをしている、そのように見えた。

「なんだ、ありゃァ」
悪戯だろうか、それともまさか五層の高欄から落ちたのだろうか。眉根を寄せたときに、元気のいい子供の声がした。
「おじちゃん、竜を作れる」
「あ、ああ。いらっしゃい」
小さなお客に声をかけ、もう一度目を五重塔にやった。すでにあの人影は見えなかった。錯覚か、鳩かなにかの影があんなふうに見えたのだろうか。盗むものとてない五重塔、そうと知っていながら胸のあたりがもやもやするのは、不審火が怖いからだ。
「竜にして、竜」
輪平は笑った。
「あいよ、竜だね、坊や」

「ありゃァ、なんだ」
最初に声を上げたのは随身門の傍の露店を冷やかしていた客だった。
周囲の者が男が示したほうを見ると、浅草神社の手前にある鐘楼、その屋根の上に明かりがあった。
ぱらぱらと人が鐘楼のほうに動いた。

見れば、鐘楼の屋根の上、瓦からは一間ほども上に丸い明かりがいくつか浮かんでいる。

「人魂だ」

「ばか、提灯だ」

なるほど、よくよく近づいてみれば、それは小さな破れ提灯のよう、しかしそれが宙に浮いているのはどういうわけか。

「化け提灯」

声を上げた男を、止しねえ、と連れが制して、今度はその連れのほうが大声を上げた。

「首だ」

え、と人々の間で声が上がった。

「提灯の間だ。首だ。生首が浮いている」

狼狽した叫びの言う通り、浮かんだ提灯の間の宙を見てみると、そこには薄ぼんやりと白いものが、白い顔の生首としか思えないものが二、三、前を向き後ろを向きして漂っていたのだった。

誰かが悲鳴を上げて、それであたりは騒然となった。境内を行く人の間にも口伝えにそれが伝播して、あっという間に境内の人々が走り出す。鐘楼の下はたちまちのうちに黒山の人だかりができた。

お糸は坐った箱の上から身を乗り出した。輪蔵を挟んで見える鐘楼の下に呆れるほどの人が集まって、今もそれは膨れ上がっている。口々に何かを叫んでいるが、お糸は老齢、すでに目も悪く耳も遠い。何が起こったのか分からないまま、首を伸ばして様子を窺っていたのだ。

誰かに訊きたいが、あたりには人影がない。近くの露店の者だけが店を離れるに離れられず、お糸と同じように首を伸ばして鐘楼のほうを見ている。

駆けつけてみたいが、お糸もまたその場を離れられない。お糸は五重塔の番人だった。五重塔に昇りたいという者から喜捨と称して見物料を取るのが仕事なのだ。昔には考えられなかったことだが、御一新以来の廃仏毀釈とやらで寺にも事情ができたということなのだろう。

見えないなりに首を伸ばしていると、ふいに目の前に人影が立った。

「入れてくれ」

若い書生風の男だった。男の出した二銭を受け取って、右を示す。男は塔の中に入っていった。

しまった、と思ったのは男の姿が消えてからである。あの若い男に何が起こっているのか、訊けばよかった。歳のせいか、近頃そういう知恵の廻りが遅い。いつも後手後手

になって後悔するのだ。

そう自分に悪態をついたあとだったので、いくらも間をおかずにまたも若い男がやってきたときには、今度は質問を忘れなかった。

「鐘楼は何の騒ぎかね」

洋装の若者だった。綺麗な顔を鐘楼に向けて、若者は、分かりません、と柔らかな声で言う。見物料を受け取って右を示すと、丁寧な会釈をした。

そのすぐあとにあたふたとやってきた男は蟹のような顔をしたひどく小さな男だった。これにも同じことを問えば、分からない、と返答がかえってくる。

疑問を解決してくれたのは、ずいぶんと遅れてやってきた四人目の男だった。銘仙に法被姿、片手に明かりがひとつ入った黒紹の袋を持っていた。

「何があったのか知らないかい」

「なァに、誰かが鐘楼に提灯で悪戯をしたんでさ」

お糸はやっと溜飲を下げた。言われてみれば、鐘楼の上に薄ぼんやりと明かりが見えた。

「お兄さん、ありがとうね」

「どういたしまして」

「ときに、その袋の中のものは何だい」

「人魂で」
お糸は声を上げて笑った。
「やだよ、兄さん、やくたいもない」
男も笑って塔の中に入っていく。そのときだった。何か叫ぶ声とともに、いきなり鐘楼の下に集まっていた人垣が崩れて、今度はお糸のほうに向かってきたのだ。

三次は寺男だった。呼ばれて駆けつけ、鐘楼を昇る。上の高欄に出てみたが、さて、何の人影もなく屋根に昇る手段もない。
「梯子をもって来ねえ」
一緒についてきた若い寺男にそう命じて、自分は高欄の上、手摺に跨って屋根を見上げる。
いったいどうして、あんなところにあんなものが。浮かんでいるように見えたのはどういうわけか。そこまでを考えて、三次は近頃噂の首遣いとやらいう化け物のことを思い出した。
すっと背筋を冷たいものに撫でられた気がして、慌てて身を揺すり、首を振る。その視野に強い光を見たのはそのときだった。
ぎょっとして光のほうを振り返ると、五重塔の五層の高欄、そこに朱い炎が見えた。

今度は本当に全身が冷えた。火事か、とそう思ったのだ。改めて見れば、それは人の形をしている。五層の高欄に火達磨になった人間がいるのだ。

鐘楼の下に群がった人々が、今度は塔のほうに走っていこうとしていた。

人が走ってくるのにぎょっとしたお糸は、同時に塔の中から転がり出てきた人影に肝をつぶした。

「ああ、助けてください」

二番目に塔に入った、洋装の若者だった。あとから蟹面の小男が駆け下りてきた。

どうした、と問うより先に、露店の男が駆けつけてきた。

「ちょっと、あんた、何があった」

輪平は問う。五重塔の天辺に火の手が上がって、店をおいて駆けつけてきたのだ。

塔の中から転がり出てきた若者は、輪平に向かって訴える。

「火炎、魔人が」

やはり、と輪平はとっさに思った。

「助けてください、直が、直が上にいるのです」

若者の叫びに被って、誰かの叫び声がした。

「ああ、消えちまう」

その声に突かれたように、若者はもう一度中に入ろうとした。それを慌てて輪平は止める。例の火炎魔人とやらが上にいるのなら、とても危険で行かせられない。

塔の脇から悲鳴が上がった。

「誰か。誰か来とくれ。人が」

輪平は声のほうを見、若者もまた声のほうを見た。

「人が死んで」

塔の南側、寺の建物と塔に挟まれた狭い場所の入口で女が立ちすくんでいた。

常は走る。まさか、とたったひとつの言葉だけが脳裏を駆けめぐっていた。

駆けつけた塔の脇には倒れ伏した身体があった。何を考える間もなく駆け寄り、膝を突き、そうしてその身体に手をかける。

「直」

揺すった身体は動きのままに抵抗なく揺れた。取った手は無惨に灼け爛れて、掌を濡らした。

「お兄さま」

手を触れた頬は温かい。死んでいるはずがない、と口許に当てた指に、しかしながら呼気は感じられなかった。

傍らに膝をついた男が倒れた身体に軽く触れた。検めるように探って、すぐに手を放す。
「駄目だ。死んでる」
「そんなはずはありません」
とっさに常は反駁したが、とうに心のどこかで、そうであることを予想していた。
「知り合いかい」
男の声はどこか優しかった。
「兄です。兄なんです」
「そりゃあ、可哀想に。家はどこだい。連絡をしないと」
涙が溢れた。
「鷹司、です」触れたままの掌に直の頬は温かい。「これは、鷹司公爵です」
「なんだって」
こんな。
「こんな、ことが」常は叫ぶ。「どうして」
あとは言葉にならなかった。
どうしてこんな、むごいことが起こりうるのか。

お糸はぽつんと坐っていた。塔の脇から泣き崩れる声が響いていた。
駆けつけてみたいが離れられないのだ、これがお糸の仕事だから。
手近の者の袖を引いた。
「死んだのかい」
「の、ようだな」
「で、ひとりかい、ふたりかい」
「ひとりだ」
誰もが怖じ気づいて踏みこめなかった中、寺男の三次が、ふたりほど若い衆を連れて塔に昇り、誰もいない、と悪態をついて出てきた。
ぽつんと坐ったまま、お糸は指を折った。書生、洋装の若者、蟹のような小男、それから法被の男で四人。駆け下りてきたのは、洋装の若者と小男。落ちた者がひとり。
老婆は呟いた。
「あとのひとりはどうしたんだろう」

二

「万造さん、また、出た」

男の声が階下から聞こえて、新太郎も万造も思わず立ち上がった。やってきた男は息せき切って、階段のほうに身を乗り出すようにしていた。
「どう、なすったんです」
「火炎、魔人。ついさっき、浅草寺に」
万造は階段を駆け下りながら問う。
「また、殺したのですか」
「たぶん、死んでます。こないだの人です」
え、と万造も新太郎も顔を見合わせる。
「鷹司公爵、だそうです」

息を切らし、転がるようにして浅草寺に駆けつける。近くの人々を摑まえて訊くと、五重塔の脇を示された。そこにはまだ人垣があり、人垣の中央に羽織をかけられて横たわっている人の姿と、呆然と土の上に坐っている常、そうしてその傍に立ちすくんでいる左吉の姿があった。
「常さん」
呼びかけた新太郎の声に、振り返ったのは左吉だった。
「平河さん、万造さん」

「ああ、常さんは無事だったのだね。公爵というから、ぼくはてっきり」
頭から胸に羽織をかけられた男はぴくりでもない。死んでいるのだと、そう分かった。
「これは」
新太郎の問いに、左吉は低く答える。
「直さまです」
え、と問い返すと、左吉はただ頷いて顔を伏せた。
「常さん」
声をかけて傍に寄れば、常はぼんやりと顔を上げる。上着の肩口がひどく焦げていたが、手当を受けているとも思えない。
「平河さん」
「直さんが、どうして」
「五重塔に火炎魔人が」
「奴が、直さんを」
常は頷く。
「五層に上がったら、急に火の手が。直はわたしと左吉に逃げろ、と」
呟くように言って、常は目に透明なものを溢れさせる。
「わたしのせいです。みすみす兄を犠牲にしてしまいました」

顔を覆った常の脇に屈みこむ。羽織の下から直の手がのぞいていた。持ち寄られた提灯であたりは明るい。それでその手がひどく灼け爛れているのが分かった。見れば、遺体のすぐ脇に、きちんと添えるようにして一本の鏝が置いてあった。両手の掌の形をしていた。

その瞬間を見たような気が、新太郎にはした。鏝を構えて襲ってくるそれ、とっさに手を出し、鏝を受けとめる直。

さぞ熱かったろう、と新太郎は思う。

軽く手を合わせたときに、人垣を割って桂井老が駆けつけてきた。

桂井老の采配で、直は汐見坂の鷹司邸に運ばれていった。

それを見送りながら、新太郎は皮肉だ、と思う。あそこは直の家ではない。なのにやはり、己の死という大事に際しては、そこに戻らなくてはならないのだ。

ぼんやりと常たちが仁王門前に寄せた馬車に乗りこみ消えていくのを見守って、新太郎は息を吐いた。そうしてふと、万造がいないのに気づく。桂井老に挨拶をしたところまでは、確かに傍にいたのだが。

三々五々散っていこうとする人波の中を探して、新太郎は塔の入口でそこに坐った老婆と、いかつい風体の男と三人で話しこんでいる万造を見つけた。

「万造君」
呼ぶと、万造は軽く手を挙げる。
「どうしたのだい」
「いえ、ちょっと立ち話を」言って万造はふたりを示した。「こちらは三次さんと、お糸さんとおっしゃいます。おふたりとも、今の話を平河さんにしてさしあげてくれませんか」
万造が言って、ふたりは互いを見やった。
先に口を開いたのは、老婆のほうだった。
「いえね、勘定が合わないんでございますよ」
え、と呟く新太郎に、お糸は頷いてみせた。
「わたしがここで番をしておりましてね、塔の中に入ったのが四人、出てきたのがふたりなんです。落ちたのがひとりですから、ほら、ひとり足りないでしょう」
「ひとり、足りない」
「入って出てきたのが、品のいい坊っちゃまと人相の悪い小男で、落ちたのが書生さん、すると法被の男が出てきてないことになるんですけどねえ」
「法被の男」新太郎はお糸の顔を覗きこむ。「ひょっとして黒絽の袋を持っていませんでしたか」

「持ってましたよ。なんだか明かりの入ったのをねえ。それが塔に入ったまんま、消えちまったんです」
「見落とした、ということは」
お糸はふん、と鼻を鳴らした。
「冗談じゃありません。わたしゃ、ここでしっかり見てたんですから。鐘楼で騒ぎがあったときも、人が落ちたといって騒いでいたときも、一歩も動かずにちゃんと番をしてたんです。わたしは真っ正直な人間ですからね」
「鐘楼で騒ぎ」
問い返した新太郎には、三次という男のほうが答えた。
「へえ、あの鐘楼でさ」
三次は北のほうにある鐘楼を示した。
「あの鐘楼の上に、といっても、高欄の上でも屋根の上でもござんせん。そのさらに上で。つまり宙に、提灯が浮いていたんでさ」
「提灯が」
「へい。明かりのついた提灯が四つ浮いてましてね、その間に生首が三つ」
生首、と聞いて息を呑んだ新太郎に、三次は顔をしかめてみせた。
「それがとんだ枯れ尾花で。こりゃあ大事だってんで梯子をかけて、若い者を昇らせて

みりゃ、これが張りぼての首で。提灯も首も風船玉で浮かせてあっただけなんでさ」

「風船玉、というと護謨の」

護謨風船は江戸の時代からあったが、明治八年に開成学校で理学教師が生徒にこれを作らせたのが始まりで、翌年には露店で売られるようになった。特に二十三年に英人が軽気球の興行を行ない、これに影響されて菊五郎が芝居で風船乗りを演じたせいで、大流行を見た。今も風船玉を商う露商は多い。

「へえ、そのへんの小店で売ってるあれでさ。それに墨を塗りつけて、三つ四つほど括りつけてあったんですから、わざわざ梯子を昇った奴はかんかんで」

「誰がそんな悪戯を」

「それが、分からないんでさ。鐘楼のあたりに露店を出していた連中に訊くと、提灯が見つかる少し前に、子供が三人ほど鐘楼に出入りしたってぇじゃないですか。それで境内を捜したら、絵馬堂で三人、雁首並べて人待ち顔なのを捕まえまして。これに訊くと、妙な男が連中に小金を握らせて仕掛けを頼んだ、てんです。なんでも着流しに深編み笠の男とか」

あ、と声を上げると、万造は新太郎を見やって頷く。

「これが道具一式渡して、金を握らせて、風船をこれだけ買ってこい、そうしてこれこれの細工をして、鐘楼に昇って手摺に結びつけろと。ちゃんとやれば倍の礼金を払うか

ら、と言ったってんです。それで男が駄賃を持ってくるのを絵馬堂で待ってたってわけで」

「その子たちは今」

「ちょいと灸でも据えとこうかと、縄かけて鐘楼に放りこんでありやす」

「そりゃあ、可哀想に」

苦笑混じりに言って新太郎は万造を見る。

「なるほど、火炎魔人がいて読売りの姿がないのは妙だと思ったけれど、奴はやっぱり出たんだね」

「あら、読売りなら、わたしも見ましたよ」

口を挟んだのは、お糸だった。

「見た、どこで」

お糸は塔を見る。

「塔の中に入っていきましたよ。ええ、ちゃんと覚えてますとも」

「それは、いつです」

「もう陽が暮れてたっけね。鐘楼が騒がしくなるだいぶ前だ。それが妙な男でしてね、大きな木箱を背負ってたんですよ。なのに出てきたときにはその木箱がなかったんです」

「木箱が、ない」
「ええ。お忘れじゃないですか、って声をかけたんですよ、わたしは。親切な性分ですからね。そしたら、木箱なんて持ってなかった、なんて言うじゃありませんか。持ってなかったはずはないんですよ。わたしゃ確かに見たんですから。見間違えだろう、なんて」
「昇って確かめてみなかったんですか」
新太郎が言うと、老婆は心外そうな顔をした。
「わたしゃここを離れたりしませんよ。そりゃァ真っ正直な性分なんですから」
新太郎は心中で苦笑し、万造を見やった。万造もまた苦笑を悴えているような表情をしている。
「なるほど、そりゃあ立派な心がけです」
新太郎が苦笑しながら言うと、三次が声をかけてくる。
「さて、あの悪餓鬼どももそろそろ家に帰してやらねぇと。お会いになりますかい」
新太郎は頷き、三次のあとについて鐘楼へ向かう。鐘楼に昇る扉には特に鍵はないようだった。
「錠をしてないんだね」
「へえ。どうせこのあたりはいつも露店がありやすし、鐘を盗っていく物好きもありま

すまい」

笑って言って中に踏みこんだ三次はしかし、すぐにヤ、と声を上げて中に駆けこんだ。

「どうしたね」

戸口から覗くと、三次は振り返って笑う。「申しわけありやせん」三次は言って屈みこむ。振り返って指の先に縄をぶらさげてみせた。「逃げられたようで」

くすり、と新太郎は笑う。子供たちはさぞ悪戦苦闘したことだろう。

「どうも済みませんね」

「いやいや」

鐘楼から出た三次はすぐ前で店を開いている楊枝屋の女に声をかけた。

「餓鬼を見なかったかい」

「いいや。いないのかい」

「逃げられた」

「だったら、誰かが逃がしたんだろうねえ。三次さんより仏心のある奴がさァ」

「まったく、人に断りもなく」

言ったが、三次の声は笑っている。新太郎たちも一緒になって笑っているときに、当の万造を呼ぶ声がした。

「万造さん、見つけました」

言ってふたり連れの男が小走りに寄ってくる。一方は時折万造の家で顔を見かける男だった。

「この飴細工屋が、妙なもんを見たそうで。境内の全部の連中に訊いてみましたが、この輪平だけでした」

「手間ァとらせて、済みませんねえ。ついでに申しわけないんですが、ちっと五重塔に昇って木箱がないか、見ちゃァもらえませんか。珍妙珍奇噺替、と書いてあるはず」

へい、と男は頭を下げて去っていって、その場には輪平という男だけが残される。

「それで輪平さん、妙なものというのは」

万造が問うと、輪平は塔の四層の屋根で人影らしきものを見た話をした。

「それは鐘楼で騒ぎが起きる、前ですか後ですか」

「前でさ」

「確かに人影だったかどうか、分からないんですね」

「ええ。ちっとの間だったもんで。ちょいと客の相手をしてる間に消えちまって、気のせいかとも思ったんですが」

「なるほど。輪平さんの店はどれです」

輪平は塔の北東にある露店を示す。

「すると、人影があったのは東側ですか」

「へい、さようで」
万造は少しの間塔を見上げてから輪平に視線を戻した。
「ときに、輪平さんは、火炎魔人を見やしませんでしたか」
「へい。やっぱり東っ側でしたんで。回廊のところに火の手があがって、見ると人の形をしております。仰天していると、崩れるようにして消えちまったんです」
「その火炎魔人と争う人影なんてのは、見たりしてないでしょうね」
「争うもなにも、奴の近辺には誰もおりませんでした」
「そうですか。ありがとう、商売の邪魔アして済みませんでしたね」
言って、万造は小金を握らせる。輪平は何度も頭を下げて店に戻っていった。同時に頭上から男の銅鑼声が響いてくる。
「万造さん、ありました。高欄の隅に」

「いったい、何が起こったんだと思う」
夜道を歩きながら訊いたのは新太郎だった。高欄の隅から読売りが置いていった木箱は見つかった。中をふたつに仕切ってあって、上は空洞、下には火鉢が仕込んであった。火鉢の中には炭が活けてあったが、見つけたときには火は消えていた。上には張りぼての人形を入れていたのだろう。その程度の空間に納まるのだから分解したり折り畳んだ

りしてあったはずだ。
「本当に何が起こったのでしょうか」
「万造君でも分からないかい」
「そんな意地悪をおっしゃるものじゃござんせん。わたしには何がなんだか」
「けれど、火炎魔人、つまり読売りが子供たちを使って妙な細工をしたのは、鐘楼に注意を向けるためなのじゃなかろうか」
「そういうことでございましょうよ。いま浅草は御覧の通りの人出ですから、何かで注意を引いて五重塔から人払いをしておきたかったのでしょう」
「だろうね。しかし、直さんと常さんはどうしてあんなところにいたのだろうね。ひょっとして呼び出されたのだろうか」
「かもしれません。前もって人払いのための仕掛けを用意しておいたぐらいですから、お二人が五重塔に来ることは分かっていたのだと思います」
うん、と新太郎は頷く。
「前もって直さんと常さんを五重塔に呼び出して、人払いの仕掛けを用意しておく。それから犯人はまず読売りの扮装で五重塔に入り、そこに荷物を隠して一度は表に出てしまう」
「はい。ひょっとしたら、そのときにすでに人形をいつでも使えるように用意しておい

たのかもしれません。それを五層の高欄の下に隠した、というのはどうでしょう」
「輪平が見た影がそれだというのだね」
「はい」
「準備を整えた犯人は、今度は人魂売りに化ける。これはなぜなのだろう」
「やはり二度も入れば怪しまれると思ったのかもしれません」
「なるほどね。今度は人魂売りに化けて、直さんと常さん、常さんについてきた左吉のあとから五重塔に入ったわけだ。そうしてそこでどうにかして人形を引き出して、直さんたちに襲いかかった」
「高欄はぐるりと一周しておりますから。壁の影ででも用意したのでしょうか。鐘楼はあの騒ぎでしたし、たぶん常さんたちは塔の北側にいたと考えられます」
「ああ、そうだね。東側だか、あるいは南側だかに隠した人形を引き出して、犯人はいつものように襲いかかったわけだ。直さんがその場に残って常さんを逃がそうとしたが、直さんは結局突き落とされてしまった。ひょっとしたら揉み合っているうちに落ちたのかもしれないが」
ええ、と万造は呟く。
「だけれども、そこからが分からない。犯人はそれからどうしたのだろう。屋根を伝って降りるわけにはいかないだろう。五重塔は注目されていたのだから」

「無理でしょうね」
「お糸が見落としたのでなければ、犯人は完全に消えてしまったことになる」
「こう考えてみてはいかがでしょう」と、万造はそう言ったが、あまり歯切れの良い口調ではなかった。「もしもこの世に妖怪変化がいないものなら、人が消えるはずがございません。だとしたら、やはり人魂売りは塔を降りたのです。それも出口から出ればお糸さんに見つかってしまいますから、屋根伝いに」
「しかしね、きみ」
ちょっと待ってください、と万造は手を挙げる。
「けれども火炎魔人が現れて、塔は注目されておりました。あの衆目の中で塔の外側を降りられるわけがございません。すると、考えられるのはひとつ、犯人は火炎魔人が現れて五重塔が注目される前に降りたのです」
「ああ、なるほど」
「四人が入って三人が出てくる。ひとりが消えたように見えますが、人は消えたりいたしません。ならば、ひとりが消えたのではなく、三人が四人に水増しされたと考えるべきなのじゃないでしょうか」
「水増し」
「はい。実際には三人だったものが、四人に見えただけなのだと。つまり、四人の中の

ふたりは同一人物、誰かが二役をしていたのではないでしょうか。火炎魔人が現れるまで、衆目は鐘楼に集中しておりました。この間ならば屋根伝いに塔を降りるのは決して不可能ではないかもしれません。縄か何かは必要でしょうが、それは木箱に仕込んでおけば良いこと。塔を密かに降りておいて、あとから人魂売りの扮装をして何食わぬ顔で中に入る。すると、帳尻は合うのでございますが」

「塔に昇った犯人以外の人物は、どうしたって鐘楼の様子が気になるだろうから、塔の北側に集まるね。その間に犯人は反対側から降りてしまうわけだ」

「はい」

「そうしてあとから入りなおして、中で着ているものを替えてしまうのだね。着替えの入った荷が人目につくのを気にするなら、同じものを先に持って入って隠しておけばいいわけだ」

「そういうことになりましょう」

しかし、と新太郎は眉を顰めた。

「けれどそれでは、あの三人の中の誰かが犯人だということになってしまう。中でも直さんは殺されたのだから犯人じゃない。すると常さんか左吉か」

言って新太郎は口の中に苦いものが湧いてくるのを感じた。

「しかし、常さんと左吉は一緒に降りてきた。どちらかが犯人ならそう言うだろう。言

わなかったということは、ふたりとも犯人ではないか、あるいは」
口に出すのを渋った言葉を、万造はあっさりと言ってのけた。
「ふたりとも犯人、つまり常さんと左吉さんが共犯だったか」
「万造君」
新太郎の声は尖る。それはあまり愉快な想像ではなかった。新太郎には常が人殺しをするようには思えなかったのだ。
「まあ、待ってくださいまし。前にも言ったように、火炎魔人は読売りであり、同時に人魂売りです。ところが、左吉さんはそのどちらでもない」
「ああ、伊沢屋の」
「それを持ち出すまでもなく、人魂売りも読売りも、誰一人として小男だとは申しません。左吉さんならば必ずそう証言した者があったでしょう」
「まさかきみは、常さんだと」
「ところが」万造は眉を寄せる。「平河さんが人魂売りに出会ったとき、私は常さんといたのですよ、鷹司のお屋敷に」
新太郎はぽかんとした。
確かにそうだ。新太郎が鷹司邸に着いたとき、約束の時間を半時ばかり過ぎていた。万造が時間通りに行ったのなら、常はそれ以前に屋敷に帰り着いてなければならない。

読売りを見失ってから鷹司邸に到着するまでにかかった時間は四半時かそこら、それより多いとしても半時ということはありえない。実際、新太郎は片倉町のあたりで一度懐中時計、義父からもらったロスコフを見て、すでに約束の時間が過ぎていることを確認していた。

「きみは時間通りに着いたのかい、万造君」

「時間より少し早うございました。お宅に入ってあの部屋に通されまして、少ししてから柱時計が鳴るのを聞きましたので」

「しかし、それでは、犯人はいなかったことになってしまう」

「はい」と万造は頷く。「それでわたしも先程から困っているのでございます」

三

直の通夜はその翌日、青山の梅窓院で執り行なわれた。新太郎と万造は夜の中、何やら重い気のする足を引きずって、青山まで出掛けたのだった。

整えられた本堂は、ちょうど弔問の客足が途切れたのか、あまり人の姿がなかった。そこが広い空間なだけに、棺のそばにぽつんと坐っている常の姿は哀れを誘った。すでに直の納棺が済んでいるのも、その理由が分かるだけに胸が痛んだ。

「平河さん、万造さん」
常は新太郎たちに気づいて深く頭を下げる。
「わざわざいらしてくださったのですか」
「おとりこみのところ、かえってお邪魔かとも思ったのですが。直さんとは御面識もいただいておりましたから、せめてお別れを、と参りました」
「ありがとう存じます」
棺にはすでに蓋がしてあった。それを見やる新太郎に、常はぽつんと声を落とす。
「お会いいただけるとよろしいのですが。なにしろ、剃髪もさせかねるような状態で」
「そうですか」
「せめてこれが病だったらと、そう思えて哀しゅうございます」
「御心中、お察しいたします」
深く俯いてしまった常の背を桂井老が撫でる。新太郎たちに目を向けた。
「わざわざありがとう存じます。どうぞ、離れにお礼のお席がございますので。これ、誰か西のお部屋に御案内申しあげなさい」
「考えてみれば」と万造は多恵に連れられて廊下を歩きながら言う。「常さんはこれで肉親のほとんどをお亡くしなのですねえ」

「ああ、そうだね」
残っているのは、京都の兄弟だけか。その兄弟とは特別交流のある様子もなく、さぞ寂しいことだろうと思われた。
多恵が口を挟んだ。
「本当に、その通りです、万造さん」
言って、多恵は不服そうに頬をふくらませる。
「常さまにしたら、お兄さまはお兄さま、お別れがお辛くないはずがないんです。それを御親戚の方々ときたら、これからお祝いでもなさろうかという按配なんですよ」
「ああ」新太郎は顔をしかめた。そのせいだろうか、どこかから賑やかな話し声が聞こえていた。「なるほどね」
「かと思うと、別の方は、さも常さまが何かなさったのじゃないかと言わんばかりだし。常さまがそんなことをなさるはず、ないじゃありませんか」
「そうだよねえ」言って、新太郎は足を止める。「ねえ、お多恵さん」
新太郎は多恵の肩を叩いて、脇の廊下に引っぱりこんだ。手近の縁側の様子を窺い、そこに腰を下ろすよう勧める。
「どうなさったんです」
「ここだけの話を少ししておきたいのだが」

「はァ」
「そんなに御親族の争いは熾烈だったのかい」
多恵はちょっと天井を見上げた。
「そうでございますね。こう申しては何ですけど、特に御生母さまの御実家の方々が」
「ああ、なるほど」
「あの方々にとっては、自分の血筋が鷹司の当主になるかどうかでいろいろと変わりがございますでしょ。それでもう、目の色が変わっていらっしゃったんです」
それは充分、理解できることだ。何しろ鷹司は政治表にも顔がきくし、熙通が築いた大きな財もある。
熙通が最初に政治表の近くに姿を現したのは堀田正睦の勅許工作のおり、次の井伊直弼のおりにも再び暗躍を行ない、勅許には結びつかなかったものの、港を持つ沿岸の諸藩の説得に成功、自身は自ら通事を買って出て、この成果は高く評価されている。そのまま野に在って歴代の外務大臣に協力し、その死の近くには、井上馨らと欧化政策を進めるためにも活躍した。
その一方で、熙通は対外貿易の中枢にいた。井伊に協力して工作したおり、港を持つ諸藩と強力な繋がりを作り、これらを連合して地紙同盟を結び、維新と共にこれを柿香御社と改名、共同事業を興して横浜に大がかりな築港工事を行ない、柿香御社が柿香会

と改名して貿易商の組合組織となった頃には、これに参画する人々で対外貿易は一手に握られてしまっていた。その主宰者であった熙通の懐に転がりこんだ財がどれだけのものか、その実数は新太郎にも想像がつかない。

「御実家の方々は、損得がらみでございますわね。かと言ってそもそもの御親族、鷹司の傍流の方々だの、あの方々は体面のことでございますね。欲がないだけ表向きはさほどでもございませんでしたけど、そりゃァ矜持はお高くていらっしゃる方々ですから、次男が継ぐのは恥だの、廃嫡騒ぎがあるのは恥だのと」

「なるほどねえ」

「かと言って、直さまはあまり真面目な華族さまじゃございませんでしたでしょう。それはそれで恥だと、皆さま」

言いかけて多恵は口を噤んだ。何人かの足音が近づいてくるのが聞こえる。それと同時に声高な会話までが聞こえてきた。

「殊勝な顔をしているが、内心嬉しくてしかたないのであろうよ」

「火炎魔人とやらに礼を言いたい気分だろう」

「そんなもの、あれがやったに決まっているじゃあないですか。直熙さまと一緒にいたのはあれと左吉のふたりだけだったのでしょう」

「まったく、兄を殺してまで家督が欲しいか。呆れたものだ」

しまいには母親の沢のことまで持ち出しての言いたい放題、それが遠ざかっていくのを新太郎たちは聞き耳をたててやり過ごした。

多恵がこれ見よがしの溜息を落として、新太郎もまた溜息を落とす。

「それで、その、菊枝さんのことはどうなのだい」

「それでございますよ」多恵はさらに深い溜息を落とした。「常さまのたったひとつの、御次男だということを数えるとふたつですけど、まァ泣き所ですから。常さまのお味方をなさっている御親族はねえ、とにかく手を切らせようと必死なのですけど。菊枝さんのお宅まで行っての直談判、菊枝さんも大変です」

新太郎は多恵の顔をまじまじと見た。

「きみは菊枝さんの味方なのかい」

「味方というわけじゃありませんけど。ですけど、次期公爵さまと遊女の仲、なんてちょっとお芝居みたいでよろしいじゃないですか」

新太郎は苦笑する。

「そんなもんかね」

「ただ、こう申しては何なんですけど」と、多恵は首をかしげた。「菊枝さんは何やら企んでいそうで」

「性根のきつそうな方だからね」

「そういうことじゃございません。つまりですね、常さまが御当主におなりだと、菊枝さんが奥様にお入りになることは、まず不可能なことじゃございませんか」
「だろうね」
「もしも直さまが御当主におなりでも、常さまが無一文になるようなことはございません。分家として新しく鷹司家を立てることだっておできですもの。それで爵位をいただいたお家だってございますし」
新太郎はぽかんとした。
「確かに、そうだ」
振り返れば万造も同様に虚を衝かれた表情をしている。
「分家ということになって、男爵だか子爵だかに納まっておしまいなら、もうすこし奥様の件に関しても融通がききますでしょう。だったら、あんなに家督にこだわる必要はない気がするんですけどね」
「それは考えてみなかったが、本当にそうだね」
「でしょう。それが、菊枝さんは鷹司の御当主は常さんだと、頑強に主張なさるわけです。かと言って、表向きだけでも切れたふりをなさるかというと、それもなさらない。あたしだったら、別れたふりでやりすごすとか、むしろ直さま側の方々と協定して、常さまが分家の当主におなりになるようにがんばってみますけど」

新太郎は内心で感嘆する。どうして、この娘は頭が切れる。
「菊枝さんはきみほど利口じゃないのかもしれないね」
「それは、そうなんですけどね」あっさり言って、多恵は再び首をかしげた。「でもあたしには、それがどうにも妙な感じで。ひょっとしたら菊枝さんは、直さま側の方に頼まれて、なんてことを考えたりもいたします。勘ぐりってものかもしれませんけど」
ふうむ、と新太郎は唸る。
「なるほどね。常さんは菊枝さんをずいぶんと誉めてらしたけど、やはりきみはそうは思わないのだね」
「きつい方ですから。おふたりのときには菊枝さんも、しおらしくてらっしゃるのかもしれませんけど」
「そうだねえ」
「ただ、常さまもどうなのかしら、と思うこともあるんでございますよ」
「どう、とは」
「いえね、あんまり唐突にお連れになったものですから。初子さまの喪も明けないうちにああいった席に足をお運びになって。それも、常さまからお知り合いにおねだりなさったそうですよ。それがどうにも常さまらしくないので妙な気がするんでございます」
「ふうむ」

「初子さまは、本当に常さまを可愛がっておいでしたし、常さまもそりゃあ初子さま大事になさってましたけど。けれど、実はいろいろとお考えになることがあったのかしら、と思ったり。なにしろ初子さまは本当にどこからみても御立派な元お公家さまでいらっしゃいましたから。御生前は常さまのお嫁さまに、と九条家や近衛家や徳川さまにお声をかけてもいらしたようですし。それでかえって、初子さまの目がなくなって、菊枝さんのような女性をお探しになったのかしら、と思ったりもいたします」

「なるほどねえ」

多恵はちょっと口許に手を当てた。

「いやだ、あたしったら、本当にべらべらと。これは内緒にしておいてくださいましね」

「もちろんだとも」

新太郎は笑う。

「ときに、きみは常さんと直さんがなぜ五重塔などにいらしたのか、知らないかい」

「直さまからお使いがあって、それで常さまはお出掛けでした。ですから、直さまから呼び出された、というのが当然の考えですけど」

「当然じゃない考えは」

多恵はちろりと舌を出す。

「あたしったら本当にお喋りですね。いえね、呼び出されてお出掛けになった場所であれでございましょう。ですから、実は直さまのほうも、呼び出されたのじゃないかしら、と思ったりもいたします」
「犯人に、かい」
「他に考えられませんでしょう。すると、その場合は、直さまの御周辺に犯人がいるということになってしまいます。なにしろお使いにいらしたのが、牛込のお宅の下働きでございましたから。もっとも、小金を握らせて、というのもございますけど」
「それはなんという人だい」
「角蔵という男です」
角蔵、と新太郎は復唱する。
「そう言えばきみは、牛込のお宅にお千代さんがいらっしゃるのを知っていたかい」
多恵は頷いた。
「ええ。と言っても、初子さまの御葬儀が終わって、しばらくしてからのことでございますけど。常さまも、それまでは御存じじゃなかったんです。牛込のお宅に連絡したら、お千代さまが出ていらしたとかで、あたしたちも吃驚したぐらいで」
「それでお千代さんはいらしてるのかい」
「今も離れにおいでですよ。これから御案内いたしますけど」

「鞠乃さんは」
「いらしてます。よく分からない方ですね、あの方も」
「どうして」
「進歩的すぎて、分からないだけかもしれませんけど。でもね、仮にも華族のお嬢さまが、婆やのひとりも連れずに東京までいらっしゃいますかしら」
「それは確かにねえ」
「最初にいらしたときぐらい、お父さまなりお母さまなりがついていらして当然だと思うのですけど」
新太郎は目を見開いた。万造を振り返ると彼もまたきょとんとしている。
「鞠乃さんひとりで訪ねていらしたのかい」
「そうなんですよ。妙なお話でございましょう。いちおう九条家の紹介状を持っておられましたし、九条公爵さまにお伺いしたら、よろしくとのことだったので、家にお入れいたしましたけど。けれど、公爵さまも鞠乃さんがどういう方なのかよく分かっていらっしゃらないふうだったとお聞きしました」
「よくお家に入れたものだねえ」
「でしょう。あの方と話していると、なんとなく言いくるめられてしまうんですよね」
なるほど、と新太郎は苦笑した。

「ああ、それと、輔さんがこちらにいらしているかどうかは知らないかい」
「それなら左吉さんが京都のほうに問い合わせたようです。そしたらね、驚くじゃありませんか。輔さま、もう昨年の暮れから、倉橋子爵さまのお屋敷においでなのですって」
「倉橋というと、京都の方の御実家の」
「御実家の御本家ですけどね。常さまも少し困っておいでした。だって東京にちゃんと御本邸があるのにねえ」
「それは確かに、少し外聞が悪い感じだね」
「そうでございましょう。でも輔さまときたら、麻布のお宅は建物が嫌だ、なんて。ずっと前、そう、初子さまの御葬儀にいらしたときも、常さまに売ったほうがいいなんておっしゃって」
「何かあるんじゃないのかい。もともと倉橋家は占いのお家だろう」
「でも、初子さまは本邸を気に入ってらっしたんですよ。御自分でもそうおっしゃってましたし。設計のときだって先代さまにも技師にもこまごまとおっしゃってお建てになったんですから」
「へえ、そうなのかい」と呟いて新太郎は腰を上げる。「いろいろとありがとう。済まなかったね」

多恵は急に不安そうにした。
「まさかあたしの話が記事になったりはいたしませんよね」
「しないよ」
よかった、と大きく息を吐いて、多恵は立ち上がる。しずしずと離れへ案内し始めた。

離れの一室には四人の人間が集まっていた。
中に入るなり、思わず新太郎が足を止めたのは、なにやら険悪な空気が漂っていたからだ。
「どうも」
そう声をかけると、鞠乃と千代、左吉は丁寧に頭を下げ、菊枝はそっけなく会釈をした。
一礼して多恵が退ると、左吉が女中に命じて茶器を出させる。新太郎と万造の前に運ばせて、改めて丁寧に頭を下げた。
「わざわざお越しくださいまして、ありがとう存じます」
「左吉さんも次から次へと大変だね」
「いえ。わたしなどは」
くすり、と笑ったのは菊枝だった。

「平河さん、左吉はね、嬉しいばっかりなんですよ。おめでとうと言ってあげなくては」

新太郎は顔をしかめた。やはりこの女は好きになれない、と改めて思う。

「菊枝さん」左吉は菊枝をねめつける。「なんということをおっしゃるんです」

「あら、ですけど、事実でしょう。性悪の女狐はどうしたって身を引くなんて殊勝なことは言いそうにないし、そりゃァ頭が痛かったんでしょうから」

「菊枝さん、いい加減になさってください」

左吉は厳しい声を出して、千代のほうに向き直った。

「申しわけございません。後生ですからお信じになりませんよう」

「ぬけぬけと」

「菊枝ッ」たまりかねたように左吉は怒鳴る。「いい加減にしろと言っているだろう。お母さまを前になんてことをおっしゃる。第一、わたしは確かに常さまのお世話を任されて今日まで来たけれども、直さまがまだ本邸においでの際には、常さまと御一緒にずっとお世話していたんだ。その直さまが亡くなられて、どうして嬉しいはずがあるだろう」

「あの」と控えめな声を上げたのは千代だった。「左吉さん、わたしは気にしておりません。左吉さんがそういう方でないことは存じあげておりますから」

菊枝は面白くもなさそうな視線を千代に向け、そっぽを向いた。
新太郎は千代の傍に向かう。
「先日は突然、お邪魔をしまして」
千代は目をしばたたく。
「思えばあの機会が、直さんとのお別れだったのですね。ぼくも大変に無念ですが、お母さまにはさぞお嘆きのことと推察申しあげます」
言って隣で俯いた鞠乃にも一礼をする。
「お千代さまも鞠乃さんも、さぞお力落としのことでしょう」
ありがとうございます、と頭を下げたのは千代、軽く息をついたのは鞠乃だった。
「御縁がなかった、ということでございますわね」
そのあっけらかんとした声に、新太郎は眉を顰める。鞠乃はそれに気づいてか気づかないでか、けろりと続けた。
「わたくし、どうも鷹司のお方とは御縁がないみたいですわね。もっとも父は、かくなるうえは何としても常さまに、と言うでしょうけど」
「あのまま我慢をして、本邸にいればよかったのに」
菊枝が毒のある口調で言ったが、これにもあっさりと頷いた。
「後悔先に立たず、ということですわね」

「残念だったわね」
「ええ、本当に」
新太郎も万造もさすがに鼻白んだときに、千代が立ち上がった。
「左吉さん、わたしはこれで」
左吉は狼狽したようだった。
「お千代さま、そんな。仮にも御生母でいらっしゃるのですから」
いえ、と千代は呟く。青白い顔で泣き腫らした目をふたりの女に向けた。
「わたしの息子は中畑直でございます。鷹司さまの御葬儀にわたしがいる理由がございません」
「お千代さま」
「直を連れて帰れないのが、なんとも恨めしゅうございます」
そう言い捨てて、千代は部屋を出ていく。左吉が慌ててあとを追った。

新太郎は万造と顔を見合わせつつ、気まずい思いでその場に坐っていた。
「失礼しましょうか、平河さん」
たまりかねたのか、そう万造が言ってきて、新太郎もそれに頷いたときに、廊下を戻ってくる足音が聞こえた。

「ああ、左吉さん、わたしどもは」
新太郎は言いかけて絶句する。左吉の後ろにあの少年を見つけたからだ。菊枝も鞠乃もまた、顔を上げたきり声を失った。
「これは」と、声を出したのは少年のほうだった。「妙なところで」
新太郎は声を出せなかった。左吉は怪訝そうにしながらも、少年を紹介する。
「皆さま初めてかと思いますので。こちらは当家御三男の輔さまでいらっしゃいます」
「輔」
呟いた菊枝は毒気を抜かれたように見えた。
輔は怜悧な目を菊枝に向け、少しの間、その姿を注視していた。次いで視線を鞠乃に移す。すうと目を細め、口角を上げて色鮮やかな唇をほころばせて言った。
「どうして、ここにお前のような者が」
鞠乃は立ち上がった。顔色が変わっているように思われた。
「輔さま」
左吉は問いかけるようにしたが、輔は左吉に目もくれない。細められた目がただ鞠乃を見ている。
「なにが目的だえ」
「左吉さん、わたくしは失礼いたします」

鞠乃は輔の脇を小走りに抜ける。あまりに突然のことに、新太郎もぽかんと見ているしかなかった。
「家人を謀って何の企みか」
輔は振り返らないまま言った。鞠乃が足を止める。
「何のことだか分かりません」
「悪意あってのことなら容赦しないよ」
鞠乃は返答しなかった。面伏せ、小走りに廊下を去っていく。輔はそれを横目で見送った。
「輔さま、今のはどういう」
左吉の問いに、輔は微笑う。
「お前が気にかけなくてもいいことだよ」
「お知り合いでらっしたのですか」
「知り合い」呟いて、輔はク、と笑いを漏らす。「どうだろうね」
新太郎は万造を見る。万造も怪訝そうに眉を寄せてみせた。
「左吉、そちらの方々は」
はい、と左吉は目をしばたかせる。
「そちらが有田菊枝さまで」

「ああ」と輔は笑む。「常兄さまの」
「それから、こちらが平河さま、お隣が万造さまと」
「なるほど、先に会ったのは、本邸からの帰りだったのだね」
輔が言って、新太郎は頷いた。
「さようです。輔さんは京都にお住まいだとお聞きしていましたが、いつから東京においでですか」
輔は気のない声を出した。
「あなたには関係のないこと」
しかし、と左吉もまた口を挟んだ。
「わたしも存じあげませんでした」
「お前も知らなくていいことだよ、左吉」
言って輔は踵を返す。
「煩型もおいでなのだろう」
「あ、はい。皆さま、あちらのお部屋に」
「挨拶をしておこう。省略すると、あとあと喧しいから」
では、と言って輔は部屋を出ていく。
「ああ、左吉、お前はいいよ。探せば分かるだろうから。奥だね」

「はい」
左吉もまた、どういう表情をしていいのか分からない、という体(てい)で輔を見送った。
「たいそう変わり者のようね」
そう声を上げたのは菊枝だった。左吉はちらと菊枝をねめつけて、それで返答に代える。新太郎たちに向き直った。
「平河さんは輔さまを御存じですか」
「うん、先だってね。お宅からの帰り道にお会いしたのだよ」
「そうですか。お知り合いのようなので、驚きました」
「知り合いというほどのものじゃない。ちょっと行き合っただけだけど、なかなか彼は忘れがたい人物だね」
「輔さまは少し変わったところがおありですから。わたしもお会いしたのは数えるほどで」
「めったにいらっしゃらないのかい」
「はい。前にお会いしたのは、初子さまの御葬儀のときでしたか。少なくとも、輔さまが当家をお訪ねくださるのは、不幸のあったときばかりです」
「先にお会いしたのはお宅のすぐ近くだったけれど、お寄りじゃなかったのだね」
「いいえ。近くにいらしてたのですか」と、左吉は驚いた様子だった。「以前、常さま

が学業を心配なさってお出ましを勧められたおりにも、東京には興味がない、とけんもほろろでございましたのに、いつの間にか本郷に。いったいどうして」

左吉は輔が消えたほうを見やる。

「ああ、左吉さん、ぼくたちはこれで」

「お帰りでらっしゃいますか」

「うん。常さんもきみも、これから大変だろうけど、決して無理にならないようにね」

「はい。ありがとうございます」

では、と菊枝に会釈して部屋を出、新太郎はふと左吉を振り返った。

「ときに。こういう席でこんなことを訊くのはなんだけれども、どうしてきみは常さんと御一緒でなかったんだい。少なくとも、五重塔ではあとから追いかけていたようだね」

はい、と左吉は頷く。深く面伏せるようにした。

「常さまはひとりで行くとおっしゃっていたのですが。わたしはどうにもおひとりでお出しするのが心配で」

「ああ、それで。実際、それは正解だったね。とにかく常さんだけでも御無事でよかった」

左吉はさらに面伏せた。

「はい」

四

「お千代さんをお見舞いしよう」と新太郎は帰り道、万造にそう言った。「あれではお可哀想だ」

万造が頷いて、新太郎は俥を探す。牛込まで急がせて、戸を叩いてみると顔を出したのはいかつい顔の中年男だった。

「はい」

「お千代さまはお戻りだろうか」

訊くと男は目を丸くする。

「いえ。本日当家では不幸がございまして」

新太郎はその声を遮った。

「まさか、まだお戻りでないのかい」

言うと男は怪訝そうにする。新太郎が千代が先に通夜の席を出たことを言うと、さらに目を丸くした。

「てっきりもうお帰りだろうと思ったのだが」

男は奥へ向かって声をかける。
「巳之助。お前少しそのあたりを回って奥さまを捜してくれないかい」
へい、と庭を回って顔を出した三十がらみの男に、細かく申しつける。
「こちらにお戻りの途中かもしれない。そのあたりを捜して、見あたらないようなら梅窓院まで行って奥さまの行方を尋ねておくれ」
「かしこまりまして」と巳之助は一旦奥へ戻り、すぐに黒羽織を着て提灯を提げて戻ってきた。「では、行ってまいります」
その背を見送って、新太郎は男に声をかける。
「ひょっとして、きみが角蔵さんですか」
「へい」と男は頭を下げる。「どうぞお上がりください。お待ちいただいたほうが宜しいかと思います」
「ああ、済まないね。失礼して待たせていただこう。お千代さまが心配だ」
はい、と角蔵は先に立って奥へ向かいながら頷く。
「大層なお気落としのようでございましたから。よりによってお通夜を抜け出されるなど、何か早まったことをお考えにならなければいいのですが」
言ってから、角蔵は足を止めた。
「申しわけありませんが、どうぞ勝手に奥のお座敷へ。この廊下の突き当たりでござい

ます。どうにも嫌な気がいたしますので、わたしも奥さまをお迎えに」
「うん。そうしてあげなさい。何だったらぼくらはお暇しよう」
「よろしかったら、こちらにおいでください。奥さまとすれ違ってしまうといけませんので」
「そうだね。では、留守居は引き受けたから」
よろしく、と頭を下げた男を新太郎は呼び止めた。
「お急ぎのところを済まないのだが、ひとつだけ。昨日きみが常さんに手紙を届けたとか」
はい、と角蔵は怪訝そうに頷いた。
「それは直さんからの手紙だったのかい」
「もちろん、さようでございますが」
そう、と呟いて新太郎は角蔵に行くように示す。角蔵は深く頭を下げて、小走りに廊下を戻っていった。
角蔵が出ていってしまうと、家の中はしんと音もない。どこからか吹きこむ風に乗って、庭の水の音が響いてきていた。本当にこれだけしかいない家なのだと、そう分かる。麻布の本邸の賑やかさに比べ、なんと寂しいことだろう。
万造を促して先へ向かいながら、新太郎はからからという音を聞く。何かが転がるよ

うな音だった。

「なんの音だろう」

左右を見渡してみると、すぐ先の脇廊下の向こうから風に乗って音は響いてくるようだった。なんの気なしにそちらに向かい、新太郎は曲がってすぐの襖が開いているのに目を止める。六畳の部屋を隔ててさらにその奥の、三寸ほど開いた襖の間から月の光が射しこんだ部屋の中に、白い丸いものが転がるのが見えた。それがからからと音をたてていたのだ。

新太郎はそっと部屋の中に踏みこみ、奥の襖を開けてみた。誰の部屋なのだろう、棚に並んだ洋書を見ると、おそらくは直の部屋ではなかったろうか。直自身、あんなことになるとは夢にも思わなかったのだろう、雑然と散らかった畳の上に丸いものが転がっている。張りぼての、提灯の笠か、あるいは大きな紙風船のようなものだった。大きさはちょうど人の頭ほど、それが縁側から入る風に吹かれて転がっている。からからと音がするのは、中になにか入っているせいだろう。

「平河さん」

万造が強い声を出した。部屋の隅を示したそこに新太郎も目をやって、思わず声を上げた。

珍妙珍奇噺替、と。墨の色も新しく、そう書かれた木箱がそこには置いてあったのだ。

「これは」

新太郎は駆け寄り、箱を検める。箱は真新しい。背負うように帯をつける金具はついていたけれども、まだ帯はついていない。箱の傍にこれからつけようとしたのだろうか、端布を粗く縫い合わせて膨らませた帯が放り出されてあった。

新太郎は背後を振り返る。ちょうど首の大きさの張りぼて。投げ出された糊の刷毛や無数の紙縒、ひからびた糊の椀、石綿の塊、人の足型を模した鏝。

「これは、万造君」

はい、と万造の声も硬い。

「そんな。直さんが火炎魔人だったと、そういうことなのかい」

木箱は開けてみると、中にはびっしりと石綿が貼られている。底には小さな火鉢が動かないように固定してあった。五重塔で見つかったものと同じ造作である。

「では、直さんが常さんを襲って、それで過って御自身が塔から落ちたと、そういうことだとでもいうのかい」言って新太郎は叫ぶ。「そんなことはありえない。直さんは闇御前に襲われたのだろう。左吉を常さんと間違えるはずもない。第一、直さんは家督など望んでいはしなかった」

万造も張り子の首を取り上げて重い息を吐く。本当に提灯のように折り畳めるのを、中から何かで支えてあるようだった。

「チロー館の事件はやはり狂言でございましたのでしょうか。だとしたら闇御前は、お千代さまでしょうか。そして黒衣が例えばあの角蔵さん」

「ありえないよ。お千代さんも直さんもそういった方ではない。あれほどはっきりと、家督など欲しくはないと言っていたじゃないか」

ひょっとしたら、と万造は顔を上げた。

「家督欲しさではなかったかもしれません」

「と、言うと」

「最初に言っていたあれでございます。実は直さんは何か常さんに、あるいは鷹司のお家に恨みがおありだったのでは」

は、と新太郎は息を呑んだ。

「ひょっとして初子さまへの」

「かもしれません。あるいは初子さまを殺めたのも直さんだったのかも。その初子さまに溺愛された常さんまでもを憎んで」

「そんな、莫迦な」

「しかし、他には考えられません」

万造が言ったところで、細い女の声がした。振り返れば千代が駆けて部屋の中に飛びこんでくる。万造の手から張り子の首を引っさらい、部屋の隅に駆けこんで木箱もろと

も背後に隠すようにして坐りこんだ。
「どうして、どうしてこんなところに」
千代は新太郎たちを見上げる。蒼白の顔が月の光に幽鬼の色をしている。
「お千代さま」
「出ていってください」
「ですが」
「出ていって。二度といらっしゃらないで」
万造が新太郎の肩を叩く。それで新太郎もひとつ息を吐いて踵を返した。
違うんです、と千代の叫びがその背を追いかけてきた。
「違います、あの子ではありません」千代は涙を溢れさせる。「こんなものは昨日までなかったんです」
新太郎は千代に向き直った。
「なんですって」
「昨日まではなかったんです。お湯呑みを下げに来たのでようく知っております。あの子が出掛ける前でした」
「しかし」
「すぐに出掛けて、そのままとうとう帰らなくて。夜に桂井さんが直は死んだ、と。そ

れで慌てて麻布のお宅に駆けつけて。喪服を取るために今日家に寄ったら、いつの間にかこんなものが」千代は言って泣き崩れる。「直ではありません。あの子はそういう子ではございません。殺されたんです、誰かに殺されてしまったんです」

新太郎は千代の前に屈みこんだ。

「直さんでないと、ぼくらもそう思っていますよ。直さんは私欲にかられて人を殺めたりなさる方ではありません。もちろんそう分かっていますとも」

「平河さん」

「万が一、直さんが犯人だと無理に仮定しましても、だったらなおさらこんなものを出しておくはずがありません。なるほど、誰かがここに持ちこんだのですね。直さんに濡れ衣を着せようという魂胆でしょうか」

「直を信じてくださるのですか」

「もちろんですとも。きっと昨日から今日にかけて、お宅もいろいろと大変だったことでしょう。その混乱に乗じて誰かが家に忍びこみ、こんなものを散らかしていったに違いありません」

ありがとうございます、と改めて千代は泣き崩れる。新太郎はその背を長く撫でていた。

五

翌々日、新太郎は万造を誘って本郷、帝大近くまで行く。帝大前の龍岡町、ここに倉橋子爵の所有する小邸があって、そこに輔が住んでいると、そう聞いたからだった。

ぼくはね、と新太郎は夕暮れの道を歩きながら言う。ちらほらと咲き始めた桜を目当ての人々が、上野方面へ歩いていた。

「ぼくはね、直さんが犯人だったとは思わない。信じたくないのだと正直に言ってもいい。なにも情でばかり、そう言うのじゃない。本当に直さんだったと、確実な証拠がない限り、気を抜いてはならないと思うからだ」

傍らを歩く万造の返答はない。

「直さんが犯人だったのなら、これで凶行は止むだろう。そう気を抜いてしまうのが恐ろしい」

「それがよろしいかと思います」

「直さんは違うと思う。左吉を常さんと間違えて突き落としたりする必要がない。直さんは左吉が伊沢屋へ行ったことを知っていたんだから。チロー館では闇御前に襲われた。黒衣が何者だかは知らないが、あれがいなければ直さんは危うかったとぼくは思ってい

る。たしかに常さんを浅草に呼び出したのは直さんだろうが、その直さんだって呼び出されてのことかもしれない。ぼくがむしろ気になるのは、直さんが何かに気づいていたということのほうだ。やめさせる、と直さんは言っていた。それが理由であんなことになったのじゃないのかと、そんな気がしてならないんだよ」

「では、常さんでしょうか」

万造は静かに問いかけてくる。新太郎は首を振って手に握っていた新聞を改めて握り潰した。そこには五重塔の事件について書いてある。お家騒動の件について触れ、常がやったと言わんばかりの論調だった。

「常さんも違う。徳川霊場脇で闇御前に襲われたあれ、あれがもしも狂言だったとしても、常さんは直前まで菊枝のところにいたんだ。菊枝に女が殺せないものなら、常さんにだって殺せない。しかも左吉が襲われたとき、常さんはお宅においでだった。これは親戚の方々だって証人になってくれるだろう。ぼくが読売りに会ったときだって、麻布のお屋敷においでだった」

万造は頷く。

「では、輔さんでしょうか」

「分からない。それをこれから尋ねてみようと思うんだよ」

その屋敷はひっそりとした風情の、割合に小さめの邸宅だった。倉橋と表札があるのを確かめて、新太郎は門を潜る。輿寄せから声をかけると、すぐに老齢の男が出てきた。すでに面会の約束はとりつけてある。それですぐに奥へ通された。

案内されたのは庭に面した広縁で、輔はそこに腰を下ろして庭を見ていた。案内の老人もお茶を振る舞ってくれた老婆も、上方の訛りがあったので、京都から呼び寄せたのかもしれない。

「残念な月だね」と輔は訛りのない声で言う。空にはうっすらと雲がかかっていた。

「わざわざわたしに話をとは、どういうことです」

新太郎は一礼する。なぜかそうしてしまう威厳のようなものがこの少年にはある。

「実は、初子さまのことを伺おうと思いまして」

輔は振り返る。恐ろしく怜悧な目をまっすぐ新太郎に向けた。

「わたしが直を殺したのじゃないかと、そういう話じゃなかったんだね」

「そこまではまだ、考えておりません」と新太郎は正直に言った。「前にとある人が、初子さまは殺されたのじゃないかと、そんなことを言っておられました。輔さまのお母さまでいらっしゃる小里さまは初子さまとは縁続きのお方、それで何か御存じではないかと」

「まさか、常かい」言って輔は新太郎の表情を窺うようにする。「ああ、違うようだね。

まあ、常はそういう気性ではないか」
「お兄さまを呼び捨てになさるのですか」
ああ、と輔は笑った。
「常も直をそう呼んではいなかったかい。これは父の方針でね。父は兄弟に序列をつけるのが嫌いだったんだ。外国ではそうするのだから名前を呼べばいい、とそう言って」
「そうですか」
輔は庭を見やる。池の代わりに白州の広がる庭だった。小島のように石がいくつか。石榴と松と、ねじれた木が多い。
「初子さまはね、あれは事故だね。少なくともわたしはそう聞いているし、実際にそうだと思うけど」
「どうして、夕暮れに海へなど出ていかれたのでしょう」
「さあ」と輔はそっけない。「大方、サイレンにでも呼ばれたのだろうね」
え、と問い返した新太郎に、輔は笑う。
「知らないのかい。近頃横浜の港には妙な化け物が出るそうだよ。綺麗な女の声でね、人を呼ぶのだそうだ。ついふらふらと海に出ると、その魔性が舟を沈めてしまう。そうして海難に遭う人があとを絶たないのだそうだよ。とても綺麗な女だけれど、下半身が海鳥なのだそうでね。半人半鳥というのだから、磯女じゃない。西洋にいるサイレンと

いう妖怪に似ているね」
「輔さん、ぼくは真面目にお話ししているんです」
輔はさも面白げに笑った。
「わたしもだよ。初子さまは横浜からお便りをくださって、どうやらサイレンが住みついたらしい、今度調べてみようと思っている、と言ってらした。それで本当に調べに行って、それで命を落とされたのだろうね。半分は自棄でいらしたのかもしれない。初子さまはつねづねこの国の行く末を見たくない、と言っておられたから」
「自殺の可能性もある、ということですか」
「自殺とは言ってない。死んでも構うものかという気構えがおありだったのだろう、という話をしているんだ」
新太郎は溜息をついた。
「輔さんは鞠乃さんを御存じなのですか」
「あれは化け物だね」輔はあっさりと言う。「いつぞや夜道で出会った、あれも化け物だ」
「闇御前や火炎魔人も、化け物だとおっしゃるつもりですか」
「会ったことがないから、分からない」
新太郎はさらに深い溜息をついた。

「わたしにはお家を狙う人に見えます。あるいは、鷹司のお家か、熙通卿に恨みのある者の」

「では、初子さまの亡霊だろう」と輔は笑った。「それとも倉橋の先代だろうかね。たしか鷹司とは御一新の頃に確執があったはずだから」

「確執」

「神仏分離だよ。神と仏を分けろという。先代はあれに猛反対なさっていたからね。反対に父はその推進派だった。あの人のいつものような西洋を睨んでの理屈でね。国に宗教は必要だが、それは外国人にも分かりやすく、しかも洗練されて、統一されていなくてはならないと。別に神をありがたがっていたわけじゃないのだけどね。まあ、諸派乱立する仏教よりも神道のほうが外国人には分かりやすいという話だろう。廃仏毀釈に反対して抗議を起こした僧侶たちが出たときに、父が画策してその責を倉橋、安倍家にも被せた。それを先代は恨んでおられたようだから」

「しかし、倉橋家は初子さまの」

「父にとっては関係ないこと。どうせ鷹司の先代に娶せられただけの妻、父は格別初子さまにも倉橋家にも用はなかったのだからね。むしろ家が家だから、嫌っていたよ。初子さまにも実家には立ち入りならぬと申しつけておられたぐらいで」

「そうなのですか」

「実際、倉橋の先代が危篤の際にも、初子さまはお帰りになれなかった。何とか父を説き伏せてお帰りになられたときには、すでにお父さまはお隠れだったそうだ。それをずいぶん恨めしそうに話しておられたのを聞いたことがある」

しかし、と新太郎は輔を見た。

「そういう輔さんのお母さまも、倉橋家ゆかりの」

「そう。初子さまが母の許に通うよう、お願いしてくださったらしいね。初子さまはお沢さんもお千代さんもお好きではなかったから、通えば煩く文句をおっしゃる。父もそれで母の許に通うのが、いちばん気楽だったのだろう」

「それは」と言ったものの、新太郎には先をどう続けていいのか分からない。「初子さまはずいぶんと」

「風変わりな人だろう。いろいろ事情もおありだったのだけれどね」

他の側室を嫌っていながら、敢えて自分が側室をあてがう初子の行動は理解に苦しむ。ましてや、実家に帰るなと命じながら、妻の顔色を窺って小里の許に通う熙通の心理もよく分からない。

新太郎がそう言うと、輔は笑った。

「単に初子さまと喧嘩をするほどの執着が、お沢さんにもお千代さんにもなかったということなのだろうね。初子さまと、つまらぬことで喧嘩をしたくもなかったろう。本当

のところは離縁なさりたかったのだろうが、旧教の国では離縁は不道徳だ。それで外国のお客さまの顔色を窺ったということだろうね。母のことも知人と紹介して妾だとは言わなかった。直と常を手許に引き取られたのも、正妻の子供だということにしておきたかったから」

「しかし、輔さんと弟さんは」

「そう、引き取られなかった。初子さまが反対してくださったからね。父は引き取りたかったようだけれど、とうとう果たせなかった」

そうですか、と新太郎は呟く。

「ときに、どうして輔さんは、東京にいらしたのですか。なぜそれを常さんには伏せておかれたのですか」

「いろいろとね」と輔は喉の奥で笑う。「常に言わなかったのは、麻布に来いだの、言われるのが面倒だったからだ。わたしは鷹司の者というより、倉橋の者だと、自分をそう思っている。だからあまり係わりになりたくなかったんだよ」

庭を見ながら言ってから、輔は新太郎と万造を見比べた。

「ふたりはどちらの生まれだい」

「ぼくは」と新太郎は唐突な質問に首をかしげながら答えた。「会津の生まれです。父親は会津の下級藩士で」

「お前は」
輔に問われて、万造は苦笑した。
「存じません。親は流れ者で、わたしを産み捨てていったそうですので。興行師に拾われてあちこちを転々とし、ひとり立ちできる歳に東京に参りました」
そう、と輔は庭に目を戻す。
「鷹司で何が起ころうと、わたしには関係がない。家督の行方にも興味がない。ふたりもあまり深入りはせぬほうがいい。どうせ大したことじゃないから」
新太郎はむっとした。
「お兄さまが殺されても、そうおっしゃるのですか」
輔は目を細めた。
「人の生き死になどということはね、実はとても小さなことなんだよ、平河さん」言って輔は立ち上がる。「夜が更けないうちにお帰りなさい。他家の騒動に首を突っこむのは勝手だが、それで足許を掬われないよう。あなたが思っているほど、今は安全な時代じゃないんだからね」

六

「平河さん、万造さん」
雑踏の中で澄んだ声がした。輔の家を訪ねてから三日、花もたわわに咲き始めた浅草は、カンテラの明かりと夜桜見物の客を狙った夜見世で賑わっている。普通は昼間で閉める興行も、遅くまで開けているようだった。
新太郎は軽く手を挙げ、隣に立つ万造に目をやる。
「なんだい、そんな顔をするものじゃないよ」
万造は笑いを噛み殺そうとしていたが、ほとんど成功していなかった。
「いえ。連れがあるとおっしゃるので、どんなお連れさんかと思っていれば」
娘は下駄を鳴らして小走りにやってくる。
「こんばんは」多恵は笑って言って頭を下げた。「本当にパノラマ館に連れていってくださるんですか。あたし、嬉しくって」
「ああ、パノラマ館でも花やしきでも。お宅はまだ大変なのだろうね」
新太郎が言うと、多恵は含みありげな目つきをする。
「やっぱりあたしのお喋りが目的なんですね」

「ああ、いや」
「喋って見物に連れていっていただけるなら、口から先に産んでくれたおっ母さんに感謝しないと」
パノラマ館は二十三年、上野公園に開場した、その名も「パノラマ館」を嚆矢とする。立て続けに浅草には「日本パノラマ館」が開場、翌年以降、続々とパノラマ館が開場した。ここ、浅草にもふたつ目の「美術パノラマ」が開場している。
「どちらを観たいかね」
「美術パノラマは世界周航なんですよね。日本パノラマ館は」
万造は軽く苦笑する。
「先月、平壌総攻撃に替わったばかりです」
「じゃ、美術パノラマだわ。人が死ぬところなんか観て、何が面白いんでしょうね」

パノラマを観て花やしきを覗いて、花の下をそぞろ歩き、近くで茹で小豆を奢る。小店の主人とは知り合いなのだろう、万造が挨拶をしていた。
「こうして外に出られるくらいだ、そんなにお宅は大変でもないのだね」
新太郎が訊くと、多恵は頷いた。
「常さまは宮内省に行かれたり、華族会館に行かれたり、御挨拶まわりにお出掛けにな

ったりと大変なようですけど。あたしたちはもう。御親族もあらかたお帰りですし」
「ずいぶん気を落としていらっしゃったようだけど、少しはお元気になったろうか」
「ええ、多少は。直さまとはほとんどお付き合いがございませんし、あんなに落胆なさるなんて、あたしたちも思っていなかったんですけどね」
「そう」
「やっぱり、小さい頃には一緒にお暮らしだったんですから、お寂しいんでしょうね。つねづねそうじゃないかと思ってましたけど、初子奥さまの直さまへのなさりようには、お心を痛めておいでだったのだと思います。常さまはお優しくていらっしゃるから」
「うん、そうだね」
「菊枝さんのことも、初子奥さまに対する常さまなりの精いっぱいの反抗、というのだったんじゃないでしょうか。お忙しいせいもおありでしょうけど、御葬儀いらい、すっかり御疎遠で」
「おや、そうなのかい」
かえって寂しがって、菊枝を離さないのではなかろうか、と新太郎などは思っていたのだが。
「それで、直さんのお宅はどうなるのだい」
「あのまま、お千代さまにさしあげてしまうおつもりのようですよ。お寂しいだろうと、

下働きの娘を二人ほどお千代さまのために雇われたぐらいですから」
「ああ、そりゃあ、いいことだ。ひとり暮らしは気が滅入るものだから。そう言えば、鞠乃さんは」
「まだ牛込のお宅においでのようですよ。この間、お寺でお千代さまを怒らせておしまいだったのでしょう。それでもまだいらっしゃるというんですから、ひょっとしたら菊枝さんよりずっと気の強い方なのかもしれませんね」
「確かにね」新太郎はあの気まずい光景を思い出して苦笑した。鞠乃の豹変ぶりは実際のところ、見ていて気持ちのいいものではなかった。「そう言えば、あのお宅はそもそも鷹司家の別荘か何かなのかい」
「いいえ。初子奥さまが直さまのために、というか、なんと申しますか、とにかくそのためにお買いになったんです」
「ふうむ」
多恵は言って椀を置き、そうしてぱちんと手を叩いた。
「そうだわ。いつか平河さんがおっしゃっていたでしょう、人魂売りとか、って」
「ああ。それが」
「あたし、見たんです、それ」
え、とこれには新太郎のみならず、万造も声を上げた。

「いつだね」
「もう三日か、それくらいです。御葬儀の翌日ぐらいでしたもの。門柱の瓦斯灯に灯を入れに行ったら、家の前を歩いていたんです。法被を着て背中に絽の袋を担いだ男が。最初は蛍売りかしらと思ったんですけど、その蛍というのが平河さんの拳ほどもあるやつで。二匹入ってました。ああ、これが例の、と思ったんですけど、気味が悪くって」
「人魂売りなら、わっちも見ましたよ」
唐突に声がして、振り返ると小豆屋の親父だった。
「見たって。いつ」
「つい先日。なんですか、五重塔で人死にがあった、あの夜のことでさ」
え、と新太郎は呟く。
「火炎魔人だ、ってんで、人が走っていきますでしょう。そのときにのんびり反対に向かって。噂には聞いてたんで、すぐにぴんと来ましてね、それでどこの者だって声をかけたんですけどね、返事もせずに行っちまいました」
では、直が殺された後なのだ、と新太郎は目を見開く。
「法被に黒絽の袋を提げてました。人の拳ほどもあるふわふわしたものを四つも入れてましてねえ」
ちょっと、と新太郎は親父を見た。

「四つ。ひとつではなく」
「へえ。間違いなく四つで。数えましたから」
新太郎は首をかしげる。五重塔の番をしていたお糸の記憶を信じるなら、袋の中の人魂はひとつだけだったはず。それきり塔から消え失せて、再び現れたときには三つ増えている。
「まるで、鐘楼の中から消えた子供たちを攫ったようですね」
万造が言って、新太郎はぎくりとした。それを見て、万造は苦笑する。
「単なる偶然でございましょうが」
ああ、と口を挟んだのはやはり小豆屋の親父だった。
「鐘楼から消えた餓鬼。馬道町の丁字屋ってぇ仲見世の餓鬼でしょう。それが、あれきり姿が見えないそうで」
え、と新太郎は腰を浮かせた。
「なんだって」
「鐘楼から消えて、それきりなんだそうで。どこかで何かあったんじゃねぇかと、千束村のほうまで人を出して捜したんですが、あれきり。流行の拐かしだろうかってぇ、そういう噂で。まァ、放浪癖のある悪たれどもですんで、そのうち戻ってくるんじゃないかと、みんなそう言ってはいるんですが」

そうか、と新太郎は額を押さえた。これではまるで、人魂売りに攫われたようだ。だが、そんなことはありえない。だとしたら読売りに口封じのため、殺されでもしたのだろうか。考え過ぎだ、と思う一方で、嫌な気分が増してくる。殺される子供たち、そのまま死体は隠されて。

新太郎はひとつ頭を振った。

「とにかく、早く見つかるといいね」

「まったくで」

親父が苦笑して退ると、多恵がほうっと息を漏らした。

「気味の悪い話」

まったくだね、と言いながら、新太郎は考えを巡らせる。左吉は人魂売りではなく、常もまた人魂売りではない。そうして、直もまた確実に人魂売りではなかったのだ。死後に目撃されているのだから。それはあの日五重塔で消えて、多恵に目撃された通り、また鷹司家の周囲を徘徊している。

「お多恵さん、常さんには重々気をつけてあげてくださいね」

多恵はきょとんとした。

「そりゃァ、もちろん。どうしたんですか、急に」

「いや、なんとなくね」

新太郎は笑ったが、その耳に、ふいに雑踏のざわめきが飛びこんできた。
「まァ、火炎魔人」
え、と新太郎は顔を上げる。
「十二階ですって。気味の悪いったら」
「本当に」
ふたり連れの女だった。とっさに新太郎は立ち上がり、ふたりの傍に駆け寄っていた。
「済みません、いま火炎魔人の噂をしてませんでしたか」
ええ、と女たちは顔を見合わせる。
「出たんですってよ。ちょっと前」
「十二階で、ですか。いつ」
「さあ。宵の口じゃないかしら。詳しいことは知りませんけど」
ありがとう、と言って新太郎は駆け戻る。
「万造君」
「いま、誰か詳しい者を探してまいります。平河さんはここでお多恵さんを」
分かった、と言いかけたとき、ふいに通りを包んだざわめきが高まった。北、千束村に続くほうから浮き足立った気配が小波のように押し寄せてくる。
「死」

「男の」
「の死体が」
まあ、と多恵は身を硬くした。新太郎が見やると、その視線を受けて万造は頷く。
「ちょっと行って様子を見てまいります」
新太郎が返答するのも待たず、万造は雑踏をかき分けて消えていく。じりじりしながら待つことしばし、やっとのことで戻ってきた万造は硬い表情をしていた。
「万造君、どうだったね」
万造はわずかに言い淀んだ。
「闇御前だと思われます」
え、と呟いた新太郎に万造は頷く。
「傷の具合がいかにも。申しわけありませんが、平河さん、お多恵さん、一緒に来ていただけませんでしょうか」
新太郎の胸に不吉なものが差した。
多恵もまた青ざめて立ち上がる。
「万造君、まさか」
「あれは左吉さんだと思います」

それは間違いなく左吉だった。露店で賑わう道のはずれ、人気のない荒れ地の茂った草の中に倒れていた。喉許は無惨なありさまだったが、顔にはさしたる傷もない。蟹に似た顔が驚愕した表情を浮かべていた。

多恵の弁によれば、左吉は今日午過ぎに出掛けたが、行く先は告げなかったという。どれほどの時間そこに放置されていたのか、花冷えの夜、左吉はすでにしんと冷たかった。

駆けつけてきてその身体に取りすがった常の体温で、少しは温まっただろうか。

同じ夜、十二階から落ちたのは、付近の水茶屋の女だった。ちょうど新太郎らがパノラマ館に入った頃合、夜の十二階は人も少なく、付近の人波も途切れがちだった。それでこの人出にもかかわらず、大した騒動にはならずに済んだものらしい。死んだ女の髪はひどく焦げていたが、あの手形の痕はなかった。十二階の木戸番が、中に入っていく読売りの姿を見ていたが、降りるところは見ていない。

女の死体が運ばれたあとの地面を見下ろして、新太郎はぽつりと呟く。

「どうして、手形がなかったのだろう」

「しかも今度は刃物を使ったようですね。傷があったそうでございますよ」

「やはり、五重塔に手形を残してきてしまったからだろうね。ならばどうして左吉のよ

うに爪で襲わなかったのだろう」

「はい、本当に」

七

立て続けに二つの葬儀をこなさなければならなかった常から丁重な招待状が届けられたのは、左吉の葬儀が済んで二日、いつになく花の長い桜が満開の頃だった。

呼ばれて出掛けたのは上野、凌雲院の一画をこの夜、特別に借り受けたという。約束の時間、万造とともに車坂を登ると、鷹司牡丹の入った提灯を手にして鷹司家の桂井老と数人の男衆が待っていた。

案内されながら、新太郎は忍ヶ丘を見渡す。そもそもここ上野公園一帯は、四季折々に景観の名所、寛永二年、将軍家光の頃に江戸の鬼門鎮護のため東叡山寛永寺を建立して、宏大壮麗な大伽藍を築いた。徳川将軍家の菩提寺として長く繁栄してきたのだが、御一新が明けてみると、そこは朝敵の聖域だったというわけだ。

上野戦争で廃墟と化したその聖域には、博物館が建ち、植物園が設けられ、勧業博覧会の会場が設置された。文明開化を象徴する広大な公園だが、そこには江戸がたわめられている。

公園の桜は月光にいよいよ白かった。踏みにじられた聖地の地下から怨念を吸い上げて、白く夢幻の花が咲く。江戸の怨恨のかけらのようだ、と新太郎は思う。あるいは、散華した開化の夢のかけら。

鷹司家の家人に案内されたのは凌雲院の南の外れ、咲きほころんだ桜の枝々が夜の中に花弁を落としこんでいるのが、いかにも美しかった。そこに張りめぐらされた幕の裾には家紋の牡丹、土の上には由緒ありげな折り畳みの椅子と几が並べてあって、足許には紫の毛氈が敷き詰めてある。

その幕の内に大きく枝を差しかけた古木の下にいるのが常だった。すでにその場には菊枝、鞠乃と千代が揃っていた。新太郎と万造が着いてすぐに、輔が到着して桂井老が入口の幕を落とす。それに促されたように、常が丁寧に頭を下げた。

「今夜は、皆さまをお呼びたてして申しわけございません。わざわざのお運び、ありがとう存じます」

言って常は、やんわりと微笑う。女中たちが硝子の杯を持ってきて、几の上に並べていった。

「本来ならば当家は喪中、こうしたお席を設けられるはずもありませんが、兄、直はともかく、左吉の回向のつもりでございますれば、ごく内々の、左吉とおなじみの方々にお越しいただいたのでございます」

常は杯に酒を注していく女中たちを見守る。

「そういう事情でございますので、不調法は百も承知で今夜は家人もお相伴にあずかりたく存じます。手向けの場でございますので、魚肴はお出しできません。そもそも当地は寛永寺の昔、魚肴鳴り物禁止の場でございますので、どうかお許しくださいませ」

左吉のための催しなのか、と新太郎は思う。それでこんなに濃厚に何かの儀式の気配がするのか。

見れば、下座に揃った桂井老をはじめとする男衆は紋付袴姿、女衆も色無地に紋付の黒羽織、当の常も洋装ながら黒の礼装と、どこまでも儀式のにおいが濃く漂っている。

「堅苦しいことは申しません。今宵のお席を左吉を思い出すよすがにしていただければ、嬉しく存じます」

悲しげに微笑った様子が、ひどくはかなげに見えた。紫の毛氈に散った桜が白い模様を描いていくのまでが、いかにも寂しい。十二階から見た夜景のように、あまりに寂しくて不安に思った。

「本当に左吉さんへの回向なのでしょうか」

ぽつりと言ったのは万造だった。常は首を傾けて万造を見る。

「もちろんですが」

万造は常の言葉を遮る。

「わたしにはこれが、常さんの回向に見えて仕方がないのでございますが」
常は目を見開いた。
「お別れの場に見えるのは気のせいでございましょうか、常さん」
新太郎は密(ひそ)かに息を詰める。なにやら不安なこの寂しさ。その正体を言い当てられた気がした。
常は微笑う。月のせいか花の作る影のせいか、やはり寂しい顔に見えた。
「もちろん、万造さんのお気のせいだと思います」
万造は深い息を落とす。その顔を新太郎は見やった。
「どうしたのだい」
「いえ。そういう気がしたものですから。気のせいならばよろしいのです。わたしには一瞬、常さんは左吉さんと一緒に葬(ほうむ)られてしまうおつもりなのかと」
縁起でもない、と新太郎は万造と常を見比べる。
「確かに立て続けに御不幸があって、さぞかしお気落としだろうけれども、それは過ぎた心配というものだよ」
「生きるのが嫌になることもございますわね、平河さん」と言ったのは千代だった。
「人が死んで遺(のこ)されることほど、悲しいことはございません。どうせ何一つ取り返しがつかないのなら、もう何もかも放り出して逃げ出してしまいたいと思ったりもいたしま

す。常さんがそういう気分にならなくても不思議はございませんでしょう」

千代は足許に目を据えたまま、毛氈の上の花びらを睨むようにしている。ひょっとしたら直のことを思い出してたまらなくなったのかもしれなかった。

「本当に、後を追っていけるものなら行きたいと、そう思うのが人の情というものです」

「それは、分かります」

「家督だ何だと、くだらない。そんなもののために死んだのかと思うと、鷹司の家までが恨めしゅう思えます。直を惜しんでくださった常さんなら、そう思ってくださるのではないでしょうか。わたしは鷹司から逃げ出してしまえば済むことですけれど、常さんはそれもおできにならない。ましてや身近に兄を殺めた者がいるかもしれない、その犠牲の上に継いだ家督と思えば、いっそうのことでございましょう」

きり、と千代は常を見る。それは無理にも同意を求める表情だった。常はそれを受けて寂しく微笑う。

「本当に、お千代さまのおっしゃる通りでございます」

「誰が左吉さんにあんなことを。きっとその者が直も。その者は今頃さぞかし笑いが止まらないことでございましょう」と千代は菊枝を見た。「そうはお思いになりませんか、菊枝さん」

対する菊枝は、平然としたものだった。
「きっとそうでございましょうね」
「あなたは犯人に心当たりがございましょうね」
「いいえ、ちっとも」
「白々しい」
新太郎は席を立つ。千代の肩に手をかけた。
「お止しなさい、お千代さま。お怒りは分かりますが、菊枝さんに当たってももう仕方のないことです」
「いいえ、きっとあの菊枝が」
新太郎は首を振る。
「菊枝さんではありません。直さんを殺したのも、左吉さんを殺したのも、菊枝さんではないんです」
千代はぽかんと新太郎を見上げた。その他の視線も集まるのを新太郎は感じる。その目を新太郎は見渡した。
「せっかくのお席で無粋な話ですけれど、こうしてお身内を疑い続けるのも辛い話、いっそ膿は早くに出してしまったほうが」
新太郎は常を見た。

「平河さん、ですが」
「ぼくは多分、犯人を知っていると思います」
かたり、と何人かが腰を浮かせた。
「先日、直さんが浅草寺で亡くなりました。火炎魔人とやらに五重塔から突き落とされたんです。あの日、まず夕暮れどきに読売りが塔に入ったのを、木戸番の老婆が見ています。読売りは塔に昇り、背負った木箱を中に置いて出てきた。そして夜、今度はその五重塔に直さんが昇ったのです。次いで常さん、左吉さんが。そのあとを追うようにして人魂売りの男が入っていきました」
言って新太郎は指を示した。
「塔から落ちたのは直さん、出てきたのは常さんと左吉さん」順に指を折っていくと、小指だけが残る。「御覧のようにひとり、数が合いません。人魂売りはついに塔から出てこなかったんです」
しんと誰もが新太郎を見ている。
「けれども人が宙に消えるはずがない。するとこれは、先に入った三人のうち、誰かが塔の外側を降り、姿を変えて何気ない顔であとからもう一度入ったことになります。しかも、ぼくは以前、増上寺裏で人魂売りに行き合ったことがある。これを追って袋小路に入り、そこで人魂売りではなく読売りに出会いました。人が消えないものなら、これ

は人魂売りが袋小路に入り、そこですばやく着物を替えて読売りに扮したとしか考えられないのじゃないでしょうか」

新太郎は全員が納得するのを待って少しの間を作る。

「この読売りは実は火炎魔人が現れた夜、必ず付近で目撃されているんです。火炎魔人が化け物ではなく人だとするなら、燃えたのは人形、手形は灼き鏝、誰かがそれだけの仕掛けを持ちこまねばならない。おそらくそれが読売りで、木箱の中に仕掛けを隠していたのだろうと考えられる。きっと」と新太郎は千代の顔を見た。「木箱の中に火鉢を入れ、石綿を貼って、炭火の中に鏝を埋めておいたのでしょう」

そうとだけ言うと、千代は感謝するように小さく目を伏せた。

「つまり火炎魔人は、あるときは読売りの姿をとり、あるときは人魂売りの姿をとって帝都を徘徊していたんです」

新太郎は言って息を継ぐ。

「さて、この人魂売りが塔の中に入って、とうとうついに出てこなかった。これは中で人魂売りが扮装を解いたからでしょうか。ところが、すると妙なことが起こるんです。つまり、三人のうち誰かが人魂売り、つまりは火炎魔人だと考えられるわけだけれども、左吉は体格からいって人魂売りではない。直さんが死んだあとも、人魂売りは現れているから、直さんもまた犯人ではない」

「まさか、常さんが」

言ったのは千代と菊枝が同時だったが、新太郎は首を横に振ってみせた。

「いえ、常さんも違うんです。なぜならぼくが人魂売りに行き合ったとき、常さんは万造君と本邸にいたからです」

安堵するように落胆するように、菊枝と千代は息を吐く。

「するとどうでしょう、誰も人魂売りではなかったということになってしまう。人魂売りがいなければ、火炎魔人もない道理、火炎魔人が現れた以上、やはり人魂売りは宙に消えたことになってしまうんです」

くすくすと鞠乃は笑った。

「じゃァ、直さんは妖怪変化に魅入られてしまったんですのね」

「いいえ」と新太郎は否定する。「そんなはずはありません。妖怪などというものは、この世にはいないのです。だとしたら考えられることはひとつ、火炎魔人は塔の中に入らなかったのだと」

その場の全員が怪訝そうにした。

「実は五重塔の事件の前、ぼくは直さんにお会いしました。そのとき直さんは、自分は犯人の考えていることが分かった、と言ったのです」

え、と上がった声は幾人分か。

「おそらく直さんはチロー館で襲われたときに、襲ったのが誰だか、何を目的のことだか分かってしまったのだと思います。やめさせる、と言ってました。犯人に凶行をやめさせる、と」

「直が、そんなことを」

声を上げた千代に、新太郎は頷く。

「常さんが五重塔に行かれたのは、直さんからの手紙で呼び出されたからです。そうですね、常さん」

ええ、と常は半ば呆然としたように頷く。

「直さんは常さんを呼び出して、どうするつもりだったのでしょう」

「殺すつもりだったのよ」と菊枝が言って、無言の非難がその場を飛び交う。「きっとそれで反対に落ちてしまったのだわ」

「そうではありません。直さんの言葉から推測すれば、常さんを犯人と見なして説得するため、あるいは、常さんを襲おうと現れる犯人を捕まえるため、とそう思われます」

「どういうことですか」

訊いた千代に、新太郎は頷いてみせる。

「それはこういうことです。そもそもの最初から、果たして狙われていたのは直さんだったのでしょうか、常さんだったのでしょうか。それとも」と新太郎は敢えて言葉を切

った。「それともおふたり、両方だったのでしょうか」

あ、と誰かが声を上げる。

「ひょっとしたら狙われていたのは、常さんでも直さんでもなく、おふたりの両方だったのでは。直さんはチロー館で、それを分かってしまった。それで犯人が常さんをも狙っていることを知って、罠にかけようと、そう考えたのではないかと思うのです」

すると、と千代も菊枝も同じく言って、平然と坐っている輔のほうを見た。

「ひょっとしたら直さんは、それで常さんを呼び出し、敢えて犯人にそれを教えたのかもしれません。あるいは、犯人から呼び出しがあったので常さんを呼んだのかも。いずれにしても同じです。たとえ直さんを狙って犯人が五重塔に来たとしても、そこに常さんがひとりでいれば、必ず常さんを襲うでしょう。直さんはその現場を押さえようと、先に塔に入り、無理にも屋根伝いに降りて人魂売りの扮装をして中に入った。これはどこからか監視しているかもしれない犯人の目を慮ってのことだと思われます」

「でも、なぜ人魂売りなんかに」

千代の問いに、新太郎は、「それが近頃流行りの噂だったからではないでしょうか。変装して塔の中に入りたい、そのときにふと思いついただけではないかと。実際、あの日、本当の人魂売りが事件のあと、浅草に現れています。ですがこの人魂売りは人魂なる光の玉を四つ持っていた。五重塔の中に入った人魂売りが持っていたのはひとつだけ。

つまり、この人魂売りは別人です」

そうか、と呟いた多恵に新太郎は笑ってみせる。

「つまり、あの日塔に入ったのは直さんと常さんと左吉の三人、ですがこの誰も犯人ではありません。では、犯人はどうやって直さんを殺したのかと言いますと、これは何かのからくり、自動人形のような仕掛けによるものではないかと思うのです」

誰もがぽかんとした。

「犯人は読売りに化けて塔に入り、この仕掛けをいたします。おそらく弓のようなもの、それで灼き鏝を飛ばすのではないでしょうか。その仕掛けの引き金をひくのは、やってきた誰かがそれとは知らずにやってしまうのか、あるいは遠くから糸でも使うのか、そのあたりの詳しい仕掛けは犯人に訊いてみなければ分かりません。ですがそれによって直さんは塔から落ちたのだと、そう思うのです」

「でも」と菊枝は声を上げた。「直さんは火炎魔人に襲われたって、そう常さん自身が」

「ええ。ひょっとしたら、犯人を待つ間、塔で出会った直さんは常さんに犯人の話をしたのかもしれません。それで常さんは犯人が誰だか知ってしまった。それは常さんもよく御存じの人で、思わず庇ってしまうような人だったのではないでしょうか」

誰もがしんと口を閉ざす。そうして輔をもう一度見やった。

「塔から屋根伝いに降りるのは、女性ではとうていできないことです。ここまでくれば、

輔さんだとしか、ぼくには思えません」
新太郎の言葉に、輔はくすりと笑った。
「そんな仕掛けが本当に作れるものかな。どうやって狙いを定めます」
「それは」
「時間を置けば、灼き鏝は冷めてしまうのではないかな。残った仕掛けはどうします。灼き鏝を残したという話は直のとき以外は聞かないけれど、どうやって取り戻したんだい」
「それは」
「からくり仕掛けを唱(うた)っておいて、肝心のからくりがお粗末じゃあ観客は納得しない」
「でも、きみが犯人だ」
新太郎が言うと、輔は笑った。
「わたしじゃない。何だったら証人を訪ねてごらん」
「証人」
「直が死んだその日、わたしはさる場所にいた。このうえもない証人になってくれそうな人たちのところにね」
「どこです」
挑(いど)むように言った新太郎の声に、輔はあっさりと答えた。

「宮城」
これには新太郎も愕然とせざるをえなかった。
「陛下にお目にかかるためにね。なんでも御都合がお悪いようで、ずいぶんと待たされたけれどもとうとうお会いできなかった。これは侍従その他の人々がいくらでも証人になってくれるだろう」
そんな、と新太郎は呟く。そんなはずはない。他には考えられないのだ。
常は軽く息を吐いて深々と頭を下げた。
「本当に親身になって考えていただいたようで、心からお礼を申します」
「いや、常さん、ぼくは」
ありがとうございます、と深く頭を下げられてしまうと、新太郎には言葉がない。
「いや、どうも」新太郎は赤面した。「大変な失礼をしてしまったようです」
常はやんわりと微笑う。
「輔も気にはいたしませんでしょう。どうぞお気になさらず」
「済みませんが」と口を挟んだのは万造だった。「無粋ついでにお多恵さんにひとつお訊きしたいのですが」
呼ばれて多恵は、ぱちぱちと瞬きをする。
「常さんは犬を三頭飼っていらっしゃいますが、二頭は秋田犬、三頭目はなんという犬

なのでございましょうか」

多恵は伺いをたてるように周囲を見る。そのあげくに明瞭に答えた。

「シェパアドという独逸の犬です」

え、と新太郎は呟く。

「お多恵さん、それは尾の巻いてない大きな犬ではなかったでしょうか」

「はい。ふっさりとまっすぐな尾で」

「狼か狐に似た」

ええ、と多恵は邪気もなく答えた。

「犬よりは狐に似ております。狐とは違って黒いですけれども。頭から背中にかけてが黒くて、おなかのあたりが狐色の」

多恵の表情が返答の途中から変わった。彼女は自分が言った言葉の、隠し持つ意味に思い当たったのだ。

万造は静かに言い切った。

「それが闇御前の遣う、黒狐の正体だったのです」

しんと凍った空気を裂いて、音もなく花が散り落ちる。

「常さんには馴れているけれども、他の方の言うことはなかなかきかない、大きな見慣れない洋犬。それを遣う闇御前という魔性、あれは常さんだったのでございます」

常は目を伏せていた。桂井老が声もなく立ち上がり、そしてその場に立ちつくした。

「闇御前は黒い獣を遣う赤姫姿の女、そう言われておりますが、なにしろ白塗りのことですから必ず女だとは限りません。爪で裂いたような傷、と言われましたが、その爪が紛いものであることは、チロー館で直さんが確認しておられました」万造は語る。「衣装は脱げば済むこと、鬘は取れば済むこと、ですがそれだけの荷物を隠す場所が必要でございます。そうして、闇御前が現れるところ、多くの場合に般若蕎麦と呼ばれる蕎麦屋が現れておりました。蕎麦屋の屋台の中ならば、それだけの荷物も隠しおおせはしないでしょうか」

「しかし」と新太郎は口にする。「しかし、常さんは闇御前に襲われて」

はい、と万造は頷く。

「それに菊枝さんだって」

「ええ」と菊枝は声を高くする。「常さんがお帰りになったのは十時過ぎ、襲われたのがそのすぐあと、常さんじゃありませんわ」

菊枝を万造は複雑な表情で見る。

「直さんを後押しなさる御親戚が出入りなさっていたというのに、それでも常さんをお庇いになるのですか」

さっと菊枝の表情が変わった。

「実は直さん側の御親戚に因果を含められておいでではないか、と教えてくださったのはお多恵さんでございます」

万造は簡単に、いつか多恵がした話を披露する。

「確かに言われてみれば、常さんが公爵におなりでは、万が一にも菊枝さんが奥様になれる望みはございません。そうまでして家督になぜこだわられるのかと、失礼ですがおふくさんにお話を伺いました。やはり鷹司や九条、中畑を名乗る方々が、時折やっていらしては、何やら穏便にお話をしておいでだったとか。穏便にというのですから、別れろというお話し合いではございませんでしょう」

常は菊枝をただ見る。菊枝は毅然と顔を上げた。

「ええ。そうですわ。それのどこがいけませんの。だってこのまま常さんにしがみついていれば、大枚のお金をくださると言うのですもの」菊枝は唇を震わせる。「常さんが分家して、それなら奥様にとおっしゃいましたけれど、そんなことが本当に叶うとお思いですの。芸者上がりの女をどこの華族さまがお嫁に迎えてくださるというんです。たとえ妾でも悪し様に言われることなど分かりきっていますでしょう。どうせいつかはお別れしなくてはいけないのだわ。常さんだって家督はいらないとおっしゃっているんですもの、だったらお金をいただいて、それでどうしていけないんですの」

「菊枝さん」と万造は真っ向から菊枝を見る。「常さんは何時にお宅をお帰りでしたか」

「十時過ぎです。間違いありません」
「およしなさいまし」と鞠乃が声を上げた。「菊枝さんが言い張ったところで、誰も聞いてはいませんわ」
「いいえ、十時過ぎです。直さん側のわたくしが言うのだから確かですわ。実を言えば、常さんは近頃わたくしに飽きておいでです。音信もさっぱり、そのうえもともとわたくしの他にもどなたかお通いの方が。皆さんがわたくしの家にいらしたと思っている半分も、実はおいでじゃありません」菊枝は恨みをこめて言い募る。「ええ、常さんをお恨みしておりますとも。そのわたくしが十時だと言うのです。これ以上の証人は」
菊枝は言葉を途切らせて、顔を覆う。万造はそんな菊枝を複雑な目で見やった。
「屋台をどこに隠しましょう。衣装や鬘は屋台の中に置いておけても、屋台だけはお宅に持ってお帰りになるわけにはまいりません。もちろん常さんは、どこか隠れ家をお持ちだったのです。そこに通って夜の帝都を徘徊しておられた。他の方などではなかったのですよ、菊枝さん」
深く面伏せた菊枝の返答はない。子供が嫌と言い募るようにただ首を振った。
「常さんが菊枝さんのお宅を出たのは、もっと早い時間だったのですね」
千代の声に万造は頷く。
「はい。そうだと思われます。あのとき、人々は見慣れない獣を追っておりました。犬

は走ってその手を逃げる。気の向くままに逃げて、そうしてたまたま常さんの足許へ逃げこんでしまいましたのです」

そう言って万造は常を見る。常はただ目を伏せて散り急ぐ花の下に立ちつくしている。

「常さんは驚かれました。ただ戻ってきただけならば問題はございませんが、犬を追ってやってくる人々があって、その声が耳に届いたのでございます。得体の知れない見世物の多い昨今、般若の面を被った蕎麦屋がいたところで、さほどの問題はありませんが、怪しげな犬を追ってきた人々が、そこにさらに怪しげな蕎麦屋を見れば何を考えるでしょうか。それで常さんは犬をさらに先に走らせ、例の凶器で御自分の手を切って、曲がり角まで走ってゆかれたのです」

常の反応はなかった。

「道に落ちた血痕は、途切れてそこで消えたのではなく、そこから零れ始めたのでした。聞けば、あの日常さんは珍しく着物をお召しだったとか。着物でなければならなかったのですね。洋装の蕎麦屋などおりませんゆえに」

「常さんが」新太郎は呟く。「闇御前。無力な女や老人を切り刻んだ、あの」

万造は頷く。

「常さんは御覧の通り、ほっそりしていらっしゃる。ふいをついてのことならともかく、闇御前なる魔性が徘徊しているようだと、人々が心得てしまってからは、大の男を殺し

てしまえる自信がおありではなかったのじゃないでしょうか」
常の返答は、やはりなかった。
では、と新太郎は万造を見る。
「では、火炎魔人も常さんなのかい。直さんも常さんが殺したのだと、そう」
「それには」と万造は答える。「直さんが亡くなられた、あの事件のことを考えてみるのがよろしいでしょう。先ほど平河さんがおっしゃったことを思い出してくださいませ。もしも人魂売りが消えたりはしないものならば、残ったお三方は、誰も犯人ではありません」
万造は言って、思い起こすようにしばらく目線をさまよわせた。次いで息をひとつつく。
「それで、こう考えてみたいのでございます。人魂売りは実は人ではない、と」
くすり、とごく微かに笑ったのは脇に坐った輔である。
「きみ。万造君」
半ば呆れた新太郎の声に、万造は苦笑してみせた。
「もしも人魂売りが人ではなく、妖怪変化の一種だとしたら。いずこへともなく消えても何の不思議もございません。平河さんが人魂売りのあとを追っていくと、そこには人魂売りではなく読売りがいた。これを、人魂売りが消えて、そこにたまたま読売りがい

たのだと、そのように考えてみたいのです」

新太郎は笑って頭を振ったが、万造はそれに頓着しない。

「塔から人魂売りが消えたのもまた、化け物が消えただけのこと。すると読売りは、人魂売りとは何の関係もないことになります。読売りは塔の中に入って荷物を置いて出ていった。その後に入っていったのが、直さん、常さん、左吉さん。出てきたのが同様にこの三人。では、火炎魔人はこの三人の中の誰かだということになります」

「ずいぶん、すっきりしたものだね」

新太郎が言うと、万造は意を得たように頷く。

「はい。これで本当に簡単になるのでございます。前にも申しましたように、左吉さんは読売りではございません。背恰好がまるで違っていらっしゃいました。そして、常さんもまた火炎魔人ではいらっしゃらない。なぜなら、平河さんが袋小路で読売りに会ったとき、やはり常さんは御本邸におられたからです。すると、読売り、すなわち火炎魔人でありえたのは直さんだけだということになるのです」

「しかし」

新太郎は言いさし、そんな、と声を上げた千代を見やった。万造はそれを手で止める。

「ですが、直さんは実際には、塔から落ちて亡くなっていらっしゃる。これはどういうことでしょうか。直さんは火炎魔人で、常さんを襲おうとし、反対に自分のほうが落ち

てしまったのだと、そのようにしか考えられないではございませんか」
「ですが」と悲痛な声を上げたのは千代だった。「直が亡くなってのちも、火炎魔人は現れております」
万造は頷く。
「その通りです。ですが、少なくとも五重塔の事件に関して、火炎魔人は直さんだったとしか思えないのでございます。すると直さんが亡くなったあとに現れた、あの火炎魔人はいったいどういうことでございましょう。いえ、そもそも」と、万造は常を見る。「火炎魔人が現れて直さんと争っておられる、などとどうして常さんはおっしゃったのでしょう」
「しかしね、万造君」
「ここでひとつ、気になることがございます。それはこの前後に左吉さんが殺されてしまったことです」
万造はその場を見渡す。
「塔に昇った三人の間で何かが起こった。左吉さんはその場にいた犯人でないことが確実な人物、つまり証人でございました。その証人が闇御前に殺められてしまったのでございます」
言って万造は言葉を切る。少しの間、夜の桜を見上げた。

「そして闇御前とは、常さんのことでございました」
「けれど」と新太郎は口を挟む。「左吉が何を知っていたとしても、常さんが左吉を殺す必要があるだろうか。左吉は常さんのためにならないことを口に出したりはしないと思うが。口止めすればいいだけのことじゃ、なかったのだろうか」
万造は頷く。
「その通りでございます。決して常さんの不都合になることを口に出す方ではございません。常さんがもし、御自身を守るためならば、左吉は殺される必要などありはしなかったのです。むしろ常さんが直さんを守ろうとしたときにだけ、左吉さんは殺されなければならなかった」
ああ、と新太郎は呻く。
「先にも申しました通り、火炎魔人は常さんではなく、直さんでございました。直さんが常さんを襲おうとして、反対に塔から落ちてしまったのです。けれども常さんは、火炎魔人が直さんを殺した、と偽りの証言をなさった。左吉さんもこれに同意なすった。そのあげくに、常さんは直さんを殺して家督を奪ったと陰口を叩かれる始末、左吉さんはさぞ本当のことをおっしゃってしまいたかったことでございましょう。左吉さんは常さんのためになら巌のように口を噤んでおれたけれども、直さんのために口を噤み続けておれたかどうか、さだかでなかった。だからこそ、左吉さんは殺されなければならな

かった」

それでは左吉があまりに哀れではないだろうか、と新太郎は思う。あの実直な男はただ主人のことだけを考えてきたのに、当の主人によってまさに忠義のそのために屠られたのだ。

「そうと分かってみると、最後の火炎魔人の仕事、あれはなんだか可怪しくはなかったでしょうか。突き落として殺したのはいつも通りのことですが、灼き鏝の痕はございませんでした。しかも女は刃物で切りつけられておりました。犯人は火炎魔人ではなかったのです。火炎魔人を騙った者の仕業、もちろんそれは常さんにほかなりません。直さんの死後も火炎魔人が出没したと、そう思わせんがための」

万造がやんわり微笑った。

「火炎魔人は直さん、闇御前は常さん。火炎魔人は五重塔で常さんを襲い、闇御前はチロー館で直さんを襲った。つまり、直さんと常さんは互いに互いを襲おうとしておられたのです」

「直さんが。常さんが。よりによっておふたりが」

呟いた新太郎に万造は複雑そうな視線を向けた。

「そもそも火炎魔人と闇御前は別の者でございました。常さん、左吉さんと被害が鷹司の方に続いてしまったのは、火炎魔人である直さんが、常さんが闇御前に襲われたこと

を御存じではなかったからです。もしも同一人物なら、きっと続くことを避けたでしょう」

家督のために、と新太郎は唇を噛む。

直は相続権以外のものを持たず、常は相続権だけは持っていなかった。長子相続という呪縛。それは古いものの怨霊だ。長子相続はそもそも封建制の遺物、親から子へ家督が相続されるたびに家を細分されないよう、定められたものだが、封建制が葬り去られた今になってもそれは地上を徘徊している。

「あれほど欲には無縁に見えても、やはりそれからは逃げられないものなのか」

家督という呪いにも似たもの。

「直さんと常さんだけはと、そう思っていたのに」

どうして、と桂井老は言った。

「ならばどうしてそこまでして、左吉をお手にかけてまで、直さまをお庇いになる必要がおありだったのですか」

桂井が懇願するように見た先の、常はしかし、返答をしない。

「少し待ってください」

万造は言う。新太郎は万造を見返した。

「互いが互いを襲ったふたつの事件、あれは少し可怪しくはなかったでしょうか」

え、と新太郎が首をかしげると、万造は頷く。

「例えば、五重塔の事件です。塔の下は夜桜見物の雑踏、そこに突然現れた火炎魔人、当然のように五重塔の下は黒山のひとだかりです。たとえ巧く常さんを殺したとしても、たとえ読売りに化けたとしても、火炎魔人の現れたその塔から出てきた者を周りに集まった者は見逃すでしょうか。塔に駆けつけ、中に飛びこんできた人々の間に交じって逃げるには、いささか建物が小さすぎはしないでしょうか」

「確かに」

塔の内部はごく狭いものだ。そこに階段があるものだから、身を屈め続けて昇る必要がある。飛びこんできた人々を、身を隠してやりすごす場所さえ内部にはないのだ。かといって高欄に出れば、衆目がある。

どうして、と新太郎は思った。どうして直はそんな危険な場所を殺人の舞台に選んだのだろうか。しかも殺す相手は常、肝心要の、絶対に自分が疑われてはならないその事件のときに限って。

「しかも当時のあの状況、昨今の夜の事情がございます。常さんだけを呼び出したところで、左吉さんが黙って見過ごすとは思えません。実際、左吉さんはあとを蹤いてゆかれた。その状況では、直さんはそもそも逃げおおせるはずなど、なかったのです」

「その、通りだ」

「一方、チロー館の事件のほうはどうでしょう。直さんは鞠乃さんとのふたり連れ、常さんは事前にそれを御存じでした。被害者を殺して闇に身を隠し、犬を囮に使って犬が追われる間に蕎麦屋になりかわるのがそれまでの手口、なのにチロー館の事件のときに限って、直さんが被害者になるはずのときに限って、犬の姿も蕎麦屋の姿もなかったのはどういうわけでしょう」

「確かに」

「常さんは事前に検分されたのでしょう、チロー館の構造にお詳しかった。逃げ出して外の雑踏に紛れることは難しくはなかったでしょうが、脱いだ衣装や鬘を常さんはどうなさるおつもりだったのでしょう。しかも相手はふたり連れ、片方を襲っている間に片方に逃げられ、人を呼ばれて、建物の周囲を閉ざされてしまっては逃げることさえできません」

これはいったいどういうことだ、と新太郎は思う。直も常も、よりによって肝心の相手を襲うときにだけこうも段取りが悪い。

「なぜ直さんも常さんも、いちばん安全でなければならないそのときに限って、いちばん危険な舞台を選ばれたのでしょう。考えてみれば理由は明らか、おふたりにはそもそも、逃げるおつもりなどありはしなかったのです」

はっと新太郎は常を見た。そこにしんと立ったまま、目を伏せ、黙って万造の糾弾を

聞いている彼。

「直さんが殺される。あるいは、常さんが殺される。たとえそれが火炎魔人の仕業にしても、闇御前の仕業にしても、双方が疑われないなどということがそもそもあるでしょうか。疑惑に理屈はありません。ただ怪しいと、それだけで充分なのでございます。御一新を過ぎて自白よりも証拠を重んぜよと、あるいは拷問をしてはならないと、そのように布告がございましたが、今も自白強要のために拷問が行なわれているのは周知の事実、だとすれば、たとえ疑惑だけとはいえ、決して軽んじてはなりません」

「けれど、もしも」と新太郎は呟く。「もしも相手を襲おうとしてそれに失敗し、あえなく捕まってしまったなら」

万造は頷いた。

「襲われたほうは、これ以上ないほど安全に過ごすことが、家督を手に入れることができるのです」

誰もがしんと万造を見た。万造はそれに頷いて応える。

「この事件はそもそも、ふたりの兄弟が、できうる限り安全に相手に家督を譲ろうとした、互いにそれが目的の事件だったのです」

そんな、と桂井は呟いた。

「このように考えると、火炎魔人に左吉さんが襲われた、あの事件も何が起こったのか

明らかです」

新太郎は頷いた。それは本当に明らかなことだ。

「左吉さんは菊枝さんに間違えられたんだね。直さんは、菊枝さんに同行したのが常さんではなく左吉さんだということを、知っていた」

万造は頷く。

「菊枝さんは」と万造は視線を菊枝に向ける。「こう申しあげては失礼でございますが、常さんの唯一の弱点でございました。菊枝さんの存在を気にかけて、家督を直さんにと言う方もあった。だからこそ、直さんは常さんのために、常さんが何の問題もなく家督を相続するために、菊枝さんを排除しておきたかったのです」

なぜ、と新太郎は思う。なぜ、そこまで。

「直さんは麻布を出て、まっすぐに銀座へ向かい、左吉さんを伊沢屋から突き落としました。ただし、このとき火炎魔人は火を使っていない。必ず犠牲者を火達磨にしてきたのに、左吉さんのときだけはそれが行なわれませんでした。明らかに火炎魔人は左吉さんに対して手加減をした。なぜなら、途中で自分の襲った人物が目的の人物、菊枝さんではなかったことを知ったからです」

万造はそう言って、影のある笑みを浮かべた。

「さぞかし直さんは迷われたことでございましょう。常さんのためを思うなら、左吉さ

んは生かしておきたい。けれども自分には目的があり、そのためには襲った被害者は間違いなく殺しておきたい。左吉さんを襲って捕まって、それで常さんが安全に家督を相続できるだろうか、いろんなことをお考えになったに違いございません。結局左吉さんを突き落としたけれども、直さんには迷いがあった。それで左吉さんは庇をかすめて墜落することになったのです。そして、この迷いは、チロー館の中で闇御前に襲われたときにも、直さんの中にあったのではなかったでしょうか。このままこの闇御前とかいう化け物に殺されてしまえば、と」

「おありだっただろうね」

誰しも人は好んで汚名は着たくないもの。いっそ闇御前の凶器の前に自ら飛び出して、と思わずにいられただろうか。けれども直は、あえて汚名を着ることを選んだ。より確実により安全に、常に家督を譲ることのできる道を選んだのだ。

「そしてそのチロー館で、直さんは闇御前が常さんであること、何を考えておられるのか、それを知っておしまいになった。止めてみせる、と直さんはおっしゃいました。あれは」

新太郎は言葉を継ぐ。

「あれは自分が目的を遂げて、この悲劇を終わらせるという」

万造は頷く。

「人望のある次男と、人望のない長男と、利権を漁って双方の派閥に分かれて争う親族方。これを丸くおさめて互いに家督を譲るためには、互いが死ぬしかなかったのです。少なくともそれが最も早くて確実な方法だった。けれども互いが自殺すれば、残ったほうが怪しまれる。たとえ衆人環視の中で首を括ってみせたとしても、いったいどうやってそこまで追い詰めたのだと、悪し様に言われることは分かりきっております」

言って万造は常を見る。

「それさえ我慢できなかったのです、お二人は。安全に、互いの風評に傷ひとつつけることなく、家督を譲ってさしあげたかった。だからこそ、常さんは五重塔で、火炎魔人が直さんを襲ったなどと、嘘の証言をなさったのです」

おそらく、と万造は言う。

「直さんの心づもりでは、常さんがお兄さまに襲われたと証言してくれるはずだったのです。常さんを襲い、足許を過ったふりで高欄から飛び降りる。あとには鍵や人形や、そんなものが残されます。そうして」と万造は千代を見る。「御自宅には予備の木箱や作りかけの人形や、そんなものまでが用意してあったかもしれません」

千代は俯く。忍び泣きを漏らした。

それではあの道具類は間違いなく直が、出掛ける前に自らの手で出していったものだったのだ。

「ところが常さんは、その全部を五重塔から隠してしまわれた。あのときの状況から考えて、人形には火がついておりませんでしたでしょう。それに火をつけ、左吉に口裏を合わせる約束をさせた。常さんは家督など欲しくなかった。それを直さんにさしあげたかったのです。けれども直さんは、同じことを考えて、しかもそれを実行に移してしまわれた。どうして常さんは嘘をつかれたのでしょう。どうしてあのあとも火炎魔人が現れたのでしょう。すべては直さんのため、譲ろうとした家督は当の直さんによって突き返されてしまった。そんな常さんの、せめて直さんにはいかなる汚名をも着せまいとする、不帰の道を辿っていってしまわれたお兄さまへの餞だったのです」

そして、と万造は言葉を継ぐ。

「きっとじきにまた闇御前が現れて人を襲うことでございましょう。それがあの赤姫の最後の舞台でございます。闇御前は今度こそ殺戮に失敗し、司直に捕らえられ、あるいはその前に自害する。そうして、家督欲しさに兄を殺し、無関係な人々までを殺してまわった稀代の大悪党が現れるというわけです」

誰も言葉のないまま、花はしんしんと降る。

「ですからこれは、常さん自身の回向、皆さまとのお別れの宴なのでございます」

しばらく誰も言葉を発しなかった。やがて、どうぞ、と声を発したのは桂井老、桜はあいも変わらず降り積み、紫の毛氈を白く斑に染めている。

「どうぞ、このことばかりは、御内密に」そう桂井は新太郎と万造に言って、老いた顔を歪めた。「いえ、決して罪に蓋しようというわけではございません。今日までお仕えした常さまが司直に引かれるのを見るのはなんとも辛うございます。お家の今後もございますれば、なにとぞ家内で処断あるまで、お時間をいただけませんでしょうか」

新太郎は困惑して万造を見る。彼が頷いたのを受けて、桂井老に頷いてみせた。

「承知しました。しばらくは口外いたしません。記事にもしないとお約束しましょう」

ありがとうございます、と老爺は頭を下げる。その桂井の背中にも花は降った。

常はこれからどうなるのだろう。司直に引かれて裁かれるのだろうか。しかしながら、華族の体面を考える親族や宮内省がそれを許すとは思えない。華族は皇室の藩屏、華族についた傷は、皇室についた傷に等しい。せいぜいが癲癇として病院なり屋敷の奥深くに押しこめられることになりはしないだろうか。

「輔」

ようやく常が口を開いた。輔は無言で常を見る。

「これから汚名にまみれる家名だけれども、お前は継いでおくれだろうか」

輔は常を見返し、そうして頷く。

「はい。必ず」

常は輔に頭を下げる。次いで菊枝に頭を下げた。

「わたしのような者を庇っていただいて、本当にありがとうございます」
「常さん」
そして常は新太郎たちにも深く頭を下げた。
「とんだことに巻きこんでしまいまして、申しわけございません」
「なぜお謝りになるのですか」
新太郎は口に出した。罪や不正は許せないけれども、常を憎む気にはなれなかった。
「ぼくには常さんが、常さんも直さんも被害者に見えます。家督とはなんですか、家とはなんですか。穢れも誉れもあるものを、そっくりそのまま伝え続けていくことに、どれだけの意味があるんでしょう。そんなものは封建制の残した亡霊です。ただ人をおびやかすだけ、何の意味もありはしないのです」
「おっしゃる通りです」
「その亡霊にとり憑かれたんです、あなた方は。憑かれて正気をなくしておられた。いえ、もっと言うならば、これは全部初子夫人の」
新太郎は歯ぎしりをする。
「すべては初子夫人のせい。みすみす火種をお作りになった。十一やそこらの直さんにどんな咎があったというのでしょう。お千代さんとの確執でしょうか、それとも他の何かでしょうか。それでも初子夫人さえ冷静でいてくだされば」

常は目を伏せる。

「初子さまは、お父さまの御臨終の際、ちょうど父熙通が逝く少し前のことでございましたが、そのおりに、ひとつの予言をいただいたのだそうです」

え、と新太郎は常を見た。

「いずれ長男が次男を殺すだろう、と」言って常は悲しげに微笑う。「それで初子さまは、兄をお出しになってしまったのです」

そんな、と絶句した新太郎の脇で、万造がぽつりと声を発する。

「常さん」

「はい」

「初子さまは、お父さまの御臨終に間に合わなかったのです」

え、と常は目を見開いた。新太郎もまた瞠目する。確かに輔がそう言っていたのではなかったか。

万造はいたましげな表情をする。

「常さんはいまお住まいのあの家が、初子さまの意見をとりいれて建てられたはずのあのお宅が、家相上、たいへんな凶相のお宅だということを御存じでしょうか」

常は呆然と首を振る。

「では、これはいかがでしょう。直さんのお宅、初子さまが直さんのために探されたあ

のお宅が、地図の上でも鷹司本邸のまさしく真北にあることは」
常はこれにも首を振った。
「お宅を拝見いたしますと、あれはどう考えても故意に悪く造られているとしか思えません。しかも、真北に別邸があって、これではおそろしく北にお屋敷が張り出しているのも同様です。そうでございましょう、輔さん」
万造が輔を振り返ると、輔は頷いた。
「その通りです。父の葬儀のときにはまだあれは建っておりませんでしたので、初めて足を踏み入れたのは初子さまの葬儀の際、あまりに悪意に満ちているので驚きました。しかも別邸が家相風水的には家の続きになるように庭まで工夫しておられる。あれでは住む者をみすみす狂わせるようなもの、あれ以上凶相の家を、建てろと言われてもわたしにはできかねます」
常は輔を見る。
「それでお前は家を変えたほうがいいと」
「ええ。理由を申しあげようかとも思ったのですが、鷹司の本邸で占いまじないに関することは御法度。それにもう、手遅れなのが分かっておりましたから」
常はすがるように万造を見、万造はそれを沈痛な表情で見返した。
「なんと哀れな、いたましいことか。あなた方は骨肉の争いを望む初子さまに欺かれた

だけだというのに」

静かなばかりだった常の顔色が初めて変わった。

「万造さん、それは」

「初子さまは熙通卿を憎んでおられたのですよ、常さん」言って万造は首を振る。「その熙通卿の御側室も、御側室のお産みになったお子さま方も、全部憎んでおられたのです」

常の顔から血の気が引いた。

「初子さまが直さんを嫌っていたなど、嘘です。常さんだけを愛していたなど、嘘です。遺言ですか、予言ですか。そんなものは全部嘘です。全ては、ただ熙通卿の庶子に血で血を洗う争いをさせてみたいという、それだけの」

ほとりとかそけく音をたてて常が膝をついた。

「予言ではなく呪詛だったのです」

大詰　時代転変

「幕は必ず引かれるもの」
言って黒衣は膝の上に人形を抱き上げた。
「それは開いたがゆえに引かれ、次にまた開くために引かれるのだよ」
『幕かえ』
娘は艶やかな振袖姿、それが黒衣をかつんと振り返って問う。
黒衣は答えた。
「幕だ」
言い切ってから、くつくつと黒衣は笑う。
「なんて芝居の幕切れにふさわしい、好い夜なのだろうね。夢のように美しい夜だ」
くすくすと娘もまた笑って黒衣の胸に身体をあずける。
『夜の者とやらは』
「手に入れるよ」言って黒衣は笑う。「お前が嫉妬しないならね」

『アレ、またそんな意地悪を言わしゃる』
「そうか、お前は心待ちにしているのだったね」
『これ、モウ、嫌なひとじゃ』
くつくつと黒衣は娘を背後から抱えて膝の上に載せたまま笑う。
娘は自分の帯に回された黒衣の手に触れた。
『欲しいのは火炎魔人じゃと思うたに』
「闇御前のほう」
『どちらも同じ夜の者ではないのかえ』
「同じではないよ」
黒衣は言って娘の顔を覗きこむようにする。片手で娘の顔を上げさせた。
「清い眸だねえ」
言ってくすりと笑いを漏らした。
「常もこんな眸をしている」
言って黒衣はしばらく娘の頬を撫でている。
「闇とは、黒でも白でもない。ただひとつのもので塗りつぶされたもののことだ。夜とはそのように、ただひとつのもので塗りつぶされたもののことなんだよ」
『では、夜の者は』

「ただひとつのもので満たされて、それ一色に染まった者のこと」
黒衣は娘の手を取る。小さな手の手首までを握りこんだ。
「夜に染まった者がいたら、菩薩のように見えはしないか、と前に言ったねえ。菩薩とは、願いで満たされた者のことだ。衆生得度とか一切衆生発菩提心だとか。内容はともかく、あれの中にはただひとつのことしかないのだ。純粋無比なただひとつの願い」
『願い』
「そう。夜の者も同じことだ。その願いが昏いか明るいか、人を暗がりに突き落とすか救済の光となるかはともかくも」
言って黒衣は娘を抱き上げる。
「惚れた男に会いたさに、添い遂げようとも手に入れようとも、どんな欲もなく、ただ一目会いたいと、その幼い願いだけに満たされて、お前が人であることを踏み越えて魔性に昇華されてしまったように」
娘は首を傾ける。黒衣はその首を撫でてやった。
「常もね、昇華されてしまったのだよ」
『直は』
「直には雑念があった。初子に奪われるのではなく、自らの意思でそれを常に与えようとする意地、自らを散らして弟に餓る己への憐愍と自己満足、世情への絶望、己への嫌

悪」

言って黒衣は笑う。

「常にはそれがなかった」

かつん、と娘はさらに小首をかしげる。

「常には直に返そうという、そのただひとつの願いしかなかったのだ」

黒衣は言いながら闇の中に足を踏み出す。

「己にあって直にないものならすべて、直に与えようという、ただそれだけしかありはしなかったのだよ」

夜が黒衣の姿を呑みこみ、溶かしこみ、そこにはただ闇があるばかり。

一

贄の柔らかな身体を切り裂いて、女が倒れたところで常は用意した小瓶を逆さにした。透明な液体が女の髪に降り注ぎ、髷を濡らす。濡れたそこに向かって提灯を落とした。

澄んだ朱色の花が開いた。女は悲鳴を上げて身もだえた。火が移ることを恐れず、その身体に手をかけて手摺の上に押し上げた。

常はひどく落ち着いていた。もう何を急ぐ必要もありはしないのだ。今この場に官警

が上がってきても構わない。それならこのまま一息に飛び降りるだけのことなのだから。

女は哀れな悲鳴を上げていたが、階段を昇ってくる足音はしなかった。頭を掻きむしる女を火種にして、手摺に結びつけた人形に火をつけた。五重塔でそうしたように。

そのまま力をこめ、女の身体を手摺の外に押し出す。女の重みと抵抗の手応え、それが突然消失した掌の空虚さ。

この夕暮れ、ここでひとりになった身の不運を悔やんでくれ、と手摺の外にわずかに目をやる。深編み笠を冠ろうとしたときに、露台に飛び出してくる影があった。

終わった、と思ったのだ。

なのにその影は駆け寄ってくるなり編み笠をひったくり、それを手摺の外に投げ捨てる。自分が着た羽織を脱いで常に着せかけた。

「左吉」

左吉はちらりと視線を寄こしただけだった。常の腕を摑んで、まっすぐ階段に向かう。ものも言わずに階段を降り始めた。常も何も言わなかった。仕舞い間際の十二階には客の姿はほとんどなく、そのわずかの人々も、常たちに目を向けなかった。四階まで降りたところで、血相を変えた人々が昇ってくるのにすれ違いもしたのに、それでも彼らは常に目もくれないのだった。

それはひどく暗示的なことに思われる。常は自分が目に見えない亡霊になった気がし

たし、実際のところ常は亡霊なのだった。直が死んだときに、五重塔から飛び降りたときに、常もやはり死んだのだから。

左吉は顔色ひとつ変えないまま常の手を引いて十二階を出た。戸口で怪訝そうな客に、なにかあったのかと声をかけられれば、よく分からない、と平然と受け答えをしさえした。

その左吉がようやく常の手を放したのは、露店の並ぶ雑踏を千束のほうに抜けてからだった。

左吉は常の手を投げ捨てるように放した。放したその勢いのまま振り返り、常の顔を見る。その表情はひどく歪んでいた。泣きたいのを咏えているのだと、何となくそう感じた。

「どういうことです、常さま」

「どういうことって」

「なぜ、あんなことを」

問われて常は微笑った。

「火炎魔人は死んでいなかった、そういうことだよ」

「常さま」

「火炎魔人は鷹司常なんだよ、左吉。直は火炎魔人に襲われて命を落とした。家督を狙

った極悪非道の弟に襲われて」
「常さま、何をおっしゃいますのです」
左吉は心底困惑し、心底怒っているように見えた。怒りのあまり、怒鳴ることもできないようなのに、これほど忿っても、左吉は常を警察に突き出したりはしないのだ。
その情愛が嬉しくありがたく、常はふと笑む。
「あんなふうに手を引かれて、直と歩いたことがあったな」
常が言うと、左吉はさらに顔を歪めた。
「迷途をふたりで歩いたことがある。わたしはチロー館で直を待っている間、それを思い出していた」
左吉は目を見開く。
「チロー館」
「歩けば歩くだけ、迷って抜き差しならなくなってしまいそうで、わたしは歩くのが怖かった。ぐずって泣き出したわたしに小言をいいながら叱りながら、それでも一度も引いた手を放さずにいてくれた」
言って常は左吉を見やる。微笑ってみせた。
「本当に、直は路次へ入っていくのが好きだった。足手まといだと言いながら、それでもわたしを連れていってくれて、迷って泣き出しても必ず手を引いていてくれた。わた

しは、そんな直が大好きだったよ」

「常さま」

「わたしは直から沢山のものを奪った。必ずその手に返してあげようと、そう思ったのに、直はたったひとつわたしが奪えなかったものさえ、わたしの手の中に落としこんでくれた」

常が見やった手には夜を帯びた空気以外、なにひとつありはしない。

「鷹司の長男は、母にも見捨てられた不出来のくせに、家督を狙って人を手にかけ、弟までも殺めようとした極悪人だと言わせるのか。このわたしが、哀れよ不憫よと言われて、このうえさらに直を悪し様に言わせるのか」

常は左吉を見る。

「わたしはね、それだけはどうあっても許さない」

「常さま」

左吉は、何がなんだか分からない、という顔をしていた。その顔に微笑って、常は懐に手を入れる。

「そんな顔をしないでおくれでないか。大事に考えても始まらないんだよ、わたしはもう沢山人を殺してきたのだから」

「嘘です」

「本当に。もう六人殺した。今の女で七人目」言ってから、常は苦笑する。「ああ、直も、直が殺した者も、結局わたしが死なせたようなものだから、それを数えると十人になろうかね」

常は手を引きだした。鋭利な爪を握っていた。左吉の目がこれ以上ないほど見開かれたが、常が一歩を踏み出して、振り上げた爪を振り下ろすまで身動きはしなかった。

爪は左吉の首の付け根に深々と刺さった。

無意識にだろう、左吉の手がその爪を引き抜き、押し上げようとする。常はあっさりそれを抜いて、もう一度、今度は喉笛に向けて振り下ろした。

ぐ、とくぐもった声が血だらけになった喉から漏れる。身を屈めたところにもう一度、今度は首を狙いたかったが、もう狙った場所が見えなかった。腕を振り下ろすと、硬い手応えがして、その衝撃で溜まった涙が零れ落ちた。絶え間なくそれはこみ上げてきた。

「常、さま」

左吉の手は常の襟を摑んだ。常はその手をそっと撫でる。力がこもって血色を失った無骨な手に、透明な滴が零れ落ちた。

「許しておくれねえ、左吉」

やんわりと包んだ手の中から、左吉の手が抜けて落ちる。摑んだ襟を掻きむしるようにして沈むさなかに、白い胸許が顕になって、そこに左吉の指の跡に赤い血糊が線を描

いた。

「この償いは必ず冥途で。どれほどにも責められてあげるから」

「常」

「陰になり日向になり、ようく今日まで仕えてくれた。わたしは本当に、お前が好きだったよ」

左吉はその場に膝をつき、呆然と常を見上げてからその場に倒れた。常もまた膝をつき、爪の先をしっかりとその後頭部に当てる。軽く弾みをつけ、体重を乗せて貫いた。長く苦しませたくはなかった。

左吉はその一撃で唐突に死体となった。夜の中に膝をついて、常はしばらくその背中を見ていた。幼い頃、何度この背に背負われ、何度そこで眠ったろう。

「左吉」

その背から視線をもぎ離し、常は夜空を仰ぐ。月もなく、星もなかった。真の暗闇だけがそこには広がっていた。

「お育ていただいた御恩はいかにも深く、可愛がってくだされた慈しみは、ありがたくももったいなくも思いますれども」

常は瞑目する。

「お恨みします、初子さま」

二

誰もがしんと声がなかった。膝をつき、地に突いた指の先で身体を支えるようにした常の背に白く花弁が降っていた。その背に落下できなかった花は、地に敷かれた毛氈の上に零れて白く模様を染め抜いた。

「傀儡だったのですか、わたしも、直も」

沈黙と闇。白く切り裂くようにして舞う花弁の、その音さえもが聞こえそうだった。

「初子さまがあればこそ、同じ邸に住むこともままならず、兄弟として暮らしたこともなく、会えば仇敵のようにならざるをえず」桜のように言葉は落ちる。「それが切なく申しわけなく、せめて直の手に奪い取ったものを返そうと、直もまた、同じようにして一生の決心」

常は顔を上げる。言葉もない一同を縋るように見渡した。

「罪もない人を手にかけ、それが及ばず他ならぬ直の死に際を見て、そのうえさらに兄とも慕った左吉までも殺め」夜露が静かに零れた。「家人には済まないばかりの醜聞、一切合財を負うのも承知なら、煉獄に落ちて七生九生を苦しむのも承知のうえ。それが全部」常は声を途切らせる。「全部、初子さまの」

何かが欠けて零れるように、花は降り積む。

「これが運命ならばもう何も申しあげますまい。ただ、どうしてわたしは魂の宿った傀儡に生まれたのでしょう。魂などなければよかった。心などなければよかった。ただ初子さまのために踊る器だけの傀儡ならばよかったのに」

再び面伏せ、地に額ずいた常を新太郎は見守る。忍びやかな慟哭を聞いているしか術がなかった。

これが帝都に流布する奇談の結び。

そもそもの発端からは想像しえなかった悲嘆を眺めて、思い切るように天を仰いだ。

「しかし、よくもふたりして、同じことを考えたものだね」

ああ、万造は言う。

「平河さんは、占星術を御存じですか」

「西洋の星占いだろう」

「ええ。生まれ落ちた星のめぐりによって人はある定められた道を生きる。では、同じ日に生まれたふたりの人間は、よく似た人生を生きはしないでしょうか。これを占星術的双生児と呼ぶのですよ。直さんと常さんは、まさしくその占星術的双生児でいらしたのです」

そう、と息をついて万造を振り返る。帰ろう、と促そうとして、新太郎はふと眉を顰

めた。
「万造君」
「はい」
万造の面には翳った色があるばかり、新太郎の怪訝な表情に気づいた様子もない。
「今も奇妙に思ったのだが。きみのあの言は、妖怪変化がいることを前提にしたものじゃなかったかい」
なにをいまさら、というように、万造は新太郎を見返す。
「ねえ、きみ。占いやら化け物やら、そんなものは一切なかったのではないのかい。このままでは、妖怪変化を認めることになりはすまいか」
くすりと万造は苦笑を零した。
「そういうことになりましょうね」
「しかし」
言いさした新太郎の言葉は途切れた。万造の表情に正体不明の色を見て取ったせいだった。
「それで何か不都合がございましょうか、平河さん」
「ございましょうか、って。きみ」
さらに困惑を強くした新太郎の耳に、張りのある声が響いてきた。

その場の誰もが、声のしたと思しき方向を振り返った。遠くから近づいたそれは、明瞭になるにつれ周囲に人の声と足音をまとわりつかせて、容易には聞き取れない。

「いぃ。たいていィ」

全員が耳をそばだてたとき、風が凪ぐようにふと喧騒が途切れて、いきなりこのうえなく明瞭な声が飛びこんできた。

「号外ィ。大帝、崩御ォ」

花でさえ、一瞬降ることを忘れたようだった。

声を上げたのは幾人か。桂井が懐に手を差し入れる。

「誰か。一部貰っておいで」

幕の近くにいた女中が幕を潜って外へ転げ出、桂井から小銭を受け取った女中がさらにそれに続いた。

「なんてことだ。お加減でもお悪かったのだろうか。そんな噂はついぞ聞かなかったが」

言った新太郎に万造は微笑う。

「隠されていたのでございましょうね。ああ、いよいよお隠れになりましたか」

万造の声に微かに明るい響きを聞いて、新太郎は万造をしげしげと振り返った。視野の端で輔が立ち上がるのが見えた。

「大変なことだとは思わないのかい」
　万造は笑う。
「大変なことでございましょうとも。陛下は秋津島の要石、天を支える御柱とも言うべきお方。百二十二代の末に現れた、佐野命以来の呪者でございましたのですから」
　新太郎は瞬いた。万造の言葉の意が汲み取れなかった。
「何、だって」
「信長公は呪者ではなく家康公こそが呪者でございましたゆえに、天下は家康の手に落ちたのです。それと同様に、陛下は稀代の呪者であられた。ゆえに帝国の主になられたのですよ、平河さん」
「きみはいったい何を言い出したんだい」
　万造は新太郎を見返して笑う。
「陛下はこのところ御不調であられた。ありていに申しあげれば、もうずっと以前から御危篤であらせられたのです」
　ぽかんと言葉を失った新太郎に万造は笑む。その笑みに意味もなく後退りたいものを感じながら、新太郎はその一方で号外売りの声も喧騒も止み、号外を買いに出た女中が戻らないことを怪訝に思っていた。
「それで輔さんはお会いになれなかったのですよ。ですからね、平河さん。闇に押さえ

こむ力が緩んだのを見てとって、水底から這い出してきたのですよ、夜の魚たちは」

「夜の、魚」

闇が濃くなったような気が新太郎にはした。いつもより粘度の高い闇が、垂れこめようとしている。気のせいとも思えない。そうでなくて、万造の足許を墨をぼかすようにして這い上がってくるものをどう説明すればいいのか。

「秋津島はそもそも、人と魑魅魍魎の世界でございましたのです。もとより共存できるはずもなし、佐野命が呪力によって魍魎を平らげ、朝廷とやらを築いて二千と五百年。領土の拡大によって追われ落とされ、恨みを呑んで眠りについた妖怪変化は数知れず、事あるごとに闇を這い出し彷徨い出ようとしたものの、人のほうもマァ、仏法やら陰陽道やらと小賢しい。そのうえ現れた祐宮。強大無比な呪力に、これまでかと思い定めたものでございましたよ」

粘度を増した闇にしんしんと花は降る。万造のすでに胸までが闇に沈んでいた。

「それが新政府のおかげさまで。維新だ開化だと、古いものは切って捨てろの御風潮。鰯の頭は迷信ですか。イエ、とんでもない間違いでございますとも。ささやかなりとも呪術は呪術。それをことごとく排し、おまけにせっかく古来からの知恵で神と仏を撚り合わせ、強い縄を綯うてあったというのに、これを解いて緩めてくださる」

闇は万造の首をも呑みこみ、新太郎の前には影のように黒い人型だけがあった。

「やはりお前は」声を上げたのは輔だった。「人にしては奇妙な気配だと思っていれば」
「およしなさいませ」
くつくつと闇の中から笑いが響いた。
「輔さまは大層な呪者のようですが、かと言ってわたしを狩れるなどと思い上がらないほうがよろしいでしょう」
「貴様」
「それとも、格の違いを見極める、その程度のお力もお持ちではございませんか」
輔はきり、と唇を噛む。
「わたしが人に見えたようでは、どうして、どうして、どうして」
くつくつと笑いが響いた。
「頼みの綱の祐宮は、援護の呪術を失って青息吐息。這い出た魍魎どもが宮城の内側にまでちょっかいをかけて、それが恨みの虫の息。枷なく帝都を跋扈いたしますのはね、それは楽しゅうございましたよ、平河さん」
忍び笑いの声だけが闇の中から響いてくる。
「時代にたわめられたもの、それはこれだったのでございます。二千と五百の長きにわたって、たわめられ、たわめられしてきたものたち。家だの家督だの武士の体面だの、そんなものは、これまでたわめられ続けてきたものに比べれば、小さなものでございま

す」

「万造君」

「京は長く都でありすぎたのですよ。地下にためこまれて、たわめられすぎた怨念が裂け目を伝い、ひびわれを伝っては噴き出して、国の要は宮城にあるというのに、その要の根本が危うい。それを見てとって家康公ははるか東の江戸湊に国府を置かれた。理想的な地相を生かして、清い都を建てようとしたようですが、人とは愚かなものでございますねえ。国府をめざして流れこんだ人々で膨れ上がり、蠢く夜の魚たちを狩り尽くす間もなくとにかく蓋をして、たわめておくしかなかったのです。そのうえ新政府のやり口ときたら」

万造はさも可笑しげに笑う。

「この場所を御覧なさい。これは宮城の鬼門、せっかくの押さえの東叡山を焼き払い、再建もせずに公園とやらに。いくら宮城から祐宮が祈禱したところで、これでは焼け石に水、しかもその祐宮が死んだとあれば」

「いったい、これはどういうことなんだ」

「新しい時代が来るのですよ、平河さん。あなたの望んだ通りにねえ。そりゃァやってくる時代が良い時代とは限りますまい。あまり人向きの時代ではないやもしれませんけれどねえ」

「そんなことは、許さない」
　輔は言ったが、ただ笑いだけが返ってきた。
「どうやって止めるおつもりです。祐宮はいないのですよ」
「わたしたちが」
「二千五百年、惰眠をむさぼって腐り果てた拝み屋に何ができます。皇室をはじめ、公卿の方々はそもそも術者巫覡の系統、中でも土御門、倉橋両家はそのために血統を御してきたお家。その末裔のあなたがその程度、わたしひとり狩れなくて、どうやって時代の移ろうのを止めるおつもりです」
「血統を御す」
　新太郎の問いに、万造は笑う。
「初子さまは、それはそれは熙通卿を憎んでおられたのです。初子さまは倉橋家のお生まれ、国の要が呪力であると、そう御存じのお方でございました。ところが当の熙通卿は呪力だのを莫迦にして。西洋のものなら確かですか。教皇の要も重い旧教ならばともかく、その旧教さえ腐り廃れ、呪力のなんたるかを知りもしない新教の席捲する腐り落ちた世界のものに何ができます」
　万造はさらに忍び笑う。
「瓦斯灯が良い例でございますよ、平河さん。わたしたちは夜の底に住むもの、昼の光

は苦手でございますけどね、瓦斯灯なんぞは、身の周りに百や千並べられたところで、痛くもかゆくもないのです。あれにはなんの呪力もありはしないのですから」

くすくすと万造は笑う。

「大陸では漢王朝が衰え、西洋では旧教会が衰え、ここ大和では朝廷が衰える。良い世の中が来たものでございます。大陸やら西洋から見慣れない妖怪どもも流れてきたようですが、なに、なんとか巧くやっていけましょうよ」

「おのれ」

輔が吐き出したが、冷笑が浴びせられただけだった。

「およしなさい、無駄なことは。わたしも鷹司の姓を持つ方に無体はしたくございません。なにしろ、今日あるのも熙通卿のおかげなのでございますから」

「なにを」

「開国するべきではなかったのです。せっかく呪力で国を包んであったのに、そこに風穴を開けてどうします。開化などしてはならなかった。国を守ってきたものを、迷信だなんだのと切って捨ててどうするのです」

「父は、あの男は分かっていなかったんだ」

「さようでございますとも。堀田正睦の勅許工作に協力したのを皮切りに、井伊直弼まで協力して、殿上に乗りこんでの説得、対外貿易を餌に臨海の諸藩を手なずけて、自

ら通事を買って出、それは見事な条約を結ばれたところまではよかったのですが。ええ、それは清国の悲惨を見るにつけ、治外法権を跳ねつけただけでも、御立派だったと思いますとも」

くつくつと万造は笑う。

「御自分でも諸藩と手を結び、柿香同盟とやらを結ばれて、供託の財を投入して横浜に大がかりな築港工事を。おまけに横浜の要所を買い占めて、対外貿易の利鞘と一緒にたちまち築いた膨大な家財。対外折衝の天才、稀代の外交官とおだてられ、政府からも一目置かれたことをいいことに、井上馨と結託し、列強に侮られぬ国作りをと。欧化だ開化だと、はしゃぐのは勝手ですけれど、背伸びをするときには足許ぐらいは確かめておくものです」

輔はただ唇を噛む。

「合理主義ですか、西洋文化ですか。重石を壊してくださって、それはありがとうございます。ですから初子さまは常さんにおっしゃったのです、熙通卿は国を沈めておしまいだと」

「莫迦な」

新太郎の呟きにも、笑い含みの声が返ってくる。

「小里さんは初子さま御自身が選ばれた方だったのですよ。呪者の血が濃く流れる摂関

家、その血と倉橋の、晴明の血を混ぜるために。輔さんのような、巫覡を作り出すために」

「万造」

半ば喘ぐようにして呼びかけようとした新太郎の声を遮り、闇の中から声がする。

「常さん」

何が理由か、すでに判然としない体で呆然と万造のほうを見ていた常が目を見開いた。

「器だけの傀儡でありたかったと、そうおっしゃいましたね」

常の返答はない。薄く開かれた唇が、ただ息を零していた。

「たしかに、そうおっしゃいましたねえ」

笑い含みの声に、常は小さく喘ぎ、やがて首を頷かせる。わけもなく危険に思ってそれを止めようとした新太郎の言葉は、常の声に遮られた。

「たしかに、そう申しました」

「なりますか。人形に」

「それで痛みが終わりになりましょうか」

「なりますとも」

「初子さまの手から逃げられましょうか」

「もちろんですとも」くつくつと笑いが響いた。「わたしはね、初子さまよりよほど親

切な人形遣いでございますよ」
ああ、と新太郎は呻いた。
「常さん、いけない」
新太郎が叫ぶよりも、一枚の幕のようにして闇が常の上に落ちるほうが早かった。
常さん、と新太郎の叫びは闇に吸われ、舞い散る桜に切り裂かれてゆく。
「娘や」
かつん、と乾いた音は背後から。とっさに振り返れば、万造のいた方角、鞠乃が坐っていたはずの椅子の上には一体の人形が。
『あい』
若い女の声は、紛れもなくその人形から聞こえた。
娘の人形は空ろな音を立てて背後を振り仰ぐ。背後の闇から黒い手甲の手が現れて、そこだけ白い指の先で娘の頬を撫でた。
「よく常を守っておくれだ。本当にねえ、あれほど綺麗な夜の者を死なせてしまってはどうにも惜しい」
常の姿はすでにない。新太郎は娘の背後にほの見える黒い影に声を投げた。
「鞠乃さんは。では、なにもかもお前の」
くつくつと笑いが聞こえる。

「常さんを守るには、直さんを見張るのが一番、そうお思いになりませんか」
「お前は、何者だ」
くつくつと笑い声がする。
「さて、何者でございましょうね。ときには三途の渡し守。引導のような気分もいたしますが、そういう者でもないような。可愛い娘の父親のようでもあり夫のようでもあり」
「化け物」
「ああやはり、化け物なのでございましょうかね。どうにも自分が夜の底の魑魅魍魎とは違うように思えてならないのですけどね。連中のように人は殺めませぬよ。ええ、とんと殺めたことなどございませんとも」
降りしきる桜が影に止まって、その輪郭を顕にしてゆく。娘の背後に立ったのは黒衣。含み笑いの声音だけが微かに新太郎の知る万造の面影を残している。
「それでも自分が死神のような気分がいたしますねえ」低く笑い、「物の怪のようでもあり。亡霊のようでもあり。さて、わたしはいったい何でございましょうね。わたし自身には意味のない問いでございますけれど」
愉しげに笑って、黒衣は娘の肩に手を置く。もう一方の手で、すうと胸を撫でる仕草をして、腕の中に一体の人形を現した。

「娘や」
『あい』
「御覧。大層美しい源太だこと」
『ほんに』
闇の懐から黒衣が取り出した源太を、娘は首をかしげて見つめた。砥ぎ出された頬の線がふっくりと微笑って、俯いた源太の首に秋波を送る。
銀杏に結った生え際に落ちた解れ毛が艶めかしい。柳の眉と筆で払ったような目尻と。そこには確かに、常の面影があった。
黒衣の指が源太の俯いた顎の線を辿る。そっと添えて掌を返し、上へ向かって跳ねあげるとカツと音がして源太の首が顔を上げた。娘は仰向くようにし、首をかしげてその首に見入る。
『ほんに、吉三さまもかくや』
「気にいったかえ」
『あい』
娘は抱いた袂に顔を伏せる。首筋が羞恥を帯びて匂い立つよう。
「では、仲ようおし。鷺のように睦まじゅうねえ」
宙を見ていた源太が軽い音をたてて娘を振り返った。水を含んだような目が娘の視線

を受け止める。チと軽い音がしたのは鳴り物の幻か、それとも髭でも鳴った音か。トと源太が片手を伸べると、ツと娘が袂の手を伸べる。

「それでは皆さま。無粋な出し物でごめんくださいませ」

闇に溶けて黒衣の声。

「お帰り道中お気をつけて。もう夜は、決して暗いだけじゃございませんよ」

一方の手は源太を抱いたまま、他方の手が娘を抱いた。抱いたそこから闇に沈む。

「くれぐれも御用心なさいませ。妖怪変化に魅入られませぬよう」

腕のふたりがかつんと空ろな音を立てて抱き合うのと時を同じくして、かつんと黒衣の姿も消えた。幕を切って落としたように、闇の姿までがない。月と夜の空と、そこに降る桜と、それらの中に呆然と立つ人々と。

誰もが声を発せぬまま、どこからともなく黒衣の密かな笑いが響いて、微かに微かに幻聴のように柝の音がした。

「いぃ」

新太郎が我に返ったのは、号外売りの遠ざかる声を聞いたからだった。

「号外ぃ。大帝崩御ォ」

悪い夢でも見たようだが、その場にはもう万造の姿も鞠乃の姿も常の姿もありはしな

い。それでもなお、起こったことを把握できず、肩でただ息をつく新太郎の正面から強い風が吹いた。

桜を吹きつける風はどこか生温かく、しかも生臭いにおいがした。

「常さま」

桂井が声を上げるのと同時だった。

音を立てて屏風が倒れる。幕を吹き上げて風が吹く。煽られたその向こうに見えたものは。

新太郎は一歩を退った。声を忘れていたかのようにただ口を開けて坐っていた菊枝が千代が悲鳴を上げて立ち上がった。

そこに姿が見えたのは、異形の者ではなかったか。

目を見張る新太郎の目の前、幕の上にふわりと首が現れた。無念の形相も顕な男の首は、漂うように幕を越えて音もなく新太郎の側に寄ってくる。二、三歩を退り、桂井と肩をぶつけ、菊枝の手に二の腕を摑まれながら、新太郎はその首の下にどんな身体もありはしないことを確認した。

「ああ、そんな」

「寄って」と鋭い声は輔のものだった。「決してここから出てはいけない。ここだけは鏡を埋め、反閇して浄めてあるから」

「輔さん、これは」

新太郎の声は、幕が落ちる音に紛れた。幕を引き千切ったのは、鬼の手、その向こうから現れたのは。

鬼、夜叉、髑髏。天狗、水虎、牛鬼、大蜘蛛。野槌、朱の盤、姥火、河童。

こんなにも、と新太郎は思った。

こんなにも恐ろしく異形の者が夜の中には潜んでいたのか。伝説の中に迷信の中に沈めたその実、これだけの者が闇の中で時代の到来を待っていたのか。

異形の者共はてんでに幕を引き千切り、桜のようにそれを撒いて歓喜の表情を顕にする。夜の中を踊り、舞う花弁を追って、時代の幕開けを祝うのだ。

ふわりと首が寄って、薄く目を開け、ニヤと笑って離れていった。遠く悲鳴のしたほうに目をやれば、夜桜見物の客だろう、母親の手から取り上げられた赤子が男の手の間で青白い光に、人魂に捏ねられてしまうところ。男は人魂を背中に負った袋の中に投げ入れる。跳ねるようにして背を向けた人魂売りの背で黒紹の袋が揺れて、十かそれ以上か入った人魂が明滅するように揺れた。

異形の者たちは、肩を寄せ合う新太郎たちの傍を踊りながら駆け抜けていく。

百鬼夜行。

すれ違いざま、手の目が笑った。

「見逃してやろうよ、今日は祝いの夜だから。術者と争って怪我などしたくはないからよ」

新太郎は目を閉じる。

時代が来る。

夜が怖い、そんな時代が。葬った呪術を掘り起こし、それで武装する時代が。

夜が人のものであった時代は終わったのだ。

煌々と月は白い。白銀の光が降る東京の夜に低く地鳴りの音がした。海面が蠢いた。最初に沈んだのは佃島だった。

海は生き物のように上陸を開始した。膨れ上がった汀がありとあらゆる堤防を越えて陸地を浸食し始めた。

川は静かにその水位を上げた。無数の橋の橋桁を呑みこみ、欄干までひたひたと押し寄せた波は、やがて橋板を洗い始め、ついにはそれを完全に水没させた。

霊岸嶋が海の中に消えるまで、いくらの時間もかからなかった。葛飾の練兵場にも水はさらさらと押し寄せ、あっという間にその土地をぬかるみに変え、さらには泥の浅瀬に変えていった。

亀嶋川を越え、さらには楓川までも呑みこんだ水は、日本橋川を逆流し、東西の堀留

川と日本橋の一帯を水没せしめてそこに忽然とお玉が池を復元した。

一方、浜離宮を呑みこんだ水は、新橋の停車場を沈め、そのまま麹町から宮城へ向けて押し寄せていったのだった。

それはまさしくたわめられ、忘れ去られたものの復権だった。大地に水に守護する精霊があり、それもまた魍魎としてたわめられてきたのなら、妖怪変化とともに再び現れ出ることに何の不思議があったろう。

静かな静かな逆流だった。樹木一本倒れるものはなく、ただ音もなく水の中に沈んでいったのだった。

それは、長い間後退を余儀なくされてきた海が、もとの均衡に向かって前進を始めたようにも見えたし、あるいはまた、街であることに疲弊した陸地が爪先立つことをやめたようにも見えた。

海にとりもどそうとするものと、海に還ろうとするものと。鬩ぎ合いはないゆえに、渦ひとつなくそれはただ静かに進行していったのだった。

夜が蒼く染まるころ、東京の風景は一変していた。

東海道は川だった。銀座の煉瓦街は一階の半分までが水没して、水の中に整然と赤い建物の建つ、あるいは建物の間を縦横に水路がはしる街に変貌している。

その銀座の沖に島のように見える大屋根は西本願寺の本堂だろうか。日比谷入り江の

中にも高い建物の上階が水上に突き出た飛び石のように見えていた。愛宕山は海に面した岸壁だった。岸壁の足許に無数の岩が見えるのは、東に広がる無数の寺院の屋根が覗いているからだった。上野の麓には大きな池が広がっている。隅田川は川幅を広くして、その西岸に五重塔が三層ばかり突き出していた。

そして汀には堤防ができていた。否、堤防のように数え切れないほどの人が並んで、呆然と言葉もないままに夜明け前の海を見ていた。逆流はあまりに静かだったので、人は逃げる余裕を持ちえた。ひたひたと追ってくる水から逃げた人々が、汀に立って魂の抜けた表情で蒼い海の表面や、透明な水の中に水没した家々を見ているのだった。

月がさらに傾き、夜が白み始めると同時に、沖から霧が流れてきた。濃い霧は水面を伝い、水路に流れこみ、街を深く閉ざしてしまったのである。

三

東京は水の都、建物の間を無数の船が行き交う。同時にまた霧の都でもある。夜明けとともに沖合いから流れてくる霧は、昼の間じゅう街を閉ざして、夕暮れとともに沖に向けて去っていくのだった。

「本当にすごい霧なんだね」

少年は露台の手摺に凭れて無邪気に歓声を上げる。
新太郎は苦笑した。
「別に霧など珍しくもないでしょう。どこへ行ってもこうなんですから」
「だってぼくは京都ですもの」少年は言って、霧の漂う海面を見やった。「大阪の霧はこんなに酷くなかったな」
「そうですか」
「霧雨みたいだね。合羽がいらないかしら」
「一日じゅう表で働くのなら」
「ああ、やっぱりそうなんだ」
少年が納得したように頷いたところで、背後の仏蘭西窓から多恵が顔を出した。
「熙さま、お舟がまいりますよ」
うん、と少年は笑う。鷹司熙は十三、京都から母親、姉ふたりとともに越してきて、東京に到着したのが昨夜遅くだった。
「お兄さまは、帰っていらしたの」
熙の問いに、多恵は肩をすくめてみせた。
「とうとうお帰りになってません。またややこしいことみたいで」
ふうん、と熙は呟く。

輔はこのところ、上野寛永寺再建のために走りまわっていた。上野にはどうしても方角鎮護の建物が必要なのだという。陰陽、神道、仏道総出で伽藍の建立をめざしているが、なにしろ呪術もすたれて久しいものだから、少し目を離すと現場の人夫がすぐに手を抜く。手抜きで呪術は成り立たないから、そうなるともう建物を解体して地鎮祭からやり直さなくてはならないのだ。おかげで寛永寺はまだ計画の二割も建設できていない。

「熙さま」

手摺の下から声がする。覗くと、家の船頭が小舟を回してきたところだった。

「行こう、平河さん。お多恵も来るんでしょ」

「参りますよ。ああ、待ってくださいまし」

慌てて出てきた多恵を、すでに熙は舟の上で待っている。露台にある石造りの手摺の一部を切ってあって、そこに水面まで鉄製の階段が下ろしてある。ちょうど上げ潮だったので、四段ほどしか海面に出ていない。そこにつけられた舟に、多恵と一緒に乗りこんだ。

新しい鷹司邸は、輔が面白がって永田町に買い求めたものだった。永田町は日比谷入り江の奥、かつての永田町はほとんどが日比谷入り江に水没してしまっている。輔はその水没した永田町にあった、しっかりした石造りの洋館を買い求めたのだった。露台は本来、正面の輿寄せの上にあったもの、それが今では一階部分が完全に水没しているの

で、海に出る玄関代わりに使われている。そうやって二階以上の部分に人が暮らす建物の群れが、新しい永田町を作っているのだった。

船頭が舟を出してから、多恵が声を上げた。

「どうしたんだい」

「お守りを忘れてきたんです。せっかく輔さまから水魔退散の護符をいただいていたのに」

舳から振り返って、熙が笑った。

「大丈夫だよ、ぼくがいるもん」

多恵はあっと気がついたようにして、笑った。

「そうでございますね」

初子は小里の産んだ四人の子を、実家である倉橋家に任せて厳しく養育させた。女子はふたりとも術者としてはいまひとつだったが、男子ふたりはともに極めて優秀なのだという。倉橋家、土御門家、阿倍家の係累の中から、特にその方面の才能を期待できそうな娘を捜し、敢えて夫の側室に迎えた初子の功績なのだった。

日比谷入り江は入り江といっても、水没した家が並ぶところ、実際には家々の間に縦横無尽に水路が通る水上の町の総称である。かつてあった平屋などは完全に水没してしまい、わずかに屋根の頂上を覗かせるだけだったが、それらは少しずつ取り壊され、か

わりに新しく家が水上に建てられ、かつてのものに近い家並みが戻ろうとしている。

水面下の建物を壊すのが専門の大工を、堪忍大工と呼ぶ。なにしろ水に潜らないわけにはいかない商売だが、水の中には何がいるか分からない。舟端から飛びこむ前に手を合わせて「堪忍、堪忍」と呼ばわるところから、そう呼ばれるようになった。そのあとから生まれた水上に建物を建てるのが専門の大工は、もとは堪忍大工だった者が多く、やはり「堪忍」と言って水に潜るのだが、単に水大工と呼ばれている。

建物の間の水路を辿って、舟は銀座方面に向かう。完全に日が暮れるまでにはもう少し、霧はまだ水路の間に薄い煙のように漂っている。

船頭が「ホゥイ」と声を上げた。これも東京が沈んでからできた風習だった。水路を行き交う舟は、必ず交差点で声をかけあう。横に進む者が「ホゥイ」と語尾を上げて声をかけ、縦に進む者が「コゥリャ」と語尾を下げて声をかける。どの方向が縦でどの方向が横なのかは、各町によって決められていた。これを覚えなければ、船頭にはなれない。霧の昼間か夜しかないのだから、当然といえば当然の風習である。

「蛍がいっぱいいる」

熙は沖に揺れる光の群れを示した。新太郎は笑う。霧が濃いので舟は必ず明かりをつける。水上の賑やかな朝夕は、霧ににじんだ光の群れで、沢山の蛍か何かが水面に集まっているように見えるのだった。

「すごいねえ」
「あっという間に慣れてしまって、飽きてしまうと思いますよ」
「そうかしら」
「なにしろ毎日のことですからね」新太郎は笑う。「ほら、銀座が見えてきましたよ」
熙は身を乗り出す。まだ薄く残っている霧の向こう、正面に銀座の煉瓦街が見えてきていた。舟はちょうど内山下町に出たところ、このあたりは水面下に陸軍練兵場など更地が多くて、見通しの良いところなのだった。
わあ、と声を上げて、熙は振り返った。
「平河さんの勤めてる新聞社も、銀座にあるんでしょう」
「そうですよ」
他の社が不便だからと牛込のほうへ移転していったなかで、帝都日報だけは、依然としてそこに居据わっていた。
「大きな建物がある」
熙は正面ではなく、舟の右手を示した。
「ああ、右が、もと東京府庁、左に小さく見えているのが鹿鳴館、もと華族会館です」
「もう使ってないの」
「倉庫に使われてますよ。日比谷入り江を入ってきた舟が一時荷を揚げ降ろしてお

く」

「へええ」

煉瓦街の瓦斯灯はまだ生きていた。一日じゅう灯したままだから、点灯夫は街灯の点検と修理をする仕事に変わってしまった。

瓦斯灯に照らされて煉瓦街を抜けるうちに、あたりは本格的に暮れてきて、霧が晴れていく。舟は東海道、かつての東海道は水路になった今もそう呼ばれているのだが、それを漕いで日本橋へ出た。

日本橋の先はかなり深くなっていて、建物が見えない海面が広がっている。これが大昔のお玉が池、近頃ではその名が復活している。

お玉が池を渡って馬喰町へ向かう。

このまま浅草広小路、これももう、水路の名前だが、そこを北上して浅草に行き、そこから上陸して上野を見物してから陸路を帰ろうというのが熙の望みだったのだ。東京の事情を見ておきたい、と小さくとも一人前の陰陽師らしいことを言っていたが、この様子ではかなりあやしい。

「わあ」

熙が無邪気な声を上げた。霧が晴れてみれば夜空は曇り、その雲が切れて月が顔を出したのだ。

まぶしい明かりというものにすっかり縁がなくなってしまったが、形良い月があればかなり明るい。ほとんど満月に近い月が燦々と降らせる月光で、海の様子が見えるようになった。

「家が見える」

熙は舟端から身を乗り出す。透明なお玉が池の海水越しに、沈んだまま朽ちもせずに眠る、かつての家並みが見えた。

月が良いせいだろう、水上にはたくさんの小舟が見える。夜には闇の間から、昼には霧の底から魑魅魍魎が現れては人を襲ったが、外を出歩かないわけにはいかない。それですぐに人々は、結局のところ化け物に出会うことも強盗や流行病に出会うことと大差はない、と割り切るようになってしまった。

それで人々は月が丸くなると、護符やら守りやら底の抜けた柄杓だのを乗せた舟を出して、かつて自分が住んでいた家や町を訪ねるのだった。そうやってそこを懐かしむことが、ひとつの流行になっている。

「ここはどのあたり」

馬喰町からまた水路に戻って、浅草橋、これは水面下の橋なのだが、それをしばらく行ったころ、熙が訊いてきたので、新太郎は答えた。

「浅草瓦町のあたりですよ」

へえ、とまた水底（みなそこ）の風景に見入った熙から視線を離して、新太郎は舟の左手を見る。その借家は借り主を失い、今では別の人物の住まいになっていた。

新太郎は、ついにあれきり二度と万造に会わなかった。

ただ、舟で水路をゆく者が、すばらしく見事な娘と源太の人形を遣う見世物に行き合ったという噂（うわさ）を耳にするばかりだった。

帝都、東京。

明治二十九年四月、天皇崩御あって、明けて翌年、弘永（こうえい）二年三月のことである。

――幕

作中、歌舞伎の台詞については、『名作歌舞伎全集　第九巻　鶴屋南北集一』（戸板康二ほか監修、東京創元社）から引用しました。
（引用にあたっては、一部文字づかいを変えてあります）

解　説

野崎六助

本書の初刊は一九九四年。わずか五年前のことだとしても、ずいぶんと〈歴史〉は遠くになってしまったような感慨をおぼえる。そんなつまらない感傷はわたしだけのものだろうか。

戦後五十年という時点で、阪神大震災とオウム集団によるサリン・テロ事件が起こった。「平和国家」の半世紀の終焉を告げるにあまりある二大事件である。今からふりかえれば、という限定つきであり、さらには不遜な言い方になるが、一九九四年という時点は「アルマゲドン前夜」と名づけるのに相応しい日々だったのではないか。

本書はその「前夜」にひそかに送り出された予兆めいた書物の一つだった、と思える。『東京異聞』は、明治二九年、日本帝国の帝都を襲った一連の変事を描く。さいしょに断っておけば、背景におかれた明治国家のすがたは、一種のパラレル・ワールドである。この伝奇ミステリは、歴史ロマンの巧妙な仕掛けを駆使しつつ、過去の時代をそのままなぞって舞台にしているわけではない。

折しも、ほとんど時期を重ねて、京極夏彦が『姑獲鳥の夏』によって登場している。これ

はいうまでもなく、昭和二七年の首都を舞台にした破天荒な物語の第一作としてむかえられたものだ。パラレル・ワールドの趣向はむしろここでは排されているが、異空間というシグナルはいっそう際立っていたのだ。

予兆めいた作品をもう一点あげるなら（前年刊になるが）、宮部みゆきの『震える岩　霊験お初捕物控』だろう。これは江戸時代後期の帝都「江戸」を舞台にしたパラレル・ワールド・ミステリといえる。ここではゾンビが跳梁し、忠臣蔵ゆかりの奇岩が鳴動し、サイコメトラー探偵のお初が活躍する。

三作並べてみると、やはり瞭然となることがある。そこではたしかに、異界が顕現して、なにものかの破局の予感が気味の悪い肌触りで作品世界を緊迫させているのだった。――いつの間にか、人びとが、こんな恐ろしい時代に生きねばならないことを思い知らされ、不安を抱くにいたった一九九五年。その予兆であったような作品は、すでに深く静かに読まれていたのだった。

これらは書かれるべくして書かれたといえるだろう。われわれの生きていた現実世界のなかに亀裂が走り、そこからぽっかりと異世界が顔を出したのだ。いや、この異世界は、もとからわれわれの日常にゆっくりと浸透し、それを喰い破りつつあったのであり、ただ気づくのが遅かっただけなのである。

こんなにも恐ろしく異形の者が夜の中には潜んでいたのか。伝説の中に迷信の中に沈めたその実、これだけの者が闇の中で時代の到来を待っていたのか。

異形の者共はてんでに幕を引き千切り、桜のようにそれを撒いて歓喜の表情を顕にする。夜の中を踊り、舞う花弁を追って、時代の幕開けを祝うのだ。

（中略）

時代が来る。／夜が怖い、そんな時代が。葬った呪術を掘り起こし、それで武装する時代が。／夜が人のものであった時代は終わったのだ。

――と、これは『東京異聞』の一人物が、物語の終盤にもらす感想だ。「そういう時代」はすでに来ていたのだ。そうした小説が読まれ、受け入れられる現実が現にある、という形で〈時代〉はすでに足元に迫っていたのである。

ほとんど時期を接して、京極夏彦の妖怪ミステリが登場し、宮部みゆきのサイキック探偵捕物帖が書かれた。こうした時代の顕現は、まったくミステリの同時代史という限られた視点でみるだけでも、出来すぎた風景ではなかろうか。

予兆ということについては、もう一点ある。現実の都市の風景から、それは引き出されてくる。小説に描かれた風景は過去のものだが、〈現代〉を類推させるに充分なのだ。

その街は海底の泥の中から浮上した。

『東京異聞』の書き出しだ。

泥海のなかから浮上した異界の都市。ここから始まる一連のイマジネーションを刺激したのは、たぶん、現実の帝都における臨海副都心構想ではないかと思う。臨海都市の試案は、この小説が出たころ、莫大な公共資金の投入と空費によって実現進行しつつあった。この構想のなかばが、選挙で選ばれた知事の決断によって凍結され、臨海副都心がテクノポリスの未来空間とジャンクヤードの廃墟が混在する奇天烈なお台場シティになったことは、記憶に新しい。

一方にこうした現実を置いてみたとき、異世界〈東京〉が、作者のなかにどんなふうに結晶化していったかの答えが見つかるはずだ。『東京異聞』のラストの破局のイメージは唐突に引き出されてきたものではなく、泥海のなかから立ち上がってきたものは海底に没していくだろう、という正当な想像力によっている。

小野不由美は、この作品以前に、ティーンズ向けファンタジーの領域で〈ゴースト・ハント〉シリーズや〈十二国記〉シリーズなどの人気作品を書いている。

魍魎が支配する闇のダーク・ファンタジーの味わいは、本書にも受け継がれ、濃厚に流れている。それと伝奇ミステリの要素が渾然と一体化され、著者の記念すべき挑戦作となった

のが本書だといえる。

異界の帝都には、火炎魔人と闇御前と呼ばれるシリアル・キラーが跋扈し、その正体を追う表向きのプロットが進行する。新聞記者の新太郎と万造を探索役として立て、連続殺人の様相が描かれる。殺人鬼の跳梁する背後には、ある名門一族の跡目相続をめぐる暗闘の気配もある。——というように、表の物語は、明治開化ものの道具立てを手堅く取りこんでいる。そこで、維新がひらいた近代化コースへの違和感というおなじみの議論も折りこまれてくる。一人の人物はいう。

「御一新がやってきて、世間はそりゃあ変わりました。開国、開化といろんなものが大波のようにやってきましたが、さて、波に洗われた巌のほうは、そうそう変わりますものでしょうか」

しかしこれらのものは、大まか表向きに飾られたストーリーといっていい。底に沈んでいる仕掛けは、やはり、〈東京→東京〉というパラレルな二重性だ。ここで語られている「明治維新」や「開国」は、決して額面通りのものではない。もちろん教科書の歴史にあるとおり、小説世界においても、日本帝国は武家社会を廃絶し、鎖国体制を解き、絶対主義天皇制のもとに新たな時代には入っている。しかし東京は東京ではない。重なるようで、ずれる。

この「ずれ」の感覚こそが、本書のいちばんの読みどころだろう。

パラレルな二重性において、異界は現実の現在の都市とだぶってくる。現実にわれわれが棲息する帝都東京に走る亀裂を垣間見せてくれる。東京は、ホラーファンタジーの魔物たちが遊ぶ魔界の遊園地でもあるが、現実から切断された想像力の産物ではないのだ。東京の「京」の字に横線を一本書き入れると、現実世界と微妙に重なり、かつずれを持った異界が降りてくる。小野不由美が新作『屍鬼』でみせたパワフルな筆致はすでに、『東京異聞』において充分に開化している。まさに屍鬼おりおりの世界である。読者は堪能されたことであろう。

ある人物は、結末近くのところで自分の正体を告白する。

秋津島はそもそも、人と魑魅魍魎の世界でございましたのです。もとより共存できるはずもなし、佐野命が呪力によって魍魎を平らげ、朝廷とやらを築いて二千と五百年。領土の拡大によって追われ落とされ、恨みを呑んで眠りについた妖怪変化は数知れず、事あるごとに闇を這い出し彷徨い出ようとしたものの、人のほうもマァ、仏法やら陰陽道やらと小賢しい……。

そして宣言する。「新しい時代が来るのです。あまり人向きの時代ではないかもしれない

けれど」と。たぶんその予兆のとおりに「この時代」も動きつつあるのだ。

終わりに付け加えておくと、先日、綾辻行人氏と法月綸太郎氏とお会いしたときに、本作が話題になりました。両氏の意見によると本書は、島田荘司『本格ミステリー宣言』の問題提起に最も鋭く答えた作品であるという由。〈新本格〉派のピュアな志向の原石の輝きが見られるとの説を、たいへん興味深く伺いました。

（平成十一年三月、文芸評論家）

この作品は平成六年四月新潮社より刊行された。

新潮文庫最新刊

唯川　恵　著

5年後、幸せになる

もっと愛されれば、きっと幸せになれるはず……なんて思っていませんか？　あなたにとっていちばん大切なことを見つけるための本。

よしもとばなな著

よしもとばなな ドットコム見参！
—yoshimotobanana.com—

喜怒哀楽から衣食住まで……小説家の日常を惜しみなく大公開！　公式ホームページから生まれた、とっておきのプライヴェートな本。

よしもとばなな著

ミルクチャンのような日々、そして妊娠!?
—yoshimotobanana.com2—

突然知らされた私自身の出来事。自分の人生の時間を守るには？　友達の大切さを痛感し、からだの声も聞いた。公式ＨＰ本第二弾！

よしもとばなな著

子供ができました
—yoshimotobanana.com3—

胎児に感動したり、日本に絶望したり。涙と怒りと希望が目まぐるしく入れ替わる日々。心とからだの声でいっぱいの公式ＨＰ本第三弾。

柴門ふみ著

恋愛は終わらない

恋愛の明暗を分けるものは相性か、テクニックか、運命か、それとも……？　フーミンによる、とっておきの恋愛＆人生指南術。

光野桃　齋藤薫　著

優雅で野蛮な女になる方法

恋もおしゃれも綺麗も仕事も！　女性の美と生き方を見つめてきた二人からの、格好いい女になるためのメッセージを込めたエッセイ。

新潮文庫最新刊

鈴木光司著

シーズ ザ デイ（上・下）

16年前沈んだヨットに乗っていた男は、沈没の謎を解き、人生をその手に摑み直すべく立ち上がる。鈴木光司の新境地、迫力の傑作。

夏樹静子著

検事霞夕子 夜更けの祝電

孤独な誕生日の夜に届けられた数本の紅いバラ……翌朝、彼女は無惨な死体で発見された。検事霞夕子の人気シリーズ。4編収録。

酒見賢一著

陋巷に在り10 —命の巻—

激しい雷雨の中、無我の境地で舞い続ける顔徴在に下り立った尼山の神が告げた驚くべき「命」。孔子出生の秘密がいよいよ明らかに！

内田百閒著

第二阿房列車

百閒先生の用のない旅は続く。弟子の「ヒマラヤ山系」を伴い日本全国を汽車で巡るシリーズ第二弾。付録・鉄道唱歌第一集、第二集。

中山庸子著

森の中にいるように、心が生きかえる本

肩や腰がこるように、こころだって疲れやすりがたまります。〈プチ休憩〉したいこころが、じんわり元気になる、35のメッセージ。

江原啓之著

スピリチュアルな人生に目覚めるために —心に「人生の地図」を持つ—

カリスマ霊能力者が、苦悩の果てに手に入れた幸福のルールとは。「スピリチュアルな人生」に目覚めるメッセージ。文庫書き下ろし。

新潮文庫最新刊

木村佳友
毎日新聞阪神支局取材班 著

介助犬シンシア

シンシアは僕の身体の一部です——木村さんちのシンシアは、ちょっとたれ目で内弁慶、お仕事も遊ぶのも大好きです。可愛い写真満載。

川津幸子著

100文字レシピ

簡単料理へのこだわりから生まれた、たった100文字のレシピ集。和洋中にデザートも網羅。ラクにできて美味いという本格料理の決定版。

大谷晃一著

大阪学 阪神タイガース編

大阪の恥か、大阪の誇りか——出来の悪い息子のようなチームと、それを性懲りもなく応援するファンに捧げる、「大阪学」番外編！

P・プルマン
大久保寛訳

黄金の羅針盤（上・下）

ライラと彼女の守護精霊は誘拐された子供たちの救出を決意。よろいをつけたクマに乗り、オーロラがひかり輝く北極へと旅立った。

S・ブラウン
吉澤康子訳

指先に語らせないで（上・下）

外科部長惨殺！　首謀者と目されるのは美貌の同僚レニー。謎につつまれた女医の私生活に悪名高き殺し屋の陰が見え隠れして……。

J・カッツェンバック
堀内静子訳

精神分析医（上・下）

一通の脅迫状からはじまった自殺ゲーム。精神分析医を襲った不運の結末は？　ベストセラー作家が仕掛ける超絶サイコ・スリラー！

東京異聞

新潮文庫　お－37－2



平成十一年五月一日発行
平成十五年十一月五日七刷

著者　小野不由美
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話編集部(〇三)三二六六―五四四〇
読者係(〇三)三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Fuyumi Ono 1994　Printed in Japan

ISBN4-10-124022-1 C0193

9784101240220

1920193005905

定価：本体590円(税別)

帝都・東京、その誕生から二十九年。夜が人のものであった時代は終わった。人を突き落とし全身火だるまで姿を消す火炎魔人。夜道で辻斬りの所業をはたらく闇御前。さらには人魂売りやら首遣いだの魑魅魍魎が跋扈する街・東京。新聞記者の平河は、その奇怪な事件を追ううちに、鷹司公爵家のお家騒動に行き当たる……。人の心に巣くう闇を妖しく濃密に描いて、官能美漂わせる伝奇ミステリ。

ISBN4-10-124022-1

C0193 ¥590E